ツバサ　～砂漠の国の姫君と仮面の戦士～

地水炎風陰雷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ツバサ　～砂漠の国の姫君と仮面の戦士～

【Ｎコード】
Ｎ７７６７Ｉ

【作者名】
地水炎風陰雷

【あらすじ】
　ツバサと仮面ライダーのコラボ！！
飛王との戦いが終わり、旅立った小狼たちのと再会を待つサクラに異世界から傷を負った仮面ライダーが彼女の所に現れる。
その名は翔道翼……世界の破壊者、仮面ライダーディケイド…世界の大怪盗、仮面ライダーディエンド…２つのライダーシステムのプロトタイプ「仮面ライダーディファースト」である。
そして彼がサクラの世界に怪しい影が……翔ける道を往き、大いなる翼で世界に羽ばたけ！！

プロローグ／始まりはとある世界から（前書き）

世界の崩壊を防ぐ世界の破壊者、ディケイド…

世界を駆け巡り宝を狙う大怪盗、ディエンド…

そしてここに、一つの物語が幕を開ける…

『ツバサ　～砂漠の国の姫君と仮面の戦士～』、始まります。

プロローグ／始まりはとある世界から

とある世界のある街。深夜の空が広がる高層ビルの屋上に漆黒の身体、純白の鎧に赤い瞳の姿をした仮面の戦士がいた。

「しつこいな、あいつら」

愚痴った仮面の戦士…『仮面ライダーディファースト』が後ろを振り向くと、そこには幾多の怪人達が彼に迫っていた。
怪人達を見たディファーストは、そのままため息をつく。

「はぁ…どうするかこの状況を…」

「ギシャァァァァァァ！！！」

一体のイマジンが咆えながらディファーストに襲い掛かる。だがディファーストはイマジンに微動だにもせず、剣の形をした銃剣一体型武器『サモンドライバー・ソードモード』を構えながら、白いバックル『ディファースドライバー』にカードホルダーから取り出した一枚のカードを装填する。

【ＡＴＴＡＣＫ－ＲＩＤＥ！ＳＬＡＳＨ！】

――ズサッ！！――

電子音と共にサモンドライバーの刀身が白い淡い光に帯び、サモンドライバーをイマジンの身体に突き刺す。突き刺さったイマジンは悲鳴を上げる。

「ギャアアァァァァァ！！！」

「…とりあえず、お前等を片付けるか！！」

ディファーストはそう言うと、イマジンの突き刺したまま身体をサモンドライバーで切り裂いた。

――ズシャッ！ドガァァァン！！――

身体を真っ二つに泣き別れしたイマジンは爆散してしまう。ディファーストはそのまま怪人達に駆け行き怪人達を刀身が白い光を帯びたままのサモンドライバーの切り倒していく。
しかし数が多すぎるのか怪人達は中々減らない。

「数が多いな、なら助っ人の登場だ」

カードホルダーから一枚のカードを取り出し、今度はサモンドライバーに装填する。

【ＫＡＭＥＮ－ＲＩＤＥ！ＫＵＵＧＡ！！】

トリガーを引くと、サモンドライバーの銃口から赤、青、緑の光の像が現れる。それが一つになると、赤い鎧に金色の二対の角の姿をした古代戦士の仮面ライダー『仮面ライダークウガ』が召喚された。

「出番だ、クウガ」

「あれ？呼び出された？」

ちなみにサモンドライバーで召喚されたライダーはディエンドが召喚したライダーとは違い、自我や感情表現や意思がある。

「ああ、とりあえずお前はあいつ等を片付けろ。俺は援護する」

「なるほど、分かったぜ！！」

クウガはディファーストに向かってサムズアップをすると、怪人達に駆け行きキレのあるパンチやキックを当てる。ディファーストもサモンドライバーを銃形態のガンモードに変形させ、怪人達に銃撃を浴びせる。
やがて怪人達はほとんど倒し、ディファーストが最後の一体であるプローンファンガイアに銃口を向けていた。

「これで、終わりだ」

【ＡＴＴＡＣＫ－ＲＩＤＥ！ＢＬＡＳＴ！】

サモンドライバー・ガンモードからホーミング能力を持った無数の強化弾を放つ。

――ズドドドドドドドドドドドッ！！――

「ぐ、ガガァアアアッ…！！」

無論プローンファンガイアは、蜂の巣になりステンドガラス状に砕け散った。クウガも総ての怪人を倒し終えてディファーストに駆け寄ってくる。

「どうやらそっちも終わったようだな」

「ああ…あんま手ごたえがなかったな…ん？」

ディファーストが何かに気付き、さっきプローンファンガイアのいた場所を見る。そこにはプローンファンガイアのライフエナジーが浮かんでおり、それが空に舞うと他のファンガイアのライフエナジーが集まり眩い光を発し始める。

光が収まると、そこにはシャンデリラに似た姿をした怪物『サバト』の姿が上空になった。

「おいおい。それはねぇだろ巨大化って…」

「どうするんだこれ!!どうやって戦うんだ!?」

「心配するな、一応策はある…」

動揺するクウガに対し、冷静な様子をかますディファーストはホルダーからカードを取り出すと、バックルに装填する。

【ＦＩＮＡＬ－ＦＯＲＭ－ＲＡＩＤＥ!ＫＵ・ＫＵ・ＫＵ・ＫＵＵＧＡ!!】

「おい、我慢しろ」

「え?おわわわ!!!」

ディファーストがクウガの背中を触ると、クウガの姿が変わりゴウラムを酷似した『クウガゴウラム』に変化する。
ディファーストはクウガの背中に飛び乗り、クウガゴウラムを発進させた。

「ギシャァァァァァアアアアア!!」

サバトはディファート達に向かって光弾を放つが、クウガゴウラムに避けられたりディファーストに総て打ち落とされる。
そしてディファースはカードを手にし、ディファースドライバーに

カードを装填する。

【ＦＩＮＡＬ－ＡＴＴＡＣＫ－ＲＩＤＥ！ＫＵ・ＫＵ・ＫＵ・ＫＵ・ＫＵＧＡ！！】

「ディファースト…アサルトォ！！」

ディファーストの掛け声と共にサバトに目掛けて飛び蹴りの体勢に入り、クウガゴウラムと共にサバトの身体を貫く。

「ギャァァァァァァァァァ！！！！」

サバトは断絶魔を上げながら爆発し、辺りにはサバトの身体のステンドグラスが七色に輝く雪の様に降り掛かる。
ディファーストはうまく足場に着地し、クウガゴウラムもクウガに戻って着地した。

「じゃあな、必要な時は呼んでくれよ」

クウガはそうディファーストに言うと消えてしまう。使命を真っ当し、カードとなって再びホルダーの中へと戻ったのだ。

「…『必要な時には呼んでくれ』、か。そうするよ…」

ディファーストがクウガの言葉を噛み締めながらその場所を立ち去ろうとする。
その時目の前に銀色の歪みが現れ、ディファーストを飲み込む。

「!?何だ…ぐ、うぁぁぁぁぁぁぁ!!」

～～～～～

とある世界、砂漠の国『玖楼国』、玖楼国付近にある遺跡にて…

「う～ん、いい天気～」

遺跡の展望台の前、明るい茶色の髪をし、ここの世界の衣装を着ている天真爛漫な少女の姿はあった。
少女の名はサクラ、玖楼国の姫にして第一継承者でもある。
つい数週間前までは自分の思い出(記憶)の化身である羽根を集めに様々な異世界を同じ世界の出身で幼馴染であり彼女の大切な人で両思いでもある小狼、ぶっきらぼうだが一番心配をしている黒鋼、みんなに優しいファイ、白くて小さく皆を元気付けていたモコナと共に旅をしていた。

そして現在は『ずっと旅をし続ける』宿命を背よった小狼と彼と共に旅立った黒鋼、ファイ、モコナ達との必ずの再会を望み、皆と最後に別れた…小狼との思い出の遺跡の展望台に来ていた。

「小狼、今頃どこにいるんだろう……黒鋼さんやファイさん、モコちゃんも元気にしてるかな…」

サクラは階段を登る。そして上に登りきり、広場の方をふと見る。
するとサクラは―『何か』を見つけ足を止める。

「……え？これって…」

そこには漆黒の身体に純白の鎧、赤い瞳をした姿の仮面を被った戦士…ボロボロな姿の仮面ライダーディファーストが倒れていた。

―そして、物語は始まる―

プロローグ／始まりはとある世界から（後書き）

どうも新人の地水炎風陰雷です。
この度連載作品であるこの小説を短編作品と間違えて投稿したことをここで謝罪します。本当にすいません。
小説の修正のためなら遅刻覚悟で修正します。

次回はサクラとディファーストとファーストコンタクト（？）です。

第一話／サクラと仮面ライダーと出会い（前書き）

どうも地水炎風陰雷です。
今回は仮面ライダーディファーストとサクラの出会いを描きます。
ちなみにこの物語の設定は原作ツバサ最終回のその後の世界です。
それと
短いか長いか分かりませんがとりあえず第一話『サクラと仮面ライダーと出会い』、始まります。

第一話／サクラと仮面ライダーと出会い

「…これって、一体…鎧？それより大丈夫かなこの人…全身傷だらけ…」

サクラは体中に傷を負った鎧を纏い、妙なベルトをつけ仮面を被った姿の人物…ディファーストを少し驚きながらも心配そうに見つめる。

様々な異世界を巡り、小狼達と共に色々なモノを見てきたサクラでも仮面と鎧をつけた戦士…ましてやこんな奇妙な何処かのヒーローのような姿をした衣装は見たこともない。

――カタンッ――

「え！？」

音のした方を向くと、ディファーストの腹部についているベルト…もといディファースドライバーが腹部から滑り落ちる。

するとディファーストが眩い光を発し始める。

「うぅ！？眩しい…！！」

サクラは眩い光に思わず目を瞑ってしまう。光が収まりサクラが目

を開けると、ディファーストの姿はボロボロの黒い上着に黒いズボンの黒一色にサクラや小狼と似た美しい茶髪をした青年の姿に変わっていた。だが青年は気絶しているのかまだ目をつぶったままだった。

「人、だったの…!?怪我している。お城で手当てしないと…!!」

サクラは青年を引きずろうとする。が、サクラは女の子…ようは女性で力が弱いのか青年を引きずろうとしてもビクとも動かない。

「う、うぅ～ん。あれ?動かない…うぅ～ん、うぅ～～ん…」

「……おい…」

「…え?きゃあ!!」

青年は目覚めたようで、サクラは気絶しいた青年が急に声をかけたので驚いて地面に尻餅をついてしまった。

「おい、大丈夫か?」

「うん…ってそれより貴方の方が…身体傷だらけだし、怪我している…」

「怪我?…あぁ、これか。心配するな、こんなの平気だ」

「で、でも…」

「俺は強いんだよ。こんくらいじゃ、倒れないの。え～っと、あ、あったあった」

青年は地面に落ちていたディファースドライバーを見つけると、それを手に取る。そしてディファースドライバーを前に突き出す。するとディファースドライバーから淡い光が放たれ、彼の目の前にオーロラのようなものが現れる。

「それじゃ、別の世界へ行くか…」

「別の…世界…？あ、あの！！」

「ん？何だ？」

「あの、今世界を旅をしているって…もしかして、別の次元に…」

――ピギシャアアアアアアア――

「！？ふせろ！！」

「え！？きゃぁ！！」

青年の叫ぶと共にオーロラの中から何かが飛び出してくる。青年は

サクラの手を握り、展望台から飛び降りる。

「きゃあああぁぁぁぁぁぁぁぁぁあ！！」

「・・・・・・よっと！！」

青年は落ちている中でサクラを抱き上げると、そのままうまく砂漠の砂の地面の上に着地する。
青年はサクラを下ろすと、空の上を見あげる。

「あの、一体…」

「…ははっ…お嬢さん、どうやら厄介事に巻き込まれてしまってここに謝罪するよ。まさかこんな所にまで出てくるとは…」

青年は自分をあざけ笑い気味に笑うとサクラにそう言いながら高く空を見つめる。そこには鳥に似た姿をした異形…とある世界で未来から侵略しにやって来た生命体『イマジン』の『コンドルイマジン』がいた。
サクラはコンドルイマジンの姿を見て驚く。

「な、何…あれ…」

「ふん、いた…時空を超える力を持った者が……ピギャァァァァァ

ァァァァ！！」

コンドルイマジンはそういうと、刀を取り出し構えるとサクラに向かって急降下し襲い掛かってくる。
サクラは逃げようとするが、恐怖のあまり足が固まってしまい逃げられなくなる。

「ピギャァァァァァァァァ！！！」

コンドルイマジンの振り下ろした刀がサクラに迫る。

「（もう駄目…助けて…小狼…！！）…シャオラン…」

――ガシィィィンッ！！――

「な、なにぃ！？」

「……え……？」

サクラが前を向くと、そこにはコンドルイマジンの刀の刃をディファースドライバーで受け止めている青年がいた。

「え…何で、私を…」

「…おい、お嬢さん……名は…」

「え!?」

「名前だ!なーまーえっ!!お前の名前だ!!」

「え、えっとサクラ…」

「サクラ……思ったとおりだ。お前が『シャオラン』って呟いた時、サクラと俺に何がしらの縁があるって感じたんだよ」

「え!?小狼君のこと知っているの…」

「おいお前等…俺をほっとくんじゃねえ!!」

コンドルイマジンは青年を蹴ろうとするが、いとも簡単に避けられ、腹部に青年の蹴りをお見舞いされてしまう。
青年はディファースドライバーを腰につけると、ホルダーからライダーカードを取り出し、前に構える。そして青年はコンドルイマジンを睨み付けながら言い放つ。

「オイ鳥野郎、一つお前に教えといてやる。とある人物が言っていた。
男がこの世でやってはいけないことが三つある。仲間との約束を踏み躙るヤツと、飯を粗末にするヤツと、女の子を泣かせるヤツだ！！」

「っく、貴様！！いきなり出てきて何様のつもりだ！！」

「通りすがりの…仮面ライダーだ！覚えとけ！！変身！！」

青年はディファースドライバーにカードを装填する。

【ＫＡＭＥＮ－ＲＩＤＥ！ＤＨＩＦＩＲＳＴ！！】

電子ボイスと共に青年の周りが羽根の形をした粒子と、十枚のライダーズクレストがついた影が現れる。
二つのそれが青年に重なると青年は、漆黒の身体に純白の鎧、二対の翼を表したライドプレートに赤い瞳の仮面をつけた戦士、仮面ライダーディファーストに変身する。

「貴様、仮面ライダーだったのか！？いや、仮面ライダーであろうとなかろうと関係あるか！！」

コンドルイマジンはディファーストに向かって刀を振り下ろす。ディファーストは腕を盾代わりに刀を防ぐ。

――パキイィィンッ！！――

「な！？何だと！？俺の刀が折れただと！！？」

コンドルイマジンが振り下ろした刀は、ディファーストの腕に当たる瞬間もろく折れてしまう。

「どうやら、バックルで受け止めた時にヒビでも入ったんだろう？さて、そろそろ終わりだ」

イマジンに死刑宣告をいいはなったディファーストは一枚のカードをディファースドライバーに装填する。

【ＦＩＮＡＬ－ＡＴＴＡＫＣ－ＲＩＤＥ！ＤＨＩ・ＤＨＩ・ＤＨＩ・ＤＨＩＦＩＲＳＴ！！】

ディファーストは空高く飛び上がると、目の前にクウガ・アギト・龍騎・ファイズ・剣（ブレイド）・響鬼、カブト、電王、キバ、ディケイド、ダブル、そしてディファーストのライダークレストのゲートがコンドルイマジンに向かって現れ、ディファーストは順番にゲートを潜り抜ける。

「や、やめろぉーーーーー！！」

「ディメンション…アンデミデット！！」

ディファーストは総てのゲートを潜り抜け、エネルギーが集まった片足での飛び蹴り『ディメンションアンデミデット』をコンドルイマジンにお見舞いした。
コンドルイマジンは悲鳴を上げる間もなく爆散する。

この後のできごとだが、ディファースドライバーがサクラを庇った時に各世界を往き行く能力が故障してしまったことに気付いて落ち込む青年にサクラのはからいにより、玖楼国に行く頃になったのであった。

第一話／サクラと仮面ライダーと出会い（後書き）

～おまけ～

―とある場所にて―

【ＫＡＭＥＮＲＩＤＥ！ＩＸＡ！！ＺＥＲＯＮＯＳ！！】

イクサ

「魑魅魍魎跋扈たる・・・・この世に蔓延る悪を正義と言う名の太陽が焼き払う！その命、神に返しなさい！！…ってあれ？誰もいない」

ゼロノス

「最初に言っておく、どうやら俺達はここで色々な情報や登場人物の説明などなどをするらしいぜ」

イクサ

「何だと？そんなことのために私が呼ばれたのか！？そんなくだらないことで呼んでくれては困る！！」

ゼロノス

「うるさい！！ともかく俺達はこの初の第一回のＭＣに担当されたんだぞ。とりあえずＭＣらしくするぞ！！

どうも始まったぜ『ツバサ×仮面ライダー通信』！！ＭＣ担当するのはかーなーり強い俺、仮面ライダーゼロノスと…」

イクサ

「みんなの人気者、仮面ライダーイクサだ。この通信を見なさい！

！」

ゼロノス
「今回は仮面ライダーディファーストの事について話すぜ。これがその詳細だ」

仮面ライダーディファースト

　ディケイドとディエンドと同じシステムの仮面ライダー。基本カラーは白と黒。頭部のライドプレートの並び方が二対の翼を表しているのが特徴。複眼の色は赤。クウガからキバのライドカードを初め、ガタックやカリスなどの『カメンライド』のカード、怪人達の力が封じ込められている『カイジンライド』のカード、さらには見た事もない未知数のカードを持っている。

クウガからキバのＦＫＲ（ファイナルカメンライド）によって各々の最強形態に変身可能の他、ディケイドやディエンドやダブルなどのカメンライダーカードを所有。

ディケイドとディエンドのプロトタイプで、本人いわく「プロトタイプってのは、とてつもなく危険な力を発揮する」らしい。

ディファーストドライバー
ディファーストの変身ツール。
形状、機能共にディケイドライバーと同じだが、バックル部のシックスエレメントがそれぞれ炎を司る赤、水を司る青、地を司る金、風を司る緑、光を司る白、闇を司る黒と言う違いがある。
元々次元の移動する機能があったがサクラと出会ってすぐに怪人と

出くわし、その時サクラを庇い故障してしまう。

サモンドライバー
ディファーストの専用武器。他の仮面ライダーを召喚する時にこれを使う。
大剣のソードモードと、ディエンドライバーに酷似した銃のガンモードの二形態ある。

ライダーカードホルダー
左腰についている。任意のライダーカードを取り出せ、無限に貯蔵可能。

ゼロノス
「へぇ、俺と同じくらいかーなーり強いな。特にディメンションアンディミデットは最強クラスだ!!名前の由来は『ガンバライド』のディケイドコンプリートフォームの『ディケイドアンデミデット』だ」

【ＦＯＭＥ－ＲＩＤＥ!ＺＥＲＯＮＯＳ－ＶＥＧＡ!!】

ゼロノス
「ん?何だ?…ごわ!?」

ゼロノス・ベガフォーム
「最初に言っておく!!次回の『ツバサ　～砂漠の国の姫君と仮面の戦士～』は主人公の青年が玖楼国に訪れる。そこで青年の名前が明かされる話だ!

あ、あと侑斗のこともよろしく～」

イクサ

「次回の『ツバサ×仮面ライダー通信』も見なさい！」

第二話／玖楼国へ泊まろう！？（前書き）

どうも地水炎風陰雷です。今回は主人公が玖楼国の人達との触れ合いの話です。
玖楼国の住人さん達は原作ツバサに参考しました。

そしていよいよ敵の影が…第二話『玖楼国へ泊まろう』、始まります。

第二話／玖楼国へ泊まろう！？

ディファーストに変身した青年はコンドルイマジンを倒したその後、サクラの案内により玖楼国の入り口にある階段を登ってた。ちなみに今サクラは何故かフードを被っている。

「あの、大丈夫ですか？すみません私のせいで…」

「ああ…大丈夫だ。お前が心配するな……はぁ、あ～これからどうすりゃいいんだ～～～！？」

青年はサクラに心配させないために慰めるが、内心は自分の後先の行方につい口に出すほど落ち込んでいた。

「あ、あの…」

「…ん？何だ、サクラ…？」

「…さっきは助けて頂いてありがとうございました」

「…ああ、ってこちらこそ何だか助けてもらってたな」

2人が話し合っている内に玖楼国に住んでいる人の居住区に入る入り口の門にたどり着く。

門をくぐると楽しそうな笑顔を浮かべている玖楼国の人達の姿があ

った。青年とサクラは人込みの中に果物を盛った籠を頭に乗せて持っている男の子が今にも転びそうになっている姿を目に入る。それを見ていた青年は籠を掴む。結果男の子は転ばずにすんだ。

「大丈夫か、お前？」

「うん！お兄ちゃんありがとう！」

男の子は青年に感謝の言葉を言うと、彼に笑顔を向けた。

「お兄ちゃん、旅の人？」

「まあ、そんな所だ」

「さっきは本当にありがと！玖楼国はいいところだよ！」

男の子はそう言うと、青年から離れ人込みの中に紛れ消える。

「玖楼国…ここは玖楼国って言う場所なのか…」

「うん、ここが玖楼国。周りは砂漠だらけ、でもみんなわずかな水と緑を愛しんで生きてるの」

「……ふうん、強いんだな。この国は…」

そう呟くと青年は上を向いて青い空を見る。サクラがふと青年の瞳を見ると、そこには奥に悲しみを秘めたような瞳をしていて、何処か自分が愛する者・小狼（シャオラン）と似ていた。
すると青年はサクラに見られている事に気がつくと、顔をサクラに向ける。

「どうした？俺の顔に何かついてるのか？」

「い、いえ！！そんなんじゃ…」

「お兄ちゃん！！」

青年が振り向くと、一つのお店にさっきの男の子の姿があった。男の子の隣には母親らしき女性がいた。

「さっきはありがとう、お店の品物を落とさずにすんだよ！」

「いや、俺はそれほどのことをしたつもりじゃ…」

「本当に有難うございます。この子慌て者で…」

母親は手を男の子の肩におきながら感謝の言葉を言う。すると一人の男性が青年に話しかけてくる。

「その格好、もしかして異国の人かい？」

「う、う～ん…まあそんなものだ、異なる国から来たと言えばそうなるなぁ。だが今さっき着いたばかりだ、玖楼国に」

「なんだか見た事もない服だねぇ。一人みたいだけど連れはいるのかい？」

「……いや、今は一人だ。前は2人いてそいつ等と旅をしていた。今そいつらは、自分の故郷に帰ってるが…（ってあれ…なんで俺、こんなに喋ってるんだ？）」

青年は自分が元々こんなに人と話してるのに驚いていた。
するとさっきの男性とは別のヒゲを蓄えた男性が近づき話に参加してくる。

「いいねぇ旅も。色々な国で色んな物や観光できたりできるしな」

「誰かと一緒に旅をするのもいいが、一人旅もいい」

男性二人は青年に笑顔を向けながらそう言う。その時男性の2人の後ろにいる2人の女性が青年を見て「カッコいい」とか「素敵」とか言っていたが、青年の耳には聞こえなかった。

「ああ、そうだな」

「ゆっくりしていくといい。お前運良さそうな顔してるからもしか

したら姫様に会えるかもしれない」

「……ふ～ん、この姫様ねぇ～。そんなにお忍びで抜け出すのか…」

青年は「どんなじゃじゃ馬な姫様なんだ」と思った。すぐそこにいるフードを被ったサクラこそ玖楼国の姫様だと知らずに。

「宿はもう決めたのかい？」

「いや、まだだが…」

「だったら家に来て！」

「そうですね、是非」

「ふぇ？いや、でも…」

「そうすりゃいい。旅の途中なら金も必要だろ。なあ」

男性がそういうと、ヒゲを蓄えた男性やさっきの女性の2人もうなずく。

「だが、迷惑が…」

「大丈夫だよ！それに、この国夜はすっごく寒いよ。外に寝るなんて無理だよ」

「いや、俺は寒いのも暑いのも慣れている…」

青年が言いかけたとき、サクラが青年の耳元にささやく。

「眠れる所確保しておいた方がいいと思うよ。それにこの子達のさそいを断る気？」

「うっ……」

結局サクラの一押しの御陰で、青年は男の子の家に泊まることになった。

～～～～～～～～～～～～～～～

夜、玖楼国周辺の砂漠にて…そこに、２つの影があった。

「兄貴、あそこに例のライダーがいるよ」

灰色の瞳と機械的な装甲のしたバッタのモチーフの戦士が、『兄貴』と呼ぶ自分と同じ姿をした緑の色違いの戦士に話しかける。

「ああ、いくぜ相棒…今度こそ俺達があいつを地獄に連れて帰ってやる…新しい兄弟達と、共にな…」

緑の戦士は玖楼国の上にある城を見ながら『相棒』と呼んだ戦士にそう言い放つ。
そして緑の戦士の隣には赤い色の生体装甲に二対の角、まるで人々の憎悪や絶望などの負の感情が具現化したような闇を思わせる黒い瞳の戦士…

そしてその隣に黒い服とその上に鎧を着ていて手に鞘に収めた剣を手にしている奇妙な仮面を身に付けている騎士の姿があった。

～～～～～～～～～～

同時刻、城内の王室にサクラの姿があった。サクラは見つからないように周りをキョロキョロと見まわしていた。

「何してんだ？丸見えだぞサ・ク・ラ。帰ってくるの遅いぞ」

「まぁまぁ桃矢、姫も理由があるんだし」

サクラが振り向くとそこには黒い髪をしていてサクラの兄でもあり玖楼国を跡継ぎでもある桃矢と、白い髪のしていて桃矢の親友であり、次の神官候補の一人でもある雪兎の姿があった。

余談だが桃矢は『仮面ライダー電王の世界』で電王の仲間で、高飛車な性格の鳥型イマジン・ジークと声がそっくりである。

「に、兄様！雪兎さん！」

「やぁ、サクラ姫」

「サクラ、どこにいってたんだ？また今日もあいつ（小狼）を待ってたのか？」

ちなみに桃矢は頭の中では小狼をサクラの運命の人だと分かっているが、サクラに『シスコン』の上、最近では『ツンデレ疑惑』に桃矢の性格のため未だに素直に小狼の名前を呼んでなかった、いや呼べなかったのであった。

「うん、小狼達がいつでもこの国にまた来た時に」

「…そうか、まああの小僧は元気にやってるだろう」

「僕もそう思いますよ」

「あの子はサクラの運命の人ですからね」

そこへサクラの父であり玖楼国の現・王様でもある藤隆と、彼の妻でサクラの母親でもあり、玖楼国の王妃と現・神官の撫子（原作では不明なのでこの小説では仕方がなくそう呼ぶことにしました（b

y、作者）」の姿があった。

「サクラ姫、貴方が彼等に送った衣装は彼等をこの国に導き、そして彼等を守りますよ。必ずに」

「貴方が信じていれば、必ず再会しますよ。貴方の運命の人ですからね」

「父様、母様…」

サクラは藤隆と撫子の言葉に笑顔になる。

「そういえばサクラ姫、どうでした彼は？」

「え？彼って…もしかして…」

「そう、貴方が今日出会った貴方と同じ髪をした彼ですよ」

サクラは今日出会った青年のことを思い出す。自分が助けようとしたが、逆に助けられた青年の姿が目に浮かぶ。するとサクラは青年の名前を聞いてなかった事に気付く。

「あの人の名前…聞いてなかった…明日会って聞こうかな…」

――ブォォン――

その時、王室に銀色の歪みが現れる。
そこからグロンギ、ミラーモンスター、ファンガイアがそれぞれ数体中から出現した。

「！！何だ！？コイツら何処から現れたんだ！？」

「雪兎君！！ここは私と桃矢君で何とかします！！貴方は王妃とサクラ姫を安全な場所に連れて行ってください！！」

桃矢と藤隆は何処からともなく剣を取り出し、グロンギ達に立ち向かう。流石玖楼国を守る王のため、三種類の怪人達をたった2人で圧倒していた。
その間雪兎はサクラと撫子を連れて、王室から出て逃げる。

そして同じ頃、昼間助けた男の子と母親の家に泊まっている家にて城の異変に気付く。

「…おいおい、いきなり城崩しかよ…せっかく眠ろうと思ったのに…田舎へ泊まるも何もねぇのかよ」

青年は肩を掴み腕を一回しすると、青年は部屋から出る。部屋を出ると寝たのか親子の姿はなくテーブルの上に『パーユ』という中に

市場で売っていたリンゴが入っている玖楼国の料理がカゴの中に数個入っていた。

「…はぁ…何でこうなんだ……これじゃあ俺も、優しくなっちまうじゃねえか……そういやこんな気持ち、忘れてたな…」

青年はパーユの入ったカゴを見ながら一人そう呟いた。

同じ頃、雪兎とサクラと撫子は城の廊下を走っていた。

「もうすぐ外に出ます！頑張ってください！！」

三人は外の広場に出る。だが目の前に銀色の歪みが現れそこからサナギワーム、オルフェノク、人型サイズの魔化魍がそれぞれ数体現れる。
その内の一体であるサナギワームが三人に襲い掛かる。

「…きゃぁぁぁ！！」

「ギシャァァァァァァァ！！！」

――ブオォォォォォォォン！！――

その時周りからバイク音が響き渡り、その直後黒と白のバイク…マシンディファースダーがサクラに迫るサナギワームを引き飛ばす。
そしてそのマシンディファースダーに青年が跨っていた。
青年はワーム達を見ながら雪兎達に聞き出す。

「ふう～ん…ここが城か…まぁまぁな姿だな。で、お前等王族の関係者か？」

「…あ、あなたは一体…」

「そうだな…たまには俺の名前をちゃんと言ってやるか。俺の名前は翔ける道(みち)を往き、大いなる翼(つばさ)で世界を羽ばたく者…『翔道(ショウドウ)　翼(ツバサ)』…」

青年《翔道　翼》は何処かの人物《天の道を往き、総てを司る男》のように天を指し示すポーズをしながら雪兎、サクラ、撫子に名乗る。

「翔道…翼。それが貴方の…名前」

「ああ…ってえええぇぇぇ

第二話／玖楼国へ泊まろう！？（後書き）

～ツバサ×仮面ライダー通信～

【ＫＡＭＥＮ－ＲＩＤＥ！ＩＸＡ！！ＺＥＲＯＮＯＳ！！】

イクサ
「始まりなさい！ツバサ×仮面ライダー通信だ！！」

ゼロノス
「日本語おかしいだろぉが！！」

ドゴンッ！！

ゼロノス
「どうも俺、かーなーり強いＭＣの仮面ライダーゼロノスだ」

イクサ
「いたた…正義のＭＣ仮面ライダーイクサだ…」

ゼロノス
「おいイクサ…」

イクサ
「イクサではない、７５３《ナゴサン》と呼びなさい！！」

ゼロノス
「呼ぶか！！俺達作り出されたライダーにそんな人間のような名前ねぇだろうが！！それより何だ今回のサブタイトルは！！」

イクサ
「タイトル？ああ、『玖楼国へ泊まろう』か。それがどうした？」

ゼロノス
「まるでどっかの農業や漁業している家に泊まる番組の名前を彷彿させるじゃねえか！！何考えてんだ作者は！！色々失礼だろ！？」

イクサ
「そんなに怒るな。それより今回は名前が明かされた『翔道（ショウドウ）　翼（ツバサ）』のことについてだ。これを見なさい！！」

翔道　翼

ディケイドと同じく世界を廻っている青年。年齢は不明。サクラと小狼の髪と似ている茶色の髪をしている。

ディファーストとして今は様々な世界を旅をしていたが、何故かディケイドライバーやディエンドライバーを持っていて、それを使ってディケイドやディエンドに変身したことがある。

前はディケイドとして九つの世界、ネガの世界、あるライダーいないの世界、Ｒｘの世界、ブラックの世界、アマゾンの世界、シンの世界、ＺＯ（ゼットオー）とＪ（ジェイ）の世界、ＳＰＲＩＴＳの世界を旅をした経歴を

持つ。今はある出来事によって修復できない程ディケイドライバーとディエンドライバーが破壊されていて、上記のライダーのプロトタイプにあたるディファーストの力で異世界を巡っていた。

性格はきまぐれで優しいが、士のように偽悪的に振舞う時もある。容姿はまるでサクラと小狼（シャオラン）の子供が育ったような姿をしていて、度々もてる。

サクラとは恋愛対象とは見ていなく、どちらかと言えば仲のいい兄弟として付き合ってる。

前はクウガと旅をしていたが、ある事件によりクウガは元の世界へ戻ってしまった。

イクサ
「どうやら世界の破壊者ディケイドと繋がる所があるな」

【ＦＯＲＭ－ＲＩＤＥ！ＺＥＲＯＮＯＳ－ＶＥＧＡ！！】

ゼロノス
「ってまたか！？ぐご！？」

ブォーン、ガシャンッ！！

ゼロノス・ベガフォーム
「最初に言っておく、侑斗をよろしく!!あ、そういえば劇中に出てた『赤い色の生体装甲に二対の角の戦士』ってもしかしてクｕ…」

【イ・ク・サ・ナ・ッ・ク・ル・ラ・イ・ズ・ア・ッ・プ】

イクサ
「その命、神に返しなさい!!」

ドゴーンッ!!（イクサがゼロノス・ベガフォームに『ブロウグン・ファング』を放つ音）

イクサ
「ふぅ…ばれる所だった…おっとそれより、来週も『ツバサ×仮面ライダー通信』を見なさい!!」

ゼロノス・アルタイルフォーム
「いってぇ～、覚えてろよ…」

第三話／ディファースト、バトル・オン・ザ・タイム（前書き）

突如城に現れた怪人達…

そしてサクラ達のピンチに駆けつける翼…

戦いが始まる…

第三話『ディファースト、バトル・オン・ザ・タイム』、始まります。

第三話／ディファースト、バトル・オン・ザ・タイム

『グギャァ！？』

ワーム・オルフェノク・魔化魍達は翼のサクラが王族の撫子達と一緒いた事に驚きで上げた絶叫に驚き、一歩下がってしまう。
翼は怪人にお構いなしに無視し、サクラ達に問いかける。

「サクラ！？何でお前がここに！？何でお前城に居るんだ！？」

「そ、そう言われても…私は姫…何だけど…」

「ひ、姫！？もしかして、この玖楼国の姫なのか！？…（てっきりじゃじゃ馬な姫かと思ったら、サクラがこの国のお姫様だったのか！？）」

翼はサクラが玖楼国の姫と知って驚愕する。翼はサクラ達に話をし続けようとするが、待つのに痺れを切らした一体のサナギワームが翼に襲い掛かってきた。

『ギシャアァァァァァァ！！！』

「うるせぇ、少し黙ってろ」

何処からともなく出したサモンドライバー・ソードモードで翼はサナギワームを斬り付け、そのまま蹴り飛ばす。翼はため息をつきながら雪兎に顔を向ける

「はぁぁ、少しやってやるか…悪いけど、何処かに隠れといてくれないか？」

「あ、はい。姫、王妃、こちらです」

雪兎達三人が壁に隠れると、翼はディファースドライバーを取り出し腰につけ、ホルダーからカードを取り出し構える。

「…変身！！」

翼はディファースドライバーにカードを装填し、バックルを閉める。

【ＫＡＭＥＮ－ＲＩＤＥ！ＤＨＩＦＩＲＳＴ！！】

電子ボイスと共に翼の周りに羽根の形をした光の粒子と、十一枚のライダーズクレストがついた影が現れる。

二つのそれが重なると翼は、漆黒の身体に純白の鎧、二対の翼を表したライドプレートに赤い瞳の仮面をつけた戦士、仮面ライダーディファーストに変身した。

「いっぱいいるな、まずはワームから行くか…変身！」

ディファーストは一枚のカードをディファーストドライバーに装填する。

【ＫＡＭＥＮ－ＲＩＤＥ！ＫＡＢＵＴＯ！！】

ディファーストドライバーから波動が広がり、波動が装甲（アーマー）を作り出していく。装甲が総て纏い終わると、顎についている角――カブトホーンが顔面の定位置に収まる。
そしてディファーストは天に向かう力強い角、赤い装甲を纏った水色の瞳の『Ｄ（ディファースト）カブト・ライダーフォーム』に変身した。

「さあて、甲虫（こうちゅう）狩りならぬ、『ワーム狩り』だぁぁぁ！！」

Ｄカブトはサナギワーム達にサモンドライバー・ガンモードで攻撃し、サナギワーム達は受け次々と爆発し始める。

だが最後のサナギワーム達がＤカブトの攻撃を受ける前に脱皮し、それぞれマンティスワーム・ジオフィリドワーム・キュレックスワーム・セパルチュラワームになり、Ｄカブトから逃げようと姿を消す、いやワームだけが持つ超高速移動能力（クロックアップ）を使った。
だがＤカブトはそれを見て慌てずにホルダーから一枚のカードをディファーストドライバーに装填する。

「ちょこまか動いても、光の支配せし太陽の神の神速（はやさ）には勝てないぜ？」

【ＡＴＴＡＣＫ－ＲＩＤＥ！ＣＬＯＣＫ－ＵＰ！！】

電子ボイスを発した直後Ｄカブトも姿が消えてしまう。

――超高速（クロックアップ）に突入した世界――

「はぁぁぁぁぁ！！ワァ～～ムゥ～～～…蹴りだぁぁ！！！」

『ギ！？ギャアァァァァ！？』

――ドゴオォォンッ！！――

マンティスワームの腹部にＤカブトに蹴りがめり込んだ鈍い音が鳴る。Ｄカブトはそのままマンティスワームを空高く蹴り飛ばすと次の標的にジオフィリドワームを選ぶ。

「ググ……グ、グググァァァァァ！！！」

次にやられるのは自分だと気付いたジオフィリドワームは、やられる前にやろうとＤカブトに襲い掛かろうとする。が、もう既に遅しであった。

「ワァ～～ムゥ～～…割りだぁぁ！！！」

――バギィィンッ！！――

Dカブトは飛び掛ってきたジオフィリドワームをサモンドライバーで頭の骨格が文字どうり『割れる』ほど振り下ろし叩きつける。ジオフィリドワームは地面に叩きつけられその反動で一回バウンドし、マンティスワームと同じ運命の空高く飛ばされてしまう。

「「グ、グルルルル……」」

キュレックスワームとセパルチュラワームはいやな予感がすると感じた。すぐにその予感は当たった、いや当たってしまったのかDカブトが二体の目の前に現れる。

「今度はお前等だ…ワァ～～ムゥ～～～…折りだぁぁぁ！！」

――「「ドガァァンッ！！」」――

Dカブトはワーム二体に両手アッパーを放つ。それぞれ二体に片手ずつアッパーが身体にめり込み、空高く飛ばされる。
そして四体の成虫ワーム達が一箇所に固まって落ちてくる。Dカブ

トはディファースドライバーにカードを装填し、ワーム達が落ちてくる場所に歩み寄る。

【ＦＩＮＡＬ－ＡＴＴＡＣＫ－ＲＩＤＥ!ＫＡ・ＫＡ・ＫＡ・ＫＡＢＵＴＯ!!】

「カブト・ライダーキック……はぁぁ!!」

Ｄカブトはさきほど空高く突き上げ自分の背後に落ちてきたワーム達に強力なカウンターキックをお見舞いする。カブト版『ライダーキック』をくらったワーム四体達は爆散した。爆発すると同時にＤカブトは超高速の世界から帰った。

～～～～～～～～～

通常空間に戻ってきたＤカブトは次にオルフェノク達を見ると、一枚のカードをドライバーに装填する。

「…変身!!」

【ＫＡＭＥＮ－ＲＩＤＥ!ＦＡＩＺ!!】

電子ボイスと共にベルトから真紅に輝くフォトンストリームが身体中に流れ、ツールが流れ終わるとそこには黒いボディを伝いながら赤く発光するラインと黄色の大きな眼に銀色の装甲を纏った『Ｄファイズ』の姿があった。

「さぁ、戦うことが罪ならこの救世主が背負ってやるぜ…」

「きゃぁぁぁぁ！！」

「……！？」

振り向くとサクラ達がオルフェノク二体に襲われている姿があった。
Ｄファイズは咄嗟にホルダーから素早く一枚のカードを取り出し、ディファースドライバーに装填する。

【ＡＴＴＡＣＫ－ＲＩＤＥ！ＡＵＴＯ－ＶＡＪＩＮ！！】

「出番だ、サクラ達を助けろ」

するとすぐ其処に置いてあったマシンディファースダーの目の前にファイズの紋章――ライダーズクレストが現れ、ディファースダーがそれを通ると銀色のバイク『オートバジン（ビークルモード）』に変わる。

さらにオートバジンは変形し人型のロボットのバトルモードになると、上空に舞い上がりサクラ達の所へ向かい二体のオルフェノクを両腕で掴まえ、他のオルフェノクや魔化魍達の所まで投げ飛ばす。
その後Ｄファイズがサクラ達の所へ駆け寄る。

「お前等、大丈夫か？怪我は…」

「大丈夫です。え、えっと～…」

「あ、そういえばお前に名前言い損なったな。翼だ、そう呼んでくれ…おい、そいつらを守っとけよ」

Dファイズはオートバジンに向かってそう言うと、オートバジンの背中にあるバイクのハンドル部だった部分を握り引き抜く。するとハンドル部から赤い光の刀身が生成され、『ファイズエッジ』になった。

Dファイズはファイズエッジを構え、オルフェノク達の所へ走り出す。

「はぁぁぁぁぁ！！！」

Dファイズはファイズエッジでオルフェノクや魔化魍を斬り付ける。オルフェノクや魔化魍達はダメージを負いひるむ。

「てめえら、覚悟しろよ」

Dファイズは一枚のカードをディファースドライバーに装填、ファイズエッジを構える。

【ＦＩＮＡＬ－ＡＴＴＡＣＫ－ＲＩＤＥ！ＦＡ・ＦＡ・ＦＡ・ＦＡＩＺ！！】

「スパークル…カット!!」

Dファイズは身体をひねって回転させ、オルフェノクと魔化魍にファイズエッジでの斬撃『スパークルカット』を広範囲に放つ。二種類の怪人達はファイズのイメージでもあるギリシャ語のΦの文字がそれぞれ浮かび、オルフェノクは青白い炎と灰となって崩れ落ち、魔化魍は枯れ葉となり爆発した。
その後、Dファイズはディファーストの姿に戻る。

「さぁ〜て、これで終わりか…」

「あの待ってください、まだ城の中に王と王子が怪物と戦ってます!!」

「あ…!?何だと…」

ディファーストは雪兎の言葉に驚き、駆け寄り一瞬の内に雪兎達の目の前に現れる。

「それで、そいつらはどこに…」

「王室で王達と戦っています。王と王子は簡単に倒されないことは自分がよく知っていますが…あの数じゃ…」

「大体分かった…あとは自分で何とかしてたどり着く!!」

ディファーストはそういうと、城の中へ入り王室へ向かう。そのディファーストの姿を見送った一同は…

「ふふ、あの人翼さんって言うのですか。貴方や彼(シャオラン)と同じ真名《まことの名》ですね、サクラ姫」

「うん…ねぇ母様(かあさま)、もしかして私と出会うのと知っていたの?…『夢見(ゆめみ)』で…」

「まあね、この国の人達と触れ合う所しか見てないけどあの子はいい人だわ。また桃矢のすねる顔が見れるわ♪」

撫子は悪戯(いたずら)する子供ような笑顔をサクラに向ける。

「あ〜あ、また桃矢の…もう王妃〜」

「ふふふ♪」

そして、その場を張り詰めていた緊張感はいつの間にか解けていた。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

同じ時、場内の王室にて藤隆と桃矢はグロンギ・ミラーモンスター・

ファンガイアの三種類の怪人達と戦っていた。既に数体の怪人を倒したが数は一行に減らなかった。

「たっく、ぞろぞろと…」

桃矢が倒しても数が減らない毒づいていると、背後にファンガイアが桃矢に襲いかかって来ようとしていた…。

『ギャアアスッ！！』

「！？しまっ……」

【ＡＴＴＡＣＫ－ＲＩＤＥ！ＯＮＧＥＫＩＢＯＵ　ＲＥＫＫＡ！！】

桃矢は剣でファンガイアに応戦しようとした時、何処からか無機質な声がすると突如ファンガイアに火の弾が直撃しファンガイアはガラス細工が壊れるように砕け散った。

「…！？何だ！？」

桃矢が何かと思うと無数の火の弾が何処からか放たれ、桃矢と藤隆以外には当たらずファンガイアやグロンギにミラーモンスターに次々と着弾し、爆発が爆発を呼ぶ。
そして怪人達が全部が一掃されると藤隆は桃矢の所に駆け寄った。

「桃矢君、大丈夫ですか？」

「大丈夫だ。それより、さっきのは一体…」

――コツッ、コツッ、コツッ――

「「！？」」

2人が足音のする方へ振り向くと、そこには紫の逞しい肉体、二本の角が生えた頭に赤い紋様が走るのっぺりした顔という人々を恐怖させるには充分な鬼の姿をした『D響鬼』が赤い鬼の顔を模した二対の太鼓のバチ『音撃棒・烈火』を手に持ちこちらに足音を立てながら歩み寄る姿が目に入った。

「貴様、何者だ…」

桃矢は凄い剣幕で剣の先端をD響鬼に向けながら問いかけた。D響鬼は何も言わず、桃矢と藤隆の前に歩み寄っていく。

「おい聞こえなかったのか？お前は何者だ…」

「……！！」

D響鬼は一瞬のうちに桃矢の懐に入り、桃矢に向かって拳を放つ。
桃矢はそれを首すれすれに避ける。

「誰だか知らないが、俺にかなうとでも思ったの…」

「光家直伝…」

「!?」

「笑いのツボ!!」

――ズボッ!!――

D響鬼は親指を桃矢の首筋に軽く突き立てる。すると桃矢は突然大笑いし始める。

桃矢
「あ～～っはっはっはっはっはっはっはっはっはっはっはっは!!!な、何しやがるおま…はっはっはっはっはっはっはっはっはっはっは～～!!!」

「…うん、人間だな。ワームだったら泣き始め、イマジンだったら身体から追い出されるがこいつはちゃんと大笑いしているかられっきとした人間だな」

「あぁなるほど、僕達が人間かさっきの怪人か見分けるためにそんなことを…」

藤隆はD響鬼の行動に納得すると首をうんうんと頷く。そこへサクラ達三人とオートバジンが王室の中へ入って駆けつけてやって来る。すると三人は桃矢が何故か大笑いしている姿を見て唖然としてしまう。

「に、兄様？」

「お、王子、何故一人で笑っていらっしゃるのですか？」

「こっちがあはは、聞きたたははははははは！！」

「流石にやりすぎたか…よっと」

D響鬼は軽く桃矢の背中を叩く。すると桃矢の大笑いがピタッと止まり、D響鬼に。

「オイお前！一体何を…」

「……！！避けろ！！」

何かに気付いたD響鬼の掛け声と同時に歪みの壁が現れ、D響鬼とオートバジンが飲み込まれてしまう。

「！？翼君！！翼君！！」

サクラは歪みの壁に手を打ちつけながら翼の名前を呼ぶ。すると歪みの壁の向こうが透け、そこにD響鬼とオートバジンの姿があった。

～～～～～～～～～～

その頃、歪みの壁に入る際に元の姿に戻ったディファーストとオートバジンは周りが森に囲まれ所々壊れた古びた神社のような場所に来ていた。

「っく…どこだ?ここ……ん、そういえば…こんな事前にも…」

ディファーストはデジャブを感じそう呟く。その時さっきとは別の歪みの壁が発生し、神社に緑の『兄貴』と呼ばれた戦士と『相棒』と灰色の戦士…『仮面ライダーキックホッパー』と『仮面ライダーパンチホッパー』が柱に寄りかかっている姿…。

「!?お前は…『クウガの世界』の時の……はっ!!」

ディファーストは背後から殺気を感じ、振り向いた。そこには…。

「ウゥゥゥゥ…グァァア!!」

「シュウゥゥゥゥ…シャァア」

赤い生体装甲を纏い二対の黄金に輝く角、闇に落ちたような『黒い瞳』をした『仮面ライダークウガ』と、隣に黒い服とその上に鎧を仮面を身に付け黄金に輝く剣を持った黒騎士が自分に近づく姿があった。

ディファースト
「何で…お前等が……何でお前らがここにいるんだ!!!!」

ディファースト…いや、翼はかつての仲間――に向かってそう叫んだ…その声は、空しく空に響いた。

第三話／ディファースト、バトル・オン・ザ・タイム（後書き）

～ツバサ×仮面ライダー通信～

【ＫＡＭＥＮ－ＲＩＤＥ！ＩＸＡ！！ＺＥＲＯＮＯＳ！！ＫＡＩＺＩＮ－ＲＩＤＥ！ＤＥＮＥＢ！！】

ゼロノス
「最初に言っておく、今から『ツバサ×仮面ライダー通信』始まるぜ」

イクサ
「どうやら敵の刺客が分かったな、片一方の２人は地獄兄弟…自称闇の住人ことキックホッパーとパンチホッパーか」

デネブ
「それだけじゃない、まさか翔道のかつての仲間であるクウガと戦わせるなんて…卑怯だ！！」

ゼロノス
「…ってデネブ！！なんでお前いるんだ！？」

デネブ
「えへへ、俺も呼ばれちゃった。あ、どうもこれデネブキャンディーだ」

イクサ
「ありがとう、私は仮面ライダーイクサだ。７５３《なごさん》と

呼びなさい。このキャンディはありがたく頂こう」

ゼロノス
「なごむな、お前らっ！！！」

――ドガァァンッ！！――

ゼロノス
「それよりクウガの様子が変だな。普通クウガは力に飲み込まれたアルティメッとフォーム、『仮面ライダーディケイド　オールライダー対大ショッカー』で小野寺ユウスケがビジュムの地の石によって無理やりライジング強化させられた黒目のライジングアルティメットフォームしか黒い目のフォームはないはずだが…」

イクサ
「それに、黒い騎士は一体誰なんだ？見た所、ライダーでもファンガイアのような怪人でもないな」

デネブ
「うぅ～ん…本当に一体…ん？」

【ＫＡＭＥＮ－ＲＩＤＥ！ＤＡＢＵＬＥ！！】

ダブル（ジョーカー）

「あれ？何で俺呼ばれたんだ？っておわ！？」

ダブル（サイクロン）
「黒い騎士…ライダーでも怪人でもない謎の存在、興味深い！！」

ゼロノス
「な、何だこいつ？いきなり出てきて」

イクサ
「知らないのか？仮面ライダーダブルだ。２人で一人の仮面ライダーだ。ハードボイルドならぬハーフボイルドの左半身に、知識欲の塊の右半身という変わったライダーだ」

ダブル（サイクロン）
「検索を始めよう…キーワードは、『騎士』『黄金に輝く剣』…」
（以降キーワードを入れていく）

デネブ
「何してんだ？」

イクサ
「どうやら地球（ほし）の本棚に入ったようだな。地球規模にも広がる無限の情報の海に飛び込んで文字どうり『検索』しているようだな」

ゼロノス
「こいつはコンピューターか！つーか何でイクサ、お前がそんな事知ってる！！」

ダブル（サイクロン）
「う～ん、どうやら検索したら『アーサー・ペンドラゴン』、『エ

クスカリバー』、そして『サーヴァント』と言う単語が出てきた」

デネブ

「それってどういう意味だ？おっと、それより次回の『ツバサ　～砂漠の国の姫君と仮面の戦士～』は柳雨さんから授かったＦＦＲ（ファイナルフォームライド）と必殺技が登場するぞ。見てくれ！！　あと柳雨さんありがとう！！」

イクサ「次回の『ツバサ×仮面ライダー通信』も見なさい！！」

第四話／闇に堕ちたKとS／黄金と純銀の鬼達と人の心を持った白き死者達（前編）

～ツバサ×仮面ライダー通信～

【ＫＡＭＥＮ－ＲＩＤＥ!ＺＥＲＯＮＯＳ!ＩＸＡ!!ＤＯＢＵＬＥ!!】

ゼロノス
「最初に言っておく、『ツバサ×仮面ライダー通信』始まるぜ……って何か今日の早くねぇか?」

イクサ
「確かにここ前書きだな、何故だ?誰か答えなさい!!」

ダブル（サイクロン）
「どうやら検索によると、作者のもとに某小説から翼の出演依頼が来たらしい。それと本編の文字数が平均より多いという事情と重なって今てんてこ舞いで、それでこうなったわけ」

ダブル（ジョーカー）
「おいおい…それより何だそりゃその小説は?どんな内容だ?」

ダブル（サイクロン）
「それがその小説…いやその世界は様々なキャラが活躍するみたいだ」

イクサ
「何？もしかして主人公が仮面ライダーデルタとオーディンの…」

ダブル（サイクロン）
「いや、そっちの作品とは確実に違う。〇ンジェビルさんに失礼だよ。ちなみに後書きは新カードの紹介だ」

ゼロノス
「といっても、まだ使ってない未登場のカードばっかりだがな」

ダブル（ジョーカー）
「じゃ、そろそろ第四話『闇に堕ちたＫとＳ／黄金と純銀の鬼達と人の心を持った白き死者達』、始まるぜ」

ゼロノス
「それと最後に言っておく、次回は必ず確実に柳雨さんから授かったＦＦＲ（ファイナルフォームライド）と必殺技を出すぜ。作者も「予定よりおそくなってしまいましてすいません。できるだけ早く仕上げます」って謝罪している」

イクサ
「次回の『ツバサ×仮面ライダー通信』も見なさい！！」

第四話／闇に堕ちたKとS／黄金と純銀の鬼達と人の心を持った白き死者達

古びた神社にて、キックホッパー・パンチホッパーの地獄兄弟と共に現れた本来燃え盛る炎のように満ちた赤い目のはずがまるで闇に堕ちたような黒い瞳をした『仮面ライダークウガ（マイティフォーム）』と、クウガと同じく闇に堕ちたような黒い服と鎧を纏った黒騎士がディファーストの目の前に姿を現す。
ディファーストはクウガと黒騎士を見て驚愕していた。

ディファースト
「!?お前等は、何であいつらと…ぐ!」

クウガ
「ガァァァァ!!!」

黒い目のクウガはディファーストに襲い掛かってきてキレのあるパンチを繰り出してきた。ディファーストはまともにくらい、後ろによろけながら下がる。

黒騎士
「ウガアアアアアアアアア!!!!」

ディファースト

「！！」

そこへ黒騎士がクウガの上を飛び越え、ディファーストに剣を振り下ろした。幸い、歪みの壁に飲み込まれる時に一緒に飲み込まれていたオートバジンがバスターホイールでディファーストを守り、銃弾を黒騎士に打ち込む。ディファーストはその隙に黒騎士をクウガの方向へ蹴飛ばす。

キックホッパー
「お前、そいつらの相手をしててもいいのか？」

パンチホッパー
「俺達も、いるんだぜ…ハァァ！！」

キックホッパーとパンチホッパーがディファーストに向かって飛びかかる。が、ディファーストはホルダーから六枚のカードを取り出し、先に五枚のカードをサモンドライバーに装填し照準を地獄兄弟（キックホッパー・パンチホッパー）に向ける。

ディファースト
「……はは、よーく分かったよ……お前等は、お前等と同じ兄弟ライダーと戦っておけ……

……お前等に構ってる暇なんて、あるかよ」

ディファーストはドスのきいた低い声で、サモンドライバー（ソードモード）をキックホッパー・パンチホッパーに向かって横に振るう。

【ＫＡＩＪＩＮ－ＲＩＤＥ！ＣＲＡＮＥＯＲＰＨＮＯＣＨ！！ＳＮＡＫＥＯＲＰＨＮＯＣＨ！！】

【ＫＡＭＥＮ－ＲＩＤＥ！ＯＲＧＡ！！ＧＯＬＵＢＡＲＡ！！ＳＨＩＬＵＢＡＲＡ！！】

電子ボイスとサモンドライバーの刀身から赤、青、緑の光の壁が現れ、その衝撃波でキックホッパーとパンチホッパー、さらにクウガと黒騎士を遠くへ吹き飛ばされる。

そして三つの壁が一つになると、壁の中から黄金色の錫杖を持った金色の身体の鬼の仮面ライダー『ゴルドラ』と、その隣に純銀色の金棒を銀色の身体のゴルドラと同じ鬼の仮面ライダー『シルバラ』が光の壁から出てきた。

そして同時にゴルドラ達とちょうど背中合わせの位置にいるディファーストの隣に鶴の特性を持った『クレインオルフェノク』と蛇の特性を持った『スネークオルフェノク』、黒い姿に体中に駈け巡る金色のフォトンストリームとΩと赤い瞳の仮面にローブを纏った最

強クラスの仮面ライダー『仮面ライダーオーガ』の姿を現す。

ゴルドラ
「ふふふ、どうやら我らが呼ばれたようだな。で？何用だディファーストよ…」

ディファースト
「おいゴルドラ、シルバラ。あのネガティブ飛蝗共（キックホッパーとパンチホッパー）を……『ぶっ潰して来い』……」

ディファーストはまたもやドスのきいた声でゴルドラとシルバラに言い放つ。そのドスの聞いた声を聞いた鬼の統べる最強の鬼兄弟のライダー達はその声に秘めた怒りと殺気と迫力に恐怖を感じた。

シルバラ
「わ、分かったからそんな怖い声で言うんじゃねぇ！！そこの鶴の女が怖がってるだろうが！！俺達があいつらを潰してくりゃいいんだろ！？」

ディファーストのドスの効いた迫力に怖がりながらシルバラはオーガとスネークオルフェノクの後ろに隠れている鶴の女…もといシルバラと同じくディファーストの迫力に怖がっているクレインオルフェノクを指を指す。

クレインオルフェノク

「う、ううぅ～～～～……怖い……」

スネークオルフェノク
「そうだそうだ、怖いっちゅーの！！いくらお前がどう思っても今はあいつ等を止める方が先だろうが」

キックホッパー
「お前等…俺達を忘れるんじゃねえ……どうせ俺達なんて…日向の道は歩けないんだよ」

パンチホッパー
「俺達闇に住む住人は金や銀や白の光は眩しすぎるんだよ……汚してやる！そんな光！！」

クウガ
「ウガァァ！！」

黒騎士
「ウガァァァ！！」

キックホッパー・パンチホッパー・クウガ・黒騎士
「ハアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！」

シルバラ達が話している内に衝撃波によって遠くへ吹き飛ばされたキックホッパーとパンチホッパー、クウガと黒騎士が戻ってきてディファースト達に飛び上がり襲い掛かって来た。

だがそれを見ていたオーガは素早くベルトのオーガフォンを手に取りブラスターモードに変形させ銃口をクウガと黒騎士に向け、ディ

ファーストはオーガと同じ様にクウガと黒騎士に正面から向かって行き先ほど取り出したカードをディファーストドライバーに装填、ゴルドラはキックホッパーとパンチホッパーに錫杖の刃を向ける。

オーガ
「…ハァ！！」

ゴルドラ
「…フンッ！！」

ディファースト
「…変身」

【ＦＩＮＡＬ－ＫＡＭＥＮ－ＲＩＤＥ！Ｂ・Ｂ・Ｂ・ＢＬＡＤＥ！！】

ディファーストドライバーの電子ボイスが響く時と同時にオーガはフォンブラスターの引き金を引き、クウガと黒騎士、ゴルドラは錫杖の刃から黄金のエネルギーを放ち、それぞれクウガと黒騎士、キックホッパーとパンチホッパーを打ち落とす。

その直後バックルからスペードのカテゴリーＫ（キング）…コーカサスビートルアンデッドの紋章が刻まれた黄金に輝くオリハルコンエレメントが飛び出し、クウガと黒騎士は先程の三つの光の壁のようにオリハルコンエレメントが発生させた衝撃波によって吹き飛ばされ、それと同時にシルバラは打ち落とされたキックホッパーとパンチホッパーを金棒でホームランのようにまた遠くへ打ち飛ばした。

そしてディファーストはオリハルコンエレメントを通過し、金色に輝く重装甲の鎧と背中に重醒剣キングラウザーを背負った『Dブレイド・キングフォーム』へ変化する。

オーガ
「分かった、僕たちはあの2人を君と共に正気に戻す…」

ゴルドラ
「なるほど、じゃあ我等兄弟はあの飛蝗をか…承知した」

Dブレイド・キングフォーム
「……ああ、頼んだぞ…」

Dブレイドはそう言うと、オーガ・クレインオルフェノク・スネークオルフェノク・オートバジンと共にクウガ・黒騎士の吹き飛ばされた方向へ走り出した。それと同じく、キックホッパーとパンチホッパーも体勢を立て直し戻ってきた。

パンチホッパー
「ハァ…貴様等…」

ゴルドラ
「ふっ、ふはは…悪いがここは通さん、我等鬼の兄弟が相手だ」

キックホッパー
「お前、今俺達を笑ったな…？笑ったなぁ！！」

シルバラ
「ハンッ…さて、お前らを潰したらどんな音で潰れるだろうねぇ？」

ゴルドラとシルバラの鬼兄弟は、キックホッパーとパンチホッパーの地獄兄弟を迎え撃った…

～～～～～～～～～～～～

クウガ
「ウガァァァッ！！」

同じ時、クウガと黒騎士は黄金のゲートの衝撃波によって山の中の近くに川がある岩場に吹き飛ばされていた。クウガと黒騎士はいきり立ったようにディファースト達を探すため辺りを見回す。

黒騎士
「グルルルルルゥ……」

クウガ
「ガルルルルルルゥ……」

【ＡＴＴＡＣＫ－ＲＩＤＥ！ＳＩＤＥＢＡＳＳＨＡＲ！！】

――ブオォォォォォォンッ！！――

クウガ・黒騎士
「「！？」」

電子ボイスがした方向へクウガ達が顔を向けると、重火器を両腕を装備し二足歩行で自分達に向かって来ているカイザの愛機『サイドバッシャー・バトルモード』が姿を現す。だがサイドバッシャーには肝心の相棒のカイザの姿はなく、代わりにサイドバッシャーの操縦席にスネークオルフェノク、その後ろに武器の弓矢を持ち激情態の姿になったクレインオルフェノク…そしてサイドバッシャーの右腕と左腕にオーガとＤブレイドの姿があった。どうやらディファーストのカードの能力によってオートバジンに変化したマシンディファースダーが今度はサイドバッシャーに変化したらしい。

Ｄブレイド・キングフォーム
「おい、援護を頼む…」

クレインオルフェノク
「は、はい……が、頑張ります」

スネークオルフェノク
「任せとけ、ちゅーか俺に掛かればお茶の子さいさいだ」

オーガ
「任せたよ、2人とも」

Dブレイド・キングフォーム
「…行くぞ」

Dブレイドの合図と共にオーガとDブレイドはサイドバッシャーの腕から飛び上がり、上空でドロップキックの構えをする。クウガと黒騎士はオーガとDブレイドに攻撃しようとするが、クレインが放った矢やサイドバッシャーから放たれた銃撃がクウガ達の足元に着弾し邪魔をし、Dブレイド達2人のドロップキックをくらってしまう。

黒騎士
「グァァッ…」

クウガ
「グガァ…グガッ!!」

クウガは2人に殴りかかろうとするが、Dブレイドが背中のキングラウザーを手にしクウガに振り下ろしてきて叩き斬られる。クウガは反撃しようと手刀を振り下ろすがDブレイドは左手に持ち替えたキングラウザーで受け止め、カードを装填せずに『ライオンビート』を発動させ、強化し開いていた右腕でクウガの腹にお見舞いした。

【Ｒｅａｄｙ】

オーガ
「はぁぁあ！！」

黒騎士
「ガァァァァ！！」

Ｄブレイドとクウガが戦闘を繰り広げている隣でオーガはミッションメモリーを装着し長剣モードにしたオーガストランサーを振るい黒騎士との激しい剣劇をしていた。

――ガキィンッ！ガキィンッ！！ガキガキィンッ！！！――

黒騎士
「ギギッ…ギグァァァァ！！」

オーガ
「っく…強い、かなりの実力か…」

黒騎士はオーガストランサーを剣で受け止め、そのまま鍔迫り合いに入る。

オーガ
「君の事はディファースト…いや翼から聞いている、だけど何があ

ったんだ?何故あいつらと…」

黒騎士
「グガァァァァ!!」

オーガ
「無駄なのか…なら容赦はしない!!」

そういうとオーガは黒騎士を無理やり突き飛ばし、さらに黒騎士に無数の斬撃を叩き込みダメージを与える。Dブレイドもクウガを追い詰めていた。Dブレイドは『キッククローカスト』の力を纏った脚でクウガを黒騎士の所まで蹴り飛ばす。

クウガ
「ググ…グガァァァ!!」

ダメージを負いながらも立ち上がったクウガは、マイティフォームの必殺技である『マイティキック』の発動させる時の構えをする。するとクウガの姿が青・緑・紫、そして赤(マイティ)と最初に戻り、それを連続でフォームチェンジし始め、それと同時に黒騎士の剣が輝き始め、まるでクウガが黒騎士に力を送っているように見えた。

オーガ
「何をしているんだ……?」

Dブレイド
「クウガがあの騎士に力を送っているんだろう……ただでさえ究極の斬撃なのにクウガの封印エネルギーを魔力に乗せてあの剣に送り、俺達に巨大な一太刀を浴びせるためにな…だけどそんなことはさえねぇぜ」

ディファーストはそういうと一枚のカードをディファースドライバーに装填する。同じくオーガもベルトのオーガフォンを開きエンターボタンを押す。

【ＦＩＮＡＬ－ＡＴＴＡＣＫ－ＲＩＤＥ！Ｂ・Ｂ・Ｂ・ＢＬＡＤＥ！！】
【ＥＸＣＥＥＤ　ＣＨＡＲＧＥ】

ディファースト
「２人とも、少し我慢しろよ……オーガ！！」

オーガ
「…ああ！！」

オーガは身体のフォトンブラッドを経由してエクシードチャージしたオーガストランサーを、Ｄブレイドはスペードのカテゴリー１０・Ｊ・Ｑ・Ｋ・Ａ（ジャッククイーンキングエース）で連なる五枚のラウズカードの目の前に出現するとキングラウザーをそれぞれ構える。

黒騎士
「ガァァァ……エ、クス…カリバァァァァ！！」

Dブレイド・キングフォーム
「…ロイヤルストレートフラッシュ！！」

オーガ
「ハァァァァァァ……ハァ！！」

それぞれの掛け声と共に、黒騎士は剣から巨大な剣状の光の斬撃『約束された勝利の剣（エクスカリバー）』を、それと同じタイミングでDブレイドはキングラウザーをラウズカードに向けて一振りさせると、それを通して強大なエネルギーを放出させる『ロイヤルストレートスラッシュ』を、オーガはオーガストランサーの刀身から伸びた光の刃『オーガストラッシュ』をそれぞれ放つ。
三つの光はそれぞれぶつかり合い、周りには衝撃波や爆風が広がる。
だがクウガの力を送り込んだ『約束された勝利の剣（エクスカリバー）』は次第にDブレイドとオーガを押されていた。

オーガ
「…グッ、っくぅ…ウウウ…」

Dブレイド・キングフォーム
「…グッ、クウガの力を合わせただけあって結構くるな……だがお前等、何か忘れてないか？」

クウガ・黒騎士
「!?」

スネークオルフェノク
「おらおらぁ!!ぶっばなすぜ!!」

その時ディファースト達の横からサイドバッシャーが突っ込んできて、クウガと黒騎士に向かって一斉放火を放つ。たちまち2人がいた所は爆発と舞い上がった煙に包まれ黒騎士は攻撃を中断せざる終えなかった。

Dブレイド・キングフォーム&オーガ
「「ウオォォォォォォ!!!!」」

Dブレイドとオーガはその隙に黒騎士の光の斬撃を上空に弾き飛ばすと、Dブレイドは素早くカードを装填する。

【ＡＴＴＡＣＫ－ＲＩＤＥ!ＳＴＲＡＩＧＨＴ　ＦＬＡＳＨ!!】

Dブレイドはキングラウザーとサモンドライバーを片手ずつに持つと、二つの刃にはエネルギーを帯びていく。そしてDブレイドがクウガ達に向かって走り出し、2人にキングラウザーとサモンドライバーを振り下ろす。激しい閃光と突風が巻き起こしクウガと黒騎士は川の中に吹き飛ばされる。ディファーストはDブレイドから元の

姿に戻ると、高くジャンプしサイドバッシャーの操縦席に飛び移るとスネークオルフェノクと入れ替わってハンドルを握る。

ディファースト
「さぁて、氷付けだ。2人とも、それで頭冷やして正気になれ」

【ＡＴＴＡＣＫ－ＲＩＤＥ！ＷＡＴＥＲ！！】

電子ボイスと共にベルトから蒼い稲妻のような光がサイドバッシャーに伝わると、ディファーストはサイドバッシャーの両手の銃口を川に浸かっているクウガ達にミサイルやバルカン砲での銃撃が放たれる。

――ドドドドドドッ！！ピキッピキピキッ……――

爆風と煙が晴れると、そこには先程の攻撃によって冷気を漂いさせながら凍っている川と、その川の中にクウガと黒騎士のいた場所に佇む巨大な氷の結晶の姿があった。
ディファーストはサイドバッシャーをバトルモードからビークルモードに戻すと、サイドバッシャーは元の姿であるマシンディファースダーに戻る。

ディファースト

「……」

スネークオルフェノク
「っちゅぅ～～～、何しやがる翼！！せっかくの俺の活躍の場面が～～…」

クレインオルフェノク
「まあまあ海堂さん、落ち着いて落ち着いて」

ディファーストが上空を見ると自分の活躍の場面を取られて悔しがっているスネークオルフェノクと、スネークオルフェノクの身体を抱えて彼をなだめている飛翔態姿のクレインオルフェノクが降りてくる。オーガも三人の所に駆け寄ってきた。

オーガ
「…大丈夫なのか、あの2人は…」

ディファースト
「心配するな。あいつらはちゃんと生きている…冷凍保存…いや仮死状態になっているだけだ。氷河期のマンモスのようにそのまま化石にはならない」

スネークオルフェノク
「っへ、化石にしちまうのかよ…お前も案外酷いじゃねえか」

クレインオルフェノク
「そう言っているけど海堂さん、貴方もあの2人心配してるよね？」

スネークオルフェノク
「なっ／／そんな訳ねえだろ結花！！あいつらの心配なんてこれっぽっちもしてねっちゅーの！！！」

オーガ
「それにしては何でテンパってるのかい？」

スネークオルフェノク
「っつ／／／！！木場、結花、お前等～～～！！！ちゅーか俺をおちょくるんじゃねぇーーー！！！」

スネークオルフェノクはオーガとクレインオルフェノクに顔を赤らめながら（怪人のような姿をしているが）、二人に向かって叫ぶ。

ディファースト
「…まったく…だけど、こういうのも悪くはないな…」

そんな三人のやり取りの様子を見てディファーストはそう呟く。

――ピキッ、ピキピキ…――

ディファースト

「！？」

その時何かを感じディファーストは顔を横を向ける。そこにはクウガと黒騎士を凍らせた氷の結晶にヒビが入っていた。そのヒビからドス黒い煙が吹き出し、その煙が結晶のヒビを大きくしてゆく。
そして…

――ビキャァァァァァンッ！！！――

砕け散る巨大な音と共に、氷の結晶が盛大に崩れ落ちてゆく。そして冷気の中から2人の人影が出てくる。
一人は仮面と鎧を纏った黒騎士、そしてもう一人は…

クレインオルフェノク
「…！？う、嘘！？」

スネークオルフェノク
「な、ななな、何だあの姿は！？」

オーガ
「…翼、あれって…」

ディファースト
「……ああ、最悪最強の姿で蘇りやがったぜ…」

その身体には金色のラインが走り、刺々しい黒い生体装甲に覆われ、最後には『凄まじき戦士』や『究極の闇』という意味のリント文字の基となった仮面に四本角、そして黒い複眼のした歴代最強フォームの中で最も最強と謳われる…

クウガ・アルティメットフォーム
「…グガアァァァァァァァァ！！！」

…この世の聖なる泉　枯れ果てし時が来たような荒々しい咆哮を上げた『クウガ・アルティメットフォーム』がここに降臨する。

第四話／闇に堕ちたKとS／黄金と純銀の鬼達と人の心を持った白き死者達（後編）

新カード紹介

【ＡＴＴＡＣＫ－ＲＩＤＥ　ＦＬＡＭＥ】（アタックライド　フレイム）

ディファーストの所有するカードの一つ。使用すると炎の力の属性効果を宿し強力な攻撃を繰り出すことができ、さらに「スラッシュ」や「ブラスト」のカードを続けて使うと、強力な斬撃や銃弾を放つことが可能になる。

またマシンディファースダーや、【ＡＴＴＡＣＫ－ＲＩＤＥ　ＳＩＤＥＢＡＳＳＨＡＲ】（アタックライド　サイドバッシャー）、【ＡＴＴＡＣＫ－ＲＩＤＥ　ＪＥＴＥＳＬＩＧＥＲ】（アタックライド　ジェットスライガー）のカードでディファースダーを変形させたマシンに「フレイム」の力を宿すことができる。

【ＡＴＴＡＣＫ－ＲＩＤＥ　ＷＡＴＥＲ】（アタックライド　ウォーター）

ディファーストの所有するカードの一つ。上記の「フレイム」と同じく、水の力の属性効果を宿した強力な攻撃を繰り出せ、ディファースダーやカードの力で変形させたディファースダーにも可能。

【ＡＴＴＡＣＫ－ＲＩＤＥ　ＷＩＮＤ】（アタックライド　ウィンド）

ディファーストの所有するカードの一つ。「フレイム」や「ウォーター」と同じ風の力を宿す属性効果のカードだが、スピード上昇という効果もある。

【ＡＴＴＡＣＫ－ＲＩＤＥ　ＥＡＲＴＨ】（アタックライド　アース）

ディファーストのカードの一つ。上記の三つと同じ大地の力の属性効果を宿したカードで、パワーと防御力に加え地面をある程度自在に操る事ができたり、重力を自在に操作できる。

【ＡＴＴＡＣＫ－ＲＩＤＥ　ＩＭＡＧＩＮＥＢＲＥＡＫＥＲ】（アタックライド　イマジンブレイカー）

翼が『とある魔術の禁書目（インデックス）』の世界に訪れた際、『幻想殺し（イマジンブレイカー）』の能力を持つ上条当麻と心を通わせた時手に入れたカード。使用すると相手の異能の力（魔術や超能力など）を完全に打ち消す。ディファーストはこのカードを使って幾度の危険な場面を打ち砕いた。尚、このカードを使ってもディファースト自身は何ら影響もなく、他のカードとの併用も問題なく可能。

第五話／闇に堕ちしＫとＳ／闇を吹き飛ばし嵐を呼ぶＳＩＮ－Ｏ・ＣＬＩＭＡＸ

どうも地水炎風陰雷です。最近は色々起きててんてこ舞いでした。更新遅れてしまってすいません。

アルティメットクウガと黒騎士の正体が明らかに（もうネタバレしてますが）！！そしてあの嵐を呼ぶライダーが柳雨さんから授かったＦＦＲと共に満を持して『参上』します！！

では、第五話『闇に堕ちしＫとＳ／闇を吹き飛ばし嵐を呼ぶＳＩＮ－Ｏ・ＣＬＩＭＡＸなオラ、参上』、始まります。

それと話は変わりますが実は青いタヌキさんの『アニメ&ａｍｐ;ゲームキャラ大集合！　復讐の戦場』という小説で我が主人公翔道翼が出演してます。興味ある方はぜひ見てください。

第五話／闇に堕ちしKとS／闇を吹き飛ばし嵐を呼ぶSIN－O・CLIMAX

クウガ達とディファースト達が戦っていた同時刻、古びた神社にて…

ゴルドラ
「っふ、手ごたえがないな」

キックホッパー
「っく、この！！」

キックホッパーは格闘術で応戦するが、武器を錫杖を持っているゴルドラに返り討ちされてしまう。一方、シルバラとパンチホッパーの戦いはシルバラがパンチホッパーを圧倒していた。

シルバラ
「おらおらぁ！どんどん行くぞ！！」

パンチホッパー
「っく…調子に乗るな！！」

パンチホッパーは後方にジャンプすると、助走をつけシルバラに向かって走り出す。

パンチホッパー

「うおぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！」

シルバラ
「フンッ、……オラァ！！」

シルバラは金棒を振り下ろしてパンチホッパーに迎え撃つ。が、パンチホッパーは金棒が直撃する寸前に身体をそらし避け、バックルのホッパーゼクターの脚部分を動かす。

パンチホッパー
「ライダージャンプ！！」

【Ｒｉｄｅｒ　Ｊｕｍｐ】

パンチホッパーの右腕のアンカージャッキが作動し、金棒を踏み台にして空高く跳躍する。そしてゼクターの脚部分を戻す。

パンチホッパー
「これで共に地獄へ行こうぜ…ライダーパンチ！！」

【Ｒｉｄｅｒ　Ｐｕｎｃｈ】

パンチホッパーは自由落下を利用してシルバラに向かって『ライダーパンチ』を放とうとする。が、シルバラは落下してきたパンチホッパーが放とうとする腕を片手で掴み、そのままキックホッパーの

所まで投げ飛ばされる。

シルバラ
「へへっ、残念だったな」

ゴルドラ
「闇の住人だか地獄兄弟だか知らんが、我ら鬼を統べる兄弟に敵うとでも思っているのか？」

キックホッパー
「……は、最高なんだよ…」

シルバラ
「あ？何だと？」

キックホッパー
「……最悪は最高なんだよ。なぁ、相棒…」

パンチホッパー
「ああ、兄貴。それに、本当の地獄が始まりそうだよ」

ゴルドラ
「本当の、地獄…？……はっ！？」

何かに気付くとゴルドラは空を見上げる。そこには黒い煙が巨大な雲のように舞い上がっていた。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

クウガ・アルティメットフォーム
「ガアァァァァァ！！！」

スネークオルフェノク
「おいおいおい、何だあの姿は！？見た感じ明らかに危ないんだけどぉ！！」

ディファースト
「見た感じ危ないじゃない、あれの存在自体『危険』なんだよ」

スネークオルフェノク
「滅茶苦茶あぶねぇじゃねえぇぇぇかあぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

クレインオルフェノク
「落ち着いてください海堂さん！！」

ディファースト達は氷の結晶から抜け出した黒騎士とクウガ・アルティメットフォームに圧倒されていた。

黒騎士
「グオアァァァァァァァァァ！！」

ディファースト

「がぁぁぁっ！！」

ディファーストは黒騎士の攻撃をくらってしまい、そのまま吹き飛ばされる。そして残ったオーガ達も…

クウガ・アルティメットフォーム
「ガアァァァァア！！」

オーガ
「！？ぐわぁぁぁ！！」

オーガはアルティメットクウガの強力なパンチをくらってしまう。木々にぶつかり薙ぎ倒しながら吹き飛ばされてしまう。アルティメットクウガはオーガが手にしていたオーガストランザーを拾い手にした。

クウガ・アルティメットフォーム
「グ、グガガァ……！！」

アルティメットクウガはオーガストランザーを再構築し、両端に黄金に輝く矛先が装着された黒い『ドラゴンロッド』に変える。それは本来クウガの強化フォームの一つ『ライジングフォーム』の武器と色が違うだけで後は瓜二つである。

ディファースト
「っち、ライジングフォームの武器か…いつの間にあんな芸当を…ぐごっ！？」

黒騎士
「ガアァァァァ！！」

その時ディファーストに黒騎士が剣…エクスカリバーで斬りつけられ、ディファーストはオーガたち三人と離れ黒騎士と対峙することになった。

スネークオルフェノク
「てめぇ、よくも木場を…ウオォォォォォォォ！！！」

スネークオルフェノクは2つの剣を手にし、アルティメットクウガに突っ込んでいく。

クウガ・アルティメットフォーム
「グガアァァァ！！！」

アルティメットクウガは自分目掛けて突っ込んでくるスネークオルフェノクにドラゴンロッドの矛先をスネークオルフェノクの腹部に突き刺す。

――ズサアァッ！！――

スネークオルフェノク
「が、ああ…あ……あ……」

鈍い音と共に矛先がスネークオルフェノクの腹から背中まで貫通し、『ライジングドラゴンスプラッシュ』をくらったスネークオルフェノクはそのまま爆散してしまう。

クレインオルフェノク
「か、海堂さあぁぁぁぁん！！！う、ウアァァァァァァァァ！！」

再び飛翔態となってクレインオルフェノクは、アルティメットクウガに襲い掛かる。上空から蹴り技を繰り出し、アルティメットクウガはドラゴンロッドで防ぐので防戦一方だった。

クレインオルフェノク
「ハアァァァァァァ！！！」

クレインオルフェノクはアルティメットクウガを蹴り飛ばし上空へ舞い上がると、弓矢を取り出しそれを使ってアルティメットクウガ目掛けて無数の矢を放つ。だがアルティメットクウガはその放たれた無数の矢に向かって片手を掲げる。

クウガ・アルティメットフォーム
「ガアァァァァァァ！！！」

その瞬間、クレインオルフェノクが放った無数の矢がアルティメットクウガの『超自然発火能力』によって一瞬に塵となって燃え尽きた。

クレインオルフェノクは驚きながらも次の矢を構えようとするが、アルティメットクウガはドラゴンロッドを再び再構築し、黄金の銃身が装備された黒い『ペガサスボウガン』に変化させると上空にいるクレインオルフェノクに銃口を向ける。

クウガ・アルティメットフォーム
「ギギャアァァ！！」

アルティメットクウガは素早く狙いを定めてペガサスボウガンのレバーを引っ張ってトリガーを引くと同時にレバーを離し、三つのビーム状の矢『ライジングブラストペガサス』をクレインオルフェノクにむかって放つ。そしてクレインオルフェノクに直撃してしまい、断絶魔も上げることなくスネークオルフェノクのように爆散する。

クウガ・アルティメットフォーム
「ググ、ガガァ……」

その時アルティメットクウガの肩に銃撃が直撃した。振り向くと、そこにはフォンブラスターを構えたオーガの姿があった。

クウガ・アルティメットフォーム
「グガア……ギギギ…」

オーガ
「…どうやら、君を絶対止めなくちゃいけなくなったね……海堂や結花のためにも……ハアァァァァァ！！！」

オーガは上空へ咆哮を上げる。するとオーガの姿が変わってゆき、騎士の鎧ような白い身体にケンタウロスのような馬の下半身の姿の『ホースオルフェノク・疾走態』の姿に変わり、巨大な盾と魔剣を取り出しアルティメットクウガに目掛けて走り出す。

ホースオルフェノク
「ウオォォォォォォォォォォォォ！！！」

アルティメットフォーム
「ガガァァァァ！！」

ホースオルフェノクはまるで戦国時代の騎馬隊のようにアルティメットクウガに突進してゆく。アルティメットクウガはペガサスボウガンから矢を放つが、すべて盾に刺さり防がれてしまい、ホースオルフェノクの振り下ろした魔剣がアルティメットクウガの身体に直撃する。

さらにホースオルフェノクはアルティメットクウガに向かって無数の斬撃を放ち、最後に背を向け両後ろ足で蹴り飛ばす。

クウガ・アルティメットフォーム
「ガガァァ……グガガァァァァ！！」

ホースオルフェノクの後方にジャンプすると、アルティメットクウガはペガサスボウガンを今度は金の刀身が装備された黒い『タイタンソード』に再構築して変化させる。

ホースオルフェノク
「…！！今度は、剣か……」

クウガ・アルティメットフォーム
「グガァァァァァァァァァ！！！！」

アルティメットクウガはタイタンソードを構え、ホースオルフェノクに突っ込んでいく。ホースオルフェノクもアルティメットクウガに向かって走り出す。

クウガ・ホースオルフェノク
「「ハアァァァァァァァァァァァァァァァァ！！」」

――ガキィィンッ！！――

アルティメットクウガとホースオルフェノクの姿が交差し、剣と剣のぶつかり合う音が辺りに響き渡る。そしてホースオルフェノクはアルティメットクウガが放った紫に染まった斬撃『ライジングカラミティタイタン』に盾と魔剣ごと斬られ、青白い炎の爆発をすると灰となって崩れ去ってしまう。

～～～～～～～～～～～～～～～～

同じ時、ディファーストは黒騎士の攻撃に苦戦を強いられていた。

黒騎士
「ガァァァァァァァアアア！！！！！」

ディファースト
「グゴッ！！痛いじゃねぇかこの！！」

ディファーストはサモンドライバーを振り下ろすが、黒騎士は後方にジャンプして避け再び光の斬撃『約束された勝利の剣（エクスカリバー）』を放とうとする。

ディファースト
「…そんな切り札を初っ端から使うんじゃねぇよ。切り札ってのは

ここぞって時に出すもんだろ？こういう風にな！！変身！！」

【ＦＩＮＡＬ－ＫＡＭＥＮ－ＲＩＤＥ！ＫＩ・ＫＩ・ＫＩ・ＫＩＶＡ！！】

ディファーストがバックルにカードを装填すると、バックルから黄金色の波動のようなモノが広がりディファーストを身体を包む。そして鎖が解き放つような音と共に黄金に輝くキバの鎧に相手を脅えさせるのに十分な赤い瞳、そして左腕に魔皇龍タツロットがブレスのように装備され、「黄金のキバ」と異名を持つ『Ｄキバ・エンペラーフォーム』が姿を現す。

タツロット
「びゅんびゅーん！さぁ～て、行きますよ～。テンションフォルティッシモ！！」

Ｄキバ・エンペラーフォーム
「キバって行くぜ！！ハアアアアアアアアアアア！！」

そういうとＤエンペラーは黒騎士に向かって走り出し、華麗な蹴り技で黒騎士をお見舞いし必殺技を放つのを中断させる。

Ｄキバ・エンペラーフォーム
「流石に誇り高き騎士王も、吸血鬼（ヴァンパイア）を統べる皇帝（エンペラー）には勝てないのか？…」

タツロット
「翼さん、キバはファンガイアを述べる皇帝ですよ。それに何かこっちに向かって走ってきますよ」

黒騎士
「グガアァァァァアアア！！」

Ｄエンペラーの挑発に乗ったのか黒騎士は怒りのかぎり吼えながらＤエンペラー目掛けて剣を振り回す。Ｄエンペラーは振り回した剣を避けると、一枚のカードをディファースドライバーに装填した。

【ＡＴＴＡＣＫ－ＲＩＤＥ！ＺＡＮＢＡＴＳＷＯＲＤ！！】

電子音が鳴るとＤエンペラーの左腕のタツロットの口から炎が噴き出し、そこから蝙蝠を模した『ザンバットバット』が付いたファンガイアでも選ばれた者しか扱えない名剣『魔皇剣ザンバットソード』が現れる。Ｄエンペラーはザンバットソードを手にし、黒騎士のエクスカリバーを受け止める。

黒騎士
「ググ、グガアァァァァアアア！！！」

Ｄキバ・エンペラーフォーム
「聖剣と名剣…どっちが強いだろうな！！」

Dエンペラーは後方にジャンプし黒騎士から離れ、ザンバットを上下に動かし刀身を磨き赤い光の斬撃破を黒騎士に放つ。黒騎士はそのままくらってしまい、そしてDエンペラーは一枚のカードを装填する

【FINAL－ATTACK－RIDE!KI・KI・KI・KIVA!!】

電子ボイスと共にザンバットバットをゆっくりと動かす。動かした後、刀身は血のようなワインレッドに染まり、Dエンペラーはザンバットソードから真紅の魔皇力の衝撃波『ファイナルザンバット斬』を黒騎士に思いっきり放った。

黒騎士
「グ!?グガアアアアアアアアアアアア!!!!」

ファイナルザンバット斬が黒騎士に直撃し、その直後爆発が巻き起こる。それによって発生した衝撃波が川や岩を吹き飛ばしたり、煙を上空や周辺に巻き起こった。そして、先程まで黒騎士がいた所には巨大な岩の瓦礫や木々のが倒れていた。

タツロット
「あの、翼さん?少しやりすぎじゃあ…」

Dキバ・エンペラーフォーム
「…そんな悠長な事言ってるほどあいつは甘くはねぇよ。何背、俺と共に様々な危機を乗り越えたからな…」

Dエンペラーの言い放った言葉のとおり、突如瓦礫や木々が燃え上がり塵となって爆発し、爆風の中から黒騎士とアルティメットクウガが現れDエンペラー目掛けて走りだす姿があった。
Dエンペラーは2人に向かってザンバットソードで斬りつけようとするが、黒騎士が剣でザンバットソードを受け止め、その後アルティメットクウガが右足に強力な封印エネルギーを雷のような火花を散らすほど収束してジャンプと同時に右足を思いっきり前に突き出す飛び蹴り『アルティメットキック』をDエンペラーにお見舞いした。
アルティメットキックはDエンペラーに大炸裂し、そのままアルティメットクウガと黒騎士と共に爆風と爆炎に巻き込まれる。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

ーーードガアァァァァァアアアアアアアアンッ!!!!ーーー

ゴルドラ
「!?何だあの爆発は…」

シルバラ
「すっげぇ音だな…」

古びた神社でキックホッパーとパンチホッパーと戦っていたゴルドラとシルバラは、アルティメットクウガが放ったアルティメットキックによって起こった核爆発のような爆音が遠くにいる自分達の耳に入った。

キックホッパー
「フッ、どうやら俺達の地獄への歓迎が上がったようだな」

パンチホッパー
「お前も、来い。俺達の新しい兄弟として共に地獄へ堕ちようぜ」

シルバラ
「っへ！お断りだ。誰が堕ちるかよ！！」

ゴルドラ
「そうだ、我ら兄弟は地獄になど堕ちぬ。何背呼び出されたモノだから……」

そう言おうとした時、ゴルドラとシルバラの周りに爆発が起きる。
2人は横を向くと、そこにはアルティメットクウガと爆風によって少しボロボロな服と鎧になった黒騎士の姿があった。

シルバラ

「!?っく、てめぇ…」

ゴルドラ
「ディファーストを…倒したのか」

クウガ・アルティメットフォーム
「グガ、グガガガァァァァァァァァァァァ!!!」

黒騎士
「ガァァァァァァァァァァァァァ!!!!」

アルティメットクウガと黒騎士はゴルドラ達に襲い掛かろうとする。ゴルドラとシルバラは応戦しようと立ち向かうが、アルティメットクウガと黒騎士が共にエクスカリバーを掴み息を合わせ剣を薙ぎ振るい、黒い光の斬撃になった『約束された勝利の剣』を放つ。

シルバラ
「!?なっ……」

ゴルドラ
「っく、ミミヒコ…」

『約束された勝利の剣』が迫る瞬間、ゴルドラはシルバラを押し出すと光の斬撃はゴルドラの身体を貫く。シルバラを庇ったゴルドラは爆散してしまう。

シルバラ
「に、兄ちゃあぁぁぁぁぁぁあああん！！」

シルバラは悲しみながら兄（ゴルドラ）の名を呼んだ。だがそんなシルバラを構わずにキックホッパーとパンチホッパーが彼に迫る。

パンチホッパー
「どうやら絶望したようだねあいつ。ねえ兄貴」

キックホッパー
「ああ相棒…さぁ、共に地獄へ行こうぜ」

そういうとキックホッパーはシルバラに攻撃を仕掛けようとする。するとキックホッパーの目の前に、一つの影が現れる。それはディファーストの姿だった。

シルバラ
「！？お前は…」

ディファースト
「そうはさせるか問屋が下ろすか、俺は意外と丈夫なんだぜ…っつ、でも結構堪えた…倒れそう…」

シルバラ
「っ！！何かっこよく登場したのにそんな事言うんだ！！」

シルバラはディファーストにツッコミを入れると、今でも倒れそうなディファーストの肩を担ぐ。

パンチホッパー
「貴様、確かに俺達の兄弟に倒されたはずじゃあ…」

キックホッパー
「まあいい…まとめて砕くまで……やれ！兄弟！！」

キックホッパーはアルティメットクウガと黒騎士に命令する。だがアルティメットクウガと黒騎士はディファースト達を倒そうと動くが、急に苦しみだし始める。地獄兄弟（キックホッパー・パンチホッパー）はその様子に驚愕の顔を浮かべていた。

パンチホッパー
「！？どうしたんだ、さっさとやれ」

ディファースト
「無理だぜ、どんだけお前らが命令してもそいつらは闇と戦っているんだ。お前らの命令に構ってられるか」

キックホッパー
「何だと？そんなことができるはずがない。俺達闇の住人は闇の中でしか生きられない。光を求められるとでも…ましてや、闇から抜け出すなんて」

ディファースト
「いや、できる!!あの時、あの強烈なキックを喰らった時もうダメかと思った、だが結構きついダメージを負いながらも俺は生きている。何故だと思う?
それはな、たとえ自分達が地獄に行ったとしても誰かを救いたい……そう信じている奴らが闇という縛られた鎖に必死にもがきながらそうしたんだ!!」

パンチホッパー
「バカな、そんなことが…」

ディファースト
「この俺が誰であろうと否定させねぇよ……そいつらの一番いい笑顔を知っているこの俺が!!」

ディファーストはキックホッパー達の考えを否定すると、ライダーホルダーから一枚のカードを出す。

パンチホッパー
「貴様、何様のつもりだ…」

ディファースト
「俺か?そういえばあの時もお前らには言ってなかったな。俺は通りすがりの仮面ライダーだ!!頭に叩き込んでも覚えとけ!!」

キックホッパー
「ふっ、だったらそれも汚してやる!!」

そういうとキックホッパーは手を上に掲げる。するとアルティメットクウガと黒騎士の身体に黒い電気のような光が駆け巡り、ディファーストと黒騎士に向かって走り出してゆく。

アルティメットクウガ・黒騎士
「グガァ……グアガアァァッァァァアアア！！」

ディファースト
「なるほどねぇ…シルバラ、お前は引き続きあの飛蝗を倒せ。心配するな、闇も吹き飛ばす嵐の呼ぶライダーを使うからな！！」

そういうとディファーストはバックルにカードを装填する。

【ＫＡＭＥＮ－ＲＩＤＥ！ＳＩＮ－Ｏ！！】

電子音が鳴るとディファースト達と地獄兄弟・アルティメットクウガ達の間に遮るように赤、青、緑の三つの光の像が現れる。その三つの像が重なると尻を模した仮面にブタの顔のような装甲、そして幼稚園児のような小さい薄紫色で尻を丸出しの身体にブタの鼻のような物が付いているデンオウベルトを巻いている何処か電王を思わせる姿をした『仮面ライダーしん王』が文字通り「参上」した。

しん王
「オラ、久しぶりに参上！！」

ディファースト
「久しぶりだな、ちびっ子」

しん王
「オラちびっこじゃないぞ！仮面ライダーしん王だぞ！！」

シルバラ
「…おいおい、こんな人間の子供で大丈夫だろうな…」

ディファースト
「ああ心配するな、前に一回使って頭痛くしたから。使い方はちゃんと慣れてる」

黒騎士
「ガアアアアアアア！！」

ディファースト達三人が話していると、アルティメットクウガがディファースト、シルバラには地獄飛兄弟達がそれぞれ飛び掛り、黒騎士はしん王にエクスカリバーを振り下ろす。

しん王
「大体わかったぞ。おい飛蝗さん達。お前らの思い道理にそうはいかない、いかそうめん。真剣・白髪染め！！」

――パシンッ！！――

黒騎士
「グ、グガ！？」

なんとしん王はしん王は尻を突き出し、振り下ろされたエクスカリバーを挟み込むかのようにキャッチする。黒騎士はエクスカリバーを引き抜こうとん張るが、不思議なことにビクともしない。持ち上げたり、横に揺さぶっても微動だにしないでいた。

黒騎士
「グ…オオオ…！！」

――ガシャアアァァァァアン！！――

黒騎士はエクスカリバーを力任せにしん王ごと地面目掛けて思いっきり叩きつける。叩きつけられた地面は地割れの如く割れしまう。黒騎士は勝利を確信したが地面にあるはずのしん王の残骸（元々カードから生み出されたライダーだが）がないことに気付き驚く。

黒騎士
「グガ！？グググ…」

しん王
「ふー…」

黒騎士
「キャ、キャフィンッ！？」

いつの間にか黒騎士の肩に跨っていたしん王は、黒騎士の耳に息を吹きかける。黒騎士は小動物の鳴き声のような声を上げ腰を抜かし尻餅をついてしまう。

一方、ディファーストはさっきと戦いとは違いアルティメットクウガを追い詰めていた。

【ＡＴＴＡＣＫ－ＲＩＤＥ！ＷＩＮＤ！！】

ディファースト
「うおおおおおお！！！」

アルティメットクウガ
「グガアアアァァァァアア！！」

ディファーストはカードの効力によって風の渦を纏った脚でアルティメットクウガに数発蹴り込む。地面に転がったアルティメットクウガは立ち上がり超自然発火能力を使ってディファーストを灰燼に帰そうとする。だがディファーストは二枚のカードを取り出し、二枚連続でバックルに装填した。

【ＡＴＴＡＣＫ－ＲＩＤＥ！ＦＬＡＭＥ！！ＳＬＡＳＨ！！】

ディファースト
「お熱いのを食らわせてやるぜ！！」

ディファーストは手にしたサモンドライバーの刀身が炎に包まれ、先手を打ってアルティメットクウガを切り裂いた。
アルティメットクウガは黒騎士の所まで吹き飛ばされ、黒騎士と共に立ち上がり反撃を行おうとする。

ディファースト
「さーてと、いよいよお待ちかねのクライマックスだ…派手にやるぜ！！」

そういうとディファーストはホルダーから取り出した黄金に輝くブタ…もといぶりぶりざえもんの顔が描かれたカードを手にし装填した。

【ＦＩＮＡＬ－ＦＯＲＭ－ＲＩＤＥ！ＳＨＩ・ＳＨＩ・ＳＨＩ・ＳＨＩＮ－Ｏ！】

ディファースト
「我慢しろ」

しん王
「お？またかぞ…っていや～ん」

ディファーストが背中を開くように手をかざし触るとしん王は顔を赤らめながら妙に色っぽい声を上げて、しん王はその場で宙に浮かび、姿を変える。
右肩にはロボットアニメの主役ロボット・カンタムロボの顔、左肩にはアクション仮面の顔が装着され、さらにしん王の背丈がディファースト達と同じ大きさに伸びた（顔はそのままだが）姿…しん王はファイナルフォームライド形態『シンオウクライマックス』になった。

シンオウクライマックス
「はあ、この姿になるにはいいけどまた『管理局の白い魔王』のお姉さん達のように仕返しがならなければいいだけど…これくらった『管理局の白い魔王』のお姉さん達凄い殺気（オーラ）だったぞ」

ディファースト
「グダグダ言うな。行くぞ」

シンオウクライマックス
「ほほ～い！」

【ＦＩＮＡＬ－ＡＴＴＡＣＫ－ＲＩＤＥ！ＳＨＩ・ＳＨＩ・ＳＨＩＮ－Ｏ！！】

電子音が鳴るとディファーストとシンオウクライマックスの二人の右腕にカンタムロボの腕が装備される。それを見たアルティメットクウガと黒騎士は駆け寄る。

クウガアルティメットフォーム・黒騎士
「ガガアアアァァァァァ！！」

ディファースト
「…テンコ盛って行くぜ！！」

シンオウクライマックス
「出発進行ナスのお深厚～～！！」

それぞれの掛け声を言い放ち二人は腕を構えて前に突き出して撃った。

ディファースト・シンオウクライマックス
「「カンタム…パーンチッ！！」」

ロケットパンチの要領で、二人の腕がジェット噴射しながらに向かって飛んでいく。アルティメットクウガと黒騎士は粉砕しようとするが、それより先に2人の腹に突き刺さり、『く』の字に折れ曲が

って派手に吹き飛び、突き刺さったまま上空へ舞い上がってゆく。

続いてディファーストとしん王の左腕がアクション仮面のものに変化し、構えを取る。

ディファースト・シンオウクライマックス
「「アクション…ビーム！！」」

クウガアルティメットフォーム・黒騎士
「「グギャアアアアアッ！！」」

二人の腕からアクション仮面の必殺ビームが放たれる。ビームは上空の二人に直撃し、身体はビリビリ痺れ思わず悲鳴を上げる。

ディファースト
「決めるぜ、最後だ」

シンオウクライマックス
「ブ、ラジャー！！…っておわ！？」

しん王は突然ぶりぶりざえもんに変化して剣…ではなく、千歳飴を構える。急に背が縮んだだけでなくしん王プラットフォームだけ身

体から弾き出されてしまう。（本来生身になった変身者が弾き出されるが、今回登場したしん王はディファーストに呼び出されたライダーのためそうなった）
その後ディファーストはぶりぶりざえもんの持っている千歳飴を握り締め、最後の技を決める準備を構える。

クウガ・アルティメットフォーム
「グガァァ！？」

同じ時、空中に舞い上がったアルティメットクウガにも変化があった。背中を開くように触れると昆虫のボディが現れてだんだんクワガタ型のクウガ専用の支援機『ゴウラム』を模したファイナルフォームライドでのクウガが変化した姿『クウガゴウラム』の亜種、ゴウラムの目が赤から黒になった姿の『アルティメットゴウラム』に変化した。

ディファースト
「うおおおおおおおおおおおお！！」

ぶりぶりざえもん
「……！！」

ディファーストがかけごえを挙げると、千歳飴は急に高速で伸び始

め、ディファーストは千歳飴を握り締めたままるで槍の矛先のようにディメンションアンデミデットの時のとび蹴りの体勢になって飛んでいく。

アルティメットゴウラム
「グ、グゴ……ア〝ーーーーー!?」

アルティメットゴウラムの尻（？）にディファーストの右足が突き刺さり、さらにその勢いで…

黒騎士
「ググ、ゴ……ア〝ーーーーー!!!」

アルティメットゴウラムの両アゴが黒騎士の尻に突き刺さってしまう。そしてそんな団子状態になった2人にお構いなしでぶりぶりざえもんはブンブン振り回して、思いっきり振り下ろした。そしてその矛先（？）に向けられたのは…

シルバラ
「ぐあぁぁぁぁぁ!!」

パンチホッパー

「っへ、兄貴。ここは兄貴に任せるよ」

キックホッパー

「ああ…これで、止めだ。ライダージャンプ！！」

【Ｒｉｄｅｒ　Ｊｕｍｐ】

右足に付いたアンカージャッキが作動し、『ライダージャンプ』によって高く空に舞い上がる。そして必殺技である『ライダーキック』をシルバラに放とうとする。

キックホッパー

「ライダー…キッ…――ドゴォォン――…ぐごぉ！？」

突如キックホッパーの頭上に団子状態で繋がったディファースト達（他二名が尻に刺さっている）が振り下ろされ、アルティメットゴウラムの背中の装甲にキックホッパーの頭が直撃。さらに黒騎士の持っていたエクスカリバーがキックホッパーの尻に突き刺さる。

キックホッパー

「ぎ、ぎあああ゛ーーーーーー！！！」

パンチホッパー

「あ、兄貴！！」

シルバラ
「…！！（しめたぜ…）…隙あり！」

パンチホッパー
「ぐご！？ギャアア〝ーーーーー！！！！」

キックホッパーに気を取られていたパンチホッパーにシルバラは彼に向かって金棒で打ち上げる。何の因果なのかパンチホッパーもキックホッパーの足に自分の尻が突き刺さってしまう。そしてディファーストは…

ディファースト
「行くぜ…ディファーストアクション！！！」

掛け声と共にぶりぶりざえもんが串刺し団子のように刺さった5人を再びブンブン振り回し、地面に叩きつけ、大爆発を巻き起こす。

しん王・プラットフォーム
「おほほ〜い。やったぞ！！」

ぶりぶりざえもん
「！」

シルバラ
「やったじゃねえぇぇぇぇぇ！！てめぇらディファーストまで殺す気かぁぁぁぁぁ！！」

その時爆風を背に、互いの手をタッチをしようとするしんのすけとぶりぶりざえもん達にシルバラはまとめて2人の頭のこめかみに拳を当てグリグリをする。幸いシルバラは爆発に巻き込まれずに無事だった。そして、究極の自爆技『ディファーストアクション』によって起こされた爆発が収まると…。

衛宮　士朗
「……」

セイバー
「……」

翔道　翼
「…あ～、死ぬかと思ったぜ。ははは～～～…」

そこには尻を押さえながら悶絶しているかつての仲間――魔術師でもあり仮面ライダークウガの『衛宮　士朗』とそのサーヴァント――誇り高き騎士王『セイバー』。そして爆発から庇い圧し掛かっている2人を見て笑顔になった翼の姿があった……

第五話／闇に堕ちしKとS／闇を吹き飛ばし嵐を呼ぶSIN－O・CLIMAX

～ツバサ×仮面ライダー通信～

【ｈｙｐｅｒ　ｃｌｏｃｋ　ｏｖｅｒ】

ガタック・ハイパーフォーム
「よっしゃぁ！！着いたぜ、お前ら！！」

ゼロノス
「最初に言っておく。今日のツバサ×仮面ライダー通信はガタック・ハイパーフォームの手伝って時空を超えて第五話直後の時間から始まるぜ」

イクサ
「なるほど、ここが玖楼国か…綺麗なところだな」

ダブル（サイクロン）
「こんな砂漠ばかりの所にこんなに栄えてるなんて…ぞくぞくするねえ」

ダブル（ジョーカー）
「それより、アルティメットクウガのＦＦＲ（ファイナルフォームライド）『アルティメットゴウラム』出してもよかったのか？まだ作者『ダブル＆ａｍｐ；ディケイド』見てないんだぞ？」

ゼロノス
「お前ら!!何で俺達この時間に来たか覚えているのか!?俺達はな、翼が『アニメ&ゲームキャラ大集合!　復讐の戦場』の後書きコーナーに出向く瞬間に時空を超えてまで立ち合いに来たんだぞ。観光に来たんじゃ…」

翼
「俺がどうかしたか?」

イクサ・ダブル・ゼロノス
「うあわわわあぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!」

ガタック・ハイパーフォーム
「おお、翼。身体の方は大丈夫か?」

翼
「大丈夫だ。今さっきあの親子にパーユのお礼をしてきた。あ、お前らこれ食うか?パーユの残り物だが」

ガタック
「おっ!ありがとう…ぐふぉ!?」

シュイーン（急に魔法陣が現れる音）

翼
「…?何だこれ?…手紙…（手紙を読む）…何々、『翔道　翼さん、この度あなたはゲストとして招待されました』…あは～ん、大体分

かった。じゃ、行ってくるか…」

ゼロノス
「あ!?ちょ、ちょっとま……あ～ぁ、魔法陣の中に入ったよ…」

イクサ
「う～ん…仕方がない…余った時間は紹介コーナーで、これを見なさい!!」

衛宮士郎／仮面ライダークウガ

『クウガの世界』でクウガとして戦っていた青年。子供の頃から正義の味方になってみんなを救いたいと思っており、偶然入った遺跡の中でクウガのベルトを見つけ以後クウガとなって戦っていた。原作の仮面ライダーディケイドと同じく最初は翼に突っかかっていたが、グロンギとの相手の共闘により次第に心を通わせ和解し仲間になり、共に翼やセイバーと共に世界を巡る旅をしていた。セイバーとは相思相愛。

セイバー

翼が『クウガの世界』で出会った少女。サーヴァントと呼ばれる偉業を成し遂げた英霊で士朗と契約を結んでいた。だがディケイドが魔術師である士朗が変身したクウガをＦＦＲした時の影響によって、生きている人間と同じようになった。（なってしまった）翼からディエンドライバーを貸してもらいディエンドに変身したり、ファイ

ズの世界で拾ったオーガドライバーで仮面ライダーオーガ、カブトの世界でガタックゼクターに選ばれ仮面ライダーがタックとして戦ったこともある。士朗とは相思相愛。

イクサ
「まあこういうわけだ。それと士朗は特訓によってライジングフォームにも変身出来るぞ」

ダブル（ジョーカー）
「ん？あれ、魔法陣が現れた…って翼!?どうしたそのボロボロな姿は…」

翼
「悪魔（なのは）と魔女（フェイト）にお仕置きされた…あ、あとお土産のアップルパ…イ……」

ダブル（ジョーカー）
「おい翼!翼!!翼!!翼あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!」

ダブル（サイクロン）
「ううん、ビギンズナイトの再来か…」

ガタック・ハイパーフォーム
「な、何やってんだ…」

ゼロノス
「翼、大丈夫か!?早く手当てを!!」

イクサ

「じ、次回のツバサ×仮面ライダー通信も見なさい！！

早く医務室へ！！」

chapitre1／仮面ライダーディファースト外伝～リリカルなのはの世界

どうも遅れて出てきての地水です。更新遅れてしまってすいません。
（汗）

いよいよクリスマスですね。それで一足早く今回の話はクリスマス絡み＆一味変えて翼――ディファーストが過去に旅をして来た国（とかいて世界と読む）を話です。

P．S
ちなみになのはサイドは久しぶりに再会して『六課メンバークリスマスパーティ』してます。

chapitre1／仮面ライダーディファースト外伝～リリカルなのはの世界

次元世界『ミッドチルダ』、魔法文化が最も発達している世界であり、危険な遺産物ロストロギアを回収し他の次元世界の平和を守る巨大機関『時空管理局』が大きな影響をしている世界…この世界は数ヶ月前、とある人物が引き起こした『聖王のゆりかご事件』がようやく収まり、約二年をかけて平穏に包まれている所だった。

そんなミッドチルダの地に一人の旅人（ライダー）が舞い降りる。

～～～～～～～～～～

――ブオォォォン――

高層ビルの上から暗い夜が覗く高速道路の路上に銀色のオーロラが現れる。そのオーロラの中から白と黒の色の基準のバイク…マシンディファースダーが出てくる。そしてその座席には茶色の髪と黒装束の格好をした青年…「翔道　翼」の姿があった。

翔道　翼
「……？何だ、この世界は…」

ディファースダーを運転しながらミッドチルダの高層建築物を見てそう呟く。しばらくして高速道路から抜けると街の街路に入る。そこには周りに色とりどりな球体やぬいぐるみなどの様々なイルミネーションの飾りや天辺に星がつけられた針葉樹や、家族やカップルで賑わっている店が見かけられた。
どうやらミッドチルダは今日は１２月２４日…つまりクリスマスらしいようだ。

翔道　翼
「…ふ～ん、これってクリスマス……ってやつか。そういや俺、士朗やセイバー達に教えてもらうまでクリスマスを知らなかったな…」

クリスマス一色の街の風景を見て翼はそう呟く。今はいないかつてディケイドとして仮面ライダークウガ・衛宮　士朗と英霊（サーヴァント）・セイバーと共に様々な世界を旅をして来た翼もクリスマスなどの一部の類は疎い部分があった。

～～～～～～～～～～

一年前…12月24日の午前9時、とある世界に来た翼は士朗とセイバーと共に自分達が住んでいる『光陰(ひかげ)写真館』の近くにあったデパートに行き（翼は半ば士朗とセイバーに無理やり連れて行かれて）料理を作るため買い物をしていて、今はデパートの中にある喫茶店で一休みしていた。

衛宮　士朗
「えっと、鶏肉に野菜にタマゴだろ。あとパーティセットも買ったな…」

セイバー
「全部そろいましたね士朗。これでクリスマスの料理が食べられます」

翼とは違う茶色の髪をした青年――衛宮士朗は自分の右側の隣の椅子に置いてある買い物バックを買い忘れたものはないか確かめていて、そして士朗の隣で金髪蒼眼の少女――セイバーが楽しそうにしていた。2人の嬉しそうな様子をパフェを食べながら見ていた翼は疑問に思い、2人に話しかける。

翔道　翼
「何してんだお前ら?今日はお前ら何かの記念日か?にしちゃあ、わざわざ俺まで借り出すなんて…」

衛宮　士朗

「記念日って…何言ってんだ翼、今日は年に一度クリスマスだぜ」

セイバー
「年に一度のこの１２月２４日、子供達がサンタクロースのクリスマスプレゼントを楽しみにしているんです♪」

翔道　翼
「あ？クリスマス？なんだそれは」

翼が放った言葉に驚きの顔を浮かべる２人。

衛宮　士朗
「えぇ！？翼、もしかしてお前クリスマス知らないのか！？てっきり俺お前知ってるかと……ってか、クリスマスは子供でも知ってるんだぞ？」

セイバー
「ほ、本当に知らないのですか？クリスマスの事を！？」

翔道　翼
「知らないな、いくら俺でも疎い部分がある。それに祝い事はお前らが勝手にやってろ」

衛宮　士朗
「なんでさ、翼も一緒にクリスマスパーティをしろぜ」

翔道　翼
「俺はそんな柄じゃない。クリスマスだかクマとリスだが知らない

が勝手にやってろ」

セイバー
「翼、それはよくありません!!翼もクリスマスやりましょう」

翔道　翼
「とか言って、お前はただその底なし胃袋でたらふく食いたいだけだろ」

セイバー
「私を大食いキャラ扱いしないでください!!」

翔道　翼
「とにかく、俺はやらない。それだけだ…」

パフェを食べ終わりスプーンをグラスに放り投げた翼はそう言い放つと、席を立ち何処かへ行こうとする。だがその時、2人が翼の腕を掴む。

翔道　翼
「っく、お前らさ。だから俺は…」

衛宮　士朗
「はいはい、じゃあ俺達とクリスマスパーティしようぜ。翼の初めて迎えるクリスマスだからな」

セイバー
「私と士朗がクリスマスのことをきっちり教えますから。それにサ

ンタさんにクリスマスプレゼントを貰わないと…」

翔道　翼
「はぁ…分かったよ…そこまで言うなら、クリスマスとやら楽しんでやる」

翼は士朗とセイバーの説得により、クリスマスに参加することになった。

～～～～～～～～～～

翔道　翼
「はは…今になったら笑えるぜ。いい思い出になったからな……だけど最近はそんなこと忘れていて祝ってなかったな」

現在は最強クラスの仮面ライダー…ディファーストとしてなって一人でこの無限に存在する様々な世界を旅をしてきて、クリスマスのことは一般の人のように詳しくなったが、まだ詳しくは知らなかった。

翔道　翼
「……って、それはこの世界の話か。他の次元では春や夏なのによ……構ってられる…」

――キイィィィンッ！！キイイィィンッ！！――

翼が言いかけようとした時、翼の耳に金切り音が聞こえてくる。しかもただの金切り音ではなく、翼の周りにいる他の人達には聞こえなく、翼の耳にしか聞こえてなかった。

翔道　翼
「…？まさか……っ！！」

金切り音を聞いてある事を頭に過ぎった翼はマシンディファースダーをすぐ近くの路地に止め、ビルのガラス窓…正確には窓ガラスに写っている『モノ』を見つめていた。
そこには本来翼の姿や通行人の姿は写ってはいなく、代わりに青い模様が入った白銀の鎧に騎士のような仮面をつけ何処か白虎の思わせる人影……『龍騎の世界』にいた『仮面ライダータイガ』の姿があった。

翔道　翼
「……何の用だ？何でこの世界にお前のような仮面ライダーがいる？」

タイガ
「……」

翔道　翼
「…っけ、大体検討はついてる。こんな事をするのは……」

無言でいるタイガはアゴを向け、「こっちだ」といっているような仕草をすると翼から姿を消してしまう。翼はそれを見てタイガの示した方向に向くと、再びディファースダーに跨りディファースダーを走らせる。

～～～～～～～～～～

ミッドチルダ郊外、ディファースダーに乗った翼はこの世界にいないはずの仮面ライダータイガを追いかけ此処に来ていた。

翔道　翼
「…ここか……」

翼はディファースダーから降りると、辺りを見回す。すると「おでん」と書かれた暖簾（のれん）を上げた屋台があり、翼はその屋台を見つけると何を思ったのか屋台に入る。その中にはおでん屋の主人の姿があった。

おでん屋の親父
「おや、お客さんか。何にします？」

翔道　翼
「俺は客じゃねえ。わざわざこんな世界にまで来て俺を殺しに来たのか？そんな変装までしやがって」

翼の言葉に親父は一瞬驚きの顔を浮かべる。が、すぐに平常な顔に戻る。

おでん屋の親父
「ははは、何のご冗談を…」

翔道　翼
「とぼけるのか？ライダーがいないはずのこの世界にタイガがいた。あれはお前が呼び出したんだろう…鳴滝」

おでん屋の親父
「…ふ、ばれては仕方がない…
ひさしぶりだな翔道　翼…偽りの破壊者（ディケイド）よ…」

するとおでん屋の親父の姿が変化し、眼鏡と帽子を身につけた一人の男――鳴滝になる。鳴滝、次元に干渉する力を持った謎の男。『世界の破壊者』と異名を持つ仮面ライダー「ディケイド」を敵視し

抹殺しようとしている。だがかつてディケイドとして旅をしていた翼に対しては『世界の破壊者ディケイド』としてではなく『翔道翼』として抹殺しようとしてきて、「龍騎の世界」には龍騎・ナイトと対峙していたディケイドに「電王の世界」の幽霊ライダー『仮面ライダー幽汽』を使ってアビスと共にディケイド達を襲撃させたり、「アギトの世界」ではエクシードギルスと士朗が変身したG3－Xを助けに行こうとした翼に空を自由に舞う仮面ライダー『仮面ライダーサイガ』を仕向け追い詰めていた。

翔道　翼
「…鳴滝、その名で呼ぶんじゃねぇ。俺はもう『偽りの破壊者（ディケイド）』なんかじゃなくなった。もう俺のディケイドライバーやディエンドライバーは壊れたからな」

鳴滝
「フン…それは好都合だな。ここはライダーのいない世界だ、貴様はライダーに助けも求められないのだからな」

その時おでんの屋台は消え鳴滝の背後に次元の壁が現れ、そこから2人のライダーが姿を現す。
一人は先程の白虎の思わせる姿をした仮面ライダーのタイガ。
もう一人は黒いボディに白いラインを走らせたオレンジの目の仮面ライダー…デルタだった。

鳴滝
「翔道翼、ここがお前の墓場だ！タイガァッ！！デルタァッ！！！」

鳴滝の言葉とタイガは斧型の武器『白召斧デストバイザー』を肩に担ぎながら、デルタはデルタフォンを合体させた銃『デルタムーバー』を右腰のホルスターから手に持ちながら翼に迫る。

タイガ
「ねぇ、お前を倒せば僕は英雄になれるんだね？」

デルタ
「貴方に恨みはないですけど、おとなしく死になさい。貴方の最大の不幸は僕と戦った事ですよ」

タイガとデルタはそれぞれの武器を構え、翼に攻撃しようとする。

【ＡＴＴＡＣＫ－ＲＩＤＥ！ＪＥＴＳＩＧＥＥＲ！！】

鳴滝・タイガ・デルタ
「「「！？」」」

ディケイドライバーやディエンドライバーと同様の電子ボイスが響くと共に、黒い色の高性能バイク『ジェットスライガー』が翼と鳴滝達を遮るように現れ、巨大体当たりでタイガとデルタを鳴滝の後方まで吹き飛ばす。

鳴滝
「どうなっている…お前はディケイドにもディエンドにも変身できないと…」

翔道　翼
「俺は変身できないとは言ってない。俺は『ディケイドライバーやディエンドライバーは壊れた』って言って変身はできないとは言ってない。それに、俺はもう破壊者（ディケイド）じゃない」

そういうと翼はいつの間にか腰につけたディファーストドライバーにカードを装填する。

【ＫＡＭＥＮ－ＲＩＤＥ!ＤＨＩＦＩＲＳＴ!!】

翔道　翼
「変身!!」

掛け声と共に翼の周りに羽根の形をした光の粒子と十一枚のライダーズクレストがついた影が現れ、その2つが重なる。

漆黒の身体に純白の鎧…
二対の翼を表したライドプレートに赤い瞳の仮面をつけた戦士…
ディケイド、ディエンドのプロトタイプである仮面ライダーディファーストに姿を変える…

鳴滝
「な…ディファーストだと!?貴様、何故それを…」

ディケイドのプロトタイプであるディファーストを知っていた鳴滝は、翼がディファーストに変身したことに驚く。

ディファースト
「悪いが教えられないな…それよりもお前のライダー達は平気か?」

デルタ
「っく、なめないで欲しいですね」

タイガ
「僕は英雄になるんだ。このくらいじゃ倒れないよ」

デルタとタイガは鳴滝の頭上を跳び越してディファーストに襲い掛かる。タイガはデストバイザーを振り下ろしてくる。ディファーストは身体をそらして避け、起用にデルタにパンチを数発当てホルダーから一枚のカードを取り出し、一枚のカードを装填する。

【ＡＴＴＡＣＫ－ＲＩＤＥ!ＩＬＬＵＳＩＯＮ!!】

『ディファーストイリュージョン』を発動し、二体の分身が現れ本物を入れて計三体でデルタ、タイガを蹴飛ばす。

タイガ
「この…なめるなよ…」

タイガはVバックルからアドベントカードを抜き出し、デストバイザー刃の付け根の虎の頭をスライドさせて、その中にアドベントカードを装填した。

【ＡＤＶＥＮＴ】

デルトワイルダー
「ガルルルルルルゥウッ！！」

ディファーストの背後にタイガの契約モンスター『デストワイルダー』が現れ、ディファーストに襲い掛かろうとする。が、ディファーストの一体がデストワイルダーに回し蹴りを浴びせ、残りの二体がデストワイルダーに『ディファーストブラスト』と『ディファーストスラッシュ』を食らわし、先程蹴ったディファーストがタイガとデルタの方に蹴り飛ばした。

ディファースト
「さてと、初めてのサブライダーのカメンライドの試運転のいい機会だ」

ディファースト（ガンモード）
「ちょうど三体だし」

ディファースト（ソードモード）
「まずは、ブレイドライダーズからだ」

ディファースト（三体）
「「「変身！！」」」

三体のディファーストはそれぞれ別のライダーカードを取り出し、バックルに装填する。

【ＦＯＲＭ－ＲＩＤＥ！ＧＡＲＲＥＮ－ＪＡＣＫ！！】

【ＦＯＲＭ－ＲＩＤＥ！ＬＥＡＮＧＥＬ－ＪＡＣＫ！！】

【ＦＯＲＭ－ＲＩＤＥ！ＣＨＡＬＩＣＥ－ＷＩＬＤ！！】

三体のディファーストはそれぞれ別の仮面ライダーに変身した。赤と金の基調とし、背中に黄金の翼を装備した『Ｄギャレン・ジャックフォーム』、巨大な装甲を纏った緑と金の色を持った『Ｄレンゲル・ジャックフォーム』、野性的な赤いボディをした『ワイルドカ

リス』になり、それぞれ強化型のギャレンラウザーとレンゲルラウザーにワイルドスラッシャーを手にしデルタ、タイガ、デストワイルダーに攻撃を仕掛ける。
まず最初にDギャレンはジャックフォームによって付けられたギャレンラウザーの刃でデルタの身体を切りつけた。

デルタ
「っく、Ｆｉｒｅ！！」

【Ｂｕｒｓｔ　Ｍｏｄｅ】

【ＡＴＡＣＫ－ＲＩＤＥ！ＢＵＬＬＥＴ！！】

――ドドドドドドッ！！――

Dギャレンは同じ銃ライダーであるデルタと銃撃戦を繰り広げていた。一方Dレンゲルとタイガは白兵戦で繰り広げていた。

【ＡＴＴＡＣＫ－ＲＩＤＥ！ＳＴＡＢ！！】

Dレンゲル・ジャックフォーム
「ハァァァッ！！」

Dレンゲルはクラブの2『スタッブビー』の力を纏ったレンゲルラウザーでタイガに強烈な連続突きを当てた。

タイガ
「っくこの！！」

タイガはデストワイルダーを模した巨大な鉤爪『デストクロー』で切り裂こうとするが、Dレンゲルは一枚のカードをバックルに装填する。

【ＡＴＴＡＣＫ－ＲＩＤＥ！ＧＥＬ！！】

電子音と共にDレンゲルが液状になり、デストクローはそのまま通り抜けてダメージを与えられなく意味を成さなかった。そしてDカリスは…

Dワイルドカリス
「はあぁぁぁぁああ！！」

Dカリスは両手に持ったワイルドスラッシャーを振るい、デストワイルダーを圧倒していた。デストワイルダーは反撃しようとするが、Dカリスは【ＡＴＴＡＣＫ－ＲＩＤＥ　ＣＨＯＰ】の力を纏った手刀を繰り出しダメージを与える。

そしてカメンライドの力を駆使したディファーストは、デルタ・タイガ・デストワイルダーを追い詰める。

Dギャレン&Dレンゲル&Dワイルドカリス
「「止めと、行きますか…」」

それぞれカードを取り出そうとした時、Dカリス達とデルタ達に何かの無数の光球が降り注ぎ、デルタ達も巻き込みDカリス達を襲う。

Dギャレン・ジャックフォーム
「な、何だ?」

Dレンゲル・ジャックフォーム
「今の攻撃、何処から…?」

Dワイルドカリス
「一体誰だ!!」

Dカリスが叫ぶと、上空に数人の派手な服装の人達が姿を現す。その中の白いドレスのようなバリアジャケットを纏っている茶髪の女性と軍服のようなバリアジャケットを纏い金髪をツインテールで纏めている女性が代表のように出てきた。2人の女性はどちらも何かデバイスらしき杖と戦斧を持っている。

Dワイルドカリス

「…何だ？お前らは…」

すると2人の女性の内の一人の杖を持った女性の口が開く。

高町なのは
「時空管理局所属の高町なのは一等空尉です」

フェイト・テスタロッサ・ハラオウン
「同じく時空管理局所属のフェイト・テスタロッサ・ハラオウン執務官です。貴方達、武装の解除をして投降してください」

Dギャレン・Dレンゲル・デルタ・タイガ
「「「「……は？……」」」」

ディファースト――翔道　翼はこの世界…ましてや時空管理局など知らないので、状況は未だに飲めずにいたが一つだけ分かったことがあった。

Dワイルドカリス
「はあ…何だか面倒なことになったな…」

ｃｈａｐｉｔｒｅ１／仮面ライダーディファースト外伝～リリカルなのはの世界

～ツバサ×仮面ライダー通信～

どっさ～～んっ！！

モコナ
「ぷぅっ！！新しい世界に到着っ！！」

黒鋼
「たっく、相変わらずまともな落ち方はないのかよ」

ファイ
「まあまあ、さ～てこの世界は何だろうね～」

小狼
「…ってここは一体…ん、この紙は…」

手紙の内容
「今回の『ツバサ×仮面ライダー通信』は御三方と一匹に任せます。
Ｂｙ．みんなの人気者７５３」

小狼
「……」

ファイ
「……？」

黒鋼
「……って、なんじゃそうりゃ！！この手紙一体なんだ！？」

モコナ
「まあまあ黒鋼、抑えて抑えて。じゃあこれを紹介だ～！！ぷっぷぷ～～！！」

玖楼国

周辺を砂漠に覆われた平穏な国で、王族しか入れない遺跡がある。王政で、今現在の王はサクラの父・藤隆、そして息子である桃矢（サクラから見て兄）は王子。また魔力でこの国を支えている神官は雪兎とサクラの母でもある撫子。

ちなみに、サクラは王位第一継承者でもあり、神官候補でもある。

小狼
「玖楼国？ですか」

黒鋼
「何であの姫の国の紹介なんだ？つか、何なんだこの世界は！！」

ファイ
「黒鋼、もう時間だよ」

黒鋼
「あ！？」

小狼＆モコナ
「次回の『ツバサ×仮面ライダー通信』もお楽しみに（〜！！）」

P．S
ネタがなくてこんな風になりました。すいません。

chapitre2／仮面ライダーディファースト外伝～リリカルなのはの世界

みなさんあけましておめでとうございます。地水です。

久しぶりの更新で、遅れてしまってすいません。今回もリリカルなのはの世界番外編その二、激闘を繰り広げます。

では、始まります。

chapitre2／仮面ライダーディファースト外伝～リリカルなのはの世界

Dワイルドカリス
（はぁ……されどうするかな。相手は女性……しかも可愛い女の子ばっかり……こういうの初めてだから困るんだよな）

Dカリス達……もとい仮面ライダーディファースト・翔道翼は自分が言った「可愛い女の子たち」……もとい時空管理局元機動六課メンバーの『高町なのは』と『フェイト・T（テスタロッサ）・ハラオウン』達を見ながらこの状況を脱出する策を考えていた。その間Dギャレン、Dレンゲルは時間を稼ぐため話をし始める。

Dギャレン・ジャックフォーム
「…（んじゃ、俺は時間稼ぎでもしますか）……おい、お前ら何者だ？人のケンカに勝手に首突っ込んで来て邪魔してきて…。何のようだ？」

？？？
「何が人のケンカに突っ込むなだ。人様の迷惑を考えろ」

すると女性の二人（なのはとフェイト）の後ろから声が聞こえて来た。紅いゴシックロリータファッションを身に包み鉄製の大鎚を手に持った赤毛の少女『ヴィータ』が前に出て来て、大槌をDレンゲル達に向ける。

ヴィータ

「それにそっちこそ何者なんだよ?文字道理の鎧のようなバリアジャケットと変な仮面付けやがって」

Dレンゲル・ジャックフォーム
「……バリアジャケット?そんなもん知るか。お前のようなゴスロリファッション纏った変なヤツに自分の姿にとやかく文句言われたくはないよ、『小嬢さん』」

ヴィータ
「小嬢さんじゃねえ!しかも「お」の所が小さいの『小』になって言ってるだろうが!!お前あたしをガキ扱いしてるだろう!?ガキ扱いすんじゃねえ!!!
それにあたしは『ヴィータ』って名前があんだよ!!『鉄槌の騎士ヴィータ』だ!!!」

Dレンゲル・ジャックフォーム
「騎士だろうがロリータだろうが、そんなのお前がガキって真実に変わりはない。サンタクロースさんからクリスマスプレゼントを貰う為に家に帰ってベットで寝ろ」

ヴィータ
「何だとっ!!」

フェイト・T・ハラオウン
「ヴィータ、落ち着いて」

高町なのは
「熱くなりすぎだって。挑発に乗っちゃダメだよ」

カメンライドしたディファーストが放った言葉に怒る少女……ヴィータをなのはとフェイト2人はなだめる。そして今度は黒い服と腰の所にマントをつけた女性『八神はやて』と桃色に近い髪に騎士風の格好の女性『シグナム』がDカリス達の前に現れた。

Dギャレン・ジャックフォーム
「で、今度はお前か？何者だ？」

八神はやて
「私は管理局で特別捜査官をやってる八神はやてって言います。で、こっちがシグナムって言います」

シグナム
「主、悠長に名を名乗っている暇はありません」

そういうとシグナムは、腰から剣を抜き刃をDカリス達に向ける。

シグナム
「大規模騒乱罪の現行犯で、あなた達を逮捕します。すぐに騒乱の停止と武装の解除を」

Dギャレン・ジャックフォーム
「またそれか……だから人のケンカに突っ込むなよ。（とはいえ、ヤツラの言ってる事も一理あるが…）…」

Dギャレンは横を向くと、辺りは先程のタイガ&デルタ達の戦いに

よって地面や木々などが傷ついたり壊されたり倒された大量の残骸があった（といっても、大半がデルタとタイガだが）。

Dギャレン・ジャックフォーム
（……さぁ～て、武器を向けているとはいえ、生身の人間だからな。俺はそんな趣味はない……）

Dレンゲル・ジャックフォーム
（……「スモッグ」のカードであのこ達が混乱してる間にアレ（ジェットスライガー）に乗って逃げるか……）

Dレンゲルは「ＡＴＴＡＣＫ－ＲＩＤＥ　ＳＭＯＧ」を発動させるため、ホルダーに腰にそっと手を忍ばせようとする。その時……

――バシュウゥゥンッ！！――

一同
「「「「！？」」」」

シグナム
「っ！！主、危ない！！」

その場にいる一同が銃声音が響き、同時にシグナムははやてに迫ったビームを剣型デバイス「レヴァンティン」を振るい弾き消す。

一同がビームが発砲された方へ顔を向けると、デルタムーバーを上空に向けたデルタ……と隣にいるタイガの姿があった。

シグナム
「貴様、主に何を!!」

デルタ
「貴方達、僕達を忘れてませんか?悪いですけどそいつは我々が始末するのでどうぞお手を引いてよろしいでしょうか?」

タイガ
「いきなり邪魔しないでよ、英雄は忙しいんだから。返答次第で君たちを倒さないといけないよ?」

デルタとタイガはディファーストと交戦中になのは達元機動六課メンバーに邪魔され水を挿された事を気に食わなかったようで、デルタもタイガもそれぞれ武器を構えながらはやて達を睨み付ける。

タイガ
「どうしたんだ、英雄の僕に怖じ気ついたか?だったらこっちから行くよ!!」

タイガ達ははやて達六課メンバーを無視してDカリス達に向かって突進する。Dギャレン、Dレンゲルも再び交戦を始めようとする。

フェイト・T・ハラオウン
「って人の話を聞きなさい！！なのはお願い！！」

高町なのは
「うん、アクセルシューター、シュート！！」

なのはは約２０個の魔力弾をタイガ達とDギャレン達が交わろうとする瞬間に一斉に放つ。Dギャレンとデルタは何とか避けるがDレンゲルとタイガは何発か当たってしまう。

Dレンゲル・ジャックフォーム
「いっつ、何だ今のは……」

ヴィータ
「グラーフアイゼン！！」

アクセルシューターを何発をくらった（装甲を纏っていたためダメージを軽減したとはいえ）Dレンゲルにヴィータがさっきの大槌型（ハンマー？）のデバイス「グラーフアイゼン」の名を掛け声と共に振り下ろす。Dレンゲルは咄嗟にしゃがんで、レンゲルラウザーでヴィータごとグラーフアイゼンを弾き飛ばした。
その後Dレンゲルはレンゲルラウザーを肩に担いで、自分に向かってくるシグナムを見る。

シグナム
「貴様できるようだな、ならこの烈火の騎士シグナムが相手をしよ

うぞ」

Dレンゲル・ジャックフォーム
「…いいぜ、そういうの嫌いじゃねえからよ…」

～～～～～～～～～～

同じ頃、何とかアクセルシュートを避けたDギャレンは近くにあった高層ビルの中で逃げ込むが、その後青髪のボーイッシュな感じの女『スバル・ナカジマ』とオレンジの髪の女『ティアナ・ランスター』、槍を持った赤髪の少年『エリオ・モンディアル』と桃色の髪の少女『キャロ・ル・ルシエ』の四人に追い詰められていた。

ティアナ・ランスター
「さぁ、早く投降しなさい。もう貴方の逃げ場はないわ。抵抗するなら多少意識を失ってしまっても仕方がないわよ」

Dギャレン・ジャックフォーム
「あ?何でさ。俺は自主するつもりも捕まるつもりもないし、俺は意外とお人好しだが無抵抗にやられてやるほど良心的じゃないんでな。足掻かせてもらうぞツンデレ執務官。」

ティアナ・ランスター
「だ、誰がツンデレよ!!それに私にはティアナ・ランスターって名前があるのよ!!」

スバル・ナガシマ
「ティアナ、落ち着いて落ち着いて！！」

エリオ・モンディアル
「ヴィーダ元副隊長のように怒らないで。冷静さを失ったらダメです」

怒りを露にし冷静さを欠けかけて2丁拳銃型デバイス「クロスミラージュ」の引き金を引こうとするティアナをスバルとエリオはなだめる。

Dギャレン・ジャックフォーム
「もう一度言っておく、俺は訳も分からず捕まる気はない。ちょっとお前らの方が不利かもしれないがお前らを倒す」

ティアナ・ランスター
「やって見なさいよ……こっちから行くわ。クロスミラージュ、ファイア！！」

足元に魔法陣のような物を展開させたティアナはクロスミラージュの銃口から魔力弾を数発放つ。Dギャレンもサモンドライバーを手に取り、ギャレンラウザーと同時に銃撃を放ち魔力弾を打ち抜いてゆく。お互い互角の銃撃戦を繰り広げていたが、Dギャレンはティアナの後ろにいるキャロの呪文のような呟いていた言葉が耳に入る。

キャロ・ル・ルシエ
「我が乞うは、疾風の翼。若き槍騎士と勇気ある術者に、駆け抜ける力を」

Dギャレン・ジャックフォーム
（…？何だあの呪文……何かの読誦か？それにさっきのなのはとかいうヤツが放ったあの光弾も何かの…）

スバル&エリオ
「はあぁぁぁぁぁぁあ！！！」

Dギャレン・ジャックフォーム
「！？」

キャロに気を取られていたDギャレンのすぐ真横にインラインスケート型デバイス「マッハキャバリー」と槍型デバイス「ストラーダ」、さらにキャロの補助魔法によって一瞬にDギャレンとの距離を詰めたスバルとエリオが現れ、拳装着型アームドデバイス「リボルバーナックル」を付けた腕でのパンチとストラーダの一突きを食らってしまう。Dギャレンはそのまま勢いでガラス窓を突き破って高層ビルから落ちてしまう。

Dギャレン・ジャックフォーム
「くっ、何か気付こうとしてたのに…この！！」

――バサァッ！！――

Dギャレンは背中のオリハルコンウィングを展開させ、宙を舞い始め上へ目掛けて飛び行く。そして屋上に着き着地したDギャレンは、同時に屋上に着いたスバル達四人を見る。2人とも自分の使っていたギャレンの能力驚いた顔をしていた。

スバル・ナガシマ
「す、凄い…背中の翼で飛ぶなんて」

ティアナ・ランスター
「あのベルトのようなデバイスといい、その全身装甲なバリアジャケットといい……貴方一体何者なの?」

Dギャレン・ジャックフォーム
「通りすがりの仮面ライダーだ。覚えとけ……いや、覚えなくていい。どうせ俺を捕まえるつもりなんだろ?さっき言ったとおりに足掻いてやる。
銃使いと拳闘士、だったら銃使いと拳闘士のライダーだからコイツを呼び出すか」

Dギャレンはサモンドライバーをガンモードからソードモードにして屋上の足場に突き刺すと、ホルダーから二枚のカードを取り出しサモンドライバーに装填、再びガンモードに変形させ引き金を引く。

【FINAL－KAMEN－RIDE!RYU・RYU・RYU・RYUKI!!】

【ＫＡＭＥＮ－ＲＩＤＥ!ＴＨＥＢＥＥ!!】

電子音と共に三つの光放たれ、黄色と黒の基調としたスズメバチのモチーフの『仮面ライダーザビー・ライダーフォーム』、燃え上がる火のような赤と金色のラインの装甲に拳銃型の武器「ドラグバイザー・ツバイ」を持った龍を司る騎士の「仮面ライダー龍騎サバイブ」が現れる。ただでさえ仮面ライダーを知らないスバル達は見たこともないライダー達に驚いていた。そんな四人を気にせず、龍騎は拳を口に当て気合の掛け声を言う。

龍騎サバイブ
「しゃあっ!!行くぜ!!」

キャロ・ル・ルシエ
「しゃ、喋った!?ねぇエリオ君、あの赤い人喋りましたよ!?」

エリオ・モンディアル
「お、落ち着いてキャロ!!冷静に冷静に」

Ｄギャレン・ジャックフォーム
「お前らは落ち着きがないのかよ…」

Ｄギャレンは元スターズ、ライトニングズの落ち着きのなさの様子にそれぞれそう呟く。余談だが、ディファーストが今召喚したザビーの人格はとあるカブトの世界の「矢車想」、「影山瞬」、「三島正人」のザビーゼクターに選ばれた者達ではなく……

ザビー
「参上、キャプテンザビーッ！！気軽にブラボーって読んでくれ！！」

――ズッテーーーンッ！！――

ザビーが出た予想外の言葉にスバル、ティアナ、エリオ、キャロ、Dギャレン、龍騎は思いっきりずっこけた。

スバル&ティアナ&エリオ&キャロ
「「「「は、はぁぁ！？」」」」

ザビー
「おや、どうした？何で皆すっころんで…」

龍騎サバイブ
「いや、さっきのアンタの名乗りが原因でしょ！？何ですか『参上、キャプテンザビー』って！？」

ザビー
「そのほうがカッコいいだろ？」

龍騎サバイブ
「カッコいいとかカッコ悪いとかそう言う問題じゃねえ！！キャプテン入らないよ！！」

Dギャレン・ジャックフォーム
「…やっぱりザビー…一度腹腸（ハラワタ）をぶちまけろ、いや頭を叩き付けろ！！」

Dギャレンはサモンドライバーでザビーの頭を叩き付けた。が、ザビーはサモンドライバーが頭に直撃してもビクともしなかった。

Dギャレン・ジャックフォーム
「どれだけ硬いんだ？本来のザビーはこんなに防御力ないだろ！？」

ザビー
「これがこの俺の鍛え上げた肉体だ。ちょっとやそっとじゃ倒れないぜ！！」

龍騎サバイブ
「もうそれいいです！！さっさと行きますよ！！」

Dギャレン・ジャックフォーム
「じゃ、気を取り直していくぞ」

Dギャレンの掛け声と共にザビーと龍騎は自分達に迫るスバル達を迎え撃つ。

～～～～～～～～～～

Dカリスはジェットスライガーに乗り、なのは、フェイト、はやてと空中戦を繰り広げていた。流石に強敵を三人も相手してるのでDカリスは防戦一方だった。

高町なのは
「ディバイーン、バスターーッ！！！」

Dワイルドカリス
「っ！？」

なのはの杖型専用デバイス「レイジングハードエクセリオン」から巨大な魔力のビームは放たれ、ジェットスライガーを危うく直撃を食らう寸前で真下に急降下し何とか避けた。

Dワイルドカリス
「何だあの火力！？〇ンダムか！？ファースト〇ンダムかアレ！？」

フェイト・T・ハラオウン
「バルディッシュアサルト、ハーケンモード！！
はあぁぁぁぁぁああ！！！」

フェイトは戦斧形態から鎌のような形態になったバルディッシュアサルトを両手にてにし、ジェットスライガーに乗ってるDカリスに急接近する。

Dワイルドカリス
「はぁ……空飛ぶのかよ…だけどこっちもそういうの、あるぜ」

【ＡＴＴＡＣＫ－ＲＩＤＥ！ＦＬＯＡＴ！！】

フェイトが近づいているのに気付いたDカリスは「フロート・ドラゴンフライ」の力を纏ってジェットスライガーから飛び上がり、ワイルドスラッシャーで刃を受け止め、その後フェイト達から離れジェットスライガーに再び乗って何処かのビルの屋上に着地した。ジェットスライガーから降りてなのは達が駆けつけてくるのを顔を見て質問を問い始める。

Dワイルドカリス
「…なるほどな。その機動力、その魔力で作った攻撃……お前ら魔術師か？」

八神はやて
「ま、魔法使いか？確かに私は魔術師だけど……もしかしてアンタ、時空漂流者か？私たち時空管理局の局員を知らないなんて」

Dワイルドカリス

「ふぅん……お前ら時空管理局っていうのか。この世界は管理局って所にいる魔術師が守ってるのか。といっても、俺が知ってる魔術師が使っていた魔法とは違うな」

高町なのは
「何を思っているのか分かりませんが、話は本局でさせていただきま…」

【ＡＴＴＡＣＫ－ＲＩＤＥ！ＧＥＭＩＮＩ！！】

なのは＆フェイト＆はやて
「「「って、ええ！！？？」」」

三人は驚いた。何故ならＤカリスが「ジェミニゼブラ」の力を使い二人に分身したからだ。さらにＤカリスは新しいカードを装填する。

【ＦＩＮＡＬ－ＡＴＴＡＣＫ－ＲＩＤＥ！ＣＨＡ・ＣＨＡ・ＣＨＡ・ＣＨＡＬＩＣＥ！！】

Ｄワイルドカリス
「「ワイルド…サイクロン」」

２人のＤカリスはワイルドスラッシャーをコネクトしたカリスアローを構え、そこから巨大な光の矢『ワイルドサイクロン』を２人同時に一閃放った。
なのは達は防御魔法を展開させ光の矢を防ごうとしたが、あまりにも破壊力の高い上同時に二つも放たれた光の矢に押され、なのは達のいた所は大爆発を起こす。

chapitre2／仮面ライダーディファースト外伝～リリカルなのはの世界

～ツバサ&仮面ライダー通信～

翼
「……

……

さぁ……

出張リリカル通信の始まりだ」

雅也&皐月&ヴィヴィオ&メアリー
「「「「違います!!出張リリカル通信じゃありません!!ツバサ&仮面ライダー通信ですって翼さん!!」」」」

翼
「軽いジョークだ。じゃ、気を取り直して。今回のツバサ&仮面ライダー通信は青いタヌキさんの代表小説『アニメ&ゲームキャラ大集合!シリーズ』の久本雅也くん、神代皐月さん、高町ヴィヴィオ、メアリーちゃん達だ」

雅也
「はぁ…まさか開始早々ボケを出す司会者なんて…大丈夫かな?」

皐月
「雅也、翼さんに失礼だよ」

メアリー
「あたし達の方もこんな感じだし」

ヴィヴィオ
「すいません、初出演の時ママ達が翼さんを…」

翼
「大丈夫だ、俺も色々と失礼したからな…それより、最初の質問に移るか。

『皆さんの好きな物は何ですか?』それぞれ一人ずつ教えてくれ」

雅也
「俺はカレーとチャーハン、クッキーにあと読書だな」

皐月
「私は卵料理にお菓子。あとはかわいいもの」

メアリー
「シュークリームにマシュマロだ」

ヴィヴィオ
「私はなのはママにフェイトママ、後はお菓子です」

翼

「なるほどな……じゃ、お願いしまーす」

雅也&皐月&ヴィヴィオ&メアリー
「「「「え！？」」」」

ダブル（ジョーカー）
「さあ、自分のクッキーの数を数えろ…どうも2人で一人の仮面ライダー、ダブル…」

ディケイド
「通りすがりの仮面ライダー、ディケイドだ。覚えておけ。こういうこともあろうかと、お前の情報は大体リサーチ済みだ。前もってクッキーを作っといたぜ」

ダブル（サイクロン）
「君達の情報は地球の本棚で統べて知ってるよ。久本雅也にはカレーが好きだからカレー風のスパイスクッキー、神代皐月にはカービィやピカチュウなどのキャラクッキー、高町ヴィヴィオには母親である高町なのはの作ったキャラメルを再現して練りこんだキャラメル味のクッキー、メアリーにはクッキーとクッキーにマシュマロを挟み込んだサンドクッキーだ」

雅也
「ど、どうもありがとうございます！！」

皐月
「か、可愛いっ！！本当に可愛い！！」

メアリー
「す、凄いボリュームだ！！」

翼
（そりゃ見た目１９だけど身長４０ｃｍだからな…）

ダブル（ジョーカー）
（いや、３０ｃｍだから…）

ヴィヴィオ
「うわぁ～～美味しい！！ママの味に似てる！！」

翼
「楽しんでいただいて何よりだ……皐月、ヴィヴィオ、メアリー。後で美味いカレーチャーハンとパーユの作り方教えてやる」（親指を突き出しながらサムズアップ）

皐月＆ヴィヴィオ＆メアリー
「「「…？はい…」」」

翼
「完全にお・と・せ・る、からよ」

皐月＆ヴィヴィオ＆メアリー
「「「え、えええええ／／／！？」」」（顔を赤くする）

雅也
「っておいいいいい！！なんださっきのは！？」

翼
「何だよ、男の子を心を射落とす料理ぐらい教えても…」

ダブル（ジョーカー）
「教えるなっ！！せめて今教えるな！！」

ディケイド
「翼、お前は流れをぐだぐだにする気かお前は？じゃ、次だ。

『四人は好きな人はいますか？』」

翼
「で、実際はいるよな雅也…」

雅也
「何で俺にふる！？い、いいるわけないじゃんか…あ、あははははは」

皐月
「ちょ、それどういう意味雅也！！」

ヴィヴィオ
「ほ、ほほほ本当にいないのですか！？」

メアリー
「はっきり教えろマスター！！」

雅也
「え！？な、何を…」

皐月＆ヴィヴィオ＆メアリー

「「好きな人がいるかって事よ（です）！！！！」」

ディケイド
「おいおい…抑えた抑えた、何故三人がテンパる？もしかして、お前ら雅也のこと…」

ドゴォン！！

ディケイド
「いった～～！！！何すんだ！！」

翼
「お前の言うとおり、皐月達は雅也の事が好きで雅也も彼女達のことが好きだ。だけどそんなことを言ったら険悪な空気になって泥沼状態になるだろ！！」（小声で）

～～～～～～

数十分後

～～～～～～

ダブル（ジョーカー）
「四人が落ち着いた所で、次の質問だ。

『四人は戦いたい仮面ライダーは入ますか？』」

雅也
「えっと～…俺はディケイドですね」

メアリー
「私は剣（ブレイド）だ」

皐月
「私とヴィヴィオはダブルです…ってあれ？今ここにいるのは翼さんとディケイドさんとダブルさん…もしかして」

ディケイド
「そういうことだ、俺達はお前らが戦いたいっていうから来たんだ。ということで変身！！」

【ＫＡＭＥＮ－ＲＩＤＥ！ＢＬＡＤＥ！！】

D剣（ディケイドブレイド）
「さぁて、俺は雅也とメアリーと相手だ」

ダブル（ジョーカー）
「女だからって手加減はしないぜ？」

皐月
「な、なんでそうなるの！？」

ヴィヴィオ

「翼さん、何とかしてください！！」

翼
「とりあえず、頑張れ。お前らが勝てばお土産あげるから」

ヴィヴィオ
「そんな～～」

雅也
「でも楽しそうじゃねえか。優太さん達にお土産ももって帰れそうだし。メアリー、ユニゾンだ」

メアリー
「了解、マスター」

翼
「じゃ、バトルファイト！！」

そしてその後、Dブレイド・ダブルと雅也達ゲストメンバーに激闘が始まり、最後はディケイドがダブルをファイナルフォームライドで超絶変形させ、サイクロンサイクロン・ジョーカージョーカーと共に『トリプルエクストリーム』と、雅也・皐月・メアリーの魔力を受け取ったヴィヴィオが放った『ディバインバスター』がぶつかる。

結果ヴィヴィオ達が優勝、翼からお土産のクッキーを貰ったとさ。

結果発表

どうも地水で～す。

今回は、短い間でしたが「どのライダーとコラボ！！」という内容のアンケートをとりました。
アンケートに参加してくれた皆様、本当にありがとうございます！！

で、そのコラボ企画の結果を発表します！

ちなみに既に決まったクウガ、アギト、龍騎、カブト、キバも一緒にお披露目で～す。

仮面ライダークウガ・・・・・・『Ｆａｔｅ／ｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔ』

クウガ／Ｇ３－Ｘ／小野寺ユウスケ：衛宮士朗

八代藍／オーガ（ファイズの世界以降）／ガタック（一時的）／ディエンド：セイバー

仮面ライダーアギト・・・・・・『Ｆｓｔｅ／ｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔ』

アギト／エクシードギルス／Ｇ３／芦河ショウイチ：アーチャー

Ｇ３－Ｘ：Ｇ３ユニット隊員

八代淘子：遠坂凛

仮面ライダー龍騎・・・・・・『烈火の炎』

龍騎／辰巳シンジ：花菱烈火

ナイト／羽黒レン：水鏡凍貴也

桃井怜子：佐古下柳

仮面ライダーファイズ・・・・・・・・・『アスラクライン』

ファイズ／ウルフオルフェノク／尾上タクミ：夏目智春

友田ユリ：水無神　操納、嵩月　奏

カイザ／ホースオルフェノク／木場　勇治（この世界では智春達が通っている学校の教師、また智春にファイズギアを渡した本人の設定）

仮面ライダー剣・・・・・・『機動戦士ガンダムＯＯ』

剣／剣立カズマ：刹那・Ｆ・セイエイ

ギャレン／菱形サクヤ：ロックオン・ストラトス

レンゲル／黒葉ムツキ：アレルヤ・ハプティズム

カリス／ジョーカー／四心ハジメ：リボンズ・アルマーク

アイ、マイ、ミー：ソレスタルビーイングの皆さん

仮面ライダー響鬼・・・・・・『犬夜叉』

響鬼／ヒビキ

威吹鬼／イブキ

斬鬼／ザンキ

響鬼／アスム：犬夜叉

天鬼／アキラ：珊瑚

轟鬼／トドロキ：弥勒

日暮かごめ

仮面ライダーカブト・・・・・・『武装錬金』

カブト／天堂ソウジ：武藤カズキ

ザビー／フィロセキラワーム／弟切ソウ：矢影カズマ（オリジナル）

ザビー／おばあちゃん：キャプテンブラボー（本名、防人　衛）

ガタック／アラタ／天堂マユ：津村斗貴子

ドレイク：早坂桜花

サソード：早坂秋水

仮面ライダー電王・・・・・・『Ｐａｎｄｏｒａ　Ｈｅａｒｔｓ』

電王／野上良太郎：オズ＝ベザリウス

ゼロノス／侑斗：ギルバード＝ナイトレイ

ハナ：ハナ、アリス

オーナー：オーナー

オーナー／幽汽（味方の設定）：ザークシーズ＝ブレイク

ナオミ：ナオミ、シャロン＝レインズワーク

イマジン達／モモタロス、ウラタロス、キンタロス、リュウタロス、

ジーク、デネブ、ゴースト（ゴーストイマジンの略）、ビーラビットイマジン（アリスのもう一つの姿）

仮面ライダーキバ・・・・・・『ロザリオとバンパイア』

キバ／ワタル：青野月音

サガ：赤夜萌香

ガルル：森丘銀影

仮面ライダーイクサ：名護啓介（この世界では素晴らしき青空の会がないため凄腕のバウンティーハンターをしている設定）

仮面ライダーイクサ（量産型）：黒乃　胡夢、仙童　紫、白雪　みぞれ

仮面ライダーW（ダブル）・・・・・・『あかね色に染まる坂』

仮面ライダーダブル／左翔太郎：長瀬準一

仮面ライダーダブル／フィリップ：長瀬来斗

鳴海亜希子／片桐優姫

長瀬湊

鳴海壮吉／仮面ライダースカル（この世界では生存しており、とある事情により探偵事務所を弟子の準一に任せ、世界を駆け巡っている設定）

刃野幹夫、真倉瞬俊、ウォッチャマン、サンタちゃん、クイーン＆amp;エリザベス（原作と変わりなし）

照井竜／仮面ライダーアクセル（原作より早く登場している）

まあこんな感じです。それとオマケとして鳴滝の配下のライダーを紹介します。

【クウガの世界】

キックホッパー／矢車想

パンチホッパー／影山　瞬

【キバの世界】

仮面ライダーカイザ／草加雅人

【龍騎の世界】

仮面ライダー幽汽／ゴーストイマジン（電王の世界のゴーストと同一人物）

【剣の世界】

仮面ライダー轟鬼／トドロキ

【ファイズの世界】

仮面ライダーリュウガ／ミラーワールドの城戸真司

【アギトの世界】

仮面ライダーサイガ／レオ

【カブトの世界】

仮面ライダーイクサ／名護啓介

【響鬼の世界】

仮面ライダー王蛇／朝倉威

【電王の世界】

仮面ライダーディエンド／海東大樹（正確には鳴滝に騙されて）

仮面ライダーダークカブト／角サナギワーム／ルルーシュ・ランペルージ

【主要ライダー】

仮面ライダーデルタ／？？？

仮面ライダータイガ／東條悟（先代、後にディファーストによってデストワイルダーと共に倒される）、？？？（二代目、まだ姿を見せてない）

【登場予定】

仮面ライダーガオウ／我王

ネガ電王／ネガタロス

仮面ライダーアナザーアギト／木野薫

～～～

仮面ライダーファイズ／本須和　秀樹

仮面ライダー剣／司狼　神威

仮面ライダーカリス／桃生　封真

仮面ライダー響鬼／獅子堂　光

仮面ライダー威吹鬼／鳳凰寺　風

仮面ライダー斬鬼／龍咲　海

仮面ライダーカブト／琉・Ｆ・和彦

仮面ライダーガタック／銀月

仮面ライダー電王／ストレンジイマジン（オリジナル、姿を変えられる変身能力を持っていて、それを応用して超クライマックスフォームを除く全フォーム変身可能）

仮面ライダーゼロノス／皇　北都

仮面ライダーキバ／皇　昴流

仮面ライダーイクサ／桜塚　星史郎

まあこんな感じです。改めましてアンケートに参加してくれた皆様、本当にありがとうございます。これからも応援してください。

ｃｈａｐｉｔｒｅ３／仮面ライダーディファースト外伝～リリカルなのはの世界

どうも地水炎風陰雷です。更新遅くなりました！！まさか外伝とはいえ久しぶりの本編がこんなに遅れるとは…

今回も外伝の続きです。（早く本編に行かないと…リスさん、キラーさん、まだ遅くなります。すいません）

では、始まります。

ｃｈａｐｉｔｒｅ３／仮面ライダーディファースト外伝～リリカルなのはの世界

――ドカアァァァァン！！――

チッドミルダ郊外、建物の下でウォルゲンゲッターメンバーと戦っていたＤレンゲルは、遠くで放たれたＤカリスの「ワイルドサイクロン」によって起こった爆発音を耳に入る。

Ｄレンゲル・ジャックフォーム
「…あっちも派手にやってるな…」

シグナム
「余所見をしていると、怪我するぞ！！」

シグナムはＤレンゲルに向けてレヴァンティンを振り下ろしてきた。
Ｄレンゲルは強化型になったレンゲルラウザーの柄部分の先に追加された刃で受け止め、競り合いに入る。

シグナム
「貴様、なかなかやるな」

Ｄレンゲル・ジャックフォーム

「お前もな…」

シグナム
「それにしても、貴公は普段は剣を使っているように思ったが…剣は抜かぬのか？」

Ｄレンゲル・ジャックフォーム
「残念なことにこのライダーは杖術を用いて戦うのでな、どうしても剣と剣を交えたいのなら俺に強い一撃を与えて元の姿に変えるこっただ」

シグナム
「だったら……そうさせてもらう！！レヴァンティン！！」

レヴァンティンから電子音らしき声が鳴ると、レヴァンティンの刀身が炎に包まれた。それを見て何かを察したＤレンゲルは、一枚のカードをディファースドライバーにセット、サイドバックルを閉める。

【ＦＩＮＡＬ－ＡＴＴＡＣＫ－ＲＩＤＥ！ＬＥ・ＬＥ・ＬＥ・ＬＥＡＮＧＥＬ！！】

電子音が鳴ると、レンゲルラウザーが冷気を伴い初め、さらに「スコーピオンボイズン」の力で凍る事で鉄に匹敵するほどの強度にさせる特殊な毒を生成し、その毒を冷気を伴ったレンゲルラウザーの先端部の刃に纏って凍結させて、巨大なクローバー型の刃を作り出

した。

そしてシグナムとDレンゲルは刀身を炎に包まれたレヴァンティンと氷の刃を装着したレンゲルラウザーを構え、それぞれ掛け声を叫ぶ。

シグナム
「紫電……」

Dレンゲル・ジャックフォーム
「ブリザード……」

――ガチャンッ！！――

シグナム
「一閃ッ！！！」

Dレンゲル・ジャックフォーム
「ベノム！！！」

シグナムの「紫電一閃」とDレンゲルの通常とは違う派生技バージョンの「ブリザードベノム」をお互い薙ぎ放つ。炎と氷の互いに性質が最悪物同士の一撃がぶつかり合い、結果爆発を起こした。

――ドガアアアアアン！！シュウウウウウウウン……――

そして煙と爆発……そして水蒸気が消えると、プロテクションで爆発を防ぎダメージを減らした少しバリアジャケットが乱れたシグナム、通常の姿に戻ったディファーストが姿を現す。

シグナム
「ほう…それが貴公の本当の姿か…」

ディファースト
「なるほどな……腕は確かだな。まあさっき言ったとおり剣で戦ってやる…」

そう言うとディファーストは、腰にあるサモンドライバーに手をかけ抜こうとする。そのとき体勢を立て直して帰ってきたヴィータがグローフアイゼンを振り下ろして襲い掛かって来た。ディファーストは横に避けると、片足でグローフアイゼンを地面に踏みつける。

ディファースト
「悪いが、先客がいるんでな。お前の相手は後だガキ」

ヴィータ

「だからガキじゃねぇ！つーかその足をどけろ！！」

ヴィータはグローフアイゼンを振り回すが、ディファーストは何らく避ける。次第にイライラが達したヴィータはグローフアイゼンを使って鉄球を生み出し、鉄球をディファーストに向かって打ち飛ばした。

【ＡＴＴＡＣＫ－ＲＩＤＥ！ＥＡＲＴＨ！！】

電子音が鳴り響くとディファーストはサモンドライバーを掴み、ガンモードにして銃口からビームを放ち鉄球に当てる。すると鉄球のスピードが格段に落ち、ディファーストの身体に届かぬまま地面に落ち深くめり込んだ。

ヴィータは驚きながらもアイゼンを振るい回そうとしたが、ディファーストが一瞬の内にヴィータの懐に入ってソードモードにしたサモンドライバーをアイゼンに軽く当た。その直後アイゼンの通常より何倍も重量が増してしまい思い道理にうまく振り回せなくなる。

ヴィータ
「っち、何しやがった！！」

ディファースト
「別に、そのゲートボールハンマーを少し重くしてやっただけだ。少し落ち着け」

ヴィータ
「黙れ！！このっ！！」

ヴィータはアイゼンを振舞わそうとするが、逆によろけて倒れてしまう。ディファーストはそのヴィータの様子を見ると、再びシグナムの方へ向く。

ディファースト
「さて……心配するな、効力が切れれば元になる。それにしてもまさかこんな世界で手ごたえのあるヤツが出会えるとはな。案外悪くないかもな」

シグナム
「そうか……ならヴィータ、そこにいろ…」

ヴィータ
「う……分かったよ…」

そういうとヴィータは、ディファーストとシグナムの戦いに水を挿さない様にグローファイゼンを引きずりながら後方へ下がろうとした。

――ガラアアアアシャアアアアアンッ！！！！――

ディファースト
「!?何だ…!?」

ディファーストが横を向くと、狼に似た青い犬『ザフィーラ』と緑の服のようなバリアジャケットの女性『シャマル』が仮面ライダータイガに追い詰められている姿があった。その様子を見て、シグナムとヴィーダは驚愕する。

ヴィータ
「シャマル!?」

シグナム
「ザフィーラ!!」

ザフィーラ
「す、すまない…油断していた…」

シャマル
「っく……ごめん、活躍もできなくて…」

タイガ
「うるさいよ……英雄の邪魔をする者は悪…お前らのような悪なんて死んじまえ!!」

タイガはデストバイザーを振り上げる。そしてデストバイザーを振

り下ろした。

ヴィータ・シグナム
「「や、やめろ……」」

2人は叫び上げようとするが、すぐに止まってしまう。何故なら……

――ジャラララランッ!!!――

タイガ
「グアァッ!?何だと…動か……ない!?」

なんと何もない空間から鎖が出現し、タイガの身体を拘束していた。

???
「おい虎野郎……レディと動物に手を上げるなんて酷くねえか?」

タイガ
「!?その……声は…」

タイガが声のした振り向く。

暗黒の闇を思わせるような漆黒の身体……
返り血を浴びたような黒みかかった赤に染まったような騎士と死神のような鎧……
電王と形状が似ているが、他の形態（フォーム）には相当出せないほどの殺気に満ちた電仮面をつけた…

ディファースト……「電王の世界」の最悪最強のイマジンを取り込んだ幻の電王……『アリスフォーム』の姿があった。

タイガ
「何だ、それは……!?」

D電王・アリスフォーム
「幻の電王…アリスフォーム。こんな可愛らしい名前だが、案外なめてると痛い目見るぞ？美しい薔薇には棘があると言うが、これはそんなレベルはない…」

そういうとD電王は、タイガを縛り付けている鎖を思いっきり引っ張る。
タイガは鎖に縛られたままD電王に迫り、構えていたD電王の振るったサモンドライバーに叩き切られ、さらにまた引っ張られ思いっきり蹴り飛ばされる。D電王はヴィータ達の方へ向くと、シャマル

とザフィーラを引き下がらせる。

タイガ
「この…ぶッ倒す！！」

【ＦＩＮＡＬＶＥＮＴ】

デストワイルダー
「ガアアアアアアアアアアアアアア！！！」

近くにあった窓ガラスからデストワイルダーが出現、Ｄ電王をタイガの所まで引きずって「クリスタルブレイク」を発動させるため爪を突き当てようとする。だがいくつもの修羅場を乗り越えたディファースト……翼は簡単にやられるほどひ弱ではない。

Ｄ電王・アリスフォーム
「…見えてるものが真実じゃない。それを今実感させてやる」

――ブオォォオン――

襲い掛かってきたデストワイルダーにＤ電王が姿を一瞬の内に消えてしまう。その場にいたワイルダー、タイガ、ヴィーダたちの顔に驚きの顔を浮かべさせた。

ワイルダーは辺りにいすはずのディファーストに目掛けて鍵爪を振り回すが全て空振りにばかり、さらにD電王に斬撃での不意打ちを喰らってタイガの所まで吹き飛ばされる。

D電王・アリスフォーム
「さて…お前の魂頂くぞ！！」

D電王は某鎌職人の少女の決め台詞を口にしながら、電王のクレストが書かれた黄色いカードをバックルにセットした。

【ＦＩＮＡＬ－ＡＴＴＡＣＫ－ＲＩＤＥ！ＤＥ・ＤＥ・ＤＥ・ＤＥＮ－Ｏ！！】

サモンドライバーの剣先に赤黒い光の刃が生成される。それを見ていたタイガだが、驚く暇もなくまたもや鎖が出現しデストワイルダーとタイガを拘束されD電王の引き寄せられ…

タイガ
「う、うあああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

D電王・アリスフォーム
「……さぁ……腹腸（ハラワタ）を……ぶちまけろ！！！」

――ザシュンッ！！！――

D電王の鎌を振るった要領でサモンドライバーの赤黒い刃がタイガ達の身体を叩き切った。タイガ達は叩き切られたまま安全地帯（だれもいない）に転がって倒れる。サモンドライバーの赤い刃が消えるとD電王は一人呟いた。

D電王・アリスフォーム
「……ブラッティ……ファントム……」

――ドガガァァァァァァァァァァァンッ！！――

爆発音が辺りに響き渡り、D電王の周りにデストワイルダーの残骸である鍵爪が爆風から飛んできて地面に刺さった。

～～～～～～～～～～

Dギャレン・ジャックフォーム
「我慢しろ」

【ＦＩＮＡＬ－ＦＯＲＭ－ＲＩＤＥ！ＲＹＵ・ＲＹＵ・ＲＹＵ・ＲＹＵＫＩ！！】

龍騎サバイブ
「うわわあわあああああ！！！嘘だろおぉおおおおおおおおお！！？」

龍騎はキャロの召喚した巨大な白い竜『グリードリヒ』に対抗するためＤギャレンによってその場で宙に浮かび、烈火龍ドラグランザーに似たＦＦＲ『サバイブドラグランザー』に変形した。

サバイブドラグランザー
「おい、いくら変形したってこれで勝てるか？」

Ｄギャレン・ジャックフォーム
「そりゃ本気を出せばな。だがこいつらはいずれ近い未来に必要だ。だから死なせるな……」

フリードリヒ
「グギャアアアアア！！！」

Ｄギャレン・ジャックフォーム
「おっと！！」

Dギャレンはグリードから放たれた火球を、翼を展開させて上空に逃げて避けた。その後、サバイブドラグランザーの顔の所まで飛び、ドラグランサーとの話を続ける。

サバイブドラグランザー
「生憎俺はそんな性格じゃないよ。俺は『誰かの夢を守る』……そういう性（さが）で生まれたと信じてるからよ」

Dギャレン・ジャックフォーム
「あっそ……じゃ、いくぞ」

Dギャレンはホルダーから二枚のカードを取り出し、バックルに連続で装填する。

【ＡＴＴＡＣＫ－ＲＩＤＥ！ＳＨＯＯＴ　ＶＥＮＴ！！】

【ＦＩＮＡＬ－ＡＴＴＡＣＫ－ＲＩＤＥ！ＧＡ・ＧＡ・ＧＡ・ＧＡ・ＧＡＲＲＥＮ！！】

Dギャレン・ジャックフォーム
「バーニングショットォ！！」

サバイブドラグランザー
「ファイアァ！！」

ギャレンラウザーから炎の弾丸『バーニングショット』を高速連射、サバイブドラグランザーの口から火炎弾『メテオバレット』の同時攻撃を放つ。フリードリヒも口から火炎弾を放って打ち消したり避けたりしようとしたが、何発か当たってダメージを負う。

Dギャレン・ジャックフォーム
「どうだ？ホットなお味はどうでしたか…」

――ズガンッ！！――

Dギャレン・ジャックフォーム
「ぐごっ！？」

背中に鈍い衝撃が走る。Dギャレンは背中を振り向くと、エリオがストラーダを背中に刃を立てている姿が目に写る。さっきの衝撃はストラーダで突き刺した衝撃のようで、そのダメージを負ったことによりギャレンの姿から元のディファーストの姿に戻ってしまうが、地面にぶつかる前にサバイブドラグランザーの背中に着地する。

ディファースト

「いったた……」

エリオ・モンディアル
「はあああぁぁぁぁあああ！！」

エリオはディファースト目掛けてストラーダの刃を刺そうと、急降下して来た。ディファーストはすかさず新しいカードをバックルに装填した。

【ＡＴＴＡＣＫ－ＲＩＤＥ！ＳＬＡＳＨ】

サモンドライバーでストラーダを受け止め、『ディファーストスラッシュ』を発動させフリードリヒまでエリオを弾き飛ばした。

サバイブドラグランザー
「なあ……大丈夫なのか？」

ディファースト
「大丈夫だろうが、大丈夫じゃなかろうが…
やるしかないな」

ディファーストはドラグランザーに言うと、サモンドライバーを刃を構え管理局の元ライトニングズに向かっていった。

～～～～～～～～～

同じ頃、ティアナとスバルはディファーストが召喚したザビーに2対1で有利も関わらず苦戦をしいられていた。

ティアナ・ランスター
「この、何で強いの!?」

ザビー
「どうした、もう終わりか?かかって来い!!」

スバル・ナガシマ
「なら、いかせてもらいます!!」

スバルはザビーに向かってマッハキャリバーを走らせ、右拳を放つ。ザビーも拳を突き出して対抗し受け止め、お互い力と力の押し合いになる。

ザビー
「なかなかやるな、だが……直撃ブラボー拳!!」

掛け声と共にザビーは空いていた腕でのストレートパンチをスバルに当てる。直撃を食らったスバルはそのまま吹き飛ばされるが、マッハキャリバーがウィングロードを発生させダメージを和らげる。

ティアナ・ランスター
「クロスファイアー……シュート！！」

ザビーの攻撃の後を見計らってティアナは自分の周り無数の魔力弾を生成し、ザビーに向かって一斉に放つ。ザビーは『両断ブラボーチョップ』で総て自分に向かってきたオレンジ色の魔力弾を手刀でなぎ払った。ティアナは魔法はおろか武器も使わず、素手で魔力弾を薙ぎ払ったザビーに驚く。

ティアナ・ランスター
「なんてヤツなの！？魔力も使わずにバリアジャケットと素手での格闘だけで戦って…」

ザビー
「これが俺が鍛え上げた肉体だ……
といっても、俺のこの性格はアイツ（ディファースト）が出会ったあるザビーの人物を元にした召喚されたライダーだがな」

ティアナ・ランスター
「知るかぁ！！いきなりそんなこと言われても知らないわよ！！いいかげんにしないとただじゃすまないよ！！」

ザビー
「まあそんなに怒るな。倒せるモノも倒せなくなるなるぞ。カルシウムでも取れ」

ティアナ・ランスター
「お前が怒らせてんだろうがあぁぁぁぁぁぁ！！！！！！」

もはや絶叫に近い声でザビーのボケ（？）にツッコむティアナは、魔法陣を展開させる。するとザビーの周りに数人のティアナ――正確には魔力で作り出したティアナの幻影が出現する。ザビーは銃撃が一斉に来ると予想し、ライダーブレスのザビーゼクターを操作してプットオンを発動、身軽なライダーフォームから分厚いアーマーを纏った防御型のマスクドフォームにフォームチェンジした。

――ドドドドドドドドッ！！！――

四方八方から放たれる銃撃の嵐がザビーに炸裂する。アーマーを纏っているとはいえ無数の銃撃には耐え切れないザビーは苦し紛れに防御体勢を取るが、すぐに違和感を覚えた。

ザビー

「（ん？まてよ、こんなにも銃弾を浴びているのに俺が一行に倒れない…？まさか…）……キャストオフ！！」

【ｃａｓｔ　ｏｆｆ】

ザビーの纏っていたアーマーが弾け飛び、ライダーフォームに戻る。その際弾け飛んだアーマーはティアナの分身達に直撃して消えてしまうが本物はプロテクションを張って防いだ。

ザビー
「そこか！！はっ！！」

ザビーはザビーゼクターから伸びたゼクターニードルから小型のニードルを連射してプロテクションを打ち破る。そして駆けつけたスバルをティアナごと巻き込んでの巴投げで遠くまで投げ飛ばす。ザビーはスバルとティアナ2人が飛んだ方向見て呟く。

ザビー
「…ミッション、コンプリート」

ザビーは呟いた後、役目を終えたように姿を消した。

～～～～～～～～～～

フリードリヒ
「グギャアアア！！」

サバイブドラグランザー
「ウオオラアァァァァァアアア！！！」

キャロとエリオが乗っているフリードリヒとディファーストが乗ったサバイブドラグランザーのお互いドラゴン同士の空中戦を繰り広げていた。ディファーストはサバイブドラグランザーからエリオ達

にガンモードからビーム弾を放とうとするが、ドラグランザーに比べ攻撃面と防御面に劣るが機動力は勝るフリードにすべて避けられ、逆に2人の攻撃はディファーストに当たっていた。

ディファースト
「ふう～ん、あいつらいいコンビじゃねえか……」

サバイブドラグランザー
「何相手褒めてるんですか!?こっちはピンチなんですよ!?」

ディファースト
「心配するな、とある人物が言っていた、俺が望みさえすれば、運命は絶えず俺に味方する」

サバイブドラグランザー
「何処の天の道だ!!本当に大丈夫だろうな!?」

ディファースト
「ああ、ほら……
……運命が俺に味方したぜ」

――ドゴォンッ!!――

先程ザビーの巴投げによって投げ飛ばされたスバルとティアナの2人がフリードリヒの横腹に思いっきりぶつかる音が響いた。フリードリヒ達は怯んでしまい地面に着地、それを見たディファーストはフィニッシュとして黄色のカードをバックルに装填する。

【ＦＩＮＡＬ－ＡＴＴＡＣＫ－ＲＩＤＥ！ＲＹＵ・ＲＹＵ・ＲＹＵ・ＲＹＵＫＩ！！】

ディファースト
「いくぜ……えっと確か、『ディファーストファイアーストーム』！！」

電子音が鳴り、サバイブドラグランザーがバイクモードに変化して地面を走りながら口から無数の火炎弾を放つ『ディファーストファイアーストーム』が発動させ、スバル、ティアナ、エリオ、キャロ、フリードリヒは爆風に巻き込まれながら遠くへ吹き飛ばされた。ディファーストはバイクモードのサバイブドラグランザーから降りるとサバイブドラグランザー――もとい龍騎サバイブは消えてしまった。するとシグナムとの戦いを蹴りをつけたＤ電王・アリスフォームに変身したディファーストの分身がやって来た。

Ｄ電王・アリスフォーム
「どうだ？そちらはすんだか？」

ディファースト
「ああ。さてと…もう一人の俺を助けに行くか」

ディファーストとＤ電王・アリスフォームは最後のディファーストの所へ向かった。

chapitre3／仮面ライダーディファースト外伝～リリカルなのはの世界

～ツバサ×仮面ライダー通信～

ゼロノス
「最初に言っておく、久しぶりに『ツバサ×仮面ライダー通信』に登場だぜ」

イクサ
「始まりなさい！！それにしても今回は見たこともない電王が登場したな」

ゼロノス
「ああ、アリスフォームか……一体何なんだ？電王（りょうたろう）のイマジンでもあんな怖いフォームはなかったぞ？」

イクサ
「うむ……一体何なんだあのフォームは……」

？？？
「それについては僕が話そう」

イクサ＆ゼロノス

「「…？誰だ？」」

オズ＝ベザリウス
「やあ、『ツバサ　～砂漠の国の姫君と仮面の戦士～』、読んでくれてありがとう。こうして俺が君達読者に会う事ができたのも…抗う事が出来ない…（バラを出す）…運命。俺のハートは君だけのもn…」

ゼロノス
「ゼロノスキィーーーック！！」

どごおおぉぉん！！

オズ＝ベザリウス
「いったぁ！！何すんだよギルバード！！」

ゼロノス
「誰がギルバードだ！！つか、ギルバートって誰だ！！」

オズ＝ベザリウス
「え？ゼロノスなのに声違う……本当に？じゃあ試しに…」

猫

「にゃあ～～（何処からともなく出てくる）」

ゼロノス
「…は？何で猫なんだよ！！ふざけんじゃねえぇえ！！」

猫
「にゃあああああ！！（ゼロノスによって遠くに投げ飛ばされた）」

イクサ
「そうだ、こいつはギルバードという人ではない。侑斗だ」

ゼロノス
「性格同じだけども違うわぁ！！話は戻って、お前誰だ？」

オズ＝ベザリウス
「俺？俺はオズ＝ベラリウス。読者は知ってる人もいるけど俺は『電王の世界』の仮面ライダー電王なんだ」

ゼロノス
「電王……？じゃあモモタロス達も…」

オズ＝ベザリウス
「うん、こっちの世界では俺の契約イマジン。俺は君達でいう野上

良太郎っていう別の世界の電王と同じ立場って事になるんだ」

イクサ
「で、オズ君。その君が今回出たフォームとどう関係するんだ？教えなさい！！」

オズ＝ベザリウス
「いいよ。え～っと……アリスフォームは俺とアリス……あ！アリスってのは俺の契約イマジンでさ、めちゃくちゃ可愛いんだよ。そりゃもう照れたところが何ともいえないよ～特に俺と抱き合ってのk……」

イクサ
「やめなさあぁぁぁぁぁぁいぃ！！！色気絡みの話はやめなさあぁぁい！！！！（イクサナックルをつけてオズの頭をグリグリする）」

オズ＝ベザリウス
「いたたたたたたたた！！！！！」

ゼロノス
「……勝手にやってろバーカ…
その間紹介だ」

電王・アリスフォーム

電王が「最悪最強のイマジン」と異名を持つビーラビットイマジン（アリス）の力を纏った電王のイレギュラー形態。電仮面はライナーフォームやＮＥＷ電王ストライクフォームと似ている。基本カラーは黒み掛かった赤と黒。オーラアーマーは騎士と死神を合わせたような姿。姿を消したり何もない空間から鎖を出したりなどトリッキーな戦術を主に使う。武器はアリスが愛用してる巨大な大鎌（『Ｐａｎｄｏｒａ　Ｈｅａｒｔｓ』で黒ウサギ姿のアリスが使ってたヤツと思ってください）。必殺技は巨大鎌で標的を広範囲に叩き切る『ブラッティファントム』。

ゼロノス
「なるほどな、他作品とのクロスオーバーで初めてできたオリジナルフォームか。かーなーり、強そうだ」

オズ＝ベザリウス
「いたたたた……まあね、このフォームに変身するとアリスと意識が共有してる、簡単に言えばテンコ盛り（クライマックスフォーム）と同じなんだ。アリスのビーラビットイマジンとしての最強クラスの戦闘能力に加え、俺とアリスの動きで強さが変わるから危険があるけど……今は扱いに成れたけどね」

ゼロノス
「最悪最強のイマジンの能力を取り入れたってことになると俺でも苦戦しそうだな。作者もこういうトリッキーな戦い方をするヤツを使いたいって言っていたしな」

イクサ
「ちなみにコレの他にもディファーストはディケイドやディエンドも持ってないカードを持っている。新カード紹介で登場するかもしれないから楽しみにしなさい！！」

ゼロノス
「それと……次回はなのはが魔王降臨します」

オズ＝ベザリウス
「次回のツバサ×仮面ライダー通信もお楽しみに～～♪」

chapitre4／仮面ライダーディファースト外伝～リリカルなのはの世界

どうも地水です。やっと外伝書き終わって更新しました！！

これで自分もやっと本編の続きをかけます！！

では、魔王（なのは）と元破壊者（ディファースト）の戦いが…始まります。

同じ頃、Dカリスは、「ワイルドサイクロン」を咄嗟にプロテクションを張ったなのは達の砲撃に追い詰められていた。

高町なのは
「エクセリオン、バスタァーーーーッ！！！」

Dワイルドカリス
「うわわあああああああああ！！！」

Dカリスはなのはが放った『エクセリオンバスター』が直撃してしまい、大ダメージにより元の姿に戻ってしまう。

ディファースト
「やっぱりなんてバカ魔力なんだよ！？いままでこれより凄いのは見てきたが、これは別の意味で怖いじゃねえか！！」

フェイト・T・ハラオウン
「トライデント、スマッシャーー！！」

八神はやて
「来(こ)よ、白銀(はくぎん)の風、天よりそそぐ矢羽となれ……フレースヴェルグ！！」

フェイトとはやてはディファーストに向かってディファーストに魔力の刃と無数の魔力弾を同時に放った。ディファーストは素早くカードをバックルに入れ、発動させる。

【ＡＴＴＡＣＫ－ＲＩＤＥ！ＩＭＡＧＩＮＥＢＲＥＡＫＥＲ！！】

ディファースト
「当麻、お前の力を借りる……幻想殺しの力をな」

――ババババン！！！――

魔力弾が炸裂し、爆発や爆風を起こす。だが魔力や霊力などの異能の力を打ち壊す「幻想殺し（イマジンブレイカー）」の力で肝心のディファーストはダメージを与えられず無傷の姿で煙の中から現れ、それを見てフェイトとはやては驚いた。

【ＦＩＮＡＬ－ＡＴＴＡＣＫ－ＲＩＤＥ！ＤＨＩ・ＤＨＩ・ＤＨＩ・ＤＨＩＦＩＲＳＴ！！】

ディファースト
「ディメンションアンデミデット……ゼアァァァァア！！！」

ディファーストは歴代のライダークレストの３Ｄを加速しながら通り抜けフェイトとはやてに向かう。２人は防御魔法を展開させるが、イマジンブレイカーの効力がまだ続いているため防御魔法を貫通し２人に『ディメンションアンデミデット』を直撃させる。

フェイト＆はやて
「「キャアアァァァァァァアアア！！！」」

２人はイマジンブレイカーの効力によってバリアジャケットが破壊され、元の姿に戻ってしまう。その後なのはが駆けつけ、二人を安否を確かめる。その間ディファーストは上手く着地して手を二回払った。

高町なのは
「フェイトちゃん！はやてちゃん！！……だめ、２人とも気絶してる…」

ディファースト
「あ～……なんでクリスマスの日にこんな所で戦わなくちゃなんないんだ…」

ディファーストはなのは達には目をくれず横切った。ディファーストの去る姿を見てなのはは２人を気にしながらも今はディファーストの前に立ちふさがる。

ディファースト
「……何のようだ？」

高町なのは
「なんで、なんでフェイトちゃん達を……」

ディファースト
「ふん、お前らが勝手に襲い掛かってきただろうが。俺はただ正当防衛しただけだ」

高町なのは
「何ですって…！！」

ディファースト
翼のドライな答えになのはは怒りを覚え、レイジングハートエクセリオンを向ける。しかしディファーストは動じずにホルダーから一枚のカードを取り出しサモンドライバーにセットする。

ディファースト
「少し相手をしてやれ」

【ＫＡＭＥＮ－ＲＩＤＥ！ＳＩＮ－Ｏ！！】

サモンドライバーのトリガーを引くと三つの光が現れ、嵐を呼ぶライダー『仮面ライダーしん王』が召喚される。ちなみにこのしん王だけはディファースドライバーに装填してもサモンドライバーと同様に召喚することができる。

しん王
「オラ、参上！！」

ディファースト
「おいちびっこ、あっこにいる白い服来たお姉さん（なのは）がお前と遊びたいだってよ」

しん王
「なぬ！？本当か！？おっほほ～い、じゃいってきま～す！！お姉さ～～ん！！」

しん王はまるで猿のようになのは目掛けて走り出し、その間ディファーストはその場を後にする。だがディファーストは気付いていなかった。なのはの目が濁った沼のように澱んでいる……俗に言う『魔王モード』になっていた事に……

～～～～～～～～～

ディファーストは自分の愛機のマシンディファースダーを所へ向かっているその最中、ふとあることに気付いた。

ディファースト
「…ってまてよ、何か忘れているような……」

デルタ
「そうですよ、翔道翼改め仮面ライダーディファースト。いま貴方は私を忘れています！！」

ディファーストが振り向くと、先程ディファースダーを変化させたジェットスライガーと同型のジェットスライガーに乗ったデルタの姿があった。デルタはジェットスライガーを操作し、猛スピードでディファースダーに迫る。

ディファースト
「たく、流石にカードで戦うのも飽きるかもな……たまにはカードを素手でやるもの面白い！！」

ディファーストはそう言うと、地面を蹴ってジャンプしジェットスライガーに飛び乗る。

デルタ
「な…！！まさか飛び乗るなんて…この！！」

デルタはジェットスライガーを自動操縦にして、デルタムーバーで銃撃する。ディファーストもしがみ付きながらサモンドライバーで銃撃を防ぎ、デルタの身体を斬り付ける。

デルタ
「ぐはあ！！」

ディファースト
「もう一つだ、ほらよ！！」

ディファーストは追い討ちにサモンドライバーを振り下ろすが、デルタは姿勢を低くし斬撃を避け、ディファーストの腹に右フックを打ち込む。

ディファースト
「くぅ、オァラ！！」

ディファーストも負けじと鉄拳を放ちダメージを与える。そしてディファーストとデルタの2人はお互い強烈な一撃を当て、お互い吹き飛ばされジェットスライガーから落され地面に転がる。

デルタ
「やりますね、だけどこれで決めます……」

体勢を立て直したデルタはデルタムーバーにミッションメモリーを挿入し銃身を伸ばして口元に近づけコードを音声入力をした。

デルタ

「チェック！！」

【ＥＸＣＥＥＤ　ＣＨＡＲＧＥ】

デルタの身体を伝っているブライトカラーのフォトンストリームからエネルギーが流れ、デルタムーバーに付くと銃口から白い三角錐状の光が放たれる。ディファーストはその光にロックオンされながらもジャンプする。

ディファースト&デルタ
「「ウォォォォォォォ！！」」

そしてデルタは『ルシファーハンマー』、ディファーストは初代一号ライダーをライダーキック思わせる飛び蹴りをお互い放ってぶつかり合おうとしていた。

しん王
「いやあぁぁぁぁぁぁぁぁあああん！！！」

ディファースト&デルタ
「「！？」」

叫び声を聞いてディファーストとデルタは必殺技を中断する。その直後向かい合ってる2人の間になのはと戦っているはず（？）のしん王が剛速球のごとく飛んで来て、建物の壁に叩き込まれる。
2人がしん王が横を向くと、そこには猛獣でさえ泣いて逃げるような禍々しい上凄まじい殺気（オーラ）を放ちこちらに近づいている『魔王モード』のなのはの姿があった。

ディファースト
「!?な、何だあれ……!?」

デルタ
「あ、あれって一体……オルフェノクでもあのような殺気は出せないですけど…!?」

高町なのは
「……あはは、あははははは……あははははははは!!!」

ディファースト&デルタ
「「ゾクッ!?」」

ディファーストとデルタはまるで狂ったように笑っているなのは（なのはファンの方すいません（ｂｙ、作者））見て敵同士にも関わらず同じ『恐怖』という感情を浮かべた。なのはは濁った瞳で2人に狙いを定め、いつの間にか形成したピンク色の魔力弾に指示を出す。

高町なのは
「クロスファイア……」

ディファースト
「あ、やべ……逃げろ！！」

高町なのは
「シュート」

――ドドドドドドドドドッ！！――

高速の魔力弾がディファーストとデルタに襲い掛かる。ディファーストは直前にしん王を頭を掴み被爆から逃れる。

しん王
「お、オラを死なせる気なのか？あのお姉さん」

ディファースト
「ちびっこ…今気付いた。アレはお姉さんじゃない、時空管理局という所に所属する……
『管理局の白い悪魔』だ」

高町なのは
「…シュート」

――ドゴォン！！――

ディファーストとしん王の左に魔力弾が被爆した。２人が後ろを振り向くと上空で浮いているなのはが濁った瞳で自分達を睨んでいる姿があった。

ディファースト&しん王
「「……」」

しん王を肩にしがみ付いたままにしたディファーストは回れ右してサッサと逃げ出すように地面を蹴って走り出した。なのははディファーストを空から追いかけながら魔力弾での砲撃を地上にいるディファースト（＋しん王）に向かって放ち続ける。

ディファースト
「ちっ、底なしの魔力かあいつは！？この！！」

サモンドライバーを手にしソードモードにして魔力弾を撃ち返したり、ガンモードで核を打ち抜いたり臨機応変に変形させながら、しん王はブタの鼻を思わせるモノを顔に付け、そこから鼻水状の粘着液を魔力弾に当てるなどして防いでいた。しびれを切らしたなのはは、レイジングハートエクセリオンを２人に向けた。

なのは
「エクセリオン……」

ディファースト
「!?またアレを放つつもりか……くそ!!」

【ＡＴＴＡＣＫＲＩＤＥ!ＩＮＶＩＳＩＢＬＥ!!】

ディファーストは姿を消して戦線離脱を行う『ディファーストインビジブル』を発動させ、なのはから逃げようと姿を消した。なのははディファーストが姿を消したのを驚くが、すぐに平常になるとディファーストを探し始める。

高町なのは
「ははは……今度こそ……あはははは……」

～～～～～～～～～～

デルタ
「ごほっ!ごほっ!!あんなの聞いてませんよ……」

何とか砲撃から抜け出したデルタは、戦線離脱をして改めてディファーストを倒すためジェットスライガーに乗り込み発進させようとした。

デルタ
「何なんですか、ディケイドと聞かされていたのに相手はディファーストと名乗っているわ、邪魔は入るわ……これではディファーストを倒せないじゃないですか…」

デルタは文句を言っているその時、辺りから何かの物音がする。すると近くにあったマンホールが『何か』の力によってぶち抜かれた。

デルタ
「!?誰ですか…!?」

ディファースト
「俺だ」

しん王
「オラだ」

マンホールの穴からディファーストとしん王が頭を出して登場した。
デルタは思いっきりコケてしまいジェットスライガーに頭をぶつけた。

デルタ
「いたたたた……いや、誰ですか!?って貴方達ですか。もし知らない人だったらどうするんですか?」

しん王
「その時はその時だぞ……というか、オラ達をソレに乗せろ」

デルタ
「は？いやですよ、私達は敵同士なのですよ？どうせ不意打ちでもすのでしょう。それに貴方達はコレ（ジェットスライガー）と同じモノと持ってるはずですが？」

ディファースト
「それがする暇がない……ともかく乗せろ！！あの白い悪魔が来る！！」

デルタ
「白い悪魔？はっ、笑わせないでください。魔界を統べる七人の大いなる悪魔が僕と貴方を地獄へ連れて来たのですか？アムロ・レイが乗ってるファーストタイプガンダムで……」

――ドゴォォン！！――

ジェットスライガーのすぐ真横に魔力弾が着弾した。デルタは『ギギギ』と錆びついたような音を鳴らせながら首を振り向くと、魔王（なのは）の姿があった。

高町なのは
「……」

ディファースト&デルタ&しん王
「「「……」」」

数分の静寂の中、魔王(なのは)の口が開いた。

高町なのは
「…少し、頭冷やそうか」

ディファースト&デルタ&しん王
「「「逃げろぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ!!!!!」」」

なのはの『ドス』黒い魔王笑顔を見て絶叫を大空に上げた三人はすぐさまジェットスライガーに飛び乗り発進させた。ディファーストとしん王は超高速から振り落とされないように必死にしがみ付き、デルタは最大質力の速さでジェットスライガーを走らせなのはから逃げ切ろうと踏ん張る。

高町なのは
「あははは〜〜?何で逃げるの〜〜??殺(はなし)したいだけなのに〜〜」

ディファースト
「絶対違うだろぉぉぉぉ!!何が話すだ、字『殺す』になってたぞぉぉぉ!!!絶対殺意むき出しじゃねえかァァァァァア!!!」

しん王

「魔王ぞぉおお！！白い大魔王ぞぉぉおお！！管理局の白い大魔王だぞぉぉおお！！」

デルタ
「あの化け物の事をこれっぽっちも知らない僕が言うのも何ですが、キャラぶっ壊れじゃないですかぁぁぁ！！」

ディファースト
「同意だぁぁあ！！もはや声だけ同じの別の代表的なヤンデレキャラだろうがぁぁあ！！」

もはや悲鳴に近い声で三人はそれぞれなのはにツッコみ、鬼神の殺気全開の魔王から命辛々逃れようとするが、なのはが放った『ディバインバスター』の魔力の集束砲がジェットスライガーの後部を貫き爆散した。幸い、ディファーストが「ＦＯＲＭ－ＲＩＤＥ　ＦＡＩＺ－ＡＸＥＬ」のカードによって『仮面ライダーファイズ・アクセルフォーム』に変身してしん王と敵であるはずのデルタを掴んで超高速を使って爆風から逃れる。

【Ｒｅｆｏｒｍａｔｉｏｎ】

三人とも地面に転がり込んだと同時にリストウォッチ型のツール「ファイズアクセル」からディファースドライバーとは違う電子音が鳴り響き、アクセルフォームの活動時間を越えたＤファイズは元の姿に戻った。

しん王
「はぁ、はぁ……死ぬかと思ったかぞ」

ディファースト
「この……あの『大魔王』本当に殺す気のようだな」

デルタ
「はぁ、大魔神閣下ですかあの娘？蝋人形にされて、その後砕くつもりなのですか？もう驚くのも疲れましたよ……それよりディファースト、なんで僕を助けたのですか？僕と貴方は敵同士ですよ？」

ディファースト
「別に知るか、いくら俺でも流石にあの娘には敵うかどうか……こうなれば敵も味方もあるか。呉越同舟の勢いでやるしかねえよ」

しん王
「こうなったらヤケだぞ！！」

デルタ
「はあ……やっぱり破壊者の考えることは分かりませんね。仕方ありません……一時休戦になりそうですね。さて、鳴滝さんにどう言い訳をいえば考えないと…」

高町なのは
「あははは、あははははは！！
……ねえ、いいかげん諦めて頭冷やしてよ？」

なのはがレイジングハートエクセリオンをディファースト、しん王、デルタの三人に向けた。だがディファーストとデルタは先程のように逃げようとしないで、なのはに目を向ける。

ディファースト
「おい…仮面ライダーデルタ、何故俺がこんなに強いか知ってるか？」

デルタ
「はっ……？な、何ですかいきなり？」

ディファースト
「俺はあるヤツと再会したいから旅をしてきた。たとえどんなヤツが敵でも、どんなに敵に廻しても俺は死ねない……俺はそいつと再会すると決めたから。やると決めた事はやる、それだけだ…俺は強くよくなる。これからもな」

デルタ
「ははは、……やっぱり、破壊者の考えてる事は分かりません。だけど、面白そうですね……そんな強さも」

デルタとディファーストはお互いの顔を見合わせ頷きあう。するとディファーストのホルダーから一枚のカードが飛び出す。ディファーストがそのカードを手に収め見ると、それは黄金に輝くブタの顔が描かれた見たこともないカードだった。

デルタ
「!?何ですか、これは……」

ディファースト
「多分、あの大魔王(なのは)を何とかする逆転の切り札……だが、見た所FR(ファイナルフォームライド)のカードだけど誰の……」

いくらライダーを知っているディファーストでいえもブタに関係するライダーに見覚えがなかった。ディファーストとデルタの2人が困り始めようとする時、忘れ去られていたしん王が話に入り込んできた。

しん王
「こら～、オラを忘れて話を進めるんじゃないぞ!!」

ディファースト&デルタ
「「……」」

しん王
「?どうしたんだぞ?2人ともオラを見て……そんなに見られるといや～ん」

ディファースト&デルタ
「「ま、まさか…」」

何かを予想したディファーストはバックルを装填する。

【ＦＩＮＡＬ－ＦＯＲＭ－ＲＩＤＥ！ＳＩ・ＳＩ・ＳＩ・ＳＩＮ－Ｏ！！】

しん王
「お？何だ……っていや～ん」

電子音と共にしん王は右肩にカンタムロボ、左肩にアクション仮面、身長がディファーストやデルタと同じ大きさに伸びた『シンオウクライマックス』に超絶変形した。

シンオウクライマックス
「おおお！？オラが大きくなったぞ！！」

ディファースト
「電王のクライマックスフォームか」

デルタ
「なるほど、こういうことでしたのですか…」

高町なのは
「……貴方達、いいかげんにしなさい……」

怒りや殺気を含んだ『負』のオーラを全開のなのはが、レイジングハートの先に魔力の塊を集めでょファースト達に向けて今でも砲撃を放とうとする。ディファーストは新しいカードをバックルにセッ

トした。

【ＦＩＮＡＬ－ＡＴＴＡＣＫ－ＲＩＤＥ！ＳＩ・ＳＩ・ＳＩ・ＳＩＮ－Ｏ！！】

電子音と共に、シンオウクライマックスとディファーストの右腕にカンタムロボの腕が装備される。

ディファースト
「こうなったら……ヤケだ！！」

シンオウクライマックス
「おほほ～～い！！あ、言っとくけどこの技は叫ぶんだゾ？」

高町なのは
「全力……全開……！！
ＡＣＳドライバー！！」

ディファースト・シンオウクライマックス
「「カンタムパーンチッ！！」」

なのはがディファースト達に向かっての猛突進とディファーストとシンオウクライマックスがなのはに向かって放った２つの右腕が火花の散らしながら力と力がぶつかり合い始める。

だが次第になのはの方が押し始め、２人はアクション仮面のものに

変化した右腕での構えを取った。

ディファースト・シンオウクライマックス
「「アクション…ビーム！！」」

高町なのは
「きゃああっ！！」

アクション仮面の必殺ビームが2人の腕から放たれ、なのはにダメージを与える。さらになのはがビームをくらったため一瞬の隙ができてしまい、2つのカンタムの右腕がなのはの両腕にしがみ付きそのまま空中で静止した。

高町なのは
「な、何……離して、離して！！」

ディファースト
「くっ、相手があんな状態で気分が進まんが……行くぞ。デルタ、今度はお前も一緒に参加だ」

デルタ
「ふっ、このまま出番がないと思いましたよ……チェック！！」

【ＥＸＣＥＥＤ　ＣＨＡＲＧＥ】

デルタは銃口から再びディファーストをロックオンした白い三角錐状の光を、なのはの後ろ姿に当てた。ディファーストも二枚のカードを取り出し、一枚ずつディファースドライバーに装填した。

【ＫＡＭＥＮ－ＲＩＤＥ！ＦＡＩＺ！！】

【ＦＩＮＡＬ－ＡＴＴＡＣＫ－ＲＩＤＥ！ＦＡ・ＦＡ・ＦＡ・ＦＡＩＺ！！】

ディファーストは瞬時にＤファイズに変身すると、すぐさま右脚の「ファイズポインター」からデルタの放った白い三角錐の光と似たような赤い円錐の光をなのはに向けて放ちロックオンした。

Ｄファイズ
「さてと……これからどうするか。どうやってあんな高さからジャンプして尚蹴りを当てれば…」

シンオウクライマックス
「おわわわわわ！！！」

Ｄファイズ＆デルタ
「「！？」」

Ｄファイズとデルタが何事かと振り向くと、シンオウクライマックスが変化をしはじめた。急にしん王の背が縮み、ブタ侍……ぶりぶ

りざえもんと電王のプラットフォームと酷似したしん王の姿があった。

しん王
「うお？何でだゾ？」

デルタ
「……もう驚くのも疲れましたよ」

ぶりぶりざえもん
「！」

ぶりぶりざえもんがDファイズに向かって刀……ではなく千歳飴を差し出した。

Dファイズ
「あ？何だ？これを掴めってか……？」

Dファイズとデルタは、ふいに千歳飴を握った。するといきなり千歳飴が伸び始め、Dファイズとデルタは高速でなのはに向かい始めた。

デルタ
「わわわ！！こ、こんなのありですか！？」

Dファイズ
「ありだろうが、ないだろうが行くしかないだろ！！
クリムゾンスマッシュ！！」

デルタ
「なら……ルシファーハンマー！！」

Dファイズとデルタは槍のように体勢を立てると必殺技の名を叫びながら、なのはに『クリムゾンスマッシュ』と『ルシファーハンマー』をそれぞれなのはに叩き込んだ。

高町なのは
「にゃぐっ！！？」

しかしまだこれで終わらない。2人はなのはを光にロックオンしたまま、何処かへ大空に向かって飛んで行く……

～～～～～～～～～～

高層建物の屋上にて、最後の自分を探していたアリスフォームから通常状態のソードフォームの姿のD電王とディファーストが、気を取り戻したフェイトとはやてと鉢合わせしてしまい苦戦をしいられ追い詰められていた。

D電王・ソードフォーム
「この、こっちはあいつらとの戦いのダメージが残ってるのに……」

ディファースト
「流石に、やりすぎたか……」

フェイト・T・テスタロッサ
「これで、止め…」

八神はやて
「覚悟しときや…」

フェイトは『バルディッシュアサルト・ザンバーモード』をディファースト達に向け、強烈な一撃を放としてとした。

Dファイズ&デルタ
「「どけどけどけどけえぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ!!!」」

一同
「!?」

するとその直後、フェイトとはやてが上から降ってきた「何か」にぶつかり、そのまま地面に叩きつけられ大爆発を起こしてしまう。
2人のディファーストはいきなり起きた展開に状況がまったく掴めずに困惑した。

D電王・ソードフォーム
「!?何だ……」

2人が爆発でできたクレーターの場所に駆け寄り、クレーターの中を覗いた。そこにはまたもや気絶して延びているなのは、フェイト、はやて……互いに担ぎあっているDファイズとデルタの姿があった。

Dファイズ
「よ、よう……お前ら」

D電王・ソードフォーム
「一体何があったんだ?それに何でそいつ（デルタ）といっしょに…」

デルタ
「少し共闘しただけです……それと今回だけは見逃してあげますよ。但し次に会った時は必ず倒します…」

そういうとデルタはDファイズをディファースト達に預け、何処かへ行ってしまう。その後カードの効力が切れ、二体の分身は消えた。

ディファースト
「……はあ、俺も破壊者とか呼ばれてるけど何だかんだであんなヤツに助けられないと生き残れない弱虫か……
俺も、もっと強くならねえとな…何か大切なモノを守れるように…」

ディファーストは新たなる決意と共に、未知の世界へと導く自分の愛機のマシンディファースダーを探しにいつの間にか聖なる夜が明けた朝の空を見ながら歩き出した。

～～～～～～～～～～～～～～～

ディファースト
「うわわあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

なのは＆フェイト＆はやて
「「「待ちなさーーーーーい！！！」」」

数時間後、何故かいつの間にか復活した最悪最強三大魔神とディファースダーに乗ったディファーストの逃走劇の姿があった。

この後起きた出来事だが、なのは達が放ったいつもの三倍の『スターライトブレイカー』がチッドミルダ郊外を核爆弾を落としたような焼け野原にし、その直撃を喰らったディファースト―一翔道翼は高町なのは達と言う名の魔王と、その魔王モードの姿によってのヤンデレがトラウマになった……いや、なってしまった。

――仮面ライダーディファースト外伝～リリカルなのはの世界～完

――

chapitre4／仮面ライダーディファースト外伝～リリカルなのはの世界

～ツバサ×仮面ライダー通信～

【KAMEN－RIDE！ZERONOS！！IXA！！】

ゼロノス
「最初に言っておく、今回の『ツバサ×仮面ライダー通信』は新カード紹介だ！！」

イクサ
「とりあえず見なさい！！以上！！」

ゼロノス・イクサ
「「そして俺達の出番も終了！！次回もお楽しみに！！」」

【ATTACK－RIDE　EXCALIBUR】

セイバーの宝具でもある光の究極の斬撃を放つ聖剣『約束された勝利の剣（エクスカリバー）』を召喚する。クウガの世界の時に復活したクウガのカードと共にディケイドの持っていたブランクのカードが変化したまさに翼と士朗、セイバーの絆でできた一枚。
ディファーストは魔力の代わりにクラインの壺からの無尽蔵の次元エネルギーを使って発動させる。何故か召喚時のエクスカリバーの

刀身に『全て遠き幻想卿（アヴァロン）』が納めてる。

【ＡＴＴＡＣＫ－ＲＩＤＥ　ＶＡＭＰＩＲＥ】

巨大なヴァンパイアの妖気を纏い、戦闘能力を上昇と治癒能力を与えるカード。「キバ／ロザリオとバンパイアの世界」で月音と通じ合った時に手にいれた。余談だが裏萌香のオーラと似ているため、たまに萌香を知ってる者が間違えることもある。

【ＡＴＴＡＣＫ－ＲＩＤＥ　ＲＥＫＫＡ　ＨＡＣＴＩＲＹＵ】

翼が巡った「龍騎／烈火の炎の世界」で出会った龍騎／花菱烈火の炎術士の能力『八竜』を封じ込めたカード。何故魔導具も火影忍軍も失われた今に八竜が復活したのかはいまだ不明。

【ＡＴＴＡＣＫ－ＲＩＤＥ　ＫＵＲＯＧＡＮＥ】

「ファイズ／アスラクラインの世界」のファイズ／夏目智治・水無神操緒・高月奏の模造品の悪魔・機巧魔神と使い魔の相対する力を手にした『アスラクライン』の黒鐵・改を召喚するカード。重力制御と空間切断に使い魔（ドウター）の炎の力の三つのを力を有する。主にギガンデス化したイマジンやサバトなどの巨大戦に活躍する。

【ＡＴＴＡＣＫ－ＲＩＤＥ　ＵＮＬＩＭＩＴＥＤ　ＢＬＡＤＥ　ＷＯＲＫＳ】

【ＡＴＴＡＣＫ－ＲＩＤＥ　ＳＵＮＬＩＧＨＴ　ＨＥＡＲＴＳ】

【ＡＴＴＡＣＫ－ＲＩＤＥ　ＴＥＳＳＡＩＧＡ】

以後上記のカードはまだ詳細は不明。

第六話／眠る英雄と響く音色（前書き）

どうも地水です。今回の話は翼が意外なモノでの特技を披露します。

それと今回は後書コーナーの代わりに、今後の話に関わるリスくんさんとのコラボのプロローグストーリーを乗せます。リスさんこういう形でコラボ始まります！！

第六話／眠る英雄と響く音色

地獄兄弟ことキックホッパー・パンチホッパー、操られていたアルティメットクウガに変身した士朗と黒騎士…もといセイバーオルタとの戦いが終わり、玖楼国の城に戻ってきた翼はセイバーと士朗を一人で担ぎ戻ってきてそして丸一日経過しようとしていた……

～～～～～～～～～～

衛宮　士朗
「はあ、はあ、はあ……」

黒く澱んだ曇り空に日の光も届かぬ山奥の中、傷を負った容姿の衛宮士朗はただひたすらに走っていた……

衛宮　士朗
「くそ……何なんだココは……俺は、何をしているんだ」

士朗は森から抜け出すと、白い雪が降り積もって出来た一面の銀世界の場所に抜け出した。

衛宮　士朗
「ここは……！？」

士朗は銀世界の真上で見つけた人影に驚く。それは金色のラインが走った黒い身体、黒い生体装甲、四本角と闇を思わせるような黒い瞳の姿を持った士朗と同じ超古代戦士の仮面ライダー『クウガ・アルティメットフォーム』だった。

クウガ・アルティメットフォーム
「……」

衛宮　士朗
「なんで、俺と同じクウガがここに…？」

クウガ・アルティメットフォーム
「……ガガ……ガアアアアアアアア！！！」

野獣の如く吼えながらアルティメットクウガは士朗に向かって走り出し、士朗の殴りつけようとする。
拳が来る寸前に士朗は地面に転がって避け、両手で腹部を覆いアークルを出す。

衛宮　士朗
「…変身ッ！！」

士朗は燃え盛る炎の戦士『クウガ・マイティフォーム』に変身し、アルティメットクウガと対峙し始める。
だが通常フォームであるマイティフォームと、歴戦の最強フォームの中で最も強い部類に入るアルティメットフォームとでは勝負が明らかに、そして自分も変身したことがある士朗も分かっていた。

クウガ・アルティメットフォーム
「グガァァッ！！」

クウガ（士朗）
「グハ…アァ……！！」

士朗が変身したクウガはアルティメットクウガに頭を掴まれ殴り飛ばされた。地面に叩き付けられたクウガの身体から血が噴き出し、白い雪の大地を赤黒く染める。

クウガ（士朗）
「ア、アア……」

クウガ・アルティメットフォーム
「……」

アルティメットクウガはクウガ（士朗）の元へ駆けより、クウガの腹を思いっきり踏み潰す。

クウガ（士朗）
「グアアアアアアアアアッ！！！」

クウガ・アルティメットフォーム
「クク…クハハハハ…アッハハハハハハ！！」

クウガの激痛に苦しみながら殺されようとする様子を見て喜ぶようにをアルティメットクウガは笑い狂う。そしてアルティメットクウガはクウガを蹴飛ばして士朗を変身を解除させると、『投影能力』によって漆黒の剣――それは士朗が愛している少女…セイバー、彼女の分身でもある名剣・エクスカリバーと酷似した剣を取り出し、それを使って士朗を斬ろうとする。

衛宮　士朗
（愛する者に死ね……か。何て皮肉か……俺は……もう……すまん……セイバー）

士朗は死を覚悟して目を瞑った。アルティメットクウガは士朗をあざけ笑うように狂気の声を上げて禍々しさを発する剣を振り下ろそうとする……

――ガキィィンッ！！――

衛宮　士朗
「……！？」

金属がぶつかりあった音が銀世界に響いた。士朗は自らの目を見開くとアルティメットクウガの振り下ろした黒い剣が、漆黒の身体、純白の鎧に赤い瞳…さらに頭部に自分が知っているディケイドと似たライドプレートと同じ物が二対の翼を表わしている頭部の姿をした見たこともないライダーの右腕に受け止められている姿が目に写った。

クウガ・アルティメットフォーム
「グ、グガッ！？」

？？？
「……」

白いライダーは繰り出したパンチでアルティメットクウガを吹き飛ばした後、右腰のホルダーからカードを取り出すと、腰のベルトの

バックルに装填した。

【ＡＴＴＡＣＫ－ＲＩＤＥ！ＥＸＣＡＬＩＢＵＲ！！】

クウガ・アルティメットフォーム
「グガ……グガアァァァアア！！」

アルティメットクウガは剣を振り回して、謎のライダーに迫っていく。だが白いライダーはベルトから放たれた黄金色の眩い光に包まれた『何か』を掴むと、瞬時にアルティメットクウガに『斬りつけた』。

クウガ・アルティメットフォーム
「ガアァァ……ガアァァァアアッ！！！」

自ら作り出した剣をすべり落した後、アルティメットクウガの身体が粒子化し始め、やがて全て消えてしまった。士朗は突然の急な展開に呆然とするしかなかった。

衛宮　士朗
「……倒した……？クウガを……究極の闇の姿のクウガを……」

？？？

「……」

白いライダーは自分が持っている先程アルティメットクウガを斬りつけたモノ……それはアルティメットクウガによって作られた黒いエクスカリバーではなく、セイバーが持っている本物と同じ黄金の名剣エクスカリバーを何処からともなく取り出した鞘『全て遠き幻想卿（アヴァロン）』に入れて収めると士朗に向かって放り投げる。士朗は初対面の人物がエクスカリバーを持っていた事を驚愕しながらも受け取った。

衛宮　士朗
「これって……おい、なんでお前がこれを持ってるんだ…いやそれより、アンタは一体…」

？？？
「……」

士朗の姿を無言で見つめると、白いライダーは背を向けて歩き出す。士朗は追いかけようとするが急に猛吹雪が吹き始め、士朗の周りの視界を奪って往きやがて全て真っ白に染まった。

～～～～～～～～～～

玖楼国の城内の一室にて、そこに運び込まれベットに寝ている士朗とセイバーの姿があった。

衛宮　士朗
「う、うぅ～～ん……待て……待てよ翼……翼ッ！！」

士朗は自分の掛かっている毛布を蹴飛ばし、ガバッと起き上がる。

衛宮　士朗
「…夢、か……それにしてもなんて夢だ。同じクウガに襲われて殺されかかるなんて…」

士朗はそう呟き、ベットに伏せる。どうやら先程の雪景色での出来事は士朗が見た夢だったようだ。だが、先日まで究極の闇と異名のアルティメットクウガとなり、仲間でありある事件によりもう再会するのも難しいだろうと思った翼と最悪な形で再会をし、そして死闘を繰り広げて自分が死ぬ以上の悲劇になりえなかった事も知らずに……

衛宮　士朗
「……って、ん？ココは何処だ？」

セイバー
「う、うぅぅ～～ん……あれ？士朗、おはようございます。ここは一体……」

するとセイバーも目を覚めして、ベットから降りた。セイバーは士

朗に近くに寄って問い始める。

セイバー
「士朗、ここは何処なんですか?見たところ士朗の家でもなさそうですし……」

衛宮　士朗
「ああ、俺も今調べる所なんだ。少なくとも俺達のいた世界じゃないな……というか俺達は一体何をしてたんだ……?」

その時士朗たちがいる部屋の窓の外から誰かが飛び込んでくる。それはファンガイアを統べる王の証の『キバの鎧』を纏い、黄金の瞳を持ったコウモリを思わせる吸血鬼（ヴァンパイア）ライダー『仮面ライダーキバ』だった。キバが出てきた事に2人は驚くが、この後もっと2人を驚かす事があった。

キバ
「あ、士朗さんにセイバーさん!!よかった、目を覚ましたのですね!!」

衛宮　士朗
「ああ、って……え!?」

士朗とセイバーは驚いた、何故なら、初対面でまだ名前も名乗ってないのにも関わらずキバが自分達の名前を知っていたのだからだ。
セイバーは警戒して戦闘態勢に入ろうとする。

キバ
「あ、安心してください。僕は貴方達に敵意はありませんよ。僕は貴方達を護るために呼ばれたボディーガードです」

衛宮　士朗
「……？どういう意味だ？ボディーガード…？」

セイバー
「護るって、何からですか？それにココは何処なんですか！？というか、貴方は一体何者なんですか！？」

2人の質問攻めに困り果てるキバは、2人を落ち着かせて話し始める。

キバ
「まずはココは貴方達の出身世界『クウガの世界』じゃなくて、別次元にある『玖楼国』と呼ばれる周りが砂漠に覆われた国なんです」

衛宮　士朗
「クロウ……国？」

キバ
「はい、玖珠観光の「玖」に春に咲く「桜」で『玖楼国』って漢字で書きます」

セイバー

「だけど、何で私達がこの別の世界に……」

キバ
「え……？もしかして、襲った事に覚えてないのですか？」

衛宮　士朗
「襲っただと…！？どういう意味だ……」

どうやら2人は翼を襲った記憶がないらしい。一端黙り込んだキバにセイバーが質問をした。

セイバー
「どういう意味なのですか、私達が襲ったって……」

キバ
「仕方がありません……貴方達が知りたいのなら、教えましょう。貴方達2人は何者かに操られ、その者の放った刺客たちと共にこの世界を……そして翔道翼を消そうとしていたのです」

～～～～～～～～～～

同時刻、玖楼国にある庭園にマシンディファースダーから黒いケー

スを出し、手に持っている翼の姿があった。

翔道　翼
「さぁあ～て、こいつらを動かすか…」

翼はケースを地面に置き、開く。ケースの中には手前に鬼の顔をした音叉の変身音叉『音角』（変身機能はない模造品）とその奥に銀色のＣＤのような円盤が九枚、非透明で先程の円盤と似たような石版が三枚、合計十二枚が閉まっていた。翼はその中から音叉と銀色のＣＤを二枚、非透明の石版をケースから取り出す。

翔道　翼
「アカネタカにアサギワシ、あとはこのケシズミカラスか…」

サクラ
「あれ、何してるんですか翼くん」

そこへサクラが庭に入り、翼の所へ歩み寄ってきた。サクラは翼が持っている円盤に気付くと不思議そうに見る。

翔道　翼
「サクラか。おはよう…」

サクラ
「あ、おはようございます。あのそれって」

サクラは翼が持っている円盤を指差す。翼はそれに気付くと、楽しそうな笑顔を浮かべてサクラに向ける。

翔道　翼
「これか？まあ見てな。面白い事を始めるから」

――キィィィイン――

翼は音角を円盤を持っている手に軽く打ちつける。音角は周りの空気を清らかにするような音を響かせ、翼は音角を円盤三枚にかざすと円盤が銀色からそれぞれ茜色、浅葱色、黒と変わり、さらに鳥のような姿…茜鷹（アカネタカ）、浅葱鷲（アサギワシ）、消炭鴉（ケシズミカラス）に変形し、自分の翼をばたつかせサクラや翼の頭上に飛び始めた。

――ピィィーーー！！――

――ピュイィッ！！――

――カアァーッ！！――

サクラ
「えっ！！これって…」

翔道　翼
「ディスクアニマルっていって、簡単にいや式紙が進化したヤツだ。驚いたか？」

サクラ
「うん。でも、この子達可愛い」

翔道　翼
「あぁ、それにこいつらも久しぶりに出たから嬉しいのだろうな」

すると飛び回っていたアカネタカ達がサクラの肩や頭に留まり、まるで懐いたサクラに擦り寄ってくる。

サクラ
「きゃあっ！！くすぐったいって」

翔道　翼
「久しぶりに人間に会ったのか嬉しいのかお前ら？」

――ピイィィンッ！！――

翔道　翼
「まいいや、他のヤツらも起動させるか」

そういうと翼は指で弾きまた音角を鳴らし、今度はケースの方の起動前のディスクアニマル達に音角の清めの音を浴びせる。ディスクアニマル達は色を帯びて動き始めた。

――ガゥ！ガゥガゥッ！！――

――ウフォッ！ウフォッ！！――

――ギャッギャァ！！――

瑠璃狼（ルリオオカミ）、鈍色蛇（ニビイロヘビ）、黄赤獅子（キアカシシ）に青磁蛙（セイジガエル）に黄金狼（コガネオオカミ）、岩紅獅子（イワベニシシ）や白練（シロネリ）大猿（オオザル）に緑大猿（リョクオオザル）と黄蘗蟹（キハダガニ）がそこ等じゅうに動き始める。緑大猿と黄蘗蟹が翼の肩に飛び乗ってくるが慣れているのか翼は構わず、再びマシンディファースダーから何かを取り出す。サクラがその何かを見るとそれはディファーストのライダーズクレストが描かれた白と黒の基準としたヴァイオリンケースで、ケースを開けるとそこには赤みを帯びた茶色をした綺麗なヴァイオリンがあった。

翔道　翼

「さぁて、この世界で最初の第一楽章と引きましょうか……」

サクラ

「…？それは…」

翔道　翼

「ああ、ヴァイオリンっていう楽器で、友達から貰った。ブラッティローズという名前でな……その友達というヤツが、その

友達が生涯でたった一度しか創らなかった名器だ…」

翼はそういうと弦楽器を弾く時に使う弓と共にブラッティローズをケースから取って持つと、ブラッティローズを引き始める。

――♪～～～♪～～～♪～～～♪～～～♪――

城の外や中のそこらじゅうに綺麗な音色が響き渡る。サクラやディスクアニマル達は翼の弾いたその音色をじっと聞いていた。が、サクラは翼が奏でていた音色に「何か」の悲しみを感じ取っていた。

サクラ
（…この音色…何か、悲しく感じる…）

――ピィ？――

――ピピィィ…――

――カアァ…――

何かを察した茜鷹鳥型ディスクアニマル達はサクラを心配そうに見る。サクラは他のディスクアニマル達と共に静かに翼が奏でたブラ

ッティ・ローズの音色を演奏が終わるまで聞き続けた。

――♪～ポロン♪――

翔道　翼
「おい、終わったぞ。どうだったか？演奏…下手じゃなかったか？」

サクラ
「ううん、とっても上手いですっ！！」

翔道　翼
「ふぅん、そりゃ良かったな。この曲も、その友達から『いい曲にはいい名器を使って弾け』と言ってこいつ共に俺に渡されたんだ」

サクラ
「その人って凄いですね…」

翔道　翼
「…まあな…いつかソイツの事を話すよ」

サクラ
「…似ている…」

翔道　翼
「え？」

サクラから口から唐突に出た言葉に翼は驚く。サクラは続けて話し

始めた。

サクラ
「似ているんです、小狼に…面影や、つらい事を隠している所とか…」

翔道　翼
「……」

サクラ
「…翼くん、小狼のように何か辛い事を隠しいるように見えるんです」

翔道　翼
「俺がか……辛いのを隠している……？ふっ、そんなことはないな。俺はいつでもそれなりに楽しんでいる。辛いなんてそんな……」

翼は笑顔にしてサクラに顔を向けるが、サクラは真剣な眼差しで翼を見てるため少し戸惑ってしまう。その後サクラの口が開く。

サクラ
「無理をしないで……ください。翼くんが何か隠してるは知っているんです…だけど…

…言いたくないなら言わないでもいいんです。でも笑いたくない時に……笑わないで」

翔道　翼
「！！」

その言葉を聞いた翼は驚愕を顔に浮かべ何も言えなくなる。サクラはその後我に帰った。

サクラ
「あ…！！ご、ごめんなさい何か変なこと言っちゃって…」

――ウォンウォン！！ウォンウォンッ！！――

――ギッギィ！！ギッギィ！！――

翼たちの周りで静かに黙っていたディスクアニマル達が突然一斉に騒ぎ始める。

サクラ
「みんな、どうしたの…」

翔道　翼
「…何か感じ取ったようだな……」

すると翼達の目の前に銀色のオーロラが現れ、そこから下半身が昆

虫の腹部に似た紡錘形のドレスのような姿をした怪人――『Wの世界』で人を怪人化させるガイアメモリを人々に供給している園崎家、その家族の一人『タブー・ドーパンド』が、部下の『マスカレイド・ドーパンド』と共に出現した。

翔道　翼
「……ドーパンドか。しかも、ボスはガイアドライバーを付けてる幹部か…」

地球の記憶を封じ込めたガイアメモリはドーパンドに変化させる強力な力と共に有害なエネルギー使用者を身体に流し理性を失わせたり残忍な心をしてしまう云わば「禁断の果実」だが、その有害なエネルギーをカットして理性を失わずにより強大な力を引き出す『ガイアドライバー』がある。
そしてそのガイアドライバーを所有しているのは、ガイアメモリを2つ同時に駆使してドーパンドと戦う仮面ライダーダブルと、このタブー・ドーパンドを含むガイアメモリを流通させている『ミュージアム』の幹部達だけだった。

タブー・ドーパンド
「あら、貴方意外と詳しいのね。もしかして貴方、仮面ライダーなの？」

翔道　翼
「……だったら、どうするんだ？」

タブー・ドーパンド

「決まっているわよ、邪魔する者は抹殺するわ。
それに仮面ライダーはね、私がこの世で一番嫌いな存在なのよ！！」

突然怒りを露にしてタブー・ドーパンドは、翼の上から赤い光弾を無数に放つ。翼はディスクアニマル達に指示を出して光弾を弾き飛ばさせると、いつの間にかつけたディファースドライバーにカードを装填した。

翔道　翼
「変身！！」

【ＫＡＭＥＮ－ＲＩＤＥ！ＤＨＩＦＩＲＳＴ！！】

電子音と共に翼の周りに現れた羽の粒子と十体の影が重なり、翼はディファーストへ変身する。ディファーストはホルダーから二枚のカードを取り出し、サモンドライバーに装填した。

【ＫＡＭＥＮ－ＲＩＤＥ！ＺＥＲＯＮＯＳ！！ＩＸＡ！！】

ディファースト
「サクラを守っておけ」

ソードモードのサモンドライバーを薙ぎ払って三つの光のオーロラを発生させて、その中から牛の電仮面のつけた電王と同じ時の守護者『仮面ライダーゼロノス・アルタイルフォーム』と光り輝く太陽と青空をモチーフにした白騎士『仮面ライダーイクサ・バーストモード』を呼び出して召喚した。

ゼロノス
「最初に言っておく、俺はかーーなーーり、強いッ!!」

イクサ
「その命、神に返しなさい!!」

ディファースト
「じゃ、2人とも任せたぜ」

サクラを2人に任せるとディファーストはタブー・ドーパンドに向かって走り出し、マスカレイドドーパンド達を切り倒して行く。ゼロノスとイクサはサクラに迫ってくるマスカレイド・ドーパンドにゼロガッシャー（ボーガンモード）とイクサカリバーでの銃撃を浴びせてマスカレイド・ドーパンドを撃退する。

ディファースト
「オラァァァアッ!!まとめて焼却だぁあ!!」

【ＡＴＴＡＣＫ－ＲＩＤＥ!ＦＬＡＭＥ!!ＢＬＡＳＴ!!】

サモンドライバーの銃身の光の分身が出現し、全ての銃口から炎の属性が籠った強化弾が放たれる。マスカレイド・ドーパンドに直撃し、通常より火力が増大した大爆発を起こしマスカレイドのガイアメモリを『メモリブレイク』した。変身していた部下達は気絶して倒れ何処かへ吹き飛ばされる。

タブー・ドーパンド
「ちっ！！あいつらは使えないわね」

ディファースト
「お前、自分の部下が倒されてるのになんで余裕こいてんだ？」

タブー・ドーパンド
「ふん、あんなの会社に戻ればうじ虫のようにウジャウジャいるのよ。使えないヤツなんていらないわ」

ディファースト
「あっそ……だったら次は、お前だ……！！」

ディファーストは空中にいるタブー・ドーパンドにそう言い放つと、背後に次元エネルギーの翼を出現させてタブー・ドーパンドに目掛けて飛翔した。

第六話／眠る英雄と響く音色（後書き）

～～断章1・少し未来の序章（プロローグ）～～

玖楼国とは別の次元世界の世界、そこにいずれ翼達に起こる事件に巻き込まれる三人のライダー達が住んでいた……

一月一日、元旦の神社。初詣に賑わう人々の中に2人の高校生がいた。

？？？

「うわ～、賑わってるなこりゃ……」

紋付羽織袴を着た長身の少し長めの髪をした高校生……仮面ライダーファイズ／乾健人は、初詣のお参りでできた行列を見て感想を呟いた。その隣に鷹の模様の振袖を着た黒髪の知的風の女子高生……ホークオルフェノク／鷹取美咲は目を煌かしていた。

鷹取　美咲
「これがおじさん達が言ってた初詣ね。わくわくしちゃう」

乾　健人

「美咲、しゃぎすぎだ。いくら初詣のお参り初めてだからって、わくわくするか?まあいいや、それより憲太郎や木島のヤツ遅いな…」

健人が呟いた菊池憲太郎は、健斗の友人で、今の所一般人の中で唯一健人がファイズであることを知っているお人好しなクリーニング屋の息子で一方、もう一人の木島というのは仮面ライダーカイザ／木島雄介の事で、何でもできる謎の青年である。健斗達はこの2人と初詣に行く約束だったのだが、何故か2人は待ち合わせの時間が過ぎても来なかったのだ。

鷹取　美咲
「ああ、木島くんは急用が出来て来れなくなった今朝電話があったわ」

乾　健人
「あ!?たっくあの野郎……」

――♪～～♪～～～～♪――

健人の携帯……ファイズフォンの着メロがポケットから聞こえてくる。健人がファイズフォンを取り出し、メールの文章を確認するがメールの文面を見ると、何故か黙り込んだ。

乾　健人

「……」

鷹取　美咲
「…？どうしたの健人君……」

乾　健人
「…あ～～、憲太郎のヤツ！！自分で勝手にお参り済ませたのはいいけど、なに書いてんだメールに！！恋の実況報告か！！」

何故健人が怒ってるのかというと、それは同日の午前０時で憲太郎が初詣に行く最中に彼が思いを寄せるオッドアイの少女の針尾レイと出会って、共に初詣のお参りにいったという『恋の実況報告』だったからだ。

乾　健人
「態々こんな事書くんじゃねえ！！何やってんだもう…」

鷹取　美咲
「でも憲太郎よかったじゃん。レイちゃんに会えて」

乾　健人
「…美咲、どうやらお前もかよ…はあ」

健人はため息をつく。するといきなり美咲が健人の手を繋いできて、健人はいきなり繋いできた事に驚いた。

乾　健人
「／／！？美咲！？」

鷹取　美咲
「行こう、健人君。正月は待ってくれないよ♪」

世の中の人の常識と少しずれてる事を言って美咲は健人と手を繋いで賑わう神社の行列に入って行った。

～～～～～～～～～～

健人と美咲がいる神社にて、もう一人の「仮面ライダー」達がいた。

？？？
「…で？なんでお前らと一緒に初詣一緒にしなくちゃ行けないんだ？」

声の主……妹の「龍牙真理」が買って来た何処の店に売っていたのか女性の振袖のように鮮やかな赤い龍の模様が入った恥ずかしい（と本人は思ってる）袴を着た茶色の短髪に赤い瞳をした高校生「龍牙シンイチ」は、連絡もしてないのにいつの間にか集まった知り合い達を見て呆れながら呟いた。

？？？
「いいじゃないか、こういう一緒に行くのも」

何故かシンイチが着ている袴と絵柄が何処か似ている紺色の蝙蝠の模様が描かれた袴を身に着けている青っぽい黒髪の青年「黒崎　蓮児」はシンイチを宥める。

龍牙　シンイチ
「ってレンさん、何でアンタも俺と似たような恥ずかしい袴着てるのですか！？」

黒崎　蓮児
「これしかなかったんだよ。それにこれ以外と気に入っているんだ」

龍牙　シンイチ
「嘘だろ！？恥ずかしくないのですか！？」

龍牙　真理
「ね、よかったでしょ？それ幸運を呼ぶ袴なんだよお兄ちゃん」

？？？
「そうですよお兄さん！！現に僕は新年早々真理さんに初めて会えて幸運です！！」

真理に続けてシンイチに話しかけたのは、銀色に輝く白虎の袴を着た眼鏡のかけた「東條　翔哉」。ちなみに密かに真理を恋愛感情を

抱いている。

龍牙　シンイチ
「誰がお兄さんだ！まだ結婚もしてないだろうが！！それに何だか恥ずかしいだろ」

東條　翔哉
「まあまあ、いいじゃないですかお兄さん」

龍牙　シンイチ
「だからお兄さんって呼ぶな！！」

？？？
「まあまあいいじゃない、シンイチ」

シンイチを宥めようとする声の主――白鳥の振袖を纏ったストレートヘアーの少女「白鳥美穂」はシンイチを宥める。

？？？
「新年早々初詣の人に負けず賑やかだな」

？？？
「ええ、そうですね」

？？？
「……」

黄緑色のカメレオンらしき爬虫類の模様が入った袴を着た緑掛かった巻き髪をした「霧沢隠」は、金色の蟹の模様の袴の「市村剣助」、紅色のエイの模様の袴の手塚海斗と共に今までと同じ一同の様子を眺めていた。すると剣助があることに気付いた。

市村剣助
「アレ?そういえばボルキャンサー達は?さっきから見かけませんが」

霧沢　隠
「ああ、そういえばカルタ大会をやるとかやらないとか言ってたな…」

手塚　海斗
「……」

市村　剣助
「あれ、どうしたんだ?手塚さん、黙り込んでしまって」

手塚　海斗
「……妙な、風が吹くな…」

海斗はそう呟くと、何かを感じたように空を見上げた。この世界に来た『何か』に感じて…

～～～～～～～～～

ミラーワールド……

ドラグレッダー
「じゃ、行くぞ。田子の浦にうち出でてみれば白妙の富士の高嶺に雪は降りつつ～～」

エビルゲイバー
「あ、それだ！！」

ダークウィング
「ちょ、ちょっと！！押さないでください！！」

ボルキャンサー
「ワテ、ワテが取るんや！！」

バイオグリーザ
「ぐ、苦しい……」

ブランウイング
「あ、ゲットォ！！」

……某爆竜達の如く楽しく盛り上がる喋るミラーモンスター達…そしてその様子を遠くから見つめる人影があった……

？？？

「……さてと、行きますか……」

人影は次元の壁に飲み込まれ、姿を消した……

第七話／英雄（前書き）

受験のテスト終わったァァァァァアア！！

どうも皆さん御久し振りです地水です。やっと更新できました！！

今回のタイトルは『仮面ライダークウガ』のタイトルみたいに漢字二文字にこだわってみました。何故そうしたというと・・・・・本編を見れば大体分かります。

では、第七話『英雄』始まります。

第七話／英雄

ディファースト
「はあぁあッ！！」

タブー・ドーパンド
「ふん……ハアァァア！！」

タブー・ドーパンドは向かってくるディファーストに光弾を生み出して放った。ディファーストはサモンドライバーのガンモードの銃撃で光弾を撃ち消し、タブー・ドーパンドにドロップキックを直撃させた。

タブー・ドーパンド
「このっ……！！」

ディファースト
「どうした、それで終わりか」

タブー・ドーパンド
「ちぃっ、なめるなぁ！！」

毒づいたタブー・ドーパンドは再び光弾を生み出してディファース

トに放ったが、ディファーストは空中で飛翔したままオーバーヘッドキックの要領で打ち返されて返り討ちに遭ってしまう。ディファーストは一枚のバックルを装填した。

ディファースト
「もう一つオマケだ、くらえ……」

【ＡＴＴＡＣＫ－ＲＩＤＥ！ＳＬＡＳＨ！！】

サモンドライバーが自動的にガンモードからソードモードに移行して、返された光弾を喰らっている怯んでいるタブー・ドーパンドに『ディファーストスラッシュ』の斬撃を浴びせ、近くの砂漠に叩き落した。

その後ディファーストは足場が悪い砂地に慣れたように着地し、展開させていた次元エネルギーの翼が羽の粒子になって飛び散って消えるとタブー・ドーパンドに顔を向けて質問する。

ディファースト
「お前、何でこの世界に来た？この世界はお前にとっては何も価値のない世界なんだぞ？」

タブー・ドーパンド
「ふん、貴様に話すとでも思ってるの？あまく見てると痛い目見るわよ！！」

――ブオォォン――

その言葉と共にタブー・ドーパンドと間に銀色の壁が遮り、ディファーストは思わず後方にジャンプして下がった。そして銀色の壁から煮え滾る溶岩の身体をした『マグマ・ドーパンド』、ティラノザウルスの頭部の姿をした『ティーレックス・ドーパンド』、黒光りしてるゴキブリの姿の『コックローチ・ドーパンド』、お菓子のお化けを思わせる『スイーツ・ドーパンド』、赤い体と背中に先端が折れた大剣を背負った『アームズ・ドーパンド』、始祖鳥や鳥類の特性を持つ『バード・ドーパンド（強化体）』にマスカレイド・ドーパンドの増援が姿を現す。

ディファースト
「……
自分の世界から部下の変身したドーパンドを呼び出したのか。まあ、どうでもいいか今は……そうだ、今の俺は機嫌が悪いんだ……

……てめぇら、全員掛かって来い」

怒りを込めた低いドスを響かせた声をドーパンド達に睨みつけながら言い放ち、ディファーストはサモンドライバーを握り締めて走り出した。

～～～～～～～～～～

衛宮　士朗
「そうか、それが俺達が翼を襲ったって事なのか……」

キバ
「ええ、以前翼さんが貴方と戦った時に出た緑の灰色の2人組みのライダーを何とか退いて、一人で貴方達を背負って城に戻って、撫子さんと雪兎さんと共に貴方達を手当てしてベットに寝かしたんです」

キバの話に聞いて全てを理解した2人。だが自分の意思じゃないとはいえかつての仲間である翼、さらにサクラ達を襲った事に責任を感じてしまい、顔に暗い影を落としてしまう。

セイバー
「くっ……私は騎士なのに人を襲う、その前に再び翼に逢えたのに刃を向けるなんて……」

衛宮　士朗
「……あいつに、翼に逢わす顔がない……まるであの時と同じじゃないか……」

士朗が言うあの時というのは、まだ翼と旅をしていた時に訪れた仮面ライダー一号／本郷猛や仮面ライダーＺＸ／村雨良の歴代昭和仮面ライダー達が守っている『ＳＰＲＩＲＩＴＳの世界』でかつてその世界を暗躍していた凶悪な組織「ＢＡＤＡＮ」……その残党達を引き入れた大ショッカーに士朗が捕まり、地の石によって「禁断の闇」と呼ばれた『クウガ・ライジングアルティメットフォーム』に強化変身して翼と死闘を繰り広げた。

幸い翼に止めを刺す直前に仮面ライダーイクサ／名護啓介と仮面ライダー電王／オズ＝ベザリウスと彼の契約イマジンのビーラビットイマジン／アリスの三人が地の石を破壊し、その結果士朗は正気を戻ったのである。が、未だに翼を襲った事を悔やんでいた。

キバ
「……とりあえず翼さんの所へ行きましょう。確か庭園に行くって言ってました、僕が案内します」

２人を翼に逢わせようとするキバだが、２人は動こうとしない。

衛宮　士朗
「……」

キバ
「翼さんも落ち込んでいる貴方達の姿よりも元気な笑顔な姿をしている貴方達の方が元気を出しますよ」

セイバー
「で、ですが……」

衛宮　士朗
「俺達は、翼に逢っていいのか？」

キバ
「もちろんですとも。但し、早くいかないと翼さんの身が危ないです」

士朗＆セイバー
「「…！？何だとっ（何ですってっ）！？」」

キバの言った言葉に士朗達は血相を変えて、再びキバの顔を見かえす。

キバ
「どうやら何処かの世界の怪人がこの世界に来ていて、今翼さんが変身して戦ってます。貴方達は……どうしますか？」

2人は一端黙り込み、一瞬静寂の時を迎える。そして……

衛宮　士朗
「……そんなこと、最初から決まってる」

セイバー
「私も……同じです」

キバ
「もう分かっている事でしたね」

『決意』と言う二つの文字を秘めた瞳でキバを見つめて2人は答えを出す。キバは縦に首を振るい、部屋から出ると2人と共に翼の元へ向かう。

～～～

ックス・ドーパンドの口から衝撃波の咆哮の同時攻撃によって顔の前で両腕を交差させて防戦一方の状態だった。

ディファースト
「……（…ちっ、あいつら接近させないつもりか…）……」

その時、ダメージを受けながらも耐え凌いで反撃のチャンスを待つディファーストの背後からスイーツ・ドーパンドとアームズ・ドーパンドに剣に変化させた腕で背中を斬りつけられてしまう。

ディファースト
「グガ……！！」

アームズ・ドーパンド
「ハハハッ！！この程度のなのか？あぁ！？仮面ライダーさんよ！！」

スイーツ・ドーパンド
「死にな、壁の塗料にでもおなり！！」

ディファースト
「砂漠に壁なんてモノないんだよこの菓子お化けと骸骨仮面が……」

二体のドーパンドにそう言い放ったディファーストはサモンドライバーでドーパンド達を薙ぎ払い、さらに追撃として『ディファース

トブラスト』を他のドーパンド達に巻き添えにして二体のドーパンドに浴びせた。だが多数のマスカレイド・ドーパンド達は倒せたもののマグマ・ドーパンド達は耐え切ってしまったが、代わりに大ダメージを大きく残した。

ドーパンド達
「ぐ……ぐぐが……」

ディファースト
「……止めと、行くか……」

ライドホルダーを腰に手をかけ、ドーパンド達に必殺技を放とうとする。

イクサ&ゼロノス
「「ぐあぁぁぁあぁぁぁぁああああ!!」」

ディファースト
「!」

後ろからイクサとゼロノスの悲鳴が響いた。ディファーストが振り向くと、そこにはボロボロの姿になってる2人、宙に浮かぶタブー・ドーパンド…そして目の前にサクラの首に刃を近づけたバード・ドーパンドが目に写る。

バード・ドーパンド
「動くな、この娘がどうなってもいいのか？」

サクラ
「つ……翼君……」

ディファースト
「御前等……！！」

タブー・ドーパンド
「……やれ」

タブーの合図と共に、スイーツ・ドーパンドが口から生クリームの塊を排出し、ディファーストに附着させる、そこへコックローチ・ドーパンドが動けないディファーストに蹴りや殴りを容赦なく入れる。

コックローチ・ドーパンド
「オラオラオォラァッ！！仮面ライダーもたいした事ねえな！！」

ディファースト
「…この……」

ディファーストは殴りかかろうとするが、先程の生クリームがセメントのように固まり思うように動かず、殴り返される。さらにアームズ・ドーパンド達が一斉に襲い掛かり、フルボッコにしていく。

ディファースト
「がはっ……」

ゼロノス
「翼っ!!おいイクサ!!助けに行くぞ!!」

イクサ
「イクサではない、753さんだ!!そんなこと言われなくても分かってる!!」

ディファーストの追い詰められていく様子にゼロノスとイクサは助けに向かおうとするが、足元に火山弾が着弾した。火山弾が来た方向へ顔を向けると、タブー・ドーパンドのいる方向にマグマ・ドーパンドの姿があった。

ゼロノス
「てめぇら…!!」

イクサ
「その手を離しなさい!!」

タブー・ドーパンド
「フン、黙りなさい。そもそも私達がココへ来たのはそこの小娘を捕まえるためよ」

ディファースト・サクラ
「!?」

ゼロノス
「何だと…！？」

タブーの言葉に驚くディファースト、そしてサクラ。

イクサ
「どういう意味だ！！」

タブー・ドーパンド
「その娘は次元を超える力を持っているそうじゃない……本部に連れ帰って新しいメモリの開発に協力させてもらうわ。そうでなければ、こんなに一般のドーパンドを呼ばないわよ」

ディファースト
「ふざけるな……

…サクラは、サクラはモノじゃねえぇぇえええ！！！」

ディファーストは怒りを露にし、声を張り上げながらタブーに殴りかかろうとするがドーパンド達に邪魔され、再び襲い掛かった。ディファースト――翼の姿を見てサクラは悲しむ。

サクラ

「翼くんっ!!そんな、ひどい…何でこんなことを!!」

タブー・ドーパンド
「黙りなさい!!私を誰だと思ってるの?私は地球に選ばれた家族の一人なのよ。まあいいわ、力づくでも連れて帰る。フフ、これでダブルに勝てるわ……」

ゼロノス
「ちっ、外道が……俺は今、かーなーり機嫌が悪いっ!!」

イクサ
「私の正義が怒りの業火に燃えあがる……再び、その命と神の愛娘を返しなさい!!」

ゼロノスとイクサはタブーに向かって走り出すが、マグマ・ドーパンドとバード・ドーパンドが邪魔しに入る。一方タブー・ドーパンドは手下のドーパンドが相手をしている隙に、サクラを連れてこの世界から去ろうと、次元の壁を出現させる。

タブー・ドーパンド
「さてと、後は任せたわ。さあ、こっちに来い!!」

サクラ
「い、いやっ!!」

タブー・ドーパンド
「この……生意気よ!!」

タブー・ドーパンドは光弾を生み出し、サクラに放とうとする……

――キギャァァァァァァァァァァッ！！――

タブー・ドーパンド
「!?ぐわぁっ！！」

その時タブー・ドーパンドに光弾が直撃、光弾を放つのを阻止する
する。

タブー・ドーパンド
「この……何よ……」

――ギギャォォォォォオオ！！！――

タブー・ドーパンド
「…！？何！？」

マグマ・ドーパンド
「ボ、ボス！！アレ」

マグマ・ドーパンドの指を指した先に、黄金に輝き巨大な翼で羽ばたく翼竜のような異形の姿が空に飛び上がっている姿があった。黄金の異形はタブー・ドーパンド目掛けて急降下し、タブー・ドーパンドに加えディファーストに襲い掛かっている一般ドーパンド達を大きく吹き飛ばした。

一般ドーパンド達
「グアァァアアァァ！！」

タブー・ドーパンド
「ちっ……誰だ！！」

タブー・ドーパンドは辺りを見回し、奇襲してきた人物を見る。するとディファーストの側にいつの間にかサクラ、２人の目の前に『仮面ライダーキバ・エンペラーフォーム』、そして……

ディファースト
「士朗……セイバー……？」

衛宮　士朗

「たっく……無茶するなよな、翼。
お前、まだ俺達と戦ったダメージが残ってるくせに」

そこには士朗とセイバーの姿があった。ディファーストは怪我をしているのにも関わらず助けに来た二人に驚く。

ディファースト
「お前等、何でこんな所に。怪我をしてるくせに」

衛宮　士朗
「ハァ…手当てしてないお前に言われたくないよ」

セイバー
「翼、貴方はそこにいるお方を守って下さい。ここは私が……」

ディファースト
「黙りやがれ大食い王」

セイバー
「っ／／、誰が大食い王ですか！！久しぶりに再会したのにまだそんなキャラ扱いなのですか！？」

ディファースト
「はぁ、実際そうだろうが」

セイバー
「違いますッ！！」

サクラ
「あ、あの……」

衛宮　士朗
「ああ、心配しないで。いつもこんな感じだから」

状況がつかめなくキョトンと表情をしてるサクラと違いまるでセイバーと翼のやりとりを慣れたように落ち着く士朗、そんな中…

タブー・ドーパンド
「貴様等ァ、ふざけるなァァアア！私達をほっとくなぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！なめてるのかぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

スイーツ・ドーパンド
「死ねえェェェエエ！！」

今まで忘れ去られていたタブー・ドーパンド達が激怒し、先頭切ってスイーツ・ドーパンドが襲い掛かって来た。だがそれを分かっていたように士朗が瞬時に「投影開始（トレースオン）」で作り出した『刺し穿つ死棘の槍（ゲイ・ボルグ）』と呼ばれる赤い槍を、今まで黙っていたキバはドッガハンマーを使ってスイーツ・ドーパンドを薙ぎ払い大きく吹き飛ばす。

キバ・エンペラーフォーム
「さてと、翼さん。僕はサクラさんを安全な場所に避難させます。すぐに加戦します」

サクラ
「翼くん…皆、頑張って……」

士朗&ディファースト&セイバー
「「「…ああ！！」」」

三人はそう返事を返した後、サクラはキバに連れられて別の場所へ
非難した……

第七話／英雄（後書き）

～～断章2・少し未来の序章（プロローグ）～～

シンイチ達、健人達が神社にいる同時刻…とある場所にて……

？？？

「グググ……ガガガァ」

そこには蠍を思わせる姿をした怪人――スコーピオン・ロードのレイウルス・アクティアが追い詰められている姿があった。

？？？

「どうしたのですか？まさか、これで終わりって言わないでしょう？貴方が先に襲ってきたくせに……」

レイウルス・アクティア

「！？」

レイウルス・アクティアが振り向くと、白銀の発行するライン――ブライトカラーの『フォトンストリーム』を走らせた漆黒の身体に大きなオレンジの目、そしてファイズエッジと似た白銀の刀身のエネルギーブレードを左手に持った『仮面ライダーデルタ』が姿を現

し、冷徹な声でかける。

デルタ
「さて…そろそろ倒しますか……」

レイウルス・アクティア
「ぐ……グガァァアア！！」

自暴自棄になって冷静な判断ができなくなったレイウルス・アクティアは、デルタに向かって走り出す。だがデルタは態度を崩さずにデルタフォンを口に近づかせて呟いた。

デルタ
「Ｃｈｅｃｋ」

【ＥＸＣＥＥＤ　ＣＨＡＲＧＥ】

デルタフォンからそう発せられると、エネルギーがフォトンストリームを伝ってエネルギー剣にチャージされる。

デルタ
「ハッ！！」

エネルギー剣を縦に振るうと、そこから白銀に輝く衝撃波が発生してレイウルス・アクティアを真っ二つに切り裂いた。

レイウルス・アクティア
「グガァァァァァァ！！」

頭の上に天使の輪が発生し、断絶魔を上げながら大爆発する。デルタはそれを見届ける。

デルタ
「……」

ベルトを外して変身を解くと、そこには漆黒の服に身を包んだ黒髪の整った顔で大人びた青年が現れる。

？？？1
「……」

？？？
「たっく、何しょぼくれてんだ？」

青年が後ろを振り向くと、彼とは対照的に白い服を身を包んだ同年代ぐらいの先が白い薄い茶色の少女―と、先ほどの声の主である人

の形をしていてモモタロス達と似た異形……かつて「響鬼の世界」で翼／ディケイドと電王として戦った『ストレンジイマジン』の姿があった。

？？？１
「ストレンジに？？？か……」

？？？２
「準備、できた」

少女がそう言うと呟くと、手に持っていた虎を描かれた青いデッキを取り出して見せた。

ストレンジイマジン
「へへ、やっとド派手に暴れられるのか！！楽しみだぜ！！」

？？？１
「……行くぞ」

ストレンジイマジン
「っておい！！少しは反応しろ！！」

？？？２
「……」

ストレンジイマジン
「お前も黙るな！！たっく、ここは無言なヤツ多いないおい！！」

ストレンジはハイテンションな調子に対し、２人はローテンション（とってもモモタロスぐらいだが…）……というより冷血に思えるくらいの雰囲気を出した。

ストレンジイマジン
「まあいいや、いつもの事だしよ。例の『業火の顎』のライダーは送り出したし俺達も出陣するぜ」

？？？１＆？？？２
「「…ああ…」」

２人はそういうと、青年は先ほどのベルト――デルタドライバーを腰につけ、少女はデッキを前に突き出すと腰に青年とは違うベルト――Ｖデッキが装着される。ストレンジも電王の変身アイテムであるデンオウベルト、しかも通常のモノとは異なり緑と白のボタンが追加された計六個のベルトを腰に巻く。

一同
「「「変身（！！）」」」

【ＳＴＡＮＤＩＮＧ　ＢＹ　ＣＯＭＰＬＥＴＥ】

【ＳｏｌｄＦｏｒｍ】

三人がそれぞれ変身し、『仮面ライダーデルタ』『仮面ライダータイガ』『電王・ソードフォーム』に姿を変え終わると、何処かへ向かった。

～～～～～～～～～～

シンイチのいる神社のミラーワールド内にて……

デストワイルダー
「……？何ニャ？アレ……」

二足歩行で白虎の姿をしているのに何故か猫語で喋る『デストワイルダー』、彼（？）が一人が目線の先には現実空間の様子が見える窓ガラス……その窓ガラスの向こうには、妙な人影があった……。

～～～～～～～～～～

？？？

（ふはははは！！鷹取美咲、そして仮面ライダーファイズに変身する人間……今度こそ、今度こそ貴様たちをたおしてやる！！）

ワイルダーが見ていた妙な人影…言うなれば『怪しい獅子舞』に扮した人物は心の中で呟いた後、健人……そしてシンイチ達のいる神社の中へ入った……。

第八話／再会の二重奏《デュエット》　ディファースト&クウガ

サクラがエンペラーキバに安全な場所へ避難された後、士朗は腰にアークルを出現させると、クウガ特有中国拳法を模したの変身の構えをとる。

「変身！！」

力強く叫ぶと士朗の身体が雷と装甲に包まれて行き、仮面ライダークウガ……それも再会した時の究極の闇――アルティメットクウガでも、燃え盛る烈火――マイティフォームでもない金色のラインが入った装甲と金色の装飾が入ったベルトにリント文字が入った手甲、そして右足にマイティアンクレットが装着された『ライジングマイティフォーム』に変身した。

「…！？ライジングフォーム……いつの間にそんな芸当を？」

「俺だって強くなってんだよ。お前に負けないようにな」

「…ククっ、だったら俺も負けてらんないね…！！」

何故か楽しそうにそう呟いて士朗――クウガの顔を見たディファーストは、サモンドライバーを手にしてクウガと共に走り出す。

「「ハアァァァアアアア！！！」」

ディファースト&クウガは一般ドーパンド達に飛び掛った。ドーパンド達も応戦しようとするが、先程とは違いディファースト達の方が善戦して圧倒して行き、流石の冷徹のタブー・ドーパンドも焦り始める。

「ちっ、この……！！こうなったら一端退いて……」

「そんな事はさせません！！」

逃げようとするタブー・ドーパンドに、騎士服を纏ったセイバーが彼女の目の前に現れる。セイバーは素早くエクスカリバーを振りかざしタブー・ドーパンドを斬りつけ、さらに刀身から光の斬撃を放ちタブー・ドーパンドを大きく吹き飛ばす。

「この……！！」

「もう貴方には勝ち目がありませんよ？貴方の仲間も倒されています」

セイバーの言うとおり、既にタブー・ドーパンドの手下であるマグマ・ドーパンド&バード・ドーパンドはイクサとゼロノスにもう倒されてしまい、倒した本人達はアームズ・ドーパンド&コックローチをボッコボコにダメージを与えていた。

「タアァァア！！」

「グゴゾォッ!!」

「跪きなさい、悪の害虫め」

イクサは普段の戦闘スタイルである連続に放つ斬撃コンボを駆使してイクサカリバーを巨大な一撃でコックローチ・ドーパンドを追い詰めていた。だがコックローチ・ドーパンドは超高速能力でイクサを倒そうと発動させる。

「ちっ、俺のスピードに舐めんなっっっ!!!」

「フン、待ちなさい」

だが余裕な表情でイクサは複眼のセンサーでコックローチ・ドーパンドを探して、ガンモードにしたイクサカリバーで射撃し、コックローチ・ドーパンドを地に倒れこませた。
そしてその隣で、ゼロノスがアームズ・ドーパンドのシールドソードと右腕の剣をゼロガッシャーで思いっきり叩きつける姿があった。アームズ・ドーパンドの武器である剣は既に両方ともヒビが入っている。

「オラァ!!」

「うおぉいいいいいいッ!!壊れるって、ヒビ入ってるって、割れちまうって!!」

「割ってやるんだよ、この偽仮面ライダーモドキがぁぁぁぁぁぁぁぁあっ！！！」

――バキィィンンッ！！！――

アームズ・ドーパンドの二つの剣が砕ける音が周囲に派手に響き渡る。コックローチとアームズ、二体のドーパンドを一ヶ所に追い詰めると、ゼロノスはベルトからカードを引き抜いてゼロガッシャーのスロットに挿入、イクサはベルトに『カリバーフエッスル』を差し込み、それぞれの必殺技の発動を準備を行っていき…。

【Ｉ・Ｘ・Ａ・ＣＡ・ＬＩ・ＢＵＲ・Ｒ・Ｉ・ＳＥ・Ｕ・Ｐ】

【Ｆｕｌｌ　Ｃｈａｒｇｅ】

「イクサ、再び爆現！！」

「うぉぉおらあぁぁぁぁああ！！」

それぞれの掛け声の共に、ゼロノスとイクサは自分達の必殺技である『スプリッドエンド』と『イクサジャッチメント』の同時に放ち、二体を一刀両断に切り裂いた。受けた二体のドーパンドは大爆発を起こして、『メモリブレイク』されると元の姿に戻って倒れこむ。

「「よっしゃぁぁぁああ！！！」」

そして歓喜の声を上げてゼロノスとイクサは姿を消した。

～～～～～～～

「「うぉぉぉぉお！！」」

「こ、こここっちに来るんじゃ……」

――バアァァコォォンッ！！！――

「トリッテ～～～ンッッ！！！！」

意味不可思議な言葉を叫びながら、２人に殴り飛ばされたスイーツ・ドーパンドは必殺技を受けずに大爆発した。

そして２人は残っているドーパンドはタブーとティーレックスの２人、ディファースト達はセイバーの横に立ちタブー達を見る。

「残ってるのはアンタとそこの頭部だけだ。お前らの仲間は全て倒した、諦めろ！！」

「諦めてたまるものか！！私はどうしてもメモリの増やさなくちゃいけないのよ。そうしないとお父様に怒られるのよ！！」

「…ファザコン？」

「いや翼、絶対違います」

セイバーに突っ込まれるボケたディファースト。再び真剣な眼光をタブー・ドーパンド達に向けると、ホルダーから一枚のカード……緑の黒のアシンメトリーなカラーデザインの赤い複眼の瞳のライダーが描かれたカードを取り出す。翼と付き合いが長いクウガも知らないライダーだったので、クウガはディファーストに問う。

「そのカードは……？」

「これか？あいつと同じガイアメモリを使う戦士さ……変身！！」

【ＫＡＭＥＮ－ＲＩＤＥ！ＤＯＵＢＬＥ！！】

電子音が発言すると、渦巻く竜巻と踊り舞う道化師をイメージした共にディファーストの中心に風の渦が発生し、その際周囲の砂漠の砂を高く巻き上げ、次第にディファーストの姿が砂嵐と化した渦の中に取り込まれていく。

「それは…まさか……」

タブー・ドーパンドはその様子を見てとある既視感に襲われる。自分のいた世界で何度も戦った、緑の右側と黒の右側の姿をした『疾風と切札の戦士』の事を……。

そして砂嵐が消え去ると其処にはその疾風と切札の戦士と同じ姿を

した『仮面ライダーW（ダブル）・サイクロンジョーカー』に変身（カメンライド）したディファーストが現れる。

「さ～てと。行くぜ士朗にセイバー、悪魔と相乗りした2人で一人の仮面ライダーでな！！」

「ふぇ……？悪魔と相乗り…？」

「2人で一人…？なんじゃそりゃ？」

「さあ？とりあえず、お前の罪を数えろ！！」

Dダブルは本場のダブルと同じ決め台詞を宣言すると、クウガとセイバーと共に宙に浮いているタブー・ドーパンドに向かって走り出した。

「ガアァァァァァァァァァッ！！！」

ティーレックス・ドーパンドは咆哮を上げながら阻止をはかり邪魔しようDダブルに向かって突進攻撃を繰り出す。…だが、Dダブル達三人はティーレックスを踏み台にして空に飛び上がり、タブー・ドーパンドの目の前に現す。

「な…！！」

【ＦＩＮＡＬ－ＡＴＴＡＣＫ－ＲＩＤＥ！ＤＯ・ＤＯ・ＤＯ・ＤＯＵＢＵＬＥ！！】

「ジョーカーエクストリーム！！ゼァァアアッ！！」

「デヤァァァアア！！！」

「ハァァァァァアア！！」

Ｄダブルは中央半分に分割された両半身が連続に蹴り込む『ジョーカーエクストリーム』、クウガはマイティアンクレットによって強化された必殺キック『ライジングマイティキック』、セイバーは上からエクスカリバーを振り下ろして光の斬撃を当て、三人同時に必殺技をタブー・ドーパンドに叩き込んだ。

「グアァァアアァァァアア！！」

タブー・ドーパンドは大ダメージをくらい盛大に大爆発……するかと思われたが、突然現れたオーロラの中にティーレックス・ドーパンドと部下達と共に飲み込まれてしまう。

上手く着地して通常フォームに戻ったディファーストとクウガは、その突然発生したオーロラを顔を向けて見る。

「……なんだ？もうボスは倒したはずなのにオーロラが消えない……？」

「士朗、どうやら次が来るぞ」

「は？どういう意味だ……？」

ディファーストの言葉に『？』を浮かばせるクウガ、そんな中オーロラの中から鉄筋やコンクリートの瓦礫などの金属を含む物で身体の生成した巨大な肉食恐竜……『ビック・ティーレックス』になったティレックス・ドーパンドが出てきて、ディファースト達に突進してきた。

「おわぁぁあああ！！！何だアレ！？」

「地球の記憶を封じたガイアメモリは、今までお前らが戦ってきたグロンギとかファンガイアよりモチーフが多くて、動物だけじゃなく無機物、挙句の果てには感情までレパートリーが様々。時として巨大化能力を有するヤツのも少なくはない…」

「余裕ぶっこかないでください！！」

「言っとくが逃げる必要はない…とある人物が言っていた、お前が望めば世界は絶えずお前に味方する。俺と同じようにな…てな！！」

――ギャァァア！！――

「グガァァア！？」

ビック・ティーレックスに無数の光弾が降り注ぐ。そしてディファ

ーストの目の前にタブー・ドーパンドを襲ったときに姿を見せた黄金の翼竜――『キバ・飛翔体』がサクラを安全な場所に非難させて戻ってきた。キバは瞬時にエンペラーフォームに戻り、ディファーストに加戦した。

「ただいま戻りました。で、どうするつもりですか？」

「ナイス、タイミング♪じゃ、ファイナルフォームライドしてもらおう」

「はい……って、えぇっ！？」

【ＦＩＮＡＬ－ＦＯＲＭ－ＲＩＤＥ！ＫＩ・ＫＩ・ＫＩ・ＫＩＶＡ！！】

「我慢しろ」

何故か感情が篭ってない様にディファーストはそう言うと、エンペラーキバはザンバットソードの矢に「キバアロー」よりも風格があるキバットの顔をした弓『エンペラーアロー』に変形させた。ディファーストはエンペラーアローを手にした後、新しいカードをセットする。

【ＦＩＮＡＬ－ＦＯＲＭ－ＲＩＤＥ！ＫＵ・ＫＵ・ＫＵ・ＫＵＵＧＡ！！】

「士朗、お前も我慢しろ」

「え!?またアレに……グゴォッ!!?」

クウガの抵抗も空しく、黒き鎧と巨大な牙を持ちゴウラムと似た姿をした『クウガゴウラム』に変形させられてしまう。今まで怯んでいたビック・ティーレックスが立て直って再び突進してきたので、ディファーストとセイバーが背中に乗るとクウガゴウラムは飛び上がる回避する。ビック・ティーレックスは瓦礫や鉄骨を飛ばして来るが、ディファーストはエンペラーアローを引いてワインレッドに染まる光の刃を放ち正確に打ち抜いて、セイバーはエクスカリバーで叩き斬って落した。そしてクウガのクレストが描かれたカードを取り出して、顔をクウガゴウラムに向ける。

「2人とも、準備はできたか?」

「ああ、いいぜ!!」

「構いません!!」

ディファーストは2人の答えを聞いて頷くと、新しいカードをバックルに装填した。

【ＦＩＮＡＬ－ＡＴＴＡＣＫ－ＲＩＤＥ!ＫＩ・ＫＩ・ＫＩ・ＫＩＶＡ!!】

電子音が鳴ると同時にクウガゴウラムはディファーストとセイバーを空高く跳ね上げた。上がりきったディファーストとセイバーはそ

れぞれの武器を構えて、標準をビック・ティーレックスに向ける。

「いくぜ……ディファーストザンバットアロォーッ！！」

「エクス……カリバァーーー！！！」

ディファーストは引き絞ったエンペラーアローから巨大な深紅の矢『ディファーストザンバットアロー』、セイバーはエクスカリバーを振り下ろし煌く黄金の斬撃『約束された勝利の剣（エクスカリバー）』をそれぞれ放つ。深紅と黄金の二つの光はビック・ティーレックスの頭上から襲い掛かり、大炸裂した。

爆炎と砂煙が収まった後、変身していたと思われる人物が気絶している姿が目に入るが、すぐにオーロラに飲み込まれて消えてしまう。

「くそ、逃げられた。誰がサクラの力の事を聞き出そうと思ったのに…」

「あの翼、思ったのですが……私達このままじゃ地面に叩き落ちるのでは…」

「……あ……」

――ヒュウウウウウウウウウウウン……――

…時既に遅し、ディファーストとセイバーの二人はは、引力によって地面に向かって落下し始める。さらに不幸な事に2人が落ちる直下にクウガゴウラムが浮かんでいた。

「ってちょっと待て……！2人とも待て待て待て待て！！」

――ドゴォン！！――

「きゃッ！？」

「イシダッ！？」

「ぐばッ！？」

2人が背中に落ちてきて巻き添えを喰らい、その衝撃によりゴウラムの姿から戻ってしまったクウガ。三人はそのまま落下して往き…。

「「「うわあぁぁぁぁあぁぁぁあああ！！」」」

――ドガァアァァアァァァンッ！！――

…地に激突した派手な音が砂埃と共に巻き起こる。地面にぶつかった際に変身が解かれたのか、元の姿に戻った翼、士郎、セイバーの三人は衣服が砂で汚れてる事も気にせず…というより、先程の戦いで疲れが一気に出てぶっ倒れていた。

「お～い、翼…大丈夫か？」

「今くらいで死ぬと思ってるのかよ。士郎…お前こそ大丈夫なのか

？　まあお前は大丈夫としても、腹ペコ大魔王も…何も食べてないから大丈夫か？」

「いつまで…そのあだ名…使ってるつもりなんですか？」

先程の戦いや操られていた時に負傷してるのにもかかわらず自分より翼の身を心配をかける士郎だなのだが、彼の心配もそっちのけに余裕風吹かせる翼にセイバーは呆れてしまう。

「相変わらずの調子ですね、……素直じゃない所は変わっていませんん」

「悪かったな、けどお前らも変わってねえだろ」

「…まったく…口も達者なのも変わらなな」

昔と変わらない様子の翼に安心したセイバーと士郎は互いにニッコリと笑いあった。それを見て翼は不意に吹き出して笑い出してしまう。やがて少し時間が経ち、やっと立ち上がれるまで回復した三人は砂埃を落としながら士郎はまるで楽しそうな笑顔を向けて翼にこう言った。

「翼、――俺とセイバーを救ってくれてありがとうな」

「当然だ、例え闇に堕ちようとも必ず救い出すって約束した相棒だからな…」

彼にそう言葉を返した翼は士郎とセイバーを連れて玖楼国に向かって歩き出した…その後、翼達はサクラを迎えに行き玖楼国の城へ他の2人と共に戻ったのであった…。

第八話／再会の二重奏《デュエット》　ディファースト&クウガ（後書き）

【ツバ×カメ通信】

タイガ「困った…」
デルタ「困りましたね」

ゼロノス「オイ、なんだあれ？」
イクサ「知らないのか、今度登場する鳴滝の使徒ライダーの二人…」
ゼロノス「知ってるわ馬鹿！！　俺が聞いてるのはなんでその鳴滝の使徒ライダー二人がココにいる事だ！！」
デネブ「だけどあの二人困ってるようだけど…よし、あの二人のお悩みを助けよう！！」
ゼロノス「やらんでいい、つか絶対やるな、やったらコブラツイスト！！」
イクサ「過激すぎる」

デルタ「あの、もういいですか？」
タイガ「コクコクッ……」
デネブ「いたたたっっ！？　あ、お構いなくあたたたたた」↑ゼロノスのコブラツイスト炸裂中
ゼロノス「デェェネェェブゥゥ！！」
イクサ「で、何があったのか話なさい」

デルタ「実は僕たち、今度のコラボで初登場するんですが…」
タイガ「でも、作者に聞いたら……まだ名前、決まってない」

デルタ「このままだと出られないんですよね…」
タイガ「ぐずっ…」
イクサ「泣きやみなさい、そして涙を拭きなさい」
デネブ「コレ、デネブキャンディーだ。元気出してくれ」
ゼロノス「…いいかげんにしろぉぉぉぉぉーーーー！！」

デネブ「次回の『ツバサ』はリスさんと初のコラボだ！！」
ゼロノス「再会した翼と士郎の元に異世界の訪問者の知らせが入る。その正体は？」
イクサ「次回のツバ×カメ通信を見なさい！！」

第八話／【少し先の序章（プロローグ）】

その頃、翼達がサクラを迎えて玖楼国に戻ってる頃…。
玖楼国とは別の世界……正月の参拝客で賑わっている神社……。

――カランカランカランカラン、パンパン！！――

（これからも一年、平和に健人君やおじさまやおばさまと一緒に過ごせますように…）

（無事、何事も無く平和に暮らせますように……）

健人と美咲は賽銭箱にお賽銭を投げ入れ、手を合わせてそれぞれの願い事を自分の中で思う。

「さて、お参りしたし…」
「あ！健人君、おみくじしに行こうよ！！ほら早く早く！！」

「お、おい！なんだか美咲のキャラが変わってるような…（だが、これはこれで……って何言ってるんだ俺は！！）…」

子供のようにはしゃぎながら何故か戸惑う健人の腕を美咲は引っ張っておみくじがある場所と探す。そんな中、木の物陰から『怪しい獅子舞』が2人を見つめる。

「ふふふ。見つけたぞファイズ、鷹取　美咲……今度こそ貴様を倒すときだ…」

怪しい獅子舞……この世界でオルフェノクが巣食う巨大企業のスマートブレインが集めたエリートオルフェノクの集団・ラッキークローバー（これでも一応だが）の一人、眼鏡のかけた男・琢磨　潤一郎は憎きファイズ――健人と裏切り者のオルフェノクの美咲を倒すべく今も奮闘しているのである。

「…（まず予め配置させたオルフェノクを使ってファイズを引き付け、その間僕は鷹取美咲を捕まえて人質にとる……これでファイズも身動きが取れず手も足も出られない！ああ、なんて最高の作戦だ！！）…」

まるで何処かの悪の組織が考えそうな定番ネタを過剰に自画自賛した琢磨潤一郎だが、本来人質は相手から武器をそらし、油断をして隙ができてしまう最悪な戦術であり、それは相当頭が切れる天才にしか使えないのである。

『とある人物が言っていた、悪とまずい飯屋が栄えた試しは無い…』

もし翼がこの世界にいてこの場面を見たらこんな事を言っているだろう。そしてそれを意味するかのように…

「「ふざけんなあぁぁぁぁあ！！」」

「「ぐほおぉぉっ！！」」

「!?何だ…」

琢磨が振り向くと、黄緑色の袴姿と青年と朱色の袴姿の男――霧沢と手塚が、赤い袴の青年と青い姿の男――シンイチとレンにつっこまれ蹴り飛ばされる姿があり、霧沢と手塚が空中で打線を描きながら琢磨の場所へ向かって往き、無駄にとでも言うくらいに琢磨に直撃して砂煙を巻き上げる。琢磨に霧沢・手塚が直撃する際に、『グキンッ！！』と音がしたが気にしてはいけない……

「ぐ、ぐご……」

琢磨の上に手塚と霧沢が存在を気付かずに文字道理尻に叱れているため、苦しそうな声を上げる。だがしいている2人はおろか、シンイチ達までもが気付かずに話を進める。

「イタタタ……そんなに蹴り飛ばさなくてもいいだろ！！ただ犬と触れ合ってただけじゃねえか！！」

「何が『犬と触れ合ってた』だ！ほんの少ししか入ってないアルコール入りの甘酒飲んだだけで狛犬と犬の区別がつかなくなるほど酔っ払ってんじゃねえか！！」

「レン、何で俺まで蹴る？俺は甘酒は飲んでないぞ？」

「お前はおみくじを売っている場所の側で、占いしてるから突っ込んだんだよ！お前の占いはおみくじより目茶苦茶当たるから神社の人の商売上がったり下がったりなんだよ！！」

「「はぁ、そうカッカ怒るな2人とも」」

「「怒るわァアア！！！」」

――ドゴォォン！！――

「「「「あべしいいいいいいいっ…！！（なんで俺まで！？by、琢磨）」」」」

シンイチとレンの同時キックにより、琢磨は霧沢と手塚の巻き添えを喰らって吹き飛ばされてしまう。

～～～～～～～～～

――ドゴォォン！！――

鷹取　美咲

「何だろう今の音？花火…？」

三人が蹴り飛ばされた音を新年のお祝いか何かの花火を打ち上げら

れた音と勘違いをする美咲。今健人と美咲は、先ほど申したとおりおみくじを引いていた。

「いや、冬に花火打ち上げるのはどうかと思うぞ。いくら正月とは言うけど……」

「う～ん、そうかな？あ、健人君のおみくじはどうだった？私は末吉だったわ」

「えっと、俺は大吉だな」

「え、本当！？見せて！！」

美咲は健人の持っているおみくじの紙を見ようとする。その際健人と顔との距離が数ｃｍになるが、当の本人は気付いてなく、健人は顔が赤くなってしまう。

「／／／／み、美咲／／／／か、顔近い……」

「え？何…？」

「いや……なんでもない……」

周りから見ればいちゃついているカップルに見えなくもない健人と美咲たっだが、そんないい２人の雰囲気を壊すかのように悲鳴が上がる。

「!?何だ…!?」

健人が振り向くと、自分達と同じくらいの年の茶色のセミロングをした女の子がいかにもガラの悪い男に絡まれていた。

「っく、たまにいるんだよなああいうの。美咲、ちょっと助けに行ってくる」

「え、ちょっと待って健……いっちゃった…」

健人は美咲の言葉を最後まで聞かないで女の子の助けに行ってしまう。ふと、美咲はある既視感(デジャブ)を感じた。

「あれ…?あの子どっかで見たことあるような……」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「ちょっと離して!!」

「へへ、いいじゃねえか。俺とちょっと遊ぼうぜ?」

「いや!!」

――ドゴォォン!!――

「ひでぶっ！？」

男は顔を歪ませて吹っ飛んでしまった。何故なら健人の強烈な飛び回し蹴りが彼の顔にクリーンヒットしたからだ。健人は上手く着地した後、真理に顔を向ける。

「おい、大丈夫か？」

「あ…は、はい」

真理は突然見知らぬ男の子――健人が助けに来た展開に驚く。

「この、何しやがるんだこのガキ！！」

男が体勢を立て直し、健人に襲い掛かる。が、今度は身体をひねってのカウンターキック（「仮面ライダーカブト」のライダーキック）が腹にめり込んで返り討ちにあってしまう。

「はぁ、もういいか？」

「ちっ、なめんじゃねぇぇえ！！」

男は懐から小刀を取り出して、健人の目掛けて振り下ろそうとする。

「死ねェェェええ！！」

「！？（くそ、このままよければこの子が怪我を……）…」

このまま自分が避ければ後ろにいる真理が小刀に切られるため健人は上手く身動きができながった。その時…

「待ちやがれゴォラァァァ！！！」

「！？何だ……！！」

突然聞こえてきた怒号に驚いた男が横を向くと、奇妙な袴を着た青年達――騒ぎを駆けつけたシンイチと翔哉の2人が鬼神の如くの殺気を放ちながらこっちに向かって来る姿があった。2人は袴で動きにくいはずなのにライダーに変身した時のように二人は大きくジャンプした。

「てめぇ、俺の大事な妹に……」

「貴様、僕の大切な人に……」

「「「手を出すんじゃねぇえええ！！！」」」

――バァアコォォオォォォン！！――

二人に蹴り飛ばされた男は、反撃をする暇も断絶魔を上げる暇もなく三度蹴り飛ばされる。しかも男の蹴り飛ばされた方向には健人がおり、健人が咄嗟に出した右フックがクリーンヒット。男はそのまま殴り飛ばされた後、神社の一際高い木に引っかかってしまった…。

～～～～～～～～～～

「大丈夫か、真理！？無事か！？」

「怪我はないですか、どこか擦り剥いていないですか、熱は無いですか！？」

「だ、大丈夫。というか大げさだって2人とも」

「2人とも、落ち着いてください」

気が気でなく慌てている二人に、いつの間にか側にいた剣助は袴の袖からハリセンを取り出して2人を叩く。そんなやりとりを見た後健人は真理に尋ねた。

「どうやら大丈夫のようだな」

「あ、はい。ありがとうございます」

「それほどでもねえよ。じゃ…」

「あ！あの…！！」

真理は思わず健人の手を触れる。すると突然真理の頭の中に映像が流れ込んだ。

――漆黒の闇が広がる空間に白い異形と戦う人影――

――黒い身体を駆け巡る赤い光を放つライン――

――銀色のアーマーと腹部に携帯電話が装備されたベルト――

――黄金色の大きな目の仮面の戦士――

まるで自分が知っている兄達（シンイチ）がカードデッキで変身し、ミラーワールドでモンスターと戦う仮面ライダーと何処か似ていた……。

「健人君！！」

真理は「はっ！！」と、現実に我を帰した。声をした方へ向くと、そこには前に音楽の発表会で知り合いお世話になった美咲の姿があった。同時に別の方から美穂と連児に少しボロボロな姿の霧沢と手塚が駆けつけて来た。

「大丈夫健人君!?怪我してない!?」

「大丈夫だって、心配するな」

「はぁ、たっくシンイチ。一体どこに言ってる…って、美咲さん…!?」

「あれ?本当だ」

「え…?真理ちゃんに東條くんに美穂ちゃん!?」

「「…え!?知り合い!?」」

美咲は東條、真理、美穂との再会に、シンイチと健人は四人が知り合いだった事に驚いた。これが大変な事件の前触れだと知らずに…

第九話／ＯＶＥＲ　ＤＲＩＶＥ　ＮＥＷ　ＲＩＤＥＲＳ（前書き）

どうも地水です。小説の更新が一週間ほど遅れてしまってスイマセン…

【ＬＩＧＨＴＮＩＧ　ＢＬＡＴ】

【ＪＯＫＥＲ　ＭＡＸＩＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ】

ダブル
「すみませんじゃすまねえだろうがぁぁぁバカ作者ぁっ！！！」

剣（ブレイド）
「刹那・Ｆ・セイエイ、作者を駆逐（もくひょう　ツッコミ）をする！！」

――ドガアァアアン！！（ライトニングブラストとジョーカーエクストリームが炸裂する音）――

い、いたたたた……何２人とも！！自分何かした！？

ダブル
「大有りだコンチクショーー！！なにこの俺、長瀬準一の配役を剣からダブルに変えてんだよ！！」

…？ああ、結果発表か……

剣
「俺達は別に構わないが、アンケートを送ってくれた皆さんに失礼だろ。貴様の気まぐれで迷惑かけさせるつもりか！」

あ…あの、待って！！待って待って待って……

ダブル（準一）＆amp;剣
「「お前の罪を数えろぉぉぉ！！！」」

ぎゃあぁぁぁぁああ！！！待ってりぃぃぃなアァァアアアア！！！

ダブル（来斗）
「はぁ、じゃあ作者がやられてるので僕がタイトルコール言っておくか。
ではリスさんとのコラボした第九話『ＯＶＥＲ　ＤＲＩＶＥ　ＮＥＷ　ＲＩＤＥＲＳ』、始まります」

第九話／ＯＶＥＲ　ＤＲＩＶＥ　ＮＥＷ　ＲＩＤＥＲＳ

ドーパンド襲撃から数日間が過ぎた。それから怪人達の襲撃はなく平和に包まれており、朝の玖楼国の城内の中庭にて、翼はディスクアニマル達の整備をしていた。

翔道　翼
「…これとこれでっと」

――ピィィィン！！――

アカネタカが甲高く鳴くと、羽根を羽ばたかせて飛び始める。

翔道　翼
「これで整備終わり。リョクオオザルとキハダガニを護衛でも入れるか」

サクラ
「翼くん！！」

サクラが翼の名を呼んで駆け寄って来た。サクラは翼の頭上を飛んでいるアカネタカを目を向けると微笑んだ。

サクラ

「その子、良くなったんだね」

翔道　翼

「まあな、こいつもこいつらもあの時活躍したんだからな」

――ピィィィン――

サクラ

「コッチにおいで」

――ピィィィィン！！――

サクラに呼びかけられるとアカネタカはサクラの頭上に飛んで行き、指し出した指に止まった。そこへ、士朗とセイバーが通りかかる。

セイバー

「士朗、やっぱり料理がいいですよ。士朗の料理でお礼をしましょう」

衛宮　士朗

「う～ん、だけど料理でいいのかな。ここは俺達が住んでる世界や月音や烈火達の俺達の世界に似た世界とはかなり文明や暮らしが違うって翼が言ってたから、少なくとも似た食材があるかどうか…」

セイバー

「大丈夫です。探せば何とかなりますし…」

翔道　翼
「セイバー、やっぱお前大食いキャラだな。」

セイバー
「誰が大食いキャラですか！！」

セイバーは声を上げて翼につっこんだ。翼は口から舌を出してからかい、セイバーは怒り危険を察知して逃げ出した翼を追い掛け回す。サクラと士朗は2人は苦笑いしながらその様子を見ていた。

あれから数日後、次元移動能力が壊れていて別の世界にも行けず自分達がいた元の世界にも戻れないと翼の口から告げられ落ち込んでいた2人に藤隆達のはからいで、解決策が浮かぶまでしばらく玖楼国にいることになった。なお、この時とある事件が起きたのだが、それはまた別の話で。

――ピィィィン！！――

突然今までサクラと戯れていたアカネタカが甲高く鳴くと、サクラから離れて何処かへ飛んでいってしまう。

サクラ
「…？どうしたんだろう…」

翔道　翼

「何か感じ取ったようだな。サクラ、少し付いていって来る。いくぞ士朗」

衛宮　士朗
「え！？なんで俺だけ、なんでさ！？」

セイバー
「あの、私は…」

翔道　翼
「お前はサクラを側にでもいろ、この前みたいにサクラを狙って襲ってくるかもしれないからな。士朗、行くぞ！！」

翼は昔のように偽悪的に振舞うと、士朗の服の襟元を掴み強引に連れて行きアカネタカを追いかける。

～～～～～～～～～～

翼と士朗の2人はアカネタカを追いかけていくと玖楼国の近くの砂丘に着いた。するとこちらに飛んでくるアカネタカの姿が見えてくる。

――ピィィィン！――

翔道　翼

「…ふうぅん、何か見つけたのか」

衛宮　士朗
「…！翼、アレ！！」

士朗が指差した場所には誰が倒れている姿があった。２人が駆け寄ってみると、一人は黒髪でもう一人は茶色に近い色の髪をしており、後の一人は、３人とも玖楼国にはない服…自分達が知っている着物に似ていた。

衛宮　士朗
「翼、この子たちは…」

翔道　翼
「…大丈夫、死んでない気絶してるだけだ。それより怪我してる…助けないとな」

衛宮　士朗
「じゃあ、お城に運んで撫子さんに治療を……」

「見つけたぞ！！被検体Ｈ！！」

２人が声のした方へ首を向けた。そこにはミミズの特性を持った「ワームオルフェノク」、コガネムシの特性を持った「スカベラオルフェノク」、ジャガーの特性を持った「ジャガーオルフェノク」、魚の特性を持った「スティングフィッシュオルフェノク」、巻貝の

特性を持った「シェルオルフェノク」の五体の灰色一色の異形として蘇生した人類の進化系「オルフェノク」の姿があった。

翔道　翼
「あらら、オルフェノクかよ。たっくお前等、何？何か用？」

ワームオルフェノク
「ふん、黙れ人間が。我らはそこの女に用がある」

スカベラオルフェノク
「そいつらを渡せば、貴様等だけも生かしてやるが…」

衛宮　士朗
「はぁ、随分大層な口をするんだな」

翔道　翼
「断るバーカ。一度死んだくせに未練垂れ流して結局死に切れなかった死に底無いのヤツの指図なんて聞きたかない。それに俺はオルフェノクと共存する派だから、お前等この世界で何もしなければ見逃してやるが？」

翼の言葉を聞いたオルフェノク達は激怒し始める。

ジャガーオルフェノク
「何だと！？我ら人類の進化系オルフェノクを愚弄する気か！？」

スティングフィッシュオルフェノク

「人間と共存など、反吐がでるわ！！まるでファイズのような夢を言いやがって！！」

シェルオルフェノク
「貴様など灰にしてくれるわぁぁ！！」

翔道　翼
「何処の悪党だ……たとえ夢だろうと守らなくちゃいけないんだよ。士朗！！」

衛宮　士朗
「ああ！！分かってる！！」

翼はバックルを取り出して腰につけ、士朗も腰を両手で覆い被せアークルを出現させる。

翼＆amp;士朗
「「変身！！」」

【ＫＡＭＥＮ－ＲＩＤＥ！ＤＨＩＦＩＲＤＴ！！】

翼の周辺に羽の粒子と十体の虚像が出現し、それらが翼に重なりディファーストに変身した。士朗も身体に生体装甲を纏ってクウガに変身した。

ディファースト

「さて、行くぜ」

ディファーストとクウガはオルフェノクたちに向かって走り始め、ディファーストはワームとスカラベとシェル、クウガはジャガーとスティングオルフェノクとそれぞれ対峙し始める。

ワーム&スカラベ&シェル

「「「死にやがれェェ！！」」」

ディファーストに同時攻撃を仕掛けるオルフェノク三体だが、ディファーストは高く飛び上がって避けて、三人の頭上から踏みつけ、遠くへ着地すると一枚のカードを装填する。

【ＡＴＴＡＣＫ－ＲＩＤＥ！ＳＵＮＬＩＧＨＴ　ＨＥＡＲＴ！！】

ディファーストの手元にかつて「カブトの世界」で出会った仮面ライダーカブト／武藤カズキが所有していた突撃槍型（ランス）の武装錬金「サンライトハート」が出現した。武器が出現した事にオルフェノク達は驚愕するが、シェルオルフェノクが右腕についている殻をドリルのように旋回させながら突進する。

シェルオルフェノク

「フン！何をしたのか知らないが、貴様などこのドリルで貫いてくれるわぁぁ！！」

ディファースト
「……」

無言のままディファーストはシェルオルフェノクの殻をサンライトハートの刀身で受け止めた。サンライトハートは錬金術によって作られ、かなりの強度を持つ合金のためシェルオルフェノクの殻が無残な音と共に壊れてしまう。

シェルオルフェノク
「何だと・・・俺のドリルが!?」

ディファースト
「…貫け、ランスの武装錬金……サンライトハート!!」

掛け声と共にサンライトハートの矛先が分解し、巨大な山吹色のエネルギー（サンライトイエロー）が放出され、文字どうりシェルオルフェノクを貫いた。シェルオルフェノクは青白い炎と共に灰となって爆発する。

スカラベオルフェノク
「っち、貴様ァ!!」

ワームオルフェノク
「おい、待て!!」

スカラベオルフェノクは同胞であるシェルオルフェノクが倒されて激怒し、ワームオルフェノクの静止を聞かずに一人ディファーストに向かって突っ込む。だがディファーストは何も動じずにサンライトハートを大きく振り上げ、スカベラオルフェノクを一刀両断に叩き切った。ディファーストはサンライトハートの矛先をワームオルフェノクに向け指し示す。

ディファースト
「次はお前の番だ」

ワームオルフェノク
「くそ!!付き合ってられるか!!」

ワームオルフェノクはディファーストの目の前から逃げる。一方その頃、クウガはマイティフォームで格闘戦でオルフェノクたちを追い詰めてしていた。

スティングフィッシュオルフェノク
「くそ、なんて強さだ!!貴様は一体…何者だ!!」

クウガ
「パクっていうなら通りすがりの仮面ライダーだ、覚えとけ……オリャァァアア!!」

クウガは翼やディケイドに変身する者達の決めゼリフを言うと、高くジャンプして封印エネルギーを込めた飛び蹴り『マイティキック』

をスティングフィッシュオルフェノクに繰り出し爆散させる。ジャガーオルフェノクは爆発によって吹き飛ばされるが、すぐ体勢を立て直す。

ジャガーオルフェノク
「ちっ、なめるな人間が！！」

クウガに毒づくとジャガーオルフェノクは、クロックアップには及ばないが超高速で移動し始める。クウガは一瞬驚くが、すぐに冷静に戻ると投影開始（トレースオン）で銃に似た形の鉄を作り出した。

クウガ
「いくら早く動いても、一応対応できるんだよ！超変身！！」

クウガはマイティフォームから研ぎ澄まされた感覚の持った緑のクウガ「ペガサスフォーム」の姿になり、鉄は「ペガサスボウガン」に再構築される。
クウガは超感覚を使いジャガーオルフェノクの位置を探し、ペガサスボウガンのレバーを引っ張る。

クウガ・ペガサスフォーム
「…！そこか！！」

――ビュゥン！！ドガァァン！！――

空気を圧縮した矢『ブラストペガサス』がジャガーオルフェノクに直撃し、その直後青白い炎が巻き上がった。クウガはそれを見届けると、ペガサスからマイティフォームの姿に戻る。

クウガ・マイティフォーム
「…ふう、終わったか」

ディファースト
「士朗！！」

オルフェノク達との戦いを終えたディファーストが駆け寄ってくる。

クウガ
「翼、そっちは済んだか？」

ディファースト
「いや、一体逃した。このまま何もしなければいいんだが…」

ワームオルフェノク
「うあぁぁぁぁぁぁぁああぁぁぁあああ！！」

その時向こうからワームオルフェノクの悲鳴が上がり、２人は驚いた。

ディファースト
「っち、既に後の祭りってか…」

そう毒づいてディファーストはクウガと共にワームオルフェノクの悲鳴がしたほうへ向かった。２人が駆けつけると、調度何処かから放たれた火炎と光弾がワームオルフェノクに炸裂し、身体から青白い炎を噴き出しながら倒れる姿があった。２人が火炎と光弾が来た方へ首を向けるとそこには…

龍騎？
「ギャォォン……」

真赤のスーツに銀色の鎧を身に付け、右手には龍を頭部のような籠手「ドラグクロー」、左手には龍を思わせる手甲「召喚甲ドラグバイザー」をはめた龍の騎士――仮面ライダー龍騎。そしてその隣には…

ファイズ？
「…ガァルルルル……」

黒い身体を駆け巡る赤く光るライン、フォトンストリームと巨大な黄色の単体眼（モノクロアイ）の仮面の戦士「仮面ライダーファイズ」がファイズフォンを変形させた銃フォンブラスターを構えている姿があった。どうやらこの２人がワームオルフェノクを倒したようだ。が、クウガ

は何故か少し戸惑い、ディファーストは浮かないオーラを出した。

クウガ・マイティフォーム
「龍騎に、ファイズ……まさか、今度は夏目君と烈火が前の俺のように……」

ディファースト
「いや、だったら地獄兄弟（キックホッパーとパンチホッパー）のようなライダーがいるはずなんだが……いや、どっちにしろあいつらは『操られてる』という嫌な事実は変わりないがな…」

そう、ディファーストとクウガ――翼と士朗の様子が変だったのはこの前のようにファイズと龍騎が操られて暴走していたのだ。暴走する相手を止めるのは双方危険なデメリットがあり、下手をすれば命が危険な場合がある。
そんな中、龍騎とファイズがこちらの存在を途端ドラグクローとフォンブラスターを乱射しながら襲い掛かってくる。

ディファースト
「くっ、どうやら何とかしないといけないらしいな…」

クウガ
「だな…」

龍騎
「グガァァ！！」

ファイズ
「ガアァァ！！」

龍騎とファイズはそれぞれドラグクローとデジカメ型パンチユニット・ファイズショットで2人の顔面を殴りつける。

クウガ
「いったた～～っ！！」

ディファースト
「この、ガキが……お尻ぺんぺんして、さらにお灸でもすえてやるか」

【ＦＯＲＭ－ＲＩＤＥ！ＨＩＢＩＫＩ－ＫＵＲＥＮＡＩ！！】

ディファーストは一枚のカードを取り出しながらそう呟きバックルに装填。電子ボイスと共に赤い炎に包まれ、姿が通常よりパワーアップした鮮やかな紅の音撃戦鬼「響鬼・紅」に変わる。

龍騎
「グガァアア！！」

龍騎は再びドラグクローを突き出し口から火焔放射を放つ。だが同じ炎属性のため響鬼・紅に変身したディファーストには小さなダメージでしかないので龍騎は火焔攻撃をもろともしないでそれどころ

か残り火を利用して炎に包まれたD響鬼のタックルを喰らって返り討ちにされてしまう。

龍騎
「ぐ、グガァア…」

D響鬼・紅
「どうだ？参ったか？」

ファイズ
「ガァァアア！！」

――ザシュン！！――

D響鬼・紅
「！？ぐっ！？」

背後からファイズの振り下ろした光剣「ファイズエッジ」がD響鬼に直撃する。D響鬼はよろけて膝を突いてしまい、そこに再びファイズが切りかかろうとする。

クウガ・ドラゴンフォーム
「させるかウォラァァアア！！」

だが棒術とスピードを優れた「ドラゴンフォーム」にフォームチェンジしたクウガが棒状の武器「ドラゴンロッド」を使ってファイズ

を薙ぎ飛ばし、D響鬼のピンチを救った。

クウガ・ドラゴンフォーム
「今だ、翼！！」

D響鬼・紅
「サンキュウ、士朗」

【ＡＴＴＡＣＫ－ＲＩＤＥ！ＯＮＩＺＵＭＥ！！】

D響鬼の両手から鬼爪が生え、それをファイズに向かって数発殴りつける。そんな中…

【ＡＸＥＬ　ＶＥＮＴ】

D響鬼・紅
「！？今のは…ぐわぁ！？」

クウガ・ドラゴンフォーム
「翼！！……うわぁあ！！」

ドラグバイザーの電子音がアドベントカードの名を告げると同時に、超加速能力を身に纏った龍騎が2人を襲う。D響鬼とクウガは何とか立て直すが、今までのダメージが表に出ていた。

D響鬼・紅
「っち、何でアイツ『アクセルベント』を持ってるんだよ！！本来それオルタナティブしか持ってねえだろ！！」

クウガ・ドラゴンフォーム
「翼、これじゃあ俺達がやられてしまう」

D響鬼・紅
「確かに、だが本気で戦ったらアイツらの命は確実に危険になる。どうしたら……」

【ＳＷＯＲＤ　ＶＥＮＴ】

【Ｒｅａｄｙ】

龍騎
「ガアァァア！！」

ファイズ
「グガァアア！！」

龍騎はドラグレッターの尾を意匠した竜青刀「ドラグセイバー」、ファイズはメモリーをセットしたファイズエッジを振り回しながら２人に襲い掛かろうとする……

――ブォォォンン――

…その時D響鬼・クウガと龍騎・ファイズの間にオーロラが遮り、龍騎とファイズはオーロラにぶつかって吹き飛ばされる。そしてオーロラの中から数人の仮面ライダー「ナイト」、「ライア」、「シザース」、「ライア」、「タイガ」に加えファイズの相棒である戦闘型ロボット「オートバジン」の姿が出現する。

D響鬼・紅
「!?何だ……お前等」

ナイト
「…アンタが翔道翼か?時間がないから手短に話す、俺達はあいつらを止めに来た」

D響鬼の質問にナイトが代表として答える。次にライアが口を開いた。

ライア
「俺達の仲間が妙なヤツの攻撃を受けた途端、まるで野獣のように暴れだしてそいつらと共に何処かへ行っちゃってな。あの2人を正気に戻すためには貴方の力が必要だ…」

龍騎＆amp;ファイズ
「「ガアァァ!!」」

剣を杖代わりに使って立て直した2人が一同に向かって駆け出してきた。D響鬼はナイト達を頷くと前に出る。

D響鬼・紅
「……大体分かった。後は俺に任せろ!!」

そういうと、D響鬼は龍騎達に向かって走り出しながら一枚のカードを素早く装填した。

【FINAL－KAMEN－RIDE!HI・HI・HI・HI・HIBIKI!!】

身体が業火に燃え上がり、紅蓮色の鎧に纏い小振りの刀「装甲声刃」の手にした『装甲響鬼』に変身し、瞬時に次のカードを装填する。

【FINAL－ATTACK－RIDE!HI・HI・HI・HIBKI】

龍騎&ファイズ
「「ガアァァ!!」」

D装甲響鬼
「鬼神覚声!!ハァァ!!」

D装甲は龍騎、ファイズの斬撃をすれすれに避け、すれ違い様に装甲声刃から伸びた炎の刃「鬼神覚声」を叩き付ける。

――ドガァァアン――

爆発と共に龍騎とファイズの装甲が消滅し、変身が解け少年の姿に変わって地面に倒れこんだ。D装甲――翼は暴走を止めたのにもかかわらずため息をつきながら呟いた。

D装甲響鬼
「はぁ…また厄介なことに巻き込まれたな…」

第九話／ＯＶＥＲ　ＤＲＩＶＥ　ＮＥＷ　ＲＩＤＥＲＳ（後書き）

～ツバサ×仮面ライダー通信～

ゼロノス
「最初に言っておく、今回は久しぶりにゲスト登場だ」

イクサ
「では、『アニメ&ゲームキャラ大集合シリーズ』から秋本優太、榊原綾華、村上絢、榊原光、茜、黒美の登場だ。お入りなさい！！」

優太
「どうもこんにちわ～。ってか何か偉そうだな…」

絢
「この前は雅也達がここに来たんだよな～～」

光
「ご招き頂いてありがとうございます」（デネブキャンディを貰ったため上機嫌）

デネブ
「いえいえ、あっ俺はデネブです。コレ、しいたけごはんどうぞ」

茜
「あ、どうもありがとうございます。あれ？黒美さんと綾華さんの姿がない」

ゼロノス
「それに翼の姿もないじゃねえか。たっく何処にいってやがるんだゲストほっといて…」

イクサ
「今すぐ探しに行きなさい！！」

優太
「黙りなさい！」

イクサ
「はい…」

【ＫＡＭＥＮ－ＲＩＤＥ！ＧＡＴＡＣＫ！！　ＡＴＴＡＣＫ－ＲＩＤＥ！ＣＬＯＣＫ　ＵＰ！！】

一同
「え！？」

綾華
「破刃・白百合！！」

Ｄガタック
「うおっと、あぶな！！」

黒美

「せいやあぁぁ！！」

Dガタック
「殺す気か！！」（白刃取りで受け止める）

一同
「ってえええええ！？」

優太
「何やってんだ2人とも！！勝手に俺の戦う相手とやってんだ！？」

綾華
「ああ、優太♪この馬鹿を斬ろうと…」

Dガタック
「誰が馬鹿だ！！というか死ぬわ！！」

優太
「やめんか綾華！！いくら名前間違ったくらいで、斬ろうとするな！！」

綾華
「で、でも作者が許してくれたのに……わかったわよ…」

～～～～

翼
「あ～死ぬかと思った」

優太
「すまねえな、俺の連れが……」

綾華
「っく、あの時上じゃなくて下だったら…」

茜
「何怖いこと言ってるのですか！！」

絢
「『文香（あやか）』と書かれなかっただけでも良いと思ってください」

黒美＆amp;光
「「何故ゆえ!?」」

ゼロノス
「そんなことより、料理持ってきたぞ」

デネブ
「今回は皆さんの大好物を作ってみました」

茜
「すいません、私達のために」

光
「……茜、ここは誤るよりお礼がいい……」

黒美
「…お、おいしそう…特に和食が…」

絢
「あちゃ～、こりゃおいしいわ～～」

イクサ
「さあ食べなさい、喜びなさい、楽しく濫觴しなさい！！」

翼＆amp;優太
「「お黙りなさい」」

イクサ
「……はい」

優太
「じゃあ、俺達はここで。みんなは楽しんで」

綾華
「え？どこにいくの？」

翼
「バトルだ」

ゼロノス
「率直だなおい！！アバウトすぎるだろ！！」

優太
「すぐに済ませてくるよ…」

そう呟くと、２人は何処かへ行ってしまう。

～～～～～

とあるバトルスタジアムにて…

優太
「さてと…人物カード「勇騎恐皇フォルテ」使用…」

優太の身体は紫の光に包まれ、優太はボロボロの茶色のマントで全身を包み込んでいる者――黒い闇と異名を持つ最悪最強のネットナビ『フォルテ』に姿を変える。

翔道　翼
「あの時は随分追い込まれたが、今度はそうはいかない…変身」

【ＫＡＭＥＮ－ＲＩＤＥ！ＤＨＩＦＩＲＳＴ！！】

翼はドライバーにライダーカードを入れ、ディファーストに変身する。そしてその後、優太フォルテ（以降、Ｙフォルテと表記）がこの世をすべてを憎んでいる瞳を口が開く。

優太（フォルテ）
「さあ、偽り破壊者よ。俺と戦う事を光栄に思え……そして闇の恐

怖を味わえ！！」

ディファースト
「イマジンに憑かれたような口ぶりだな……悪いが、俺は相手が闇でも光でも関係ない、何故ならその両方の力を持ってるんだ。そう簡単にはやられない！！」

まず最初にディファーストが動き、Ｙフォルテに拳を繰り出す。が、片手で受け止めると、そのままスタジアムの壁に目掛けて投げつける。

ディファースト
「うぉわあああ！！」

Ｙフォルテ
「ついでに受け取れ、バスターショット！！」

――ドドドドドドドッ！！ドガァァアアン！！――

無数の銃声と派手な音と共にスタジアムの壁が壊れる。壁はＹフォルテが放った無数の光弾によって瓦礫と化してしまう。

Ｙフォルテ
「どうした？これで終わりか？」

D龍騎
「なわけない！！」

Yフォルテの直ぐ近くのスタジアムの壁…いや、その壁にはめ込まれた鏡から龍騎にカメンライドしたディファーストが現れ、Yフォルテの背中を本来オーディンの武器である『ゴルドセイバー』でX字に切り裂いた。

Yフォルテ
「ぐごぉ……っく、まさか鏡の中に飛び込んだのか？」

D龍騎
「そういうこと」

優太の言ったとおり、あの時バスターショットが着弾する寸前、「KAMEN－RIDE　RYUKI」のカードを使い龍騎の姿になり、壁のガラスに入りミラーワールドに突入して銃撃を防いだのだ。そして優太の近くの鏡に移動する際に「ATTACK－RIDE　STRANGE　VENT」のカードを使いゴルドセイバーを召喚し、不意打ちをかけたのだ。

Yフォルテ
「今のは、きいたぞ」

D龍騎
「そうかよ。ま、最強のライダーオーディンが持つ武器だからな！

！」

D龍騎は再びYフォルテに向かってゴルドセイバーを振りかざした。だが、彼の手元に深紅の刀身を持った太刀『紅』が握れており、ゴルドセイバーを弾き飛ばすとD龍騎に大きな一振りを放つ。

D龍騎
「なっ！？ぐごぉぉぉ！！」

巨大な斬撃がD龍騎に襲い、地面にめり込んでしまう。同時に龍騎の姿からディファーストの姿に戻った。

Yフォルテ
「…気の毒だが、コレで決める……」

そう呟くとYフォルテの両腕が獅子のような怪物――電脳獣『ゴスペル』に変化し、口から邪悪な炎が噴き出す。

Yフォルテ
「極上の憎悪の炎を喰らえ…

…ダブル…バニシングワールド！！」

ギャォォォォォオオンッ！！

咆哮と同時に一気に炎が放たれ、ディファーストごとスタジアムが燃え上がる。

Ｙフォルテ
「……」

燃え上がるスタジアムを上空から見るＹフォルテ。

Ｙフォルテ
「……俺とお前の絆は、そんな容易いもんじゃないだろ……そこにいるだろ」

「とある人物は言っていた……

俺の進化は光より速い。全宇宙の何者も俺の進化にはついて来られない…てな」

Ｙフォルテはふと太陽の方へ見上げる。するとそこにはアーマーを展開させて浮び上がっている光を支配せし太陽の神とふさわしい姿

をした「Dカブト・ハイパーフォーム（ディファースト）」の姿があった。どうやら当たる寸前にDハイパーになると、ハイパークロックアップで逃れたらしい。

Yフォルテ
「フン、それでこそ俺の敵だ…これでけりつけてやる」

Dカブト・ハイパーフォーム
「それはこっちのセリフだ……いくぞ」

【FINAL－ATTACK－RIDE！KA・KA・KA・KA・KA BUTO！！】

Yフォルテ
「太陽など俺の暗闇（にくしみ）に飲み込んでやる…

アースブレイカァァァァァーーー！！」

Dカブト・ハイパーフォーム
「……ハイパー、キック」

左手から放たれた紫の巨大な閃光『アースブレイカー』と、タキオン粒子が圧縮された光輝く右足での飛び蹴り『ハイパーキック』がぶつかり合った。

そしてその後、スタジアム「だった」場所には疲れて眠った優太と翼の姿があったとさ…。

chapitre5／特別編　仮面ライダーディファースト　再会の救済者～虚

今回はラージさんの作品『仮面ライダーディロード　世界の救済者』へのお返しコラボです。

時系列的には、ライダー大戦後を描いてます。こちらは本編と比べて更新は遅れる可能性があります。出来上がり次第、更新します。

こんな作者の小説を楽しんでください。それでは。

chapitre5／特別編　仮面ライダーディファースト　再会の救済者～虚

とある世界のもう使われていない廃工場にて、様々な種類が入り混じった怪人軍団とたった一人で戦う仮面ライダーがいた。

???
「ハァァァ！！」

怪人達
「ぐあぁぁあぁぁぁぁあ！！」

イエローと黒を基調としたボディに攻撃的なライドプレードを持つ灰色の瞳の仮面の戦士――かつては『世界の終焉者』と呼ばれ、現在は『世界の救済者』として仲間達と共に異世界を旅をしている砕谷廻が変身した最悪最強のライダー『仮面ライダーディロード』は、圧倒的な強さで怪人達を蹴散らしていた。

ディロード
「おいお前等、俺はお前等のボスに用がある。お前等のような弱い雑魚は引っ込んでろ」

イマジン
「っは、誰が雑魚だ！！貴様を血祭りにしてくれるわぁぁあ！！」

一体のイマジンが無謀にもディロードに向かって突っ込んで行く。

ディロード
「うざい、くたばってろ！！」

――バゴォォン！！――

イマジンはディロードの拳の一撃で空高く殴り飛ばされ、哀れにも宙を舞ったまま爆散してしまう。ディロードの強さに驚愕する怪人軍団だが、ディロードはお構いなしに腰の本型ツール「ライドセイバー」を剣状にして一枚のカードをベルトに装填する。

【ＡＴＴＡＣＫ－ＲＩＤＥ！ＥＸＴＲＡ　ＳＬＡＳＨ！！】

ディロードは『ディロードエクストラスラッシュ』を発動させ、光を帯びたライドセイバーを怪人軍団に一体一体確実に斬り付ける。怪人達はそのまま先ほどのイマジンの同じように爆散してしまった。

ディロード
「ふう、終わったか……」

――ギャアァァァオォォォォン！！――

ディロード

「！？」

ディロードが振り向くと、そこには腹部が蜂のような鳥と蝙蝠が混じった怪物――『キガンテスヘブン』、金色の蛇のような身体をくねらせている龍――『ギガンテスハデス』、六つの眼と三本の角を持った黒い牛――ギガンテスヘルの先ほど倒したイマジン達のイメージが暴走し怪物になった『ギガンテス』の姿が大量にあった。

ディロード
「っち、イメージが暴走したのか……こりゃ久しぶりに手こずるな……」

ギガンテスヘル
「ガァァアアア！！」

一体のギガンテスがディロードに迫ってくる。ディロードはディエンドライバーと酷似した召喚銃『コールドライバー』を取り出して、ギガンテスの顔や足元を狙って乱射する。

ギガンテスヘル
「ギャァァアアァァアア！！」

ダメージは与えたものの、突進の勢いは衰えずに突進してくる。ディロードはライドセイバーからカードを抜き出そうとするが……

【ＦＩＮＡＬ－ＡＴＴＡＣＫ－ＲＩＤＥ！

ＦＡ・ＦＡ・ＦＡ・ＦＡＩＺ！！

Ｂ・Ｂ・Ｂ・ＢＬＡＤＥ！！

ＫＩ・ＫＩ・ＫＩ・ＫＩＶＡ！！】

【ＦＩＮＡＬ－ＡＴＴＡＣＫ－ＲＩＤＥ！

ＫＡ・ＫＡ・ＫＡ・ＫＡＧＡＹＡＫＩ！！

ＫＯ・ＫＯ・ＫＯ・ＫＯＫＵ－Ｏ！！

Ｃ・Ｃ・Ｃ・ＣＲＥＳＴ！！

ＤＩ・ＤＩ・ＤＩ・ＤＩ‐ＧＵＩＤＥ！！】

ディロードライバーと似た電子音が響くと同時に、六つの光がギガンテスの肉体を貫き、ギガンテスヘルは爆発してしまう。
ディロードが振り向くと、自分に向かって数人の仮面の戦士が駆け寄ってきた。

ディケイド・コンプリートフォーム
「廻、俺達も混ぜてもらおうか？」

ディロード
「…士、それと皆……」

闇を切り裂き、光の導く戦士・ファイズのファイナルフォームライド形態の巨大光線銃『ファイズブラスター』を肩に背負った銀色の身体に胸と両肩にクウガからキバまでのライダーカードが飾られたヒストリーオーナメントを纏うライダー――廻と似た存在の男・門矢士が変身した世界の破壊者『仮面ライダーディケイド・コンプリートフォーム』。

進化し続ける蒼き剣士・剣のファイナルフォームライドで超絶変形させた大剣『ブレイドブレード』を軽々と手に持つ魔人と思わせる漆黒の身体に四本の黄金の角、正義の光を宿った赤い瞳を持った『究極の闇』と呼ばれた姿になった超古代の戦士――クウガの世界出身の青年・小野寺ユウスケが変身した『仮面ライダークウガ・アルティメットフォーム』。

闇を統べる王・キバのファイナルフォームライド形態であるキバットを獏した弓矢『キバアロー』を背中に担ぎ、女性を思わせるフォルムをした純白と青紫のボディのキバと酷似した姿をしている女剣士――光写真館の女性・光夏海がキバーラの力を借りて変身した『仮面ライダーキバーラ』。

炎、風、雷の属性を持った白銀の音撃戦士・「輝鬼」のファイナルフォームライド形態の巨大な音撃音叉『カガヤキオンサ』を手にしているＧ３－Ｘと酷似した黒い装甲と青い瞳の仮面ライダー――新たなるライダーの一人・リュードの世界の出身の青年・鉄和雄が変身した『仮面ライダーＧ４』。

時の守護者の一人・「刻王」がファイナルフォームライド形態のデンカメンソードに似た剣『コクオウセイバー』を担いでいるアーマーに水色の刺青が入った電王――ネガの世界の出身のボーイッシュな女性・時峰劉子が変身した『仮面ライダーネガ電王』。

四つの紋章が刻まれた死神・「クレスト」がファイナルフォームライドした巨大鎌『クレストデスサイズ』を掴んでいる銀色のボディと新緑色の瞳の月の超子――ＢＬＡＣＫ／ＢＬＡＣＫ　ＲＸの世界でＲＸと十人ライダーの魂を受け継いだ青年・秋月信彦が変身する『仮面ライダーＳＨＡＤＯＷ　ＲＸ』。

彼らの前に立つグリーンと黒の可憐な女性ライダー――廻の幼馴染であり、互いに相思相愛の関係の女性・彩条流姫が変身した『仮面ライダーディガイド』。

今まで苦難を乗り越え、数々の危機を打ち砕き旅をしてきた一同がそろっていた。先ほどの攻撃はディケイドとディロードから貸したファイズ、剣、キバ、輝鬼、刻王、クレストのカードをディガイドライバーを使って召喚し、ファイナルフォームライドさせた後六人が放ったようだ。

ディガイド
「たっく廻、どんどん先に行かないでよ！アタシたちの活躍がないじゃん！！」

ＳＨＡＤＯＷ　ＲＸ
「まあまあ、落ち着いて流姫」

G４
「廻さんが先陣切って突っ込んでくれたおかげで私達やりやすかったですよ」

ネガ電王
「流石ボク…否、俺の一目惚れした人だ♪」

場の和みかかろうとした瞬間、ギガンテスの荒々しい咆哮が空気を打ち壊した。ギガンテス達は辺りの建物を破壊をして被害を広めている。

ディケイド・コンプリートフォーム
「和んでいる場合か。いくぞ、ユウスケ」

クウガ・アルティメットフォーム
「ああ、準備はできてる！！

ディケイドはクウガの答えを聞くと、バックルから携帯端末型ツール「ケータッチ」を取り出してクウガの描かれた紋章を触れる。

【ＫＵＧＡ！ＫＡＭＥＮ－ＲＩＤＥ　ＲＩＳＩＮＧ　ＵＬＴＩＭＡＴＥ！！】

ディケイドがクウガの紋章を触れるとクウガの姿は金の装飾が入り、禁断の闇の異名を持つ『ライジングアルティメットフォーム』に変

わる。ディロードもコールドライバーにカードを装填すると、目の前に向かって放つ。

【ＦＩＮＡＬ－ＫＡＭＥＮ－ＲＩＤＥ！ＤＥ・ＤＥ・ＤＥ・ＤＥＮ－Ｏ！！】

デンカメンソードを持った電王・ライナーフォームが召喚する。ディロードは続いてカードをコールドライバーを装填する。

ディロード
「ギガンテス相手なら、これが適応だな」

【ＦＮＡＬ－ＦＯＲＭ－ＲＩＤＥ！ＤＥ・ＤＥ・ＤＥ・ＤＥＮ－Ｏ！！】

ライナーフォームに向かって発砲すると、ライナーフォームの身体が光に包まれデンライナーと同じ姿をした時の列車「デンライナー」に超絶変形させる。

ディロード
「２人とも、乗り込め」

クウガ&ディケイド
「ああ！！」

答えを聞くとディロード、ディケイド、クウガの三人はデンライナーに乗り込んだ。先頭車ではマシンディローダーが既に搭載されており、ディロードはディローダーに跨るとデンライナーを起動させ走らせる。

ギガンテス
「「ギャアアアアアアア！！」」

ギガンテス達はエネルギー弾を口から発射するが、デンライナーは頑丈な装甲を持つため諸共せずギガンテス達に体当たりをする。そしてギガンテスの大群からそのまま上空へ抜け出すと、デンライナーのドアからディケイドが共に一枚のカードを腰の左サイドのバックルに装填し、クウガと共に飛び上がる。

【ＦＩＮＡＬ－ＡＴＴＡＣＫ－ＲＩＤＥ！ＫＵ・ＫＵ・ＫＵ・ＫＵＧＡ！！】

ディケイド＆ａｍｐ；クウガ
「「はぁぁぁぁぁあああ！！」」

ディケイドとクウガの両足に膨大なエネルギーが集結させて放つ飛び蹴り『ライジングアルティメットキック』をギガンテス達に放つ。直撃すると同時に巨大な火柱が現れ、ギガンテス達の大半が炎に飲み込まれる。そして残ったギガンテスたちに向かって……

【ＦＩＮＡＬ－ＡＴＴＡＣＫ－ＲＩＤＥ！ＤＥ・ＤＥ・ＤＥ・ＤＥＮ－Ｏ！！】

ディロード
「ディロードフューチャー！！」

大声で叫んだその直後、デンライナーは全ての車両の武器を展開させ、ギガンテスに目掛けて一斉放火を浴びせる。そして止めにデンライナー自らギガンテスに向かって突進し、ライナー電王のＦＡＲ『ディロードフューチャー』を決めた。

～～～～～～～～～～

戦いが終わった後、廃工場だった場所に一同が集まっていた。

門矢　士
「どうだった？「奴ら」はいたか？」

砕谷　廻
「いや、いなかった……俺が来た頃にはもう怪人達を残して蛻の殻だった」

廻は士に聞かれるとそう言うと、一同の顔が暗くなる。

光　夏海
「手がかりは、なしですか……」

彩条　流姫
「でも、見つけなきゃいけないんだよね。あのカードを…
…ディロードのＦＫＲのカードを奪われたからね…」

ディロードのファイナルカメンライド――それはかつて多くの仮面ライダー達を葬り去った最強最悪の力の秘めた世界の終焉者と化したディロード『デスエンドフォーム』である。あまりにも強大な力を秘めているため、最悪の場合すべての世界は破滅しかねない。廻はこの姿に何回か変身したことがあり、その度に流姫や信彦達の大切な人達を傷つけてしまった。

小野寺ユウスケ
「早く見つけないと……このままじゃ」

秋月　信彦
「何か手がかりでもあれば……」

キバーラ
「ちょっとー！みんなーーー！！」

深刻の空気の中、白い蝙蝠――キバの世界出身のキバット族のモン

スター・キバーラが何か慌てながらやって来る。キバーラの両足にはライダーカードが握られていた。だが廻がキバーラからカードを取って近くで見ると、色はカメンライドやアタックライドの赤やファイナルアタックライドのような黄色のカードではなかった。

鉄　和雄
「あれ？それって……」

時峰　劉子
「廻と同じライダーカード…？でも色が違う。」

2人はキバーラが持ってきた青いカードを見てそう言った。他の五人も青いカードを見て困惑する。

砕谷　廻
「これは……」

キバーラ
「フフフ……廻、それは貴方が戦友との再会を導くとっても素敵な贈り物よ♪」

キバーラは愉快そうに笑う。廻が見つめているそのカードに描かれていたのは砂漠に佇む翼を思わせる二つの塔と模様が入った一枚の羽の絵だった。

～～～～～～～～～

玖楼国の特徴とも言える王族だけが入れる二つの翼のような外見をした二つの塔のような遺跡の上にて、その遺跡の真上に翔道　翼の姿があった。

翔道　翼

「……今日は妙な風が吹く、何故かそんな気がする……」

まるで懐かしそうに翼は呟いた。手元には見たこともない色を失った一枚のカードが握られていた。

第十話／Fのささやき／沸騰したお湯は蒸発するだけ（前書き）

どうも地水です。久しぶりの更新ですね。

今回は戦闘シーンがないのであしからず。

では第十話『Fのささやき／沸騰したお湯は蒸発するだけ』、始まります

第十話／Fのささやき／沸騰したお湯は蒸発するだけ

とある次元にて、一際大きい高層ビルの屋上に鳴滝の姿があった。その後ろには「シンイチ・健人達の世界」で任務を終えて帰って来て、黒いオートバジン――ブラックバジンに座って夜空に輝く星々を見つめるデルタ、デストワイルダーと戯れているタイガ、鼾を掻きながら横になって寝ているストレンジイマジンの姿があった。

鳴滝
「…で、どうだった。龍騎とファイズをあいつらにぶつけたか？」

デルタ
「ええ、衛宮士朗と同じように操ってディファーストにぶつけてみましたよ。ただ、まだ色々と若いためクウガのようにいかないかと…」

タイガ
「……それに……私達の他に、別の世界から来た者がいて……龍騎とファイズの仲間、翼の元へ送った……」

ストレンジイマジン
「ぐごぉぉぉ～～～、ぐごっ！？……何でも『業炎の顎』がてこずったらしいぜ？『白銀の太陽の顎』と匹敵する実力の者が押されたってことは相手もかなりのつわものって事だけど……ぐごぉぉ～～～」

鳴滝の問いに三人は答える。それを聞いた鳴滝は苦虫を噛んだ様に

顔を歪ませた。

鳴滝
「次元を超え、様々な世界に干渉する力を持つ実力者・・・・紅渡達か。あいつらなら『業炎の顎』を倒すだけの力は持っている・・・・」

タイガ
「紅渡・・・・確か黄金の方のキバに変身する者・・・・キバの中でも最強の者・・・」

ストレンジイマジン
「それに、野上良太郎に天道総司、響鬼に剣崎一真・・・・・・相手がディケイドより厄介で悪すぎて、その手が全然出せねえよ・・・・ぐごぉぉぉぉお〜〜〜・・・・・」

デルタ
「だが、今草加雅人と木野薫――カイザとアナザーアギトが翔道翼を潰すために『キバの世界』と『カブトの世界』でそれぞれ青野月音、武藤カズキを襲撃しているはずだ。衛宮士朗と同じ方法で暴走させれば、翔道翼や紅渡たちを倒せますが……」

デルタが宥めると、鳴滝の表情が和らぐ。

鳴滝
「そうだったな。それにあの龍騎とファイズ2人がどうなろうと翔道翼に痛手を負わせるだけはできる。そこに業火の顎と、やつらの

世界にいたライダーを襲撃させる……翔道翼、これで貴様を……ふはははははは！！」

鳴滝の高らかと野望に満ちた笑顔と共に、夜の空に高らかと笑い上げるのであった……

鳴滝
「ぐふぉっぐふぉっ！！む、むせた……」

デルタ&タイガ
「「・・・・・・」」

ストレンジイマジン
「ばっかじゃなかろうか……ちょっくら暴れてくるか」

呆れた冷たい眼で鳴滝を見る2人、そしてストレンジは肩を回しながら立ち上がるとオーロラの壁を出すと、何処かへ行ってしまう。

～～～～～～～～～～～～

玖楼国の城内の一つにて、何処かの世界から来た仮面ライダー龍騎と仮面ライダーファイズに変身していた2人の青年を翼と撫子が看病していた。先ほどオルフェノク達に追いかけられていた少女達…別の世界から来たナイト／黒崎連児とその仲間達からよると黒い髪の美少女は「鷹取美咲」、茶色に近い色の髪の子は龍騎に変身して

いた青年の妹の「龍牙真理」、白い着物を着た子は「白鳥美穂」という名前らしい。今その三人はサクラとセイバーと別の部屋にいる。

翔道　翼
「すいません撫子さん、手伝わしてしまって…」

撫子
「いいのよ。困ってる人はほおっておけないし、それにこういう事をしないと神官としての力もなまってしまうから」

翔道　翼
「なまるってしまうねぇ。鍛えないとってか・・・・・・」

翼は頭の中にとある響鬼の世界の響鬼さんを思い浮かべると、響鬼さんのようにさりげなく「シュッ」と言いながら二本指を立てた手で敬礼の仕草をする。

撫子
「でも、まだ信じれない。なんでこの子達が理性を失って襲い掛かってきたのかしら…」

翔道　翼
「俺にもわかりません……ただ分かっている事は不完全だけど以前士朗達の操れた術と同じモノ使ったって事と、２人は俺を狙ってきた事だけです」

撫子

「…？何故そうと分かったのですか？」

撫子は雰囲気を変えて、翼に質問をする。

翔道　翼
「あいつらの行動がちょっと引っかかっていて……もしかしたら、何かの前兆かもしれません。流石の俺でも…」

撫子
「といっても、今貴方は別の世界へ行けないのでしょ？大丈夫、この国を守るのは神官の勤めでもあるんだから。少しでも力になれば幸いよ」

翔道　翼
「ご気持ちはありがとうございます。でも……」

衛宮士朗
「お～い、翼！！ちょっと来てくれ！！」

外の窓から士朗の声が聞こえてきた。撫子に「ここは私が何とかするから」と言われ、翼は士朗の声が聞こえた方へ向かう。外の中庭に出てみると、龍騎・ファイズ達と同じ世界からやって来て翼――ディファーストを助けた仮面ライダー達……ナイト――黒崎連児、ライア――手塚海斗、ベルテ――霧沢隠、タイガ――東條翔哉、シザース――市村剣助がまるで熱中症にやられたように地面に這いつくわってダウンしていた。

黒崎　連児
「……あ、暑い……」

手塚　海斗
「あつ、すぎる……」

霧沢　隠
「ここは夏の熱帯雨林か……」

東條　翔哉
「だ、だったら雨でも降ってこの温度……下げて欲しいですよ……」

市村　剣助
「だ……だけど、ここ砂ばっかりで乾燥してるから湿気も水分もないはずじゃ……」

黒崎　連児
「というか、暑くて暑くて死にそう……」

手塚＆amp;霧沢＆amp;東條＆amp;剣助
「「「そう何度も言っている方も、何度も聞いてるも暑くて暑くて死にそうだよ……」」」

衛宮　士朗
「翼、俺が話を聞こうとした途端、こいつら熱中症で倒れてしまって…」

翔道　翼

「脱水症状になりかねないな。というか、その袴がいけないだろ。たっく最近の若人はこんな暑さで倒れやがって」

衛宮　士朗

「いや、砂漠の暑さに慣れてない限り誰だってこうなるわ！！」

元々玖楼国は周囲が砂漠に覆われた平和な国で、シンイチ達の世界でいうエジプトなど同じ砂漠に覆われた乾燥地帯の辺境の国と酷似して、そのため日光を遮る雲も木も少なく昼は目茶苦茶暑く夜はとても寒いという急激な温度変化がある。

玖楼国の住人達にとっては平気なのだが、連児たちにとってはとてもきついのである。もし水あるとすれば玖楼国の住人が生活水と使用しているオアシスか、神官の魔力によって支えられている水が溜まっている遺跡ぐらい。

おまけに連児達は冬の時期に来た為、正月で着る袴姿なので余計暑っ苦しいのだ。

余談だが翼・士朗・セイバーの別の世界から来た三人が玖楼国の急激な温度変化に慣れているのは、士朗とセイバーの2人は翼と別れて自分の出身であるクウガの世界に戻って、武者修行で世界を各地を旅をしたのである程度暑さや寒さには慣れており、翼にいたっては様々な世界を巡り続けた事によって並大抵の人間より異常的な頑丈さと神体能力の体質になってしまった始末である。

翔道　翼

「仕方が無い。これを使うか…」

翼はどこからともなくディスクアニマル達を閉まっている物と同じ黒いケースを出し、地べたに置いて中を開く。だが中に入っていたのは起動前のディスクアニマル達ではなく、携帯やカメラなどの日常品と、それと対になるように同じカラーの数本のパソコンによく使うＵＳＢメモリのような端末が閉まっていた。

衛宮　士朗
「それは何だ？携帯にＵＳＢメモリ？」

翔道　翼
「擬似ガイアメモリ、略してギジメモリ。本来ガイアメモリはドライバーなしに地球の記憶が詰まっていて人間をドーパンドに変える厄介な物だが、これらは『メモリガジェット』を起動させるためのキーだ」

そう言うとメモリガジェットの中から楕円形の形をした緑のガジェットと音声を鳴らせるスイッチの他にもう一つのスイッチがついたギジメモリを取り出す。翼はメモリをもう一つの方のスイッチを押しながら口元に近づけ何か呟くと、メモリをガジェットに差し込む。

【ＦＲＯＧ】

電子音が鳴ったと思えば、ガジェットは電子音の名乗ったカエルのような形に変形する。（といっても、メモリがはみ出ているので何だか足が生えたお玉杓子にもみえるが）
カエル型ガジェット――フロッグポッドは翼の手元から飛び跳ね、

東條の所へ寄ってくる。

東條　翔哉
「あはは……何だか意識が朦朧としてきた。橋の先にお花畑が見えてくる……」

？？？

『東條さん、頑張って！』

東條　翔哉
「あはは、何だか真理さんの幻聴が聞こえてくる……」

龍牙　真理？
『東條さん、頑張って！立ち上がって。そしてわたしのためにみんなを運んで……できたらキスしてあげる』

――ガバッ！！――

東條　翔哉
「喜んで全力全身立ち上がらせて頂きますぅうぅッ！！」

まるで死んでいるゾンビが立ち上がったように、恋のパワーとやらで起き上がった東條。だが真理は以前東條とのデートの件で彼を「翔哉さん」と呼ぶため「東條さん」とは呼ばない、そもそも周りには真理の姿はない。だが何故真理の声が聞こえるのかというとそれは……

フロッグポッド
『東條さん、頑張って！立ち上がって。そしてわたしのためにみんなを運んで……できたらキスしてあげる』

先ほど翼がギジメモリに録音した声が真理の声のように変換されて、フロッグポッドから発声されているのだ。

衛宮　士朗
「なんでさぁぁぁーーーーーっ！！」

翔道　翼
「さっきギジメモリに俺の声を録音して、龍牙真理の声に変換した。愛しの天使の声援で恋の炎を燃え上がらせて復活させた」

衛宮　士朗
「干からびかけた人間を恋の炎に燃え上がらせるな！！水分少ないからすぐに燃え尽きて灰になって焼死体になるだろ！！」

士朗が翼に突っ込んでいる中、東條は連児を担ぎながらフロッグポッドに導かれながら運んでゆく。翼と士朗も剣助と手塚を背負ったが、隠が残ってしまう。

衛宮　士朗
「あ…しまった。俺と翼がこの2人を背負うとして、残りのこの人

は誰が…」

翔道　翼
「それなら大丈夫だ。考えがある」

そういうと何処からともなくサモンドライバーを取り出し、一枚のカードを装填する。

【ＫＡＩＺＩＮ－ＲＩＤＥ！ＮＡＺＣＡ　ＤＯＰＡＮＴ！！】

サモンドライバーから光が放たれ、独特な模様が入った青い身体と腰に以前襲撃したタブー・ドーパンドと同じメモリドライバー、首にマフラーを巻いている『ナスカの地上絵の記憶』が刻まれた蒼騎士『ナスカ・ドーパンド』が召喚された。

ナスカ・ドーパンド
「やぁ、仮面ライダー君。何か用かな？」

衛宮　士朗
「！？怪人を呼び出した？」

ナスカ・ドーパンド
「驚かなくてもいいよ。僕は君達と出会ったドーパンド…もとい怪人達とは違って、人を慈愛する心や感情を持っているから。で、話は戻って」

翔道　翼
「ナスカ、そこの青年を運んでくれないか？」

ナスカ・ドーパンド
「何だ。そんな御安い後とか…」

何故か盛り足りなさそうに残念な声を上げてしょんぼりしながら、
ナスカ・ドーパンドは隠を担いで翼と共に東條を追いかけた。

～～～～～～～～～

龍牙　シンイチ
「う……ううう、いたたたた……」

乾　健人
「身体がいってぇ～～～～……」

先ほどまで暴走していた龍騎・ファイズ…龍牙シンイチと乾健人が、
傷き痛んだ体を起こしながら目覚めた。

撫子
「あ、貴方達目覚めたのね。傷は浅いとはいえまだ身体を動かさない方がいいわ」

龍牙　シンイチ

「…？あなたは一体…」

乾　健人
「それにここは何処だ？」

撫子
「私の名前は撫子。で、ここは玖楼国。私の知り合いが貴方達を助けたのよ」

乾　健人
「？どういう意味だ？」

翔道　翼
「こういう意味だ。仮面ライダー龍騎、仮面ライダーファイズ」

そこへ手塚、隠、剣助を背負ってきた翼と士朗とナスカ・ドーパンドが部屋に入ってきた。２人はナスカ・ドーパンドの姿を見て一瞬警戒するが、背中に抱えている隠達が目に止まり一瞬戸惑う。

ナスカ・ドーパンド
「心配しなくてもいいよ。僕はドーパンドと言って君達の知っているオルフェノクやミラーモンスターとは違う」

そう言いながらナスカ・ドーパンドと翼と士朗は、近くにあったソファーに三人を座らせる。

乾　健人
「あんたが助けてくれたのか?てか、なんでファイズの事を知ってんだ?」

翔道　翼
「知ってるも何も、俺はファイズに変身したこともあるからそのくらい知ってる。後、龍騎もな」

シンイチ&健人
「「あ!?何だと!?」」

シンイチと健人は翼の言葉に驚く。そこへサクラとセイバーにが入ってくる。その後ろから美咲達三人が現れるが、その姿を見て健人とシンイチが眼を見開いた。

乾　健人
「／／／美、美咲……」

龍牙　シンイチ
「／／／美穂……」

シンイチと健人は顔を赤くする。何故なら玖楼国のドレスを着た美咲、真理、美穂が現れた。流石に砂塗れの着物姿のままじゃ可哀想なので、サクラが自分の服を貸してもらっている。サクラと年も近いため、服のサイズは丁度良かったので美人の三人が綺麗に見えた。

白鳥　美穂
「な、何よシンイチ。そ、そんなに見つめちゃって……べ、別にあんたのために着たんじゃないんからね」

翔道　翼
（どこのツンデレだ。優姫や心愛の所に行って指導してもらえ）

シンイチに見つめられて顔を赤くしながら、抽象的なツンデレ…もとい強気にふるまう美穂を見て翼は『Wの世界』の自称・鳴海探偵事務所所長の美少女・片桐優姫、『キバの世界』の赤夜萌香の妹・朱染心愛の名前を出して突っ込んだ。一方、健人と美咲はというと…

乾　健人
「……き、綺麗だな。み、美咲」

鷹取　美咲
「う、うん……」

乾　健人
（…何いってんだ俺は!!何だこの気持ち!?ドキが胸胸しやが…
…って違う違う違う違う違う!!俺なんで間違ってんだ!?胸がドキドキだろ!!つい目線が胸に……ってなに考えてんだ俺は～～～!!）

鷹取　美咲
（…うぅ、ちょっと胸が苦しいな…恥ずかしい。健人の前にこの姿はちょっと…って何言ってるの私!?）

互いにギクシャクした空気になり、何を言いたいのか分からなくなってショート寸前の2人。そんなやりとりの中、突然フロッグポッドが現れて真理の頭上に飛び乗った。

龍牙　真理
「あれ、何コレ？カエル？」

フロッグポッド
『東條さん、頑張って！立ち上がって。そしてわたしのためにみんなを運んで……できたらキスしてあげる』

フロッグポッドの発した言葉にシンイチ達は驚いた。幸い天然の真理は気付いてなかったが、タイミングが悪かったのか健人と美咲が『ボスン』と頭から湯気を上げる音と共に2人ともベットに倒れてしまう。

衛宮　士朗
「待てよ。俺何か忘れているような…」

翔道　翼
「…確かタイガの装着者と、ナイトの装着者を忘れていたな」

冷静に解説すると、部屋の外から激しい足音が近づいてくる。そして…

東條　翔哉
「真理さぁぁああん！！僕に褒美の口付けを…」

龍牙　シンイチ
「させるかぁあああ！！！」

シンイチはもはや暴走まがいの東條を真理に飛び掛り始める瞬間、真理の前に立ち投げ飛ばす。東條はそのまま手塚達三人が座ったソファーに墜落し、皆で悲鳴を上げる。尚、東條は連児を背負ったたままのため、巻き添えを食らってしまっている。

龍牙　シンイチ
「東條てめぇ、ふざけるなよ…まだはえぇよ。というか俺の目が黒い限り誰がさせるか！！」

東條　翔哉
「ぐ…お、真理さん…」

手塚&隠&剣助
「「「……」」」

黒崎　連児
「…」

5人はもはや虫の息の寸歩手前の状態で、今にも口から魂が出そうな勢いだった。士朗とセイバーは唖然、サクラと撫子はキョトンと

する中翼は…

翔道　翼
「これが玖楼国風のモテ子ファッションですわ」

士朗＆ａｍｐ;セイバー
「「で、ですわ!?」」

フロッグポッド
『ですわ』

士朗＆セイバー
「「分からんわそのネタ!!作者でさえ詳しくないのに!!」」

ナスカ・ドーパンド
「…ですわ」

士朗＆セイバー
「「無理しないでください!!」」

翔道　翼
「…駄目ですの?」

士朗＆セイバー
「「頭を冷やせぇぇぇえええ!!」」

右手の親指と人差し指でＬ字に立て、某もてる委員長の少女がでる漫画のきめポーズをする翼であった…。

～～～～～～～～～～

玖楼国周辺の砂漠にストレンジの姿があった。ストレンジの隣には紅蓮の炎の色をした身体を持つ『業火の顎』、後ろには複数の怪人と仮面の戦士がいた。

ストレンジイマジン
「さ～て、ド派手にやるか」

そう呟くとデンオウベルトを腰に装着させ、六つあるスイッチのうち赤色のスイッチを押す。辺りにはミュージックホーンのような待機音が響き渡り、バックルにセタッチする。

【ＳＷＯＤ－ＦＯＲＭ】

ストレンジの身体がフリーエネルギーで作られた黒のボディスーツ姿に変わり、さらに六つの装甲・オーラアーマーが空中に展開し胸、肩、背中に装備された。そして頭部に桃を割ったような赤のデンカメンが装着され、未来からの桃太郎侍『電王・ソードフォーム』が現れる。

電王・ソードフォーム
「へっへ、俺参上…ってな。さてと、攻め込むぜ…いくぜいくぜい

くぜ！！」

電王はそう宣言すると、怪人・仮面ライダー達を引き連れて玖楼国の城に目掛けて走りって行った……

第十一話／白銀と漆黒と虹色の暗躍者（前書き）

どうも地水炎風陰雷です。最近更新スピードが落ちてしまってすいません。

――バァン！！（ドアが開く音）――

イクサ×ゼロノス「「作者ァァアアアア！！」」

――ドガァァアアン！！――

ギャブッ！！な、何すんだ二人とも！！

イクサ「何故私達の後書コーナーが九話が最後で次の二つにはないんだ！？」

ご、ごめん…最近てんてこ舞いで疲れていて疲れていて。

ゼロノス「ふざけんじゃねぇぇ！！こちとら全力投球でやってんだよ！！やめられてたまるか！！」

イクサ「その命、一度神に返しなさい！！」

ちょ、チョチョちょっと待って～～～！！

イクサ&ゼロノス「「さぁ、お前の罪を数え…」」

――ズボォン（床下が抜ける音）――

イクサ&ゼロノス「「って・・・・え！？うわぁぁぁぁあああああ！！」」

っておい！？何勝手に落とし穴落ちてんのっぉおお！！それ防犯用だよぉぉぉぉ！！駄目だ、もう聞こえない。

まぁ、とりあえず第十話『白と黒と虹色の暗躍者』、始まります。

（ゼロノスとイクサ、助ければいいんだけどな…）

P．S　後書コーナーは後々更新しますので、もしよければ御付き合いしてください。

第十一話／白銀と漆黒と虹色の暗躍者

玖楼国城の一室、翼は先ほど連児達に水を与えて復活させるとシンイチ達・健人達に話した。士朗たちはシンイチ達のために城の厨房で料理を作っている。

翔道　翼
「…こういうことだ。分かったか二人とも」

龍牙　シンイチ
「俺達は何らかの方法で暴走させられて、異世界まで来て翼さんに襲い掛かったってことか」

乾　健人
「おいおい、マジか……わざわざ俺達が知らない世界まで来て人に襲い掛かってきたのかよ。どこのＳＦだ？」

シンイチと健人は事情を聞いて自分達が置かれている状況を理解する。異世界の一種でもあるミラーワールドの存在を知っているシンイチは納得するが、乾健人は頭を手で抱え込む。

翔道　翼
「だがそれが真実だ。こうなった以上、俺はお前等をほっとくわけにも行かない」

龍牙　シンイチ
「ふうん、で俺達はいつ元の世界戻れるのか？」

翔道　翼
「知らん」

シンイチ&健人
「「早ッ！？」」

翼の即答に一同は思わず声を上げてしまう。

龍牙　シンイチ
「どういう意味だ！？俺達元の世界に戻れないのか！？」

東條　翔哉
「シンイチさん、落ち着いてください」

翔道　翼
「今俺は他の世界を超える力が使えないから、お前らを元の世界に戻すことは難しい。それとは別に元の世界へ戻る術があるが、その能力を持ったカードがない。特定の世界に行き来できる専用のカードがあるが、生憎持ってない」

志村　剣助
「じゃあ俺達はこの世界に閉じ込められたまま…」

翔道　翼
「それはない。この俺が何とかしてやるよ」

翼は心配そうになりかけた一同に笑顔を向ける。その笑顔を見ていると健人達は自然と心が落ち着いた。

乾　健人
「翔道さん…」

翔道　翼
「ま、もしもの時はしばらくこの国に暮らせばいい。ここはいい国だ、都会のようにごちゃごちゃしてないし、田舎のように獣に逢う事もない。地元料理も美味だぞ」

白鳥　美穂
「料理はまだしも、都会でも田舎でもないってどうなのですか！？せめて田舎に済ませてください！！」

翔道　翼
「まぁそういうな。お前はどうだ、ミサキーヌ」

鷹取　美咲
「ミ、ミサキーヌ！？」

某神の代わりに剣を振るう男が姉似の異性の女性に呼ぶような名に呼ばれた美咲は驚く。ちなみに…

～～とあるカブトの世界、某建物～～

岬　祐月
「はくしゅんッ！！うう、風邪かな。最近忙しいからかしら…？」

デスクに突っ伏せになって寝ていた岬は、自らのクシャミで起きてしまう。

～～話は戻って玖楼国城～～

翔道　翼
「話は戻って健人、なんでお前等ああなったんだ？」

乾　健人
「それが俺達、正月のお参りに訪れた神社で美咲の知り合いの…そこにいる白鳥とその連れに出会ってな。しばらく色々と盛り上がっていたら前に出会ったムカデのオルフェノクが美咲と真理って子に襲い掛かってきたんだ。俺はファイズに変身して立ち向かったけど、他にもオルフェノクが現れてピンチになりかけた」

龍牙　シンイチ
「そこで俺達が龍騎になって変身して助けたんだ。あの時健人が俺達のように変身して驚いていたが、今はそんな暇じゃないと思って。で、俺達が加わったことで風向きが向かってきたんだが……
…『あいつら』が」

翔道　翼
「あいつら…？」

黒崎　連児
「ああ、俺達とは違う赤いライダーと白いラインが駆け巡った黒いライダーと…」

東條　翔哉
「僕と同じタイガが…」

連児達は翼に向けて、語りだしてゆく。

～～～～～～～～～～

時間は遡り、正月の神社。さっきまで人々が賑わっていたが、オルフェノク達の出現により何処かへ非難して行き、代わりに龍騎・ファイズ達仮面ライダーズがセンチピートオルフェノク達オルフェノク軍団と戦っていた。

ナイト
「はぁぁあ！！」

スカラベオルフェノク
「グアァア！！」

ライア

「フンッ！！」

ジャガーオルフェノク
「イタッ！！」

シザース
「おりゃおりゃおりゃ！！」

シェルオルフェノク
「ぶへぇッ！！」

ナイトは蝙蝠を模った剣型召喚機「ダークバイザー」をスカラベオルフェノクに向かって斬り付け、ライアはジャガーオルフェノクに向かってエイの尾の形状に似た鞭「エビルウィップ」に打ち放ち、シザースは右腕に装着した蟹の鋏の手甲『シザースピンチ』と左腕に装着した鋏型の召喚機『シザースバイザー』を巧みに使ってシェルオルフェノクの身体に連続パンチを打ち込む。

ベルテ
「うぉらぁああ！！」

スティングフィッシュオルフェノク
「ギャブッ！？」

タイガ
「たぁぁああ！！」

ワームオルフェノク

「なぶっ！！」

ファム
「はぁぁあああ！！」

ニュートオルフェノク
「ぐおぉっ！！」

ベルテはカメレオンの目を模したヨーヨー『バイオワインダー』でのトリッキーな戦法でスティングフィッシュオルフェノクを追い詰め、タイガは大型の鉤爪『デストクロー』でワームオルフェノクを切り裂いて圧倒し、ファムは金色の長刀『ウィングラッシャー』で爬虫類の特性を持つニュートオルフェノクを倒した。
そして…

龍騎・ファイズ
「「はぁぁあああ！！！」」

センチピートオルフェノク
「ぶべらばぼぶし！！」

ダブルライダーの奇怪な悲鳴を上げてセンチピートオルフェノク／琢磨潤一郎は顔面を引きずられながら吹っ飛ぶ。

センチピートオルフェノク
「く、くそ！！俺のすばらしい作戦が……何なんだお前等は！！た

かが人間のくせに、ファイズのように変身しやがって」

龍騎
「うるせえぞ駄眼鏡、そんなどこぞの漫画に出てくるようなだっさい作戦を考えやがって。俺は友達のピンチを見逃すほど馬鹿じゃね」

センチピートオルフェノク
「誰がダメガネじゃぁあああ！！なめてるんじゃねえぇぇぇぇぇぇ！！」

龍騎の毒舌に激怒したセンチピートオルフェノクは伸縮自在の棘のついた鞭を召喚し、２人に向かって打った。２人は横に転がり込んで避けると龍騎は一枚のカードを龍の頭部に模したガンドレット型召喚機「ドラグバイザー」に入れ、ファイズはファイズフォンに「５・２・８・１」と打ち込む。

【ＡＤＶＥＮＴ】

【Ａｕｔｏ　Ｖａｊｉｎ　ｃｏｍｅ　ｃｌｏｓｅｒ】

ドラグレッダー
「やっと俺、参上だァァアア！！」

オートバジン
「キバっていくよぉぉぉ！！」

――バァンバァンバァン！ガガガガガガガガ！！――

センチピートオルフェノク
「あっつあっつ、いたたたたた！！」

どこかで聞いたセリフを叫びながら上空から赤い龍型のミラーモンスター『無双龍ドラグレッダー』の火球（ドラグブレス）、銀色のバイクから人型ロボットに変形した戦闘用ビークル『オートバジン・バトルモード』の前輪が変形した前輪バスターホイールからの銃撃がセンチピートオルフェノクに降り注ぐ。直撃を食らいボロボロな姿になるもセンチピートオルフェノクは立ちあがる。

センチピートオルフェノク
「うぅぅ…」

ファイズ
「美咲を狙いやがって、ただで済むと思うな」

龍騎
「よくも真理を……お前の血は何色だぁぁ！！」

センチピートオルフェノク
「それはコッチのセリフじゃァアアアア！！」

【Ｒｅｄｙ】

【ＳＷＯＲＤＶＥＮＴ】

龍騎は青龍刀型「ドラグセイバー」を召喚し、ファイズはオートバジンのハンドル部分を抜き出し光剣「ファイズエッジ」を構え、センチピートオルフェノクと互いに向かい合って突進をする。だがその時、ファイズと龍騎の目の前にオーロラのような銀色の壁が現れ、不幸にもセンチピートオルフェノクは飲み込まれてしまう。

ファイズ
「!?なんだこれ…!?」

龍騎
「…ん?人影が」

2人が驚いていると、壁の中から人影が写る。姿は赤い鎧に刃がついた腕、龍騎やファイズとは違う紫の珠と三つの爪のバックルのベルト、深紅に染まった角と金色の瞳を持った戦士がいた。そして戦士が口を開く。

「我が名は顎（アギト）、業炎を司りし光の申し子だ……はぁあ!!」

突然業炎の顎――仮面ライダーアギト・バーニングフォームはオーロラから出ると、龍騎とファイズに襲い掛かってくる。

龍騎
「うわぁあ！！」

ファイズ
「何しやがる！！」

アギト・バーニングフォーム
「貴様たちを連れて行く。それが今の俺の使命だ」

龍騎
「は！？何ワケのわからねえことを！！」

2人はバーニングアギトに向けて斬り掛かろうとするが、バーニングアギトの鍛え抜かれた上半身の硬さにファイズエッジとドラグセイバーの刃はまったく斬れなかった。

龍騎
「か、かって～～……ぐあぁ！！」

ファイズ
「マジかよ」

――ガシッ――

龍騎＆ファイズ
「「ぐっ！！」」

バーニングアギトの腕が2人の首を掴み、そのまま2人の身体を持ち上げる。さらにそこへ高熱の炎を浴びせ、弱った2人を真上へ投げ飛ばす。
高く来た位置にたどり着くと、バーニングアギトは気合をためながら両腕を構える。

アギト・バーニングフォーム
「ハァァァァァァ……

ハァァア！！」

バーニングアギトは燃え盛る炎の纏った両拳を自由落下で落ちてきた龍騎とファイズに目掛けて斜め上からの逆アッパーカットを思いっきり放つ。『バーニングライダーパンチ』が龍騎とファイズに炸裂し、2人は勢いあまって地面に埋まってしまう。

アギト・バーニングフォーム
「ふん、手ぬるいな」

そう吐き捨てるとバーニングアギトは龍騎とファイズの首根っこを掴み何処かへ運ぼうとする。

ドラグレッダー
「こっちだ！！」

オートバジン

「早く早く!!2人が危ないんだよ!!」

「健人君!!」

「お兄ちゃん!!」

そこへドラグレッダーとバジンの知らせによってナイト達と、美咲と真理が駆けつけて来た。

ナイト
「!?なんだ!?あれは」

シザース
「クワガタの……異形!?」

ベルテ
「俺達が知っているミラーモンスターでも、さっき戦っていたオルフェノクって灰色野郎でもねえな」

ライア
「あいつから禍禍しい力を感じる…」

タイガ
「…!!皆さん、あれ!!」

タイガは地面に埋まった龍騎とファイズを示した。それを見た一同は驚愕する。

ファム
「シンイチ!!・・・まさか、シンイチが・・・」

アギト・バーニングフォーム
「こいつらは連れて行く。ディファーストを倒す手駒としてな」

ナイト
「・・・?ディファースト?」

ナイトは聞きなれない言葉を聞いて首をかしげる。そんな中冷静さを失ったファムがバーニングアギトに向けてウィングスラッシャーを振り下ろす。バーニングアギトは片腕を盾代わりにしてウィングスラッシャーの刃を防いだ。

ファム
「よくも・・・シンイチを…!!」

アギト・バーニングフォーム
「悪いが俺は倒される気も貴様等を倒す気も無い。何故ならその役目は俺ではなく、別の者の領分だからな」

【Ｆｕｌｌ　Ｃｈａｒｇｅ】

バーニングアギトの言葉と共に聞きなれない電子音が響くと、ファ

ムの背中を赤い閃光（やいば）が切り裂いた。ファムは変身が解除され、美穂の姿に戻って倒れてしまう。

タイガ
「み、美穂さん！！」

ベルテ
「なんだ？今の攻撃は…！！」

突然の出来事に驚愕する一同だったが、先ほどの赤い閃光が今度は自分達に向かって飛来してくる。いち早く察知したナイトとシザースはバイザーにカードを入れる。

【ＧＵＲＡＤ　ＶＥＮＴ】

ナイトとシザースは「ウィングウォール」と「シェルディフェンス」を装備し、赤い閃光を弾き飛ばす。閃光は何処かへ飛んでいくと剣の鍔の部分に戻り本来の剣の姿になる。ナイト達、そして美咲と真理たちが剣の持ち主がいる方向へ振り向くと、陣羽織に似た赤い装甲を纏った仮面の戦士――電王・ソードフォームの姿があった。

電王・ソードフォーム
「へっへ、どうだ？俺の必殺技は？」

鷹取　美咲
「あなた誰なの！？さっき白鳥さんを攻撃はあなた…もしかしてコ

イツの仲間!?」

電王・ソードフォーム
「さぁな、ただ言えるのはお前等の敵だって確かな事だ」

電王は怒っている美咲を適当に軽くあしらうと、先ほどの剣――四つのパーツの組み換えにより様々な武器に変形する『デンガッシャー・ソードモード』を一同に向ける。

電王・ソードフォーム
「お前らの所の龍騎とファイズはちょっくら貸してもらおぜ。アギトが言ったとおりに……」

ドラグレッダー
「ぎゃあぎゃあうるせぇ!!ともかくシンイチたちを返しやがれ!!」

オートバジン
「力づくでもね!!」

ドラグレッダーとオートバジンは相棒を助けようとバーニングアギトに飛び掛ろうとする。

【ＦＲＥＥＺＥ　ＶＥＮＴ】

先ほどとは違い聞き覚えがある電子音声が鳴り響くとドラグヘッダーとオートバジンは冷気を上げながら氷付けになりそのまま動けなくなってしまう。

シザース
「今の…東條さんが持っているフリーズベントの…」

ベルテ
「おい東條!!何味方に使ってんだ!!ふざけてる場合か!!」

タイガ
「いや待ってください!!僕は使ってません!!」

ライア
「だが、フリーズベントを持ってるのは東條が変身しているタイガしか…」

???
「私が・・・・・使った」

混乱している一同に声―（声からすると十代後半辺り）が、バーニングアギトの背後から2人の人影が現れる。一人は身体に白の光るエネルギーラインを駆け巡らせている、どこかファイズと似た仮面の戦士、そしてもう一人を見た途端一同は再び驚愕した。

ナイト
「!?あれは…!?」

シザース
「な、なななななな…」

ベルテ
「ド、ドッペルゲンガー!?」

ライア
「何故だ?何故だ?」

タイガ
「ぼ、僕が2人!?」

…そう、バーニングアギトの背後から現れたもう一人の人物は東條と同じ『仮面ライダータイガ』だった。東條はもちろん、一同が驚くのも無理は無い。唯一違うのは出てきたタイガは東條が変身したタイガより小柄で先程の声で変身しているのは女性という点だけだが。

一方、仮面の戦士――デルタとタイガは無言のまま自らの必殺技を発動させる。自分達のナイト達を排除するために…

【ＦＩＮＡＬ　ＶＥＮＴ】

【ＥＸＣＥＥＤ　ＣＨＡＲＧＥ】

タイガ（東條）の相棒と同名のミラーモンスター『デストワイルダー』がタイガ・ベルテの背後に出現し、両腕の鉤爪で2人をラリアットの要領で斬り付け怯んだ隙にタイガ（女）に目掛けて投げ飛ばす。デストクローを装備したタイガ（女）は身体を回転させ、投げ飛ばされた2人に斬撃の嵐『クリスタルブレイク』を浴びせ、2人を結晶爆発させる。

ナイト・シザース・ライアがデルタの銃――デルタムーバーから放たれた通常より巨大な三角錐の光にまとめて拘束（ロックオン）されると、デルタは光に向かって連続で飛び蹴り『ルシファーハンマー』を繰り出す。食らった三人は赤い爆発が起こしながら吹き飛ばされる。

ナイト・シザース・ライア・タイガ・ベルテ
「「「「「「ぐあぁぁあああ！！」」」」」」

ナイト達はダメージを負ってしまい、立てるのがやっとだった。だが無常にもデルタ、タイガ、電王の刃が振り下ろされる…

～～～～～～～～～～

霧沢　隠
「というワケだ。あの時はやばかった」

翔道　翼
「ふぅ～ん、でその後はどうなった？」

市村　剣助
「その後オーロラが現れて、そこから出てきた人達が僕らを助けてくれたんです。その人たちが貴方のことを教えてくれたのです」

手塚　海斗
「確か名前は…くれ――ドガァアン――――…！？」

大きな騒音に驚く一同。翼達は騒音が聞こえた場所へ向かうとそこには……

翔道　翼
「……！？お前らは……」

電王・ソードフォーム
「久しぶりだな、ディファースト。さあ、大暴れしてやるぜ」

そこには数体の怪人・仮面ライダーを引き連れたストレンジ――仮面ライダー電王・ソードフォームの姿があった…

第十一話／白銀と漆黒と虹色の暗躍者（後書き）

～～久しぶりのツバサ×仮面ライダー通信～～

～～玖楼国城、厨房にて～～

撫子
「すごいわね士朗くん、とても料理が上手いわ」

士朗
「はい、これでも家では大人数相手に作ってましたからね。セイバー、そっちの器を取ってくれないか」

セイバー
「はい、えっと……」

ナスカ・ドーパンド
「これですよ、セイバーさん。先ほど士朗くんが混ぜていたスパイスが入った」

サクラ
「士朗さん、野菜はこれでよかったですか？」

士朗
「サンキュウ、サクラちゃん。さて、これを鍋に入れて……」

――ガシャァアアアン！！――

「！？」

ゼロノス
「いたたたた……ったく、作者の野郎。何しやがるんだ！！」

イクサ
「この…俺を誰だと思っている！！７５Ｋスケだぞ！！」

ナスカ・ドーパンド
「それを言うなら『名護啓介』でしょ。というか、貴方はイクサでしょ」

イクサ
「！？ナスカか？なんでお前がココに！？」

ナスカ・ドーパンド
「それはコッチのセリフですよ。貴方達今の今までどこに行っていたのですか？」

士朗
「いや、それより何処から落ちてきたんだこの二人！？」

セイバー
「何で名護が変身していたイクサと、ギルバードが変身していたゼロノスがここへ？」

ゼロノス

（まてよ…まさか俺達、上の位置の『前書き』の場所から下の位置の『後書』の場所まであの落とし穴を通ってきたのか!?そんな馬鹿な話が…）

撫子
「あら?お客さん?士朗くん達の知り合い?」

士朗
「いや、初対面ですけど……」

ナスカ・ドーパンド
「ま、考えても仕方ないですしこの2人もお手伝いさせてもらいましょう。いいですか?サクラさん」

サクラ
「は、はい。あのよろしくお願いします」（2人に向かって笑顔）

ゼロノス
「!!（何だこの気持ち、心が温かくなった）」

イクサ
「いいだろう、この名護啓介が迷える子羊を…」

ナスカ・ドーパンド
「なんでやねん」

――スパァアン――（イクサの頭にナスカの緑色のスリッパが炸裂する）

イクサ

「ぐがぁっ・・・・・」

ゼロノス
「じ、次回もお楽しみに……

で、どれを手伝うんだ…」

…とある次元世界、『地球』と呼称させた世界にある通称風が吹く街『風都』。そのシンボル的存在の巨大な風車のような塔・風都タワーに二つの人影があった。一人は白いスーツに片方だけ手袋をはめている男性、もう一つは全身を覆い尽くすボロボロのローブ姿だが異常としかいえないほどの膨大な殺気を漂いさせ、ローブの中から覗かせている憎悪や悲嘆などの『混沌の闇』に満ちた瞳で風都の街並みを見下ろしていた。

男性
「さあ、破壊と終焉を司し神よ。やるのだ！！」

？？？
「ああ……全てを、消滅させる……」

そういうとローブの人物は銃を取り出し、金色のコネクタの紋章が描かれたカードを装填。同時にトリガーを引く。

【ＦＩＮＡＬ－ＫＡＩＺＩＮ－ＲＩＤＥ！ＡＬＬ　ＤＯ・ＤＯ・ＤＯ・ＤＯＰＡＮＴ！！】

無機質な電子音と共に、人物の前に巨大な銀色のオーロラが現れた。その中から大量の怪人が風都の街並みへ飛びかかった・・・

この騒動が、２人のライダーに何をもたらすか・・・

chapitre6／特別編　仮面ライダーディファースト　再会の救済者～2

――過去・何処かの世界――

『はぁぁぁぁぁあああ！！』

『ゼァァァァアアア！！』

殺気や臨場感が満たす荒野に二つの掛け声が響き渡る。一方は漆黒の身体に纏った純白の鎧、二つの羽根を模したライダープレートと赤き眼の仮面ライダー、ディファースト。

そしてもう一方は十字架を思わせるような白きX字のラインが施された絶望と憤怒が闇の心を表したダークバイオレットのアーマー、白くなったディメンションヴィジョンとの世界の終焉者の姿と化した大勢の仮面ライダー達を葬り去った最悪最強の仮面ライダー、ディロード・デスエンドフォーム。

異世界を放浪している仮面ライダーディファースト／翔道翼は己の罪を苦悩し自暴自棄になった仮面ライダーディロード／砕谷廻の心を救いに現れて丸一日が経過していた。彼ら2人の周りには無数のクレーターとディファーストが召喚したライダー達だった残骸の姿が見られた。

ディファースト

『・・・ふう、確かに終焉者と呼ばれるだけの力と技と場の経験はあるようだな』

ディロード・デスエンドフォーム
『・・・・何故だ?何故お前は余裕なんだ。お前は俺の手で終焉に追い詰められているのに』

スペックではディロードの方が上の筈だが、翼は廻と出会い頭のバトルから丸一日経過しても今だ健在気味で余裕の表情のディファースト。

ディファースト
『決まってるよ、俺はお前の心を救う。だからまだ死ねないし、死ぬ訳にはいかない』

ディロード・デスエンドフォーム
『何度も言わせるな・・・俺の事なんて知らないお前に、俺の心を救えるか!!』

ディファースト
『知らないからこそ、俺はお前と分かり合って理解し心を救う。それまでの事よ』

ディファーストは諦めない瞳をディロードに向ける。だがディロードは急に声を上げながら嘲け笑い始める。

ディロード
『・・・ふはは、ふはははははは・・・俺と分かり合う？ふざけるのもいい加減にしろ！！大勢の命を奪った俺と分かり合おうとするヤツなんかもういない！！』

ディファースト
『笑っても否定してもいい。俺はやると決めた事はやりとげる、ただそれだけだ。だからお前の心を俺が救ってやる・・・いや、俺達がな』

ディファーストは自らの行動を否定するディロードに指鉄砲を向けながら宣言すると、サモンドライバーにカードを連続装填する。

【ＦＩＮＡＬ－ＫＡＭＥＮ－ＦＯＲＭ－ＲＩＤＥ！ＫＵＵＧＡ－ＲＩＳＩＮＧ　ＵＬＴＩＭＡＴＥ！！】

【ＦＩＮＡＬ－ＫＡＭＥＮ－ＦＯＲＭ－ＲＩＤＥ！ＤＥＮ－Ｏ－ＳＵＰＥＲ　ＣＬＩＭＡＸ！！】

【ＦＩＮＡＬ－ＫＡＭＥＮ－ＦＯＲＭ－ＲＩＤＥ！ＫＩＶＡ－ＤＯＧＡＢＡＫＩ　ＥＭＰＥＲＯＲ！！】

【ＡＴＴＡＣＫ－ＲＩＤＥ！ＣＲＯＳＳ　ＡＴＴＡＣＫ！！】

究極を越えた禁断の闇・ライジングアルティメットクウガ、五つの電仮面を持った超クライマックスフォームとなった超・電王、三体のアームズモンスターと皇帝の鎧が融合したドガバキエンペラーフ

ォームのキバのもう一つの最強フォーム姿の三体は召喚されると同時に飛び上がり、自らの必殺技をディロード目掛けて発動させた。

【ＦＩＮＡＬ－ＡＴＴＡＣＫ－ＲＩＤＥ！ＤＥ・ＤＥ・ＤＥ・ＤＥＲＯＡＤ！！】

【ＡＴＴＡＣＫ－ＲＩＤＥ！ＩＬＬＵＳＩＯＮ！！】

ディロード・デスエンドフォーム

『『『デスエンド・・・クラッシュッ！！』』』

三人に分身したディロードは技名を叫ぶと、巨大なホログラムカードの通り抜け『デスエンドクラッシュ』でそれぞれライジングアルティメットクウガの『ライジングアルティメットキック』、超・電王の『超ボイスターズキック』、ドガバキエンペラーブレイク』を強大な威力でねじ伏せた。クウガ、電王、キバはデスエンドクラッシュのダメージを食らい、消滅してしまう。

【ＦＩＮＡＬ－ＡＴＴＡＣＫ－ＲＩＤＥ！ＤＨＩ・ＤＨＩ・ＤＨＩ・ＤＨＩＦＩＳＲＴ！！】

ディファースト

『ディメンション、アンデミデット！！』

そこへクウガ達に気を取られていたディロードにディファーストが『ディメンションアンデミデット』を分身達ごとまとめて直撃させた。だが分身達の方は消滅するが本体のディロードは耐え切る。着地したディファーストはソレを見て少し焦りを表す。

ディファースト
『おいおい・・・？結構今の本気だったのに・・・』

ディロード・デスエンドフォーム
『・・・終わり、だ・・・・』

【ＦＩＮＡＬ－ＡＴＴＡＣＫ－ＲＩＤＥ！ＤＥ・ＤＥ・ＤＥ・ＤＥＲＯＡＤ！！】

ディロード・デスエンドフォーム
『ウウァァァアアアアア！！』

十枚のホログラムカードを通り抜け、ディロードは大剣と化したライドセイバーをディファーストに振り下ろす。

――ドガァァアアァァァンッ！！――

激しい爆発音が響いた。流石にどんな防御が硬い者でも元からスペックが高いディロードの最強形態から繰り出した斬撃を食らったらひとたまりもない。だが巻き上がった粉塵が晴れるとそこには・・・

【ＦＩＮＡＬ－ＡＴＴＡＣＫ－ＲＩＤＥ！ＤＥ・ＤＥ・ＤＥ・ＤＥＣＡＤＥ！！】

？？？

『へへ、この零距離なら流石に効くだろ？』

ディロード・デスエンドフォーム

『！？』

ディロードが見たのはライドセイバーの刃が肩に深く刻み込んでいるのにも関わらず、自分の腕を完全に避けられないように？み、ライダーカードをディファースドライバーに入れて発動させた『Ｄディケイド・コンプリートフォーム』が不適に笑う姿だった。

Ｄディケイド・コンプリートフォーム

『・・・ディメンション、キック・・・』

Ｄコンプリートが零距離で放った回し蹴りバージョンの『ディメンションキック』が、ディロードの身体に炸裂する。

そして互いの重なったダメージが堪えたのか通常の姿になったディロードとディケイドの姿から戻ったディファーストは、地面に倒れ込み変身が解ける・・・

～～～～～～

――現在・玖楼国――

王族だけが入れる二つの羽根を模っている遺跡。その真上に立っている青年――翼は眼を閉じながらながら肩にできた傷痕を、服の上から撫でる。

翔道　翼
（そういやこの傷、廻（アイツ）を止める時にできた傷だな・・・）

そう思いながら翼は眼を開く。そこには王族が住む城とそれを取り囲んでいる居住地区の国――玖楼国とその周囲を覆う砂漠があった。

翔道　翼
「……」

？？？
「何してるの？翼」

翔道　翼
「…羽琉亜（ハルア）か」

声のした方向へ振り向くと白と黒のメッシュが入った茶髪の少女がいた。光影（ひかげ）　羽琉亜（ハルア）、嘗て翼達と旅をして来た少女で士朗たちと同

じ時期に翼と別れて自分の出身世界に戻っていたのだが、現在はある事件に巻き込まれて玖楼国に滞在している。

少女といってもそれなりに凄い美人で引き締まっている所は引き締まって出ている所はしっかりと出ている上、見た目と違い身体能力が翼並に凄い。現にかなりの高さがある遺跡の頂上を翼がいる所まで道具もしようせず己の力で登ってしまったのだから。

翔道　翼
「どうした？何か用か、羽琉亜」

光影　羽琉亜
「何か用じゃないわ翼。今日は何の日なのか分かっているの？」

翔道　翼
「・・・・何かあったか？」

光陰　羽琉亜
「何があったって・・・・本当に覚えてないの？みんな自分の世界から材料を持ってきてお祝いするってあれほど言ったでしょ。準一君達やモモタロスが一足先に来て準備しているのに」

翔道　翼
「あいつら、『ＷＯＲＬＤＲＩＤＥ（ワールドライド）』のカードを使ってココにきているのか？」

それを聞いて羽琉亜は呆れたのか手で頭を抑える。ＷＯＲＬＤＲＩＤＥ――特定の次元や世界を移動できる特殊なライダーカード、翼

は以前ある事件をきっかけで願いをかなえるミセの現主人・四月一日君尋から手に入れた。
鳴滝の一味の策略により翼抹殺で玖楼国に送り込まれた仮面ライダーW・長瀬準一達や、士朗にモモタロスを含む今まで九つの世界のライダー達は翼から貰ったWORLDRIDEのカードを使い自分の世界に帰っていたのだがたまにカードの力を使い玖楼国を訪れている。

光影　羽琉亜
「はぁ・・・本当に覚えてないの？」

翔道　翼
「覚えていない・・・ごめん、考え事をしていて聞いていなかった」

光影　羽琉亜
「たっく、なんで私に相談しないのよ・・・いつも一人背負い込んで・・・／／／」

翔道　翼
「・・・・・・・」

光影　羽琉亜
「・・・馬鹿・・・」

ギクシャクしてしまい何を言えばいいのか分からなく顔を赤らめてしまう羽琉亜は、翼の後ろから腕を回して優しく抱きついた。が、抱きつれている本人の翼は…

翔道　翼
（／／／／／）

思考が宝石の王様ダイヤモンドのように固まってしまい停止（フリーズ）した。
そんな彼らを見つめている存在がいた。

「ふふ、狙った獲物は逃さないぜ」

「『電王の世界』の世界では邪魔されたけど、今度こそは奪わせてもらうよ・・・

・・・翔道、翼」

～～～～～～～～～

翼達がいる遺跡から少し離れた位置にある、玖楼国に入る階段の前にて・・・

【ＷＯＲＬＤ－ＲＩＤＥ！ＣＬＯＷ　ＣＯＫＵ！！】

――ブォォン――

電子ボイスが響き渡ると空から突然液体のように歪み始め、物体は地に着いた瞬間四方八方弾け飛んで消滅した。そしてその中から・・・

小野寺　ユウスケ
「いててて・・・・」

秋月　信彦
「うえっ！！砂が眼に入った・・・」

鉄　和雄
「ごほっごほっ・・・け、煙い」

時峰　劉子
「きゃっ！砂が服に入った」

光　夏海
「いった～～い」

キバーラ
「フガガフガガ～～～～、ふがががふがが～～～（砂に埋もれてる～～～誰か助けて～～～）」

門矢　士
「ここが次の世界か・・・なるほど、さっきのカードは異世界を移動できるカードなのか。大体分かった」

ユウスケ、信彦、和雄、劉子、夏海の順に重なっている順に悲鳴を上げるメンバー五人（別の所に埋まっているので関係ないが十一匹）を余所に、士は『玖楼国』のワールドライドの効力を納得して四人をベット代わりに暢気に腕を頭に組む。

砕谷　廻
「おい、お前ら・・・・・さっさとどけ！！」

門矢　士
「ん？そういえば廻と流姫の姿が見当たらないな。どこに行った・・・」

砕谷　廻
「お前らの一番下だぁぁぁあああ！！」

廻は地に響くような大声を出しながら全員を退けさせる。廻の両腕には砂塗れになった流姫の姿があり、むせながら声を出す。

彩条　流姫
「ごほっごほっ・・・あぁ、砂塗れになっちゃった」

砕谷　廻
「・・・砂塗れも、いいな」

夏海&ユウスケ&信彦&和雄
「「「「え！？」」」」

時峰　劉子
「・・・いいなぁ」

バカップルとしての面が磨きが掛かったのか廻の予想外の言葉を聞いて耳を疑う四人。ただ劉子ただ一人違う反応をしたが・・・唯一廻の言葉を無視した士は砂丘に埋もれたキバーラを助けるとさっさと階段を登っていく。

小野寺　ユウスケ
「っておい、士待ってくれよ」

光　夏海
「置いて行かないでください！！」

砕谷　廻
「・・・・」

彩条　流姫
「どうしたの、廻・・・」

砕谷　廻
「これから俺達が行く場所に何が待っているか。俺達を導き助ける光か、それか俺達を蹴落とす闇か・・・」

廻はいつもの真剣な表情で言うと廻達も士の後を追って階段を登った。一同は士が待つ門へたどり着くと今まで緊張していた表情が吹っ飛んで眼を丸くしてしまう。

砕谷　廻
「・・・！？ココは！？」

門矢　士
「どうやら俺達、予想もつかない所に来たようだな」

平然と落ち着いている士に対し廻と他のメンバーは驚く。彼らの目の前には露店が開かれている広い通りにその国の衣装を着た人々が楽しそうな雰囲気に賑わっていた。

門矢　士
「見た所ここは俺達が旅をして訪れた世界とはかなり違うな。」

彩条　流姫
「私達も旅をして来たけど、まさか砂漠の国がある世界は行ってないはね・・・」

砕谷　廻
「ああ、しっかしこう見ているだけで平和な雰囲気だと調子狂うな」

廻の言うとおり、ディロードが訪れた世界は終焉を迎えるから『世界の終焉者』と忌み嫌われて最近まで拒絶されて来た彼らにとっては、穏やかで優しい玖楼国の人々の気性には少し驚かされる。それ以前に異世界を旅する事に関してはある程度知識がある廻たちでさえ、この玖楼国には少し驚いている。

・・・と、説明している内に玖楼国の人々が彼らに気付いて駆け歩んで話しかけてきた。

男性
「お、あんたら異国の人か？」

女性
「全員同じ服装だけど、同じ国の人なんですか？」

おばあさん
「あらあら全身砂塗れじゃないかい。よかったら服を貸すわよ」

少年
「これ受け取って。リンゴだよ」

鉄　和雄
（な、何だかこの国の人たち、優しい）

小野寺　ユウスケ
（ううん、心が暖かすぎる。眼から涙が今にも・・・）

光　夏海
（今は泣いちゃ駄目ですユウスケ、この人たちの心使いが無駄に・・・）

時峰　劉子
（僕、こんなに人に優しくされたの初めて・・・）

玖楼国の人々の心の暖かさに心まで沁みて感動する5人。ふと信彦は周りを見回しある事に気がつく。

秋月　信彦
「あれ？廻と流姫と士は？」

～～～～～～～～～

砕谷　廻
「・・・みんな、何処に行った？」

門矢　士
「大体分かった、どうやら俺達思いっきり迷子だ」

彩条　流姫
「思いっきりもなにもないわ！！」

廻、流姫、士の三人はいつの間にかみんなとはぐれてしまい、士と流姫は漫才のようなやりとりをする。

彩条　流姫
「どうするのよ。早くみんな探さないと！！」

門矢　士

「知らない国でどうやって探す?それより気ままにぶらついていれば見つかるだろう、その間国でエンジョイするしかない」

彩条　流姫
「そんな呑気な事言わないでよ。今私達はディロードのＦＫＲのカードを盗まれているのよ?あれを悪用されれば・・・って廻?」

砕谷　廻
「・・・・・・!!」

流姫と士が廻を見ると、廻が何かを見て驚きの表情を浮かべいた。2人が廻が顔を向けている方向へ見ると少し向こうにある露店にこの国の衣装と類似した洋服をきた焦げた茶髪の青年と明るい茶色の髪の少女が店の人と話していた。その2人を見て廻は呟いた。

砕谷　廻
「・・・翼・・・?」

門矢　士
「…翼?」

彩条　流姫
「翼…?確かそれって」

士は廻の言った聞きなれない名前を聞いて首をかしげるが、流姫は何かを思い出す。そんな中廻は何を考えたのか2人に向かって駆け出し、肩を?んだ。

砕谷　廻
「翼ァ！！」

「「！？」」

青年と少女――小狼（シャオラン）とサクラは驚き振り向いた。ハッ、と我に帰った廻は咄嗟に頭を下げて誤った。

砕谷　廻
「す、すまない。よく知っているヤツと間違ってしまった・・・」

小狼
「・・・俺が、いや俺達が誰かと似ていたのか？」

サクラ
「もしよければ、お話を聞かせてもらっていいでしょうか？」

小狼とサクラは今さっき出会った廻の様子を見て何かを悟ったのか、廻に話を聞こうとする。すると…

？？？
「お～い、小狼ッ！！サクラッ！！」

そんな時、その2人がいる露店に玖楼国の衣装を来た人物が2人の名を呼んでやって来るが、三人はその人物を見て……廻もある意味先程以上に驚いた。

何故ならその人物は服を着て人の形はしているが、顔と服から通した腕が真っ赤で二つの角を頭から生やしたどう見ても『赤鬼』を思わせる・・・・いやそうとしか思わせない怪人の姿をしており、皮肉にもその人物は三人は嫌と言うほど知っていた。

モモタロス
「はぁ、はぁ、おい小狼にサクラ!!やっと見つけたぞ」

廻＆ａｍｐ;士＆ａｍｐ;流姫
（モモタロスゥゥ〜〜〜〜!!!?何でお前がココにいやがるんだ（いるのよ）〜〜〜!!!）

ご存知皆のアイドル・モモタロスの御登場である。本来デンライナーを何らかの方法で使用しない限り次元を渉れないはずのモモタロスがライダーも怪人も存在しないまったく異なる玖楼国にいるのだ。魔王と恐れられている存在だろうが破壊者と呼ばれるライダーだろうが救済者と言われている男であろうが驚かない方がおかしい。

サクラ
「どうしたの?モモちゃん」

士＆ａｍｐ;流姫
「「モモちゃん!?」」

サクラがモモタロスに向かってのかわいらしい呼び方を聞いて、モモタロスにドン引きする流姫と士。対して真面目な表情のモモタロスは小狼とサクラに話す。

モモタロス
「大変なんだよ！翼と羽琉亜がライダーの襲撃を受けてやがるんだ！！」

～～～～～～～～～～

――廻達が玖楼国へ入った直後、遺跡にて――

そこには黒い刀型の変身ツール「ディルードライバー」と銃型ツールの「ディエンドライバー」を持ったシアンカラーの狙撃者『仮面ライダーディエンド』と漆黒の剣術使い『仮面ライダーディルード』の姿があった。彼らの隣にはそれぞれその危険な戦闘力故封印された軍神・Ｇ４、『黄金のライダー』の異名を持つＺＥＣＴが誇る最強戦士・コーカサスと『ロード』と呼ばれる伝説の怪物の種族を支配する王が巨大な鎧を纏った最大の魔界王・アーク、さらにはアナザーアギト、リュウガ、オーガ、グレイブ、歌舞鬼、ダークカブト、ネガ電王のダークライダー達がズラリと並ぶ姿があった。

ディルード

「さあ行くぞ、俺らの闇ライダー達」

ディエンド
「最強ライダーには最強ライダーってね」

対する向かい側にはディエンドたちの召喚したダークライダーに対抗するべく、サモンドライバーから闇の鎧を纏った吸血鬼の王（キング）・ダークキバと、骸骨の記憶を持つ鋼の探偵ライダー・スカルが翼と羽琉亜の目の前にいた。

ダークキバ
「さあ、千年に一度の天才であるこの俺が相手にしてやろう。光栄に思えよ坊や達♪」

ダークキバット
「ありがたく思え！絶滅タイムだ」

スカル
「さぁ、お前の罪を……数えろ！！」

ダークキバとスカルは自分の決め台詞をディエンドたちに言い放ち…

翔道　翼
「行くぞ羽琉亜」

光影　羽琉亜

「うん・・・キバーラ！！」

彼女が大声で呼ぶと、羽琉亜と同じ世界に生まれたキバット族のモンスター・キバーラが現れる。（尚、廻・士一行の方のキバーラと区別するためこちらは名前に（Ｎ）をつけて表示する）

キバーラ（Ｎ）
「はいは～い♪翼と羽琉ちゃんの２人のロマンチックな空気をぶち壊すＫＹ男達にはお仕置きよ。カーップ！！」

翼はディファースドライバーを腰につけホルダーからライダーカードを取り出し、羽琉亜の指にキバーラが噛み付くと羽琉亜の顔にステンドグラスのような血管が浮び上がる。

翼＆羽琉亜
「「変身」」

【ＫＡＭＥＮ－ＲＩＤＥ！ＤＨＩＦＩＲＳＴ！！】

――キィィィーーーン、ファァアアン！！――

白と黒の羽根の粒子と２人を渦を巻いて囲み、翼は天空を大いなるツバサで羽ばたく者『仮面ライダーディファースト』、羽琉亜は蝙蝠を模した純白の白騎士『仮面ライダーキバーラ』に変身した。

ディファーストと仮面ライダーキバーラ（以降、ＫＭ（仮面ライダー）キバーラ）はディエンドと向かい合いになる。

ディエンド
「僕達に抵抗するとは・・・君達頭に乗るなよ。何様のつもりだ？」

ＫＭキバーラ
「決まっているわ、通りすがりの…」

ディファースト
「仮面ライダーだ…」

ディファースト＆ａｍｐ；ＫＭキバーラ
「「覚えておけ！！」」

ディエンド
「フン、僕は君達よりずっと昔から通りすがりの仮面ライダーだ！！覚えておけ！！」

同じ言葉を互いに言い放つと、ディファースト＆ａｍｐ；キバーラＶＳディエンド＆ａｍｐ；ディルードの戦いが始まった・・・

chapitre6／特別編　仮面ライダーディファースト　再会の救済者～2

どうも地水です。今回はこの特別編についていくつか注意点を説明させていただきます。

・時間軸は今やっている翼が今まで出会ってきた人物達が何者かに操られ襲撃する『玖楼国ライダー襲撃編』の後の話です

・今回初登場した新キャラ・光影羽琉亜はディケイド本編において光夏海の役割で、彼女も仮面ライダーキバーラに変身できます。

・とある理由により小狼、黒鋼、ファイは玖楼国に戻ってきています。

以上、地水炎風陰雷の説明でした!!

第十二話／反撃への変身（前書き）

どうも地水炎風陰雷です。さあリスくんさんとのコラボもそろそろクライマックス！！今回はあの子達がライダーに…

では第十二話『反撃への変身』、始まります。

バァン！（ドアの開く音）

デルタ
「次回でリスさんとのコラボ話は終わりらしいですよ」

タイガ
「それと・・・・・今回・・・・・後書コーナー・・・・の司会のゼロノスとイクサは・・・・本編に出ているため・・・・・代わりが出、出ます・・・・・」

第十二話／反撃への変身

シンイチ、健人を操り暴走させた張本人・アギトバーニングフォーム、そして鳴滝の仲間のイマジン・ストレンジイマジンが変身した電王ソードフォームを見て翼は一言呟く。

翔道　翼
「お前、ストレンジか」

電王・ソードフォーム
「お?俺の名前を覚えてくれていたのか。結構なこった」

翼は過去に『響鬼の世界』で共に自分や威吹鬼流と斬鬼流を襲撃しに来た王蛇と電王と対峙したりなど過去でストレンジと何度も対峙してきた。

翼の隣では連児たちがこの事件の発端となったアギトを睨みつけていた。

黒崎　連児
「お前は、あの時の・・・!!」

東條　翔哉
「美穂さんを倒したヤツと・・・シンイチさんを操ったヤツ!!」

龍牙　シンイチ

「あの時のクワガタ野郎…！！」

乾　健人
「お前、よくも俺達を・・・」

三人は自分達と対峙したバーニングアギトを睨みつける。一方、バーニングアギトはシンイチと健人を見て鼻で笑う。

アギト・バーニングフォーム
「ふん、使えない奴らだ。たかが一人の人間を抹殺するぐらいをの容易いできないとはな。まあいい、こいつらを使って倒すまでだ」

バーニングアギトの後ろから何人かが出てきた。それは本来この世界にいないはずのミラーワールドで戦うライダー『仮面ライダーゾルダ』、『仮面ライダー王蛇』、『仮面ライダーガイ』、『仮面ライダーインペラー』の四体と、スマートブレインが新たに開発されたライダー『仮面ライダークフィー』に、スマートブレイン直属のエリート集団「ラッキークローバー」の『ロブスターオルフェノク』と『ドラゴンオルフェノク』と『センチピートオルフェノク』に『クロコダイルオルフェノク』だった。健人達は驚く。

乾　健人
「！？お前らは…！！」

翔道　翼
「知っているのか？」

乾　健人
「ああ、前に俺と戦ったオルフェノク達だ。見たこともないヤツもいるけど」

龍牙　シンイチ
「それに俺がいた世界のライダーまでいやがる」

アギト・バーニングフォーム
「その通り、こいつらはお前達の世界にいた奴らだ。お前達のように操らせてもらった」

電王・ソードフォーム
「じゃ、そういうことで行きやがれ野郎ども！！」

電王は手を上げると、ゾルダ達がシンイチ達に飛び掛ってくる。咄嗟に翼は何処からともなく本来ナイトの武器である翼召剣「ダークバイザー」を手にし、数枚のカードを装填する。

黒崎　連児
「って何でお前それを持ってんだよ！？」

【ＡＤＶＥＮＴ】

翔道　翼
「ついさっきライダーカードの力を使って呼び出した。さあ、出番だ。ドラちゃん、ダーちゃん、ボルちゃん、エビちゃん、ブランち

ゃん、デストちゃん、バイオちゃん」

目の前にシンイチ達の相棒の真紅の龍「無双龍ドラグレッダー」、紺色の蝙蝠「闇の翼ダークウィング」、金ぴかの蟹「ボルキャンサー」、紅色のエイ「エビルダイバー」、白き白鳥「閃光の翼ブランウィング」、黄緑色のカメレオン「バイオグリーザ」が召喚され、ゾルダ達に向かって体当たりを直撃させる。

バイオグリーザ
「ふう、危なかった・・・」

ドラグレッダー
「うぉぉらあ!!俺、再び参上!!おいシンイチ、大丈夫だったか？」

シンイチ
「ドラグレッダー!そういやお前今まで何処に」

ダークウィング
「シンイチと健人さんの2人が寝ている時に私達がお腹を空かせている所に翼さんがおいしいサバミソをご馳走してもらって」

デストワイルダー
「とてもおいしかったニャ」

ボルキャンサー
「本当に美味やったわ～～。いやマジで美味しかった」

エビルダイバー
「あまりの美味しさのあまり天に逝きそうになりまして」

ブランウィング
「でも何とか帰ってこれたわ。危うく三途の川を渡るところだったわ」

市村　剣助
「って、焼きたてジャぱ○か！！主人公の作った死ぬほどおいしいパンを食べた店長か！！」

翔道　翼
「いや、マシンディファースダーに積んであった前に訪れた世界で生け捕りしてた正真正銘の新鮮で生きがいい鯖ととある人物が教えてくれた鯖に合う味噌で作ったサバミソだが・・・」

龍牙　シンイチ
「知るかよそんな事！！どれだけ美味いんだよそのサバミソは！！」

手塚　海斗
「・・・食べてみたいな」

黒崎　連児
「食べなくていい！！」

シンイチ達はゾルダ達を他所に翼やドラグ達を突っ込む。それを見ていた電王は拳をプルプルと振るわせる。

電王・ソードフォーム
「てめぇら……勝手にもりあがってんじゃねぇぇぇぇぇぇぇ！！！
俺にもサバミソ喰わせやがれぇぇぇぇ！！」

美穂＆霧沢＆東條
「「「って敵のアンタも何言ってるの！？」」」

電王・ソードフォーム
「るせぇ！！これでもくらえ！！」

【Ｆｕｌｌ　ｃｈａｇｅ】

電王・ソードフォーム
「俺の必殺技ァ！！いきなりＰａｔｅ２！！」

フルチャージしたデンガッシャーの赤い刀身・オーラソードを分離させ、嘗てファムを倒した分離したオーラソードでの斬撃「エクストリームスラッシュ」を翼達に向かって振り下ろして放とうとする。

【ＡＴＴＡＣＫ－ＲＩＤＥ！ＢＡＲＲＩＥＲ！！】

だがそこへ翼のサモンドライバーの銃口から放たれたバリア光弾がドーム状になって電王とバーニングアギト達を包み込み、オーラソ

ードはバリア光弾の壁に阻まれた。

電王・ソードフォーム
「!?なんだこりゃ!?」

アギトバーニングフォーム
「フン、本来敵の攻撃を防ぐモノを攻撃を俺達を捉える檻に利用したのか・・・そんな小細工通用するとでも思っているのか!!」

叫んだ後バーニングアギトは、バリアの壁に何度も力任せに拳をぶつけて破壊しようとする。一方、翼達はバリアのドームから少し離れた位置で様子を見ていた。

翔道　翼
「時間稼ぎはできる。シンイチに健人、お前らにコレを返す」

そういうと翼はシンイチ達にカードデッキを、健人にファイズフォンを返す。

龍牙　シンイチ
「これ、俺達のデッキ…」

翔道　翼
「少し拝借させてもらった。お前達を戻すためにちょっくら修理を」

乾　健人
「お前・・・」

翔道　翼
「フッ……礼は後でいい。それより美咲、お前にこれを渡す」

そう言うと翼はファイズと似たベルトと携帯型のツールを取り出す。
健人と美咲はドライバーと携帯型のツールを見て驚いた。

鷹取　美咲
「それって、カイザのベルト！！」

乾　健人
「何で翼がカイザのベルトを持ってんだ！？」

2人は翼が出したベルトと携帯のツール……カイザドライバーとカイザフォンを見て声を上げる。2人の知る限りは自分達の世界にいるカイザに変身している木島雄介という青年が持っているはずに、今翼の手元にある。そんな事を思いながらまるで狐に抓まれた表情を浮かべる2人に構わず翼はカイザドライバーとカイザフォンを美咲に突き出す。

鷹取　美咲
「え？私？」

翔道　翼

「使い方は分かるか？まあお前なら使える」

そう言うと翼は健人の美咲に近づいて耳元で小さく囁く。

翔道　翼
「オルフェノクである美咲ならカイザの忌まわしい力の心配もないからな」

乾　健人
「！？お前、なんでそれを…」

翔道　翼
「俺ぐらいになると一目見ただけで大体分かるんだよ。そいつが良いヤツか悪いヤツか。心配するな俺はオルフェノクと共存する派だから」

鷹取　美咲
「分かりました」

美咲はカイザドライバーとカイザフォンを翼から受け取った。翼はそれを見て笑みを浮かべると、手から銃のグリップのような物を次に真理に投げて渡した。

龍牙　真理
「あの、これって」

翔道　翼
「真理だったな、お前もシンイチ達と共に戦ってくれ」

龍牙　真理
「え!?私が!?」

龍牙　シンイチ
「ちょっと待て、真理はライダーじゃないから一度も戦ったこともないんだぞ!!」

東條　翔哉
「そうですよ、第一真理さんを危険な眼に逢わせる訳には…」

翔道　翼
「大丈夫だ、アイツが戦い方を教えてくれるよ」

その言葉と共に真理の頭に水色をした蜻蛉型の機械が現れ、彼女の頭に止まる。真理は蜻蛉型の機械を見ながら翼に聞いた。

龍牙　真理
「あの、この子は…」

翔道　翼
「ドレイクゼクターだ。その子がお前を戦い方を教えてくれる…」

衛宮　士朗
「おーい、翼!!今の音は一体なんだ!!」

翼が振り向くと、士朗とセイバーとナスカ……と、何故か召喚した覚えがないゼロノスとイクサが駆けつけてくる。

翔道　翼
「士朗お前、遅い……って、何でイクサとゼロノスがここにいる」

セイバー
「そ、それが何故か厨房の上から現れたんです」

イクサ
「魑魅魍魎跋扈するこの世の中、名護啓介がココにいる！！」

ゼロノス&シンイチ&健人
「「「説明になってねぇ！！」」」

三人がイクサにトリプルをキックを浴びせるのを尻目に、翼はセイバーに刀型のツールを渡す。

セイバー
「…？これって確かカブトの世界の…」

衛宮　士朗
「サソード…秋水さんが使ってた」

翔道　翼
「使い方は分かってるだろ？さあ、そろそろ行くか…」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

――バキィィィン！！――

アギト・バーニングフォーム
「フン、他愛もない」

アギトは崩壊するバリア光弾の見てそう言い捨てる。その後ろのゾルダ達はそれぞれ武器を構えて今にも破壊活動を始めようとする

電王・ソードフォム
「たっく、手間かけさせやがって……俺のイライラはもうクライマックスなんだよ！何処だ！！出てきやがれ！！」

【ＡＴＴＡＣＫ－ＲＩＤＥ！ＰＬＩＳＯＮ！！】

電子音が鳴ると、電王とアギト達のの周りの風景が歪み、都会の街中に変わる。アギトと電王達は驚愕する。

電王
「なんじゃごりゃぁぁあああ！！」

アギト・バーニングフォーム
「!?どうなっている!?」

「今俺達とお前達がいるのは『ＰＬＩＳＯＮ（プリズン）』のカードで創った巨大な異空間。玖楼国の城で戦うと被害が出てサクラ達に迷惑をかけるから使わせてもらった、ここなら」

振り向くと、某昔の警察ドラマの刑事達の如く横並びに歩いて電王達に迫る翼の姿があった。ちなみに並び方は…

美穂・真理・東條・市村・霧沢・海斗・レン・シンイチ・翼・健人・美咲・士朗・セイバー・ゼロノス・イクサ・ナスカ

…である。アギトは苛立ちと怒りを表した表情で翼達を睨みつける。

アギト・バーニングフォーム
「もういい、貴様等は我が業炎で消えうせろ!!」

龍牙　シンイチ
「消えるのはお前の方だ」

乾　健人
「お前には随分とやられたからな、今度はコッチの番だ」

翔道　翼
「いっとくが俺達はいつでも何処でも最初から最後までクライマッ

クスだ。覚えておけ…行くぞみんな！！」

一同

「「「おう！！」」」

翼の言葉に答えると、翼達は変身の準備をする。美咲は健人と同じようにカイザフォン『９・１・３』と起動コードを打ち込み、真理とセイバーの周りにドレイクゼクターと紫の蠍型の機械「サソードゼクター」が現れ、グリップと”サソードヤイバー”の柄にに自動的にセットされる。

一同

「「「「変身！！」」」」

【ＫＡＭＥＮ－ＲＩＤＥ！ＤＨＩＦＩＳＲＴ！！】

【ＣＯＭＰＬＩＴＥ】

【ＨＥＮＳＩＮ】

【ｃｈａｇｅ　ａｎｄ　ｕｐ】

【Ｒ・Ｉ・ＳＩ・Ｎ・Ｇ】

光が包まれ翼達はディファースト、ファイズ、龍騎達、クウガに、

さらに美咲は黄色のフォトンストリームを身体に駆け巡らせた紫の複眼の戦士『仮面ライダーカイザ』、真理は蜻蛉を模した気まぐれな風の水色の銃士『仮面ライダードレイク』、セイバーは蠍を模した高貴な剣士『仮面ライダーサソード』に変身する。
ゼロノスも赤錆色に装甲と契約イマジンのデネブがフリーエネルギーと結合してマシンガンの武器になった「デネビックバスター」を武器の最強フォーム『ゼロフォーム』、イクサはボディ青空を思わせる蒼になり新たにマスク部分が銃になった強化銃「イクサライザー」を装備しイクサシステムを完全解放した『ライジングイクサ』に姿を変える。

ディファースト
「さあ、振り切るぜ…ってな！！」

電王・ソードフォーム
「派手にやりやがって・・・・」

アギト・バーニングフォーム
「焼き尽くす…！！」

ゾルダ・王蛇・ガイ・インペラー
「「「「！！」」」」

クフィー・ドラゴンO・ロブスターO・センチピートO・クロコダイル
「「「「「！！！」」」」」

龍騎・ファイズ
「「いくぜ！！」」

操り人形と化したゾルダ達ミラーライダー、新たなる記号の戦士・クフィーとラッキクローバーを率いたバーニングアギトと電王、異世界から来たＮＥＷファイズ・ＮＥＷ龍騎とディファースト達の戦いが始まった……

～～～～～～～～～～

とある何処かの世界、日本の都会にひっそりと佇む小さい、だが異様な雰囲気を漂わせる『ミセ』の中に一人の人物がいた…

「さてと……そろそろコレを届けるか…」

右と左の瞳の色が違う着物を着た眼鏡をかけた青年が、煙管を吸いながらテーブルに広げた数枚のカードを眺めていた……

第十二話／反撃への変身（後書き）

～ツバサ×仮面ライダー通信～

――鳴滝ライダーズのアジト――

鳴滝
「ライダ～～、変身…トォ！！」

ネガタロス
「・・・・・・・・・」

朝倉　威
「・・・・・・・・・」

ネガタロス
「おい、鳴滝の親父が一号ライダーの変身ポーズしてるぞ。止めなくていいのか？」

朝倉　威
「止めるのイライラする……勝手にやっておけ…」

ネガタロス
「それもそうだな。というか……王蛇、お前何食べてやがる！？」

朝倉　威
「イモリと泥だ。お前も食うか？」

ネガタロス
「いるかぁぁああ!!そんなどうみても不味くて腹壊しそうなモノ誰もくわねえよ!!天の道もドン引きするわ!!そんなもん食べないで俺の兄弟ラーメン弟味噌あげるから……って!?」

牙王
「……う～ん、おいこれも食っていいか?」

ネガタロス
「牙王ぉぉぉ!?お前も泥食おうとするな!!天下の大盗賊の名を本当の意味で汚す気か!?」

牙王
「いいじゃねえか、最近パイナップルや骨付き肉だけじゃ飽き飽きなんだよ」

ネガタロス
「いい年したおっさんが泥とイモリ食おうとするな!!中の人に失礼だ!!そんなにハラペコなら俺の兄弟ラーメン兄貴塩あげるから!!」

鳴滝
「アァーーマァーーゾォーーン!!」

ネガタロス
「アンタもやめんか!!ああ……ストレンジ何処に行った。早く帰って来い、俺だけじゃこれ裁き切れないぞ……」

影山　瞬
「兄貴…尻が痛いよ…」

矢車　想
「影山…これが地獄の浣腸だ…」

ネガタロス
「お前らはまだベットで安静にしてろ!!まだ（尻の）傷が癒えてねえんだからよ。ほら、今日の昼飯の麻婆豆腐だ」

地獄兄弟
「・・・・・・」

ネガタロス
「？どうした？」

影山　瞬
「・・眩しいよ。豆腐の純白の光は俺達闇の住人には眩しいよ…」

矢車　想
「今の俺達に、豆腐は眩しすぎる……俺達は泥がお似合いだ」

朝倉　威
「食うか？」

ネガタロス
「もうそのネタはやめぇぇぇい!!泥を食ったら身体に悪くて怪我の直りが遅くなるわ!!」

橘　朔也

「コレクッテモイイカナ？」

ネガタロス
「・・・・・・・・・・

お前誰だァァァァァァァァァああ！？」

～完（？）～

第十三話／新たなる龍の騎士・Ｎｅｗ　Ｆａｉｚ　「乱入者とＦＦＲ」（前書き）

どうも無鉄砲な地水炎風陰雷です。最近この小説の外伝的ポジションの作品を連載するという無茶をしてしまいました。

はぁ…まあとりあえず人間続ける事が大事です。小説連載これかも頑張って執筆します。

翼

「それと、近い内に新しい話更新するぜ。それじゃ第１３話『新たなる龍の騎士・Ｎｅｗ　Ｆａｉｚ』始まります」

第十三話／新たなる龍の騎士・Ｎｅｗ　Ｆａｉｚ　「乱入者とＦＦＲ」

玖楼国城でのライダーカードの力で作り出した都会の街中の姿をした牢獄（プリズン）にて、シンイチ達の世界にいたゾルダ達・スマートブレイン直属のオルフェノクを引き連れた電王・バーニングアギト達とディファースト・龍騎・ファイズがぶつかり合おうとしていた。

【ＡＴＴＡＣＫ－ＲＩＤＥ！ＳＬＡＳＨ！！】

ディファースト
「ウォオラァ！！」

サソード
「ハァア！！」

クウガ・タイタンフォーム
「オリャァアア！！」

カイザ
「やぁあ！！」

ナイト
「あらよっと！！」

ファム
「タァア！！」

先陣切ってディファースト、サソード、パワーと耐久力が優れた剛力形態・「タイタンフォーム」に超変身したクウガ、カイザ、ナイト、ファムはそれぞれ手にした剣でゾルダ、オルフェノク達の身体に斬り付ける。斬り付けられたゾルダ達は四方八方に飛ばされてしまうが、戦い慣れしている電王は斬られる直前に地面を蹴って空高くジャンプして避け、バーニングアギトは腕に生えた棘で受け流す。

電王・ソードフォーム
「おらぁ！！お返しだゴルァ！！」

アギト・バーニングフォーム
「ウォォォオオ！！」

電王はタイガ達の後ろに回りこんでデンガッシャーを振り下ろし、斬撃が直撃したタイガ、ベルテ、シザース、ライアは倒れこんでしまう。バーニングアギトも手から炎を打ち出し、龍騎達がいた場所を爆発させる。

タイガ&ベルテ&シザース&ライア
「「「「うわぁぁあ！！！」」」」

龍騎&ナイト&ファム&ファイズ&カイザ
「「「「「ああああああ！！」」」」」

電王・ソードフォーム

「へへへ・・・やっぱり俺が最強だぁぁああ！！」

アギト・バーニングフォーム
「燃えろ……！！」

ディファースト
「火は大切に扱え！！」

クウガ・タイタンフォーム
「火事になったらどうするつもりだ！！」

サソード
「２人ともそう言う問題じゃありません！！」

再び炎を放とうとするバーニングアギトの目の前にディファースト、クウガ、サソードの三人がファイズたちを助けるため現れ、バーニングアギトの往く手を防いだ。さらに電王には…

――ババババン！！――

電王・ソードフォーム
「ハナコォッ！？痛って～～、誰だ！！」

両腕を天に向けて高らかに突き上げ喜びの咆哮を上げ調子に乗ってる電王に背後から銃撃が浴びせられる。奇怪な悲鳴を上げながら電王は背中を押さえながら後ろを振り向くとデネビックバスターを肩

に担ぐゼロノス、イクサナイザーとイクサカリバーガンモードを向けたライジングイクサ、銃と剣が一体化した武器を持つナスカ・ドーパンド、ドレイクゼクターを構えているドレイクがいた。

電王・ソードフォーム
「てめぇら、何しやがる！！」

ドレイク
「あ！あの、す、すいません！！」

ゼロノス・ゼロフォーム
「誤るな、調子に乗るアイツが悪い」

ナスカ・ドーパンド
「馬鹿はよく吼えるって言いますし」

ライジングイクサ
「戦士が油断するのは命取りになる。自業自得だ、反省しなさい！！」

電王の剣幕に押されドレイクはつい頭を下げて誤ってしまうが、ゼロノスとライジングイクサとナスカ・ドーパンドは辛口コメントを言い放ち、攻撃を仕掛ける。
電王とバーニングアギトがディファースト達に気が削がれている内にドレイクは龍騎達に駆け寄る。

ドレイク

「大丈夫みんな！！」

タイガ
「ま、真理さん…ううう、すいません。本来僕が守るはずなのに…」

ベルテ
「おいおい、泣くなよ…」

シザース
「真理さんが目の前にいるのですから…」

ライア
「いくぞ、俺達も戦うぞ…」

自らの不甲斐無さに落ち込むタイガにベルテ、シザース、ライアの三人がなだめる。その時電子音が聞こえて来た。

【ＡＤＶＥＮＴ】

ディファースト達の周りのイたる所からレイヨウ型二足歩行のミラーモンスター”マガゼール”を率いた多数のレイヨウ型モンスターが現れ、ディファースト達に襲い掛かってくた。ゼロノス、イクサ、ナスカ、ドレイクは狙いを定めて乱射し、クウガ・サソード・ナイト・ファム・タイガは一体一体切り裂き、シザースとベルテは格闘術で応対した。

アギト・バーニングフォーム
「くそ、何だこいつらは……！！抹殺の邪魔だ…」

電王・ソードフォーム
「っち、これじゃうまく進められねえ…仕方がねぇ。一端引きなおして体勢を立て直すぞ……そこどきやがれ!!鹿肉にしてやろうかぁああ!!」

電王はぶん殴って蹴っ飛ばしてまるで喧嘩をしてるかのように暴れながら、バーニングアギトを連れて逃げ出す。龍騎・ディファースト・ライアはそれぞれ右腕にドラグレッダーの頭部を模した武器”ドラグクロー”を装備すると、三人合わせてドラグクローから放つ火炎放射『昇竜突破(ドラグファイアークロー)』でレイヨウ型ミラーモンスター達を炙っていく。

龍騎&ライア
「「はぁぁぁぁああ!!」」

ディファースト
「今日のディナーはジンギスカンだぁーーー!!」

メガゼール&オメガゼール
「「って、俺達は羊じゃねえ……ぎゃぁぁあああああ!!!」」

断絶魔と共にメガゼール、オメガゼール、さらに巻き添えを食らったモンスター達は三人の手によってエネルギー体という名のジンギスカンに調理されてしまった。

ディファースト
「はぁ……何だか厄介な事になったな……」

【ＳＨＯＯＴ　ＶＥＮＴ】

ディファースト
「！？ぐわぁああ！！」

突然砲撃がディファーストを襲い、ディファーストは吹き飛ばされてしまう。龍騎は砲撃が飛んで来た方向を見ると、そこには今まで操られていたが先程の斬撃の衝撃で元に戻った緑の参謀砲撃手『仮面ライダーゾルダ』、大型のドリル”ガゼルスタッブ”をつけた茶色のキックボクサー『仮面ライダーインペラー』に、右腕にサイの頭部を模した”メタルホーン”を装備した銀色の甲冑戦士『仮面ライダーガイ』、紫の狂戦士『仮面ライダー王蛇』のシンイチ達の世界にいた敵側の仮面ライダーたちの姿だった。

龍騎
「てめぇら！！正気に戻りやがったのか！？」

インペラー
「お前ら…僕の美しいモンスターを倒しやがって…絶対に許す者か！！」

ガイ
「それに貴様は龍騎と手を組んでいる。悪は見逃しておけん！！」

王蛇

「ははははは!!龍騎、戦いましょうよぉぉぉぉ!!」

王蛇達はディファーストと龍騎達に襲い掛かる。一方、ファイズやカイザはディファーストに応戦しようと行こうとするが、そこにロブスターオルフェノク・ドラゴンオルフェノク・クロコダイルオルフェノクのラッキークローバーメンバーがファイズ達に乱入してきた。

クロコダイルオルフェノク
「グガァァアア!!」

センチピートオルフェノク
「ファイズゥゥゥ!!何だか知らんが、この混乱に乗じて今度こそそのベルト頂くぞォォォ!!」

ファイズ
「てめぇらは…!!」

ロブスターオルフェノク
「あら、貴方がファイズね。潤一郎くん達から噂は聞いてるわ。だけど私達これでも困惑しているから、自己紹介はまた今度ね」

ファイズ
「っけ、誰だか知らないが其処をどけ!!」

クフィー
「嫌だと言ったら?」

カイザ
「私達は貴方達としている暇はない！！邪魔しないで！！」

ファイズはベルトからファイズフォンを取り出しブラスターモードに変形させ、カイザもＸの形をした銃剣一体型”カイザブレイガン”で三人にビームを連射する。三人はビームをくらって怯むが、避けたクフィーとドラゴンオルフェノクが二振りの剣「クフィーセイバー」と巨大な爪で倒そうとする。

ファイズ
「ぐわぁあ！！」

カイザ
「きゃぁあ！！」

ドラゴンオルフェノク
「っへ、こんなに弱いの？ファイズとカイザって、つまんない・・消えろ」

クフィー
「ゲームオーバー・・・ね」

無邪気と冷酷が入り混じったセリフを履き捨てるとドラゴンオルフェノクとクフィーはファイズとカイザに鉤爪とクフィーセイバーを振り下ろそうとする。さらに龍騎の方も、ファムの加戦もむなしく王蛇、ガイ、インペラー、ゾルダに追い詰められいた。

龍騎
「ぐわぁぁああ！！」

ファム
「きゃあぁぁぁぁあああ！！」

王蛇
「さあ、お遊びはここまでにしましょう……そろそろ貴方達の悲鳴を聞かせてもらいましょうかぁ！！」

【ＦＩＮＡＬ　ＶＥＮＴ】

巨大なコブラ型ミラーモンスター”ベノスネーカー”が出現、王蛇はベノスネーカーに向けてジャンプしベノスネーカーが放った毒液の勢いに乗せての連続蹴り『ベノクラッシュ』を２人に放つ。

ファム
「…！！」

龍騎
「美穂！！」

龍騎は咄嗟にファムを庇おうと抱き寄せる。そして王蛇の蹴りが２人に襲い掛かろうとする。

【ＦＩＮＡＬ－ＦＯＲＭ－ＲＩＤＥ！ＦＡ・ＦＡ・ＦＡ・ＦＡＩＺ！！】

【ＦＩＮＡＬ－ＦＯＲＭ－ＲＩＤＥ！ＲＹＵ・ＲＹＵ・ＲＹＵ・ＲＹＵＵＫＩ！！】

ディファースト
「健人、シンイチ、ちょっと我慢しろ！！」

ファイズ
「え？・・・うわぁぁぁああ！！」

カイザ
「健人君！？」

龍騎
「うわぁあ！？う、嘘だろぉぉぉ！？」

ファム
「シンイチ！？」

ディファーストの声が上から聞こえた直後、ファイズが急に空中に浮び上がり変化し始めその光景を見て異世界ライダーズ達は手を止めて驚く。
ファイズの両腕が背中に移動しファイズポインターとファイズショットが一体化した武器が装着され、下半身が銃身、いずれ時が進み成長した健人が真の力を手に入れる”ファイズブラスター”と酷似したファイズのＦＦＲ・巨大ビームキャノン砲『ファイズブラスタ

ー』に姿を変える。

ドラゴンオルフェノク
「なにぃ!?」

クフィー
「そんなのありなの!?」

ドラゴンオルフェノクとクフィーは予想外な出来事が起きて戸惑ってしまうが、これだけではなく、龍騎もファイズのように変化があった。いきなりドラグシールドが両肩に装備されたかと思うと下半身が変化した長い胴体に合体し、相棒の”ドラグレッダー”に酷似したドラゴン・龍騎のＦＦＲ『リュウキドラグレッダー』に超絶変形した。

ナイト&ライア&シザース&ベルテ&タイガ&ガイ&ゾルダ&インペラー&ドレイク
「「「ええええええぇぇぇぇぇぇぇ!?」」」

ドラグレッダー
「俺ェェェ!?」

ミラーモンスター達
「「「ドラグレッダーに変形したァァァあ!?」」」

王蛇
「な!?ナニィ!?って熱ッ!?」

驚くのもつかの間、リュウキドラグレッダーから放たれた火球が王蛇に直撃し、ベノクラッシュは不発に終わってしまう。

リュウキドラグレッダー
『ナニコレ!?何で俺ドラグになってんの!?口から火も吐いちゃったよ!?』

ファイズブラスター
『おいおいおい!!どうなってるんだこの姿!?』

――ブォォォォン!!!――

ディファースト
「それが俺とお前の力だ!!」

遠くに吹き飛ばされていたディファーストがオートバジン・ビークルモードに跨って戻ってきて、前輪をドラゴンオルフェノクとクフィーを弾き飛ばした。

ディファースト
「2人とも、大丈夫だったか?」

カイザ
「翼さん!?今まで何処に行ってたのですか!?無事なら早く戻っ

てきてください！！」

ディファースト
「すまない、ちょっとこいつを。それより美咲、お前は健人を持って戦え」

カイザ
「ふぇ？何だかよく分からないけど……精一杯頑張ってみます！！」

カイザはファイズブラスターを手に取り握り締める。ラッキークローバーとクフィーが舞い戻ってくる。

センチピートオルフェノク
「ファイズ貴様ぁ！何のつもりだいきなり変形するとは！！〇ランス〇ォーマーか！？」

クロコダイルオルフェノク
「〇ンボイ総司令官モビックリダ」

ロブスターオルフェノク
（2人とも何の事をを言ってるの…？）

ドラゴンオルフェノク
「灰に、なれぇ！！」

四人は一斉にカイザに襲い掛かった。カイザはファイズブラスターの引き金を引いてエネルギー弾を放ち、直撃させる。クロコダイル、

ロブスター、センチピート、ドラゴンは吹き飛ばされてしまい、地面に叩き付けられる。

ファイズブラスター
『す、すっげぇぇぇ…』

カイザ
「オルフェノク四体相手に圧倒するなんて…」

【ＦＩＮＡＬ－ＡＴＴＡＣＫ－ＲＩＤＥ！ＦＡ・ＦＡ・ＦＡ・ＦＡＩＺ！！】

ディファースト
「じゃ、ディファーストフォトン…ちゃんと決めろよ」

ファイズブラスターの銃口にエネルギーが集められ、真紅に輝くフォトンブラッドの光線『ディファーストフォトン』が放たれた。それを食らったラッキークローバーとクフィーは爆発する。カイザはファイズをＦＦＲの姿から元の姿に戻すと、三人は龍騎達の元へ急ぐ。

その頃ナイト・ライアと王蛇、ベルテ・シザースとガイ、ファム・クウガ・サソードとマガゼール・インペラー、タイガ・ドレイク・ゼロノスとゾルダ、イクサ・ナスカ・リュウキドラグレッダー・ドラグレッダーとミラーモンスター軍団と激戦になっていた。

ナスカ&ライジングイクサ
「「人の話を聞きなさい！！ハッ！！」」

ドラグレッダー&リュウキドラグレッダー
「「はぁぁぁあああ!!」」

メタルゲラス
「ぐごぉッ!?おいどん達聞いてないどん!!」

マグナギガ
「ドラグレッダー二、兄弟ガイタナンテ…」

ガイ
「てか、ミラーモンスターに家族いたか?」

インペラー
「さぁ…それにしてもカッコいい」

龍騎がいきなりミラーモンスター・ドラグレッダーの姿になった事に混乱しているライダー達は自分達の相棒達を召喚し応戦するも、リュウキドラグレッダーとドラグレッダーという二匹の無双龍によって圧倒されてた。コケにされ続けられてたゾルダと王蛇は頭に来ていており、自らの意思で元の姿に戻った龍騎を睨みつけていた。

王蛇
「この…わたしのファイナルベントを…!!」

ゾルダ
「ってめぇえら!!俺達を…!!」

ナイト
「お前らの負けだ」

ライジングイクサ
「諦めなさい、そして自分の罪の重さを知りなさい」

ゼロノス・ゼロフォーム
「このまま戦ってもお前ら後悔するだけだ」

ゾルダ
「フン！！主役で映画公開するヤツにいわれたくねえ！！こうなったら…」

王蛇
「奥の手です」

そういうと王蛇とゾルダはデッキからカードを引き抜き、自分のバイザーに装填する。

【ＡＤＶＥＮＴ】

大勢のミラーモンスター
「ウガァアアア！！！」

ナスカ・ドーパンド
「な、なんですと！？」

ナスカは声を上げて驚いた。何故なら大量の野生ミラーモンスターが、四方八方に出現したからだ。野生ミラーモンスターはリュウキドラグレッダー達の周りを囲んで追い詰める。

クウガ
「な！？契約モンスター以外のモンスターを召喚した！？」

タイガ
「俺達も前に何回か見ましたが……」

ベルテ
「てめぇら、これって卑怯って言う事知ってるのか？」

ゾルダ
「ふ、これは『戦略』だ……行け！！野郎ども！！やつらを塵を残さずたおせぇぇ！！」

ゾルダの掛け声を聞くと野生モンスター達は咆哮を上げて、一斉にリュウキドラグレッダー達に襲い掛かろうとする。だがそこへ自分達とは違う電子音が響き渡った。

【ＦＩＮＡＬ－ＫＡＭＥＮ－ＲＩＤＥ！ＲＹＵ・ＲＹＵ・ＲＹＵ・ＲＹＵＵＫＩ！！】

その時龍騎達の周りに燃え盛る炎が彼らを守るように包み込み、モンスター達を阻んだ。炎が静まると、一同の目の前に現れた人物が現れ、龍騎は驚きの声を大きく上げる。

龍騎
「な、ナニィ！？俺がいる！？」

龍騎――シンイチの目の前にはそこには『巨大な紅蓮色の龍を従えた赤と金色のラインの装甲の姿をした龍騎』が立っていた。

～～ツバサ×仮面ライダー通信～～

――実は翼とシンイチ達の間にこんな会話があった――

翔道　翼
「ふぅん……お前らも大変だな。ミラーモンスターを可愛いなんて思っているライダーがいるなんてな」

龍牙　シンイチ
「ああ、あれには正直ドン引きしたぜ」

乾　健人
「それ、何だか分かる気がするな。翼さんもそんな人物あった事あるのですか？」

翔道　翼
「う～ん…変なヤツにはいっぱいあったが、それほど悪い奴らじゃねえけどな…あ、そういや”シンイチ”って名前でこんな思い出がふと思い出したんだが…」

龍牙　シンイチ
「え？俺の名で…」

翔道　翼
「ああ、あれは俺がまだ玖楼国に漂着する前に訪れた世界の出来事

だが…」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

――とある世界――

毛利　蘭
「新一ィィィィ！！たまには連絡しなぁぁぁあいぃぃぃッ！！」

ドロンジョ&トンズラー&ボヤッキー
「「「ハラホロヒレハレ〜〜〜〜！！」」」

頭の一部が鋭く尖がった長髪をした学生服の女性――毛利蘭は、電柱をも圧し折る左手からのパンチで今は懐かしいドロンボー一味を殴りつける。3人は物凄い勢いで回転しながら空中を舞い、地面にたたきつけると何故か爆発する。そして空に髑髏型の煙が立ち上っていた。

ドロンジョ
「ぶべ…このスカポンタン、なんでこうなるのよ」

トンズラー
「ワイ達、今何があったんだ」

ボヤッキー
「女子高生に殴られたわ…ガクッ」

3人は白目を向いて動かなくなる。某大人気RPGの様にただの屍のようだ。

～～～～～～～～～～

シンイチ&健人
「「ちょっと待てぇエェイ!!」」

翔道　翼
「ん？どうした2人とも？」

龍牙　シンイチ
「今回想で突っ込む所あったよね!？何で『名探偵コナン』の蘭ちゃんがドロンボーをぶっとばしてるの!？」

翔道　翼
「いや、前に訪れた世界でその子（蘭）とトラブル起こしちゃって。何処かの誰かさんのせいで次の世界にいた俺の元に送り込んだんだ。その3人は巻き添え食らった人だ」

乾　健人
「何があったんだよ蘭ちゃんと!!てかドロンボー大丈夫なのか！？ドロンボーが死んじゃったら、誰がヤッター○ンと戦うんだ!？」

翔道　翼
「あの後その3人は病院に担ぎ込まれ、全治一ヶ月の重症を負った

ぜ。まあガンちゃんとアイちゃんが水入らずデートできたけどな」

龍牙　シンイチ
「確かに良かったけど、週一ドロンボーのお仕置きを楽しみにしているドクロベェ様寂しがってるだろ!?そもそもシンイチ違いだろ!!」

翔道　翼
「確かに…あ、あとこんな話があったが…」

～～～～～～～～～～

――何処かの世界――

ギルガメッシュ
「ははははは!!雑種め!!この俺に敵うなんて思ってるのか？この剣の錆となれ…」

――バキィィン!!――

ギルガメッシュ
「な、なぬ!?剣が切れた!?いや……折れた!?たった一つの蹴りで折れたぁぁぁ!?」

毛利　蘭

「新一ィィィィ!!浮気するなぁぁあああ!!!」

――ボコ!!ドガ!!バキ!!ベギン!!バゴンバゴンッ!!ブォオォォォン!!バァァァコォォォォンッ!!ドガァァァァアン!!ハナシナサイ!!オレハナゴダ!!ナゴケイスケダァァァ!!――

ギルガメッシュ
「嘘…だろ・・・俺が・・・・雑種に・・・負けるなんて・・・ガク・・・」

～～～～～～～～～～

翔道　翼
「と言う感じだ」

龍牙　シンイチ
「何だか蘭ちゃん新一の事で八つ当たりしてませんでしたか!?完全に金色の人を赤色の人に変えるまでボコってましたよ!?」

翔道　翼
「左手のだけのジャブでも電柱圧し折るからな。もう内臓破裂してもおかしくないぞ。まあ怒りの度が過ぎて下手していたらミンチにされていたな」

乾　健人
「・・・（何かセリフのような変な声があったような気が…）・・・」

翔道　翼
「まあ、それのせいでオレの親友が犠牲を払ってな…」

～～～～～～～～～～～～

――何処かの世界――

毛利　蘭
「新一ぃぃぃぃぃ、帰って来ぉぉぉぉぉぃぃぃぃぃっ！！」

そこには柔道着を着た女子高生――蘭が本来コナンが履いているキック増強シューズをつけている右足でサッカーボールを負の感情をありったけ込めて蹴り飛ばした。ボールはソニックも青ざめる程（元々青いが）の超剛速球で飛んで行き…

――ドゴォォォォォン！！――

脳噛　ネウロ
「ぐほぉぉぉぉ！！」

翼の隣にいた天下無敵のドS上級魔人・脳噛ネウロの身体に突き刺さる。くの字に折れ曲がったネウロはそのままそのまま飛んで行き、高層ビルを粉々に破壊しながら突き進んで往き、最後は何故か大爆発が起きる。

翔道　翼
「おい、ネウロ！！ネウロ！！ネウロォ！！ネウ・・・ロ・・・
ネウロォォォォオッ！！」

ネウロの名を呼ぶ翼の叫ぶ声が悲しく空に響き渡った。

～～～～～～～～～～

健人
「おいおいおーーいッ！！！もはや蘭ちゃん人間じゃねえよ！！
人間じゃない者を倒してるから！！」

翼
「ネウロは身体をはって世界を守ってくれた。大につまみを合わせたキック力増強シューズは地球さえも壊しかねないのに、そこへ蘭がつけたからな。あのままじゃ世の中が完全に終わってしまう……
ネウロ、頑張って『究極の謎』を探し続けてくれ」

シンイチ&健人
（（・・・生きてんのかよ！！てかアンタと出合った蘭ちゃんこそ一番の謎だ・・・！！））

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

――鳴滝ライダーズのアジト――

ネガタロス
「そういや、俺達に新しい仲間が入るとかいってたな」

草加　雅人
「ああ、何でも故郷の世界じゃ”平成のホームズ・高校生名探偵”とか”空手大会優勝者”なんて肩書きらしい」

木野　薫
「フン、若造か。アギトはオレだけでいいものを…」

草加　雅人
「いや、どうやらガイアドライバーと呼ばれるベルトとガイアメモリを使って変身らしい。まったく特種なベルトだから奪えもできな……！？」

橘　朔也
「ガツガツガツガツガツガツガツガツ…」

上城　睦月
「オレガサイキョウノライダーダ…ムシャクシャ」

木野　薫

「誰だオマエラァァァッ！！！！」

ネガタロス
「しかも何か増えてるぅぅぅぅッ！！！！」

草加雅人
「食べカズ溢すなぁぁぁぁぁぁっ！！！！」

――翼、新たなる敵の予感…？――

翼
「地水ィィィィィ貴様ァァア！！」

ぶどごぉぉッ！！な、何すんの翼！？痛いって！！

翼
「てめぇまた罪を犯しやがったな。近日に更新するとかいってながら、数日後に更新しやがって！！前回あんな事言った俺恥ずかしいぞ！！」

ご、ごめん……また１００００字オーバーしそうになって、それで三部作に……

翼
「いいかげんにしろよ、一体何処まで待たせるつもりだ！！番外編で廻との再会が後送りになってるじゃねえか！！もう我慢ならねえ……

……いっぺん、死んでみる…？」

何処の闇魔さんだよ！？絶対嫌だ！！逝ったとしてもすぐ某生徒会の杉〇健の如く帰ってくるけど！？ってあれ？何か後ろが熱い……

龍騎（烈火）
「・・・・八竜、砕羽・・・！！」

ファイズ（夏目）
「来い、？鋼…そして焔月抜刀！！」

ぎゃぁぁあああああ！！！

柳
「さ、作者さん大丈夫かな……」

奏（嵩月）
「多分、大丈夫じゃないかと……」

操緒（？鋼を発動しているため幽霊体）
「それよりタイトルコールを一緒にやろうよ。んじゃ、いっくよ～～」

柳＆操緒＆奏
「リスさんとのコラボも大詰め！！第十四話『新たなる龍の騎士・Ｎｅｗ　Ｆａｉｚ　「邪悪なる業炎との決着」』、始まります」

第十四話／新たなる龍の騎士・Ｎｅｗ　Ｆａｉｚ　「邪悪なる業炎との決着」

龍騎達の目の前に現れたもう一人の龍騎、その場にいた一同は驚く。そこへファイズとカイザがオートバジンに乗って駆けつけて来る。

ファイズ
「シンイチ、大丈夫だったか？」

龍騎
「ああ。それより２人共！！俺の目の前に俺が！！」

カイザ
「落ち着いて、あれは翼さんよ」

龍騎
「え…！？」

龍騎は意外な事実を伝えられて驚く。どうやら今彼らの眼の前にいる龍騎――龍騎サバイブは、ディファーストがファイナルカメンライドで変身した姿である。Ｄサバイブは並ならぬ気を放ちながら一枚のカードをバックルに装填する。

【ＡＴＴＡＣＫ－ＲＩＤＥ！ＳＨＯＯＴ　ＶＥＮＴ！！】

D龍騎サバイブ
「新しい調理法だ。焼き加減はミディアム？レア？それとも…ウェルダー？とりあえず、料理に大事なのは……下ごしらえだ！！」

Dサバイブはそう言うと、獲物を自分に変えて向かってくる野生モンスター達に銃型バイザー「ドラグバイザー・ツバイ」から殺傷能力が低いポイターービームをモンスターの何体かに向かって発射させる。その直後、ドラグレッダーよりも大型の紅蓮の龍――ドラグランザーがポインターービームを辿る様に炎の球弾を天から降り注ぐ隕石の如くの如く放ち、『メテオバレッド』によって先程まで大量にいた野生モンスターは一瞬のうちに灰と化した。
その光景を見た一同は”サバイブ”という未知なる強さと、それを最大限に生かしていると過言でもないディファーストに唖然と見つめるしかなかった。

龍騎
「すげぇ…あんなにいたモンスター達を…」

ドラグレッダー
「上には上がいるってわけか。世界というのは時によって恐ろしいモノだな…」

D龍騎サバイブ
「…シンイチ、みんな、これを使え」

突然Dサバイブはホルダーから何枚かのカードを龍騎たちに目掛け

て投げる。龍騎たちが受け取るとそこには『ＬＩＮＫ　ＶＥＮＴ』と書かれたアドベントカードだった。

ナイト
「何だコレ…リンクベント？」

ダークウィング
「絵柄はユナイトベントと似てますが…あまり見たことがありません」

Ｄ龍騎サバイブ
「それはここことは別の”龍騎の世界”で手に入れた代物だ。全員イクサ、ゼロノス、そして真理の隣に立ってカードに装着しろ…」

Ｄサバイブの言葉を聞いて龍騎達は頷くと、皆は三人の隣に並び始める。だがそれを阻止しようとガイとインペラーが自分達の紋章が描かれたカードをセットする。

【ＦＩＮＡＬ　ＶＥＮＴ】

ガイ
「そんな事させてるほど俺達はあまくないぞ！！」

【ＦＩＮＡＬ　ＶＥＮＴ】

インペラー
「ヒーローはライダーキックで〆るんだよ！！」

ガイはメタルゲラスの肩に足を乗せて乗っかり、メタルホーンを突きたてながら高速突進『ヘビープレッシャー』、インペラーはレイヨウ型モンスター達との一斉攻撃『ドライブディバイダー』の2人の必殺技(ファイナルベント)を発動し、龍騎達に向かって放とうとする。

【ｃａｓｔ　ｏｆｆ．Ｃｈａｎｇｅ　Ｓｃｏｒｐｉｏｎ】

クウガ&サソード&ナスカ・ドーパンド
「させるかぁあ！！」

ガイとインペラーの目の前にタイタンフォーム姿のクウガと身軽でスピードが優れた”ライダーフォーム”にサソードとナスカドーパンドが現れ、彼らにタイタンソードとサソードゼクターと長剣を振り下ろし、彼らの必殺技の勢いを消沈させる。

D龍騎サバイブ
「来たか。士朗、セイバー、霧彦」

ナスカ・ドーパンド
「いや、それは私の人格の元になった人だけど…」

ゾルダ
「もうどうでもいいよ…さっさと決着付けようじゃねえか！！」

【ＦＩＮＡＬ　ＶＥＮＴ】

ゾルダがマグナギガにマグナバイザーを装着すると、マグナギガの隠された兵器を展開させた。このままだと大量の重火器やレーザーやミサイルでの一斉放射『エンドオブワールド』によって皆が倒れプリズンが耐えられなくなり、下手をすれば玖楼国に被害が及んでしまう。そうならないためDサバイブ達四人が動き出す。

【ｃｌｏｃｋ　ｕｐ】

【ＡＣＣＥＬ　ＶＥＮＴ】

ナスカ・ドーパンド
「超加速！！ハッ！！」

サソードはクロックアップを、Dサバイブは龍騎のデッキに仕込まれていたアクセルベントのカードをバイザーに装填し、ナスカは自らの能力の一つの超加速を発動させるなど、三人はそれぞれの持つ超高速移動を。

D龍騎サバイブ
「さぁ、士朗。うけとれ」

【ＡＴＴＡＣＫ－ＲＩＤＥ！ＣＬＯＣＫ　ＵＰ！！】

サモンドライバーには他者の召喚能力のもう一つの能力ある・・・・・それは”ライダーに別のライダーの能力や武器を与える”。Dサ

バイブはサモンドライバーにカードを装填すると、クウガの背中を打ち抜き、クウガをクロックアップ能力を発動させ、彼を超高速の世界に導く。
そしてそろった四人はそれぞれ武器を構え…

サソード
「ライダースラッシュ」

【Ｒｉｄｅｒ　Ｓｌａｓｈ】

【ＡＴＴＡＣＫ－ＲＩＤＥ！ＳＷＯＲＤ　ＶＥＮＴ！！】

Ｄ龍騎サバイブ
「はぁぁあああ！！」

クウガ・タイタンフォーム
「オリャァァア！！」

サソード
「はぁぁあああ！！」

ナスカ・ドーパンド
「タアァァアア！！」

四人はそれぞれ、Ｄサバイブのドラグバイザーツバイの刃から放つ火炎の斬撃『バーニングセイバー』、クウガタイタンフォームのタイタンソードからの封印エネルギーの貫く『カミラティタイタン』、サソードは紫に輝く光刃となったサソードゼクターを振りかざす『

ライダースラッシュ』、ナスカの剣から繰り出された斬撃をゾルダ達に向かって放った。一瞬のうちにゾルダ達四人とミラーモンスター達は斬られ、ひるんでしまう。

D龍騎サバイブ
「行け、シンイチ！！」

龍騎&ナイト&ファム&ライア&タイガ&ベルテ&シザース&ドレイク
「「「ああ！！」」」

【ＬＩＮＫ　ＶＥＮＴ】

掛け声と共に龍騎達は手を肩を3人の肩に置いてリンクベントのカードを装填した。急にドレイクがキャストオフせずに蜻蛉の意匠が入った”ライダーフォーム”になると、3人の銃にシンイチ達のエネルギーが集まり始める。ドレイクはゼクターから伝わる言葉を聞いてゼクターの羽を折りたたみ、ゼロノスはフルチャージしたカードをベルトから引き抜いてデネビックバスターに装填、イクサもイクサライザーのグリップ部分からフエッスルを取り出しベルトに入れた。

【Ｆｕｌｌ　Ｃｈａｇｅ】

【Ｉ・Ｘ・Ａ・ｌ・Ｉ・Ｚｅ・ｒ・Ｒ・Ｉ・ＳＥ・Ｕ・Ｐ】

ドレイク
「えっと、こういえばいいのね…ライダーシューティング！！」

【Ｒｉｄｅｒ　Ｓｈｏｏｔｉｎｇ】

ゼロノス・ゼロフォーム
「はぁああ！！」

ライジングイクサ
「フンッ！！」

龍騎＆ナイト＆ファム＆ライア＆タイガ＆ベルテ＆シザース
「「「いっけぇえぇえ！！！」」」

ドレイクゼクターから放たれた光弾『ライダーシューティング』と、デネビックバスターから発射された高エネルギービーム『バスターノヴァ』、イクサライザーからエネルギー波『ファイナルライジングブラスト』が、それぞれ共鳴するかのように融合し虹色に輝く光の束に変えゾルダ達に直撃し、その場所は大爆発が起きる。

龍騎
「これで終わったな」

ファイズ
「後はあいつらか…行くぞ！！」

ライジングイクサ
「あとは貴方達がやりなさい」

ゼロノス・ゼロフォーム
「じゃ、後は頼んだぜ」

ナスカ・ドーパンド
「けりはちゃんと付けてくださいよ」

ゼロノス・イクサ・ナスカはその場から走っていく一同にそう言い残すと、空気に溶け込むように何処かへ消えてしまった。

～～～～～～～～～

アギト・バーニングフォーム
「はぁ・・・はぁ・・・」

電王・ソードフォーム
「何処だここはぁぁあああ!!!」

戦場から逃げ出したバーニングアギトと電王は、プリズンが作り上げた大都会の街に迷っており逃げ出せていなかった。

アギト・バーニングフォーム
「くそ…何処まで行っても街ばかり…どうなってる!?」

電王・ソードフォーム
「っち!!プリズンはその名の如く対象者を無限迷路のような牢獄

に閉じ込める。出る方法はあるんだが、今はどれも使えねぇ……ちくしょう!!出しやがれ!!」

電王は毒づきながらビルの壁を蹴りつけた。すると2人の周りが歪み始め、眩い光が彼らの襲う。

アギト・バーニングフォーム
「な、なんだ!?」

光が収まり眼を開くと、そこは大都会の街の光景はなく元の玖楼国とディファースト達の姿が写った。

電王・ソードフォーム
「てめぇら〜、やっと見つけたぞ!!」

ディファースト
「それはこっちのセリフだ。お前らがあまりにも遠くに行ってたからしぶしぶ出してやったのに…ちとやってやるか。シンイチ!!」

龍騎
「ああ、あいつの相手は俺達が…やる!!」

ファイズ
「じゃ、俺達の相手は…あいつだ」

電王

「上等だゴラァ！！」

ファイズとカイザとナイトは電王と、ディファーストと龍騎との決戦を開始させる。
ファイズとナイトがファイズエッジと巨大な突撃槍”ウィングバイザー”を電王に振りかざす。が、電王はデンガッシャーで受け止め、2人の頭に頭突きを食らわせる。

ファイズ
「痛っ！！」

ナイト
「ぐっ！！」

電王・ソードフォーム
「どうした？それで終わりか？もっとかかってこいや！！」

カイザ
「だったらお言葉に甘えて！！」

【Ｅｘｃｅｅｄ　Ｃｈａｒｇｅ】

カイザは高く飛び上がり電王に四角錐のロックオンを直撃させ、必殺キック「ゴルドスマッシュ」を繰り出した。だが電王はまともに食らって地面を滑り込むが、直ぐに立ち上がる。

電王

「いった～～、うおった～～、カイチョウハメイドサマ～～」

カイザ
「え！？効いてない…！？」

ファイズ
「おいおい、どれだけ頑丈なんだよ！？」

ナイト
「だったら今度はいっしょに行くぞ」

2人はナイトに顔を向けて頷くと、ファイズはファイズポインターを取り出しミッションメモリーを、カイザは今度はカイザブレイガンにメモリーをそれぞれセットする。

【Ｒｅａｄｙ】

ファイズは右足にポインターを取り付け、ブレイガンのグリップからエネルギーブレードが伸びると、2人はベルトにセットされたファイズフォンとカイザフォンを開き『ＥＮＴＥＲ』キーを押す。ナイトもダークバイザーに一枚のカードを装填した。

【Ｅｘｃｅｅｄ　Ｃｈａｒｇｅ】

【ＦＩＮＡＬ　ＶＥＮＴ】

ファイズ&カイザ&ナイト
「はぁぁぁぁあああ！！」

電王・ソードフォーム
「イタタタタ、なんでこう……――バァコォォン――……アラシ！？」

電王に向けてブレイガンから発射されたポイントビームが着弾し電王は黄色の網目の光に拘束され、さらに空中から飛び上がったファイズからロックオンの光を放つ。そしてファイズの飛び蹴り「クリムゾンスマッシュ」、カイザのブレイガンで切り裂く「カイザスラッシュ」、ナイトの装着されたマントがウィングランザーを中心でのドリル突撃「飛翔斬」が電王の身体を貫いた。３人が電王の後方に現れると、電王は大爆発する。

ファイズ
「はぁ…はぁ…これでどうだ…」

カイザ
「流石にアレだけ食らったらひとたまりも」

ストレンジ
「ぶほ、ぶほ！！け、煙い」

ナイト
「な！？」

なんと変身が解けたとはいえ３人の必殺技を受けてストレンジは咳き込みながら立ち上がった。それを見て３人は呆然と見ながらも、ハッと気を取り直してストレンジの後を追う。同じ時、ディファーストと龍騎はバーニングアギトと繰り広げていた。

龍騎
「この！！」

アギト・バーニングフォーム
「フン！」

バーニングアギトは龍騎の繰り出したドロップキックを片手で受け止め、火の弾をぶつける。龍騎は地面に倒れこみ、バーニングアギトは龍騎にトドメを刺そうとする。

【ＡＴＴＡＣＫ－ＲＩＤＥ！ＥＡＲＴＨ！！ＢＬＡＳＴ！！】

ディファースト
「やらせない…！！」

アギト・バーニングフォーム
「！？ぐわぁ！！」

バーニングアギトは重力を纏った銃撃を食らい、大きなダメージを負ってしまう。ディファーストは龍騎に腕をさし伸ばして立たせる。

ディファースト
「大丈夫か？新人なのにくたばるんなよ」

龍騎
「し、新人って……確かにアンタからしてみれば俺はまだ新人だけど…」

アギト・バーニングフォーム
「グガァァァァァァァァァ！！」

ディファースト&龍騎
「「！？」」

2人が振り向くとバーニングアギトが野獣の如く咆哮を上げながらゾンビの如く立ち上がり、巨大な炎を作り出していた。

アギト・バーニングフォーム
「地獄へ落してやる…落してやる……落してやるゥゥゥ！！」

ディファースト
「くっ、アギトの力が怒りの感情に蝕まれて暴走してやがる……」

龍騎
「暴走してるのかよ！？あんなの食らったらひとたまりもねえじゃんか！！」

ディファーストと龍騎は回避しようとするが、今までよりも速度も威力が上昇した炎が2人が避けるより先に襲い掛かろうとする。

ファイズ
「させるかぁああ！！」

2人に炎が襲い掛かる直前にファイズの「グランインパクト」が炎を跡形もなく玉砕、そのままの勢いでバーニングアギトを殴り飛ばした。
2人は彼が来るのを待っていたように余裕の表情を浮かべるとファイズに駆け寄ってくる。

龍騎
「健人、来たか」

ファイズ
「ああ……美咲とレンさんが健人の所に向かってくれってな。」

ディファースト
「いくぜ、2人とも。これから新世代を守り往く者とお前達よりずっと過去から守ってきた者との合体技だ」

龍騎
「ああ…やってとげてやるぜ」

ファイズ
「上等だ…！！」

ディファースト
「なら、2人ともいくぞ」

【ＦＯＲＭ－ＲＩＤＥ!ＦＡＩＺ－ＡＣＣＥＬ!!】

【ＦＩＮＡＬ－ＦＯＲＭ－ＲＩＤＥ!!ＲＹＵ・ＲＹＵ・ＲＹＵ・ＲＹＵＵＫＩ!!】

ディファーストはカードを装填したサモンドライバーを龍騎とファイズに向かって発砲し、再び龍騎をリュウキドラグレッダーにＦＦＲ、ファイズを胸の装甲が展開しフォトンストリームが銀色に変化した高速形態”アクセルフォーム”にフォームチェンジさせる。

【ＳＴＡＲＴ　ＵＰ．ＥＸＣＥＥＤ　ＣＨＡＲＧＥ】

【ＦＩＮＡＬ－ＡＴＴＡＣＫ－ＲＩＤＥ!ＲＹＵ・ＲＹＵ・ＲＹＵ・ＲＹＵＵＫＩ!!】

電子音声が発声するとリュウキドラグレッダーとアクセルフォーム姿のファイズはディファーストと共に空中に高く飛び上がる。リュウキドラグレダーはディファーストの周りを旋回しながら舞い上がり、口からはいた炎をディファーストが勢いを乗せて突き上げた右足のドロップキック『ディファーストドラグーン』、ファイズは通常より威力が上がった必殺キック「アクセルクリムゾンスマッシュ」をそれぞれバーニングアギトに向かって放つ。

アギト・バーニングフォーム

「グアァァア……!!」

バーニングアギトは直撃を食らい声を上げると、まるで身体が粒子化し始めやがて消滅してしまう。その光景を見て元の姿に戻ったファイズと龍騎は驚く。

ファイズ
「消滅…した…！？」

龍騎
「だが、なんでミラーワールドのように粒子化のように……」

ディファースト
「そうか……あのアギトは元々アギトの悪意がミラーワールドの力で具現化した幻だったか。道理で何か引っかかると思った」

ディファーストが納得していると、そこへストレンジがカイザとナイト、皆のライダーに追われながら掛けて来る。

ストレンジ
「イタタタ……あ、ディファースト！！見つけたぞゴラァ！！」

ディファースト
「はぁ……お前、あの時といい今といいモモタロスと比べるとそんな程じゃないが意外とマヌケだな」

ディファーストは「電王の世界」の住人のモモタロスとストレンジの姿を照らし合わせ、呆れながら手に頭を抱える。

ストレンジ
「チクショウ、アギトの仇……――ビュゥゥン！！――……ミミコネッ！？」

ベルテ
「ウラァ！！行きやすぜ手塚の兄貴！！今が敵をしごくチャンスですぜ！！」

ライア
「そうじゃ！！こいつを倒しゃワテらの組が勝ちじゃァァアア！！」

何故かチンピラ風の変な喋り方をするベルテとライアはヨーヨー（ワイルドバインダー）と鞭（エビルウィップ）でストレンジをシバき叩き続ける。

ストレンジ
「ぶごぐごッ……っち、このままじゃ……」

ベルテ&ライア
「「トドメじゃゴラァァア！！」」

ベルテとライアがデッキからカードを引き抜きファイナルベントを発動させようとする。その時ストレンジの前にオーロラが現れ、そこから誰かが出てくた。
一人は黒装束を着た黒髪の青年、同年代ぐらいの年齢で先っぽが白く変色した茶色の少女だった。２人共かなり顔が整っているが、異

様な気配と雰囲気を場に漂わせ他者を近づけさせないようだった。そんな2人を見てディファーストは口を開く。

ディファースト
「やっぱりな、健人たちから聞いた話やストレンジが出てきた事で薄々感じてたが…
…黒月十六夜…ビャッカ・ブランシュ……」

翼ディファーストはその青年と少女――黒月十六夜（くろつきイザヨイ）とビャッカ・ブランシュを見て呟く。

黒月　十六夜
「久しぶりですね、翔道翼（ディファースト）」

ビャッカ・ブランシュ
「……龍騎とファイズ達も……一緒」

カイザ
「その声……お前らあの時の！！」

ドレイク
「何しに来たのですか…！？」

黒月　十六夜
「そうですねぇ……簡単に申せばストレンジの救出とディファーストの討伐。とでも言っておきましょう」

ビャッカ・ブランシュ
「……邪魔するなら、容赦…しない」

ドレイクの質問に無機質で感情のこもってない声で返すと、十六夜はデルタフォンを口元に近づけ、ビャッカはデッキを持った手を突き出す。

十六夜&ビャッカ
「「…変身…」」

【ＳＴＡＮＤＩＮＧ　ＢＹ　ＣＯＭＰＬＥＴＥ】

デルタドライバーにデルタフォンをセットし、十六夜の身体に白いフォトンストリームが駆け巡りオレンジの目と黒い身体の持つ漆黒の銃士”仮面ライダーデルタ”、Ｖバックルにデッキを差し込み鏡像が重なり白銀の白虎の戦士”仮面ライダータイガ”に姿を変える……

～～～～～～～～～～

とある何処かの世界の、日本の都会にひっそりと佇む小さいミセの庭にて、着物を着た眼鏡をかけたオッドアイの青年――四月一日君尋の姿があった。彼の手元には卵型のカプセルと「ＷＯＲＬＤ－ＲＩＤＥ」と書かれたライダーカードがあり、それを目の前にいる”赤いマフラーをかけた白い服の茶髪の青年”と”黒一色に染めた服

とサングラスをかけた男”に渡す。

四月一日　君尋
「じゃあ2人とも、これを翼に頼んだよ」

青年
「ええ、必ずコレらを翼とサクラさんに渡しますよ」

黒の男
「ハァ、あんなに危ない目に遭うなと説教しているのに…世話が掛かる」

2人はカプセルとカードを受け取ると、後方に発生した銀色のオーロラに入って、オーロラと共にその場から姿を消し去った……

第十四話／新たなる龍の騎士・Ｎｅｗ　Ｆａｉｚ　「邪悪なる業炎との決着」

～ツバサ&仮面ライダー通信～

黒月　十六夜
「どうも、イクサとゼロノスの突然の降板により急遽司会をやる事になった黒月十六夜と申します」

ビャッカ・ブランシュ
「・・・・・・・・・ビャッカ・ブランシュ・・・だ・・・」

黒月　十六夜
「ビャッカ、今回僕達やっと名前明かされましたね」

ビャッカ・ブランシュ
「うん・・・・・・嬉しい・・・」

黒月　十六夜
「最近後書でやった鳴滝ライダーズの反響が良くて、それを記念に『仮面ライダーディファースト』の方で鳴滝ライダーズが主人公の話が今執筆されているんですよ」

ビャッカ・ブランシュ
「ディケイドより・・・人気出る・・・？」

黒月　十六夜
「それは分かりませんが……でも、ディケイド打倒のためまずはコーナーを始めましょうか……」

イクサ&ゼロノス
「「待てゴラァ黒白コンビィィィ!!!何勝手に俺達の仕事を奪おうとしてんだァァああ!!」」

黒月　十六夜
「あ、戻ってきたのですか?もう少し本編で活躍してくればよかったものを……」

ビャッカ・ブランシュ
「・・・・・・・出てけ・・・・」

ゼロノス
「うるさい!!お前らが出て行け!!」

イクサ
「貴様達まさか翼だけでは飽き足らずツバ×カメ通信を狙ってくるとはな……それは強欲の罪に反する!!そのボタン、私にくれなさい!!」

黒月　十六夜
「日本語おかしいですよ仮面ライダーイクサ。何ならその命、神に返しますか?」

ゼロノス
「上等だ、俺の強さはかーなーり凄い!!」

ストレンジ

「たっくるせえなてめえら。少しは落ち着けよ」

デネブ
「電子レンジ、これサバミソだ」

ストレンジ
「ストレンジだ。おお、すまねえ」

ゼロノス
「てめえら何呑気に飯を食ってやがる！！」

ストレンジ
「へへ、俺がサバミソ食いたいって言ったらこいつが作ってくれてよ…まあ食べ終わるまでこれを紹介だ」

イクサ
「勝手に進めるな！！」

黒月　十六夜／仮面ライダーデルタ

謎の預言者・鳴滝に加担する青年。年齢二十歳前後だが、若さとは裏腹の過酷な過去を斬り抜いてきて、かなりの戦闘力と類稀な頭脳によって今は鳴滝の右腕として暗躍している。姿は黒髪と整った大人びた顔に、黒い服を好む。

ディファースト／翼とは「リリカルなのはの世界」で初めて戦い、以後何度か戦闘を繰り広げていく内に彼を唯一自分と渡り合える好敵手として見ている。また、とある場所でビャッカを出会い、以後三年間彼女と行動を共にしていた。

性格は冷静沈着で滅多に動じないが、実はビャッカに独占欲が化物並に強く、彼女に下手に手を出すとヤンデレ化してしまう。

ビャッカ・ブランシュ／仮面ライダータイガ

十六夜と同じく鳴滝に加担する少女。外見は十代後半の端が白く染まった明るい茶色の髪を持つ少女だが、人間離れした戦闘力と鋭く切れる戦闘センスが鳴滝に買われ重宝されている。

十六夜と出会うまで総ての記憶がなく、言葉数や感情の表現が乏しい。三年間十六夜やストレンジと出会いで心を開きつつある。

無口で冷血な印象を漂わせるが、やや天然気味で動物好き。スレンダーボディなのに胸が大きいなのは毎日十六夜に胸を揉まれているとか揉まれてないとか。

ビャッカ・ブランシュ
「・・・作者、叩き切ってもいいか？」（デストバイザーを振りかざそうとする）

イクサ
「待てビャッカ・ブランシュ。お前の出る幕じゃない……ヤツはこの７５３が断罪する。いかがわしい事を書いて……その命、神に返しなさい！！」

ストレンジ
「おいおい落ち着け。人間誰だって秘密を二個三個持ってるもんだ

ぜ？」

ゼロノス

「バカを突っ込むのは疲れるので、進めさせていただく」（棒読み）

ストレンジイマジン／仮面ライダー電王

鳴滝に加担するライダーの中で一二を争う実力を持つモモタロス達と酷似した姿のイマジン。「奇妙」や「謎」からイメージされたため、姿を他の人物や物に自由自在に変えられる変身能力を持ち、その能力を応用して電王のほとんどのフォームを変身できる。

元々は何処かの世界のイマジンだったが、放浪していた先で十六夜と出会い、以後鳴滝ライダーズに加担することになった。キックホッパー／矢車想とパンチホッパー／影山瞬、王蛇／朝倉威とネガ電王／ネガタロスとは仲がいい。

憎まれ口を叩きながら他人を助け、周囲に気をかけるなどモモタロスと何処か似た単純で憎めない性格。意外と常識があり、ツッコミ役に回ることが多い。

鳴滝

フェルト帽とコートと眼鏡が特徴の中年男性の姿をした自称・預言者。ディケイドや翼を憎悪・敵視しており、行く先々で仮面ライダー達を刺客に差し向けたり旅の妨害をしている。このシリーズで謎の多い人物。

次回で意外な事実が発覚する。

デネブ
「なに？意外な事実が発覚するのか？」

ゼロノス
「何なんだよそれは？」

黒月　十六夜
「さあ？ただ言えるのは、次回の本編でとある人から許可を頂いた名物キャラが登場しますよ」

ビャッカ・ブランシュ
「キーワード……『四人』……『下僕』……『小姓』……」

イクサ
「兎に角、次回もツバ×カメ通信をお楽しみに！！」

橘　朔也
「コレクッテモ…」

ストレンジ
「駄目だこのオンドルゥ語が…」

第十五話／新たなる龍の騎士・Ｎｅｗ　Ｆａｉｚ　「…謎の小姓と謎の生命体。」

どうも地水炎風陰雷です。ＧＷは地元の映画館で「電王祭り」と言うの今までの劇場版仮面ライダー電王の特別価格でやってたのです。で、「さらば仮面ライダー電王」を見てきました。やっぱり面白かったです。

では、第十五話「新たなる龍の騎士・Ｎｅｗ　Ｆａｉｚ　「…謎の小姓と謎の生命体。」、始まります。

ＰＳ、今回は辰巳結愛さんから許可を頂いてあの四人が登場します。

デルタ&タイガ
「「ハァァアア！！」」

デルタとタイガは凄まじき速さでベルテとライアの距離を詰め寄り、彼らの身体を思いっきり殴り飛ばす。

ベルテ
「ぶごぉっ！？は、はぇぇえ」

ライア
「ぐはぁぁあ！！」

殴り飛ばされた2人は一回バウンドし地面に叩き付けられ、変身が解けてしまった。デルタとタイガは次の標的をファイズ達に移すと、デストバイザーとデルタムーバーを手にして飛び掛る。ディファーストは何かに気付いて振り向いて話した。

ディファースト
「次はお前か？鳴滝……」

銀色のオーロラと共にコートと黒斑眼鏡をかけた男――鳴滝が姿を現す。鳴滝の背後には黒色が主体の身体をした擬似ライダー”オル

タナティブ”と量産型ライダー”ライオトルーパー”がそれぞれ数十人ほど立っており、鳴滝はディファースト・クウガ・サソードを睨みつけながら口を開く。

鳴滝
「おのれ翔道翼……貴様のせいでアギトが消滅してしまった。どうしてくれる！！」

ディファースト
「知るか。俺はただシンイチ達と健人達とサクラ達を守るために倒したまでだ」

クウガ
「それにあんなのがアギトか？笑わせるな。俺の知っているアギトの方がずっと強い！！」

ディファースト達の反論に苦虫を噛んだような険しい顔になった鳴滝は手を掲げる。

鳴滝
「どうやら貴様達と話しても無駄のようだな。さっさとストレンジを救出して、様々な世界をうろついているディケイド達を倒す案でも考えるか……いけ！！」

ライオトルーパー&オルタナティブ
「「「「！！」」」」

オルタナティブとライオトルーパー達は鳴滝の合図と共に、ディファースト達を斬り付けて来る。ディファースト3人はすれすれで避けるが、ファイズと龍騎達を助けに行けず苦戦。

デルタ
「ハァアア！！」

ファイズ
「グアァァアア！！」

カイザ
「キャァァアア！！」

デルタの振りかざしたファイズエッジと酷似した光剣『デルタブレード』が2人の急所に直撃し、まともに受けて変身が解けてしまう。
一方タイガの方も……

【ＦＲＥＥＺＥ　ＶＥＮＴ】

龍騎
「ぐ、身体が……」

タイガ
「はぁぁあああ！！」

――ザシュゥン！！――

龍騎＆ナイト＆ファム＆シザース＆タイガ（東條）＆ドレイク
「「うわぁあああ！！」」

フリーズベントで動けなくなった龍騎達にタイガが力一杯デストバイザーを振り下ろし、鎧に重たい一撃を叩き刻む。龍騎達は鎧が壊れて変身が解けて地面に倒れこんだ。

龍牙　シンイチ
「くそ……」

乾　健人
「死ぬのかよ……俺達……」

デルタ＆タイガ
「「・・・・・・・・」」

デルタとタイガは冷徹に思えるほどの冷たい瞳で見つめ、デルタブレードとデストバイザーの刃を振り下ろそうとする……

「プップップ～～～～♪♪」

突如、場違いに思えるほどのお気楽で甲高い声が聞こえたかと思うと、デルタとタイガのデルタブレードとデストバイザーが小さな影に弾き飛ばされる。

デルタ
「！？」

タイガ
「何…！？」

2人は影の姿を確認しようとするが小さな影は目にも止まらぬ速さで辺りを動き回り、次に影はディファースト達と戦っていたオルタナティブとライオトルーパーの武器を一瞬の総て落した。鳴滝達が混乱している中ディファーストはその隙を使ってサモンドライバーに四枚のカードを装填する。

【ＫＡＩＺＩＮ－ＲＩＤＥ！ＳＰＨＩＮＸ　ＵＮＤＥＡＤ！！ＤＲＡＧＯＮ　ＵＮＤＥＡＤ！！ＢＡＳＩＬＩＳＫ　ＵＮＤＥＡＤ！！ＰＨＯＥＮＩＸ　ＵＮＤＥＡＤ】

ディファースト
「特別ゲストの登場だ」

トリガーを引くと三つの光がオルタナ・ライオ達を囲む様に現れ、三つに重なると翼を生やした白銀の身体を持つ獅子を思わせる『ス

フィンクスアンデット』、爬虫類にある蒼き鱗の身体に強靭な強さを漂わせる『ドラゴンアンデット』、蛇にも見える尾と亀の甲羅を持つ漆黒の身体におどけた表情を表す『バジリスクアンデット』、翼を持った深紅の身体に炎を思わせる姿を持つ『フェニックスアンデット』の「皇帝の世界」と呼称される世界で”カテゴリーページ”と呼ばれるバトルファイトに参加しないイレギュラーランクのアンデットたちが丁度X字に並ぶように召喚された。

バジリスクアンデット
「おや？どうやら呼ばれたようだね～」

フェニックスアンデット
「たっく、いくらライダーカードの記憶から作られた存在とはいえ、元となったのは『皇帝の下僕』と呼ばれたお偉いさんなのによ～」

ドラゴンアンデット
「まあ、この状況だと関係ないけどね」

スフィンクスアンデット
「とりあえず、コイツラ雑魚共はソコの鳴滝（マグス）の手駒だ……」

デルタ・タイガより冷血な声でスフィンクスは右腕をオルタナ・ライオ達に向けて指し出し、ドラゴン・バジリスク・フェニックスもスフィンクスと同じ事をする。それを見た途端、ディファーストはクウガとサソードをそれぞれ片腕で抱え始める。

クウガ

「何すんだ翼！？」

サソード

「いきなり抱えるなんて」

ディファースト

「いいから、でないと巻き込まれるぞ！！」

いつもと違い真剣な表情で2人に言うと、ディファーストは次元エネルギーで作り出した翼を展開させ上空に飛んだ。その直後……

「グァァアアア！！！」

サソード&クウガ

「「！？」」

けたたましい悲鳴が聞こえ2人が見下ろすと、そこには紅蓮の業火に焼かれ、一瞬に死へ追いやる冷たき氷水に凍りつかれ、どれだけ頑丈でも無意味な程の巨大な重力に押しつぶされ、風の刃に身を切り裂かれ、何もかも跡形もなく消え去っていくオルタナ・ライオ達の姿があった。ディファーストが着地する頃にはもはや何もいなかったかのように痕跡が消えていた。その光景を見てデルタ達は驚愕の表情を浮かべている。

クウガ

「何だ…？今のは…」

ディファースト
「こいつらは他のアンデット…いや怪人とは格段に違って、何処かのお偉いさんの使えるある意味最強集団だ。あのままじゃ俺達、大自然で作られた牢獄に閉じ込められる所だったぜ」

サソード
「な、何でそんな危なっかしいカードを持ってるんですか！？」

バジリスクアンデット
「まあまあ落ち着いてよサソードの女の子ちゃん。僕達は本当の世界の破壊者と似ていて翔道翼君が案外気に入ってるから、翼君やその仲間達手を出す奴らは消すから。僕、そう言う顔してるでしょ？」

サソード
「は、破壊者…？世界の…？ディケイド…？本当の…？」

どっかの未来から来た怪人の首領と同じ口癖を笑顔（元々怪人態なので分からないが）を向けながら言うバジリスクに、サソードは半ば混乱し始める。そこへドラゴンが話しかけてくる。

ドラゴンアンデット
「大丈夫よ。私達がいる限りは魔術師（マグス）は手は出せないわ。まぁ執念深くて厄介で何処かマヌケな部分があるけど」

フェニックスアンデット
「たっくあのおっさん、世界の創造や開始を司る存在だっていうのに色んな次元や世界を愛してるって言うのに…愛故の暴走か」

ディファースト
「フェニックスさんよ、愛も無理もないって。破壊者や俺が大嫌いな融通の利かない頑固親父だからよ。お偉いさんのくせに大人げない・・・」

3人は言葉に意味が分からない部分を含ませながらも鳴滝の悪口まがいの会話をそれぞれ語り合う。それを聞いて鳴滝は額に青い筋を浮かばせて眉をピクリと動かし、ムキになる。

鳴滝
「貴様等ぁ～～～、ふざけるのもいい加減にしろ!!」

スフィンクスアンデット
「フン、世界を愛する物モノが簡単にキレおって……」

ディファースト
「右に同じ、何が『総てのライダーが存在する始まりの世界』を創った22の存在の一人だ。こんなおっさんがアレだったら世も末だぞ」

クウガ
「ちょっと待て翼にスフィンクス?さん……お前何言ってんだ?さっきから鳴滝の事を魔術師とか創造や開始を司る何とか言っているけど…」

鳴滝の参加のライダー以外はシンイチ達やクウガとサソードはペー

ジ達&ディファーストと鳴滝のやり取りが付いて行けなくて文字通り困惑し、思い切ってディファーストとスフィンクスを聞いてみた。そして次の2人の放った事実にクウガ――士朗とサソード――セイバーは驚愕する。

ディファースト&スフィンクス
「「お前らは知らなかったんだな。鳴滝の正体は『魔術師』と呼ばれる神だ」」

その意外な事実を突きつけられて士朗とセイバーは仮面の下で唖然とするしかなかった。何故なら今まで何度も戦ってきた人物が、神様だと言われたら誰だって疑うだろう。付き合いが長い2人にとって、ディファースト――翼が今真実（というかちょっとした衝撃発言）を言ってる事ぐらいは分かっているので、余計混乱した。

ディファースト
「まあ無理も無い。俺も初めて聞いた時は驚愕の二文字しか頭から離れなかったぜ」

スフィンクスアンデット
「神とは案外足元にも及ばない生き物らしい。少なくとも私の元となったオリジナルもそう言っているだろう」

鳴滝
「貴様等!!私の正体を勝手に明かすのはどうでもいいとして、いつまでほっとくつもりだ!!」

ディファースト&カテゴリーページ達
「「あ……」」

鳴滝
「『あ……』じゃなぁぁぁぁあああああい！！今まで私を忘れていたのかぁぁぁっぁあああああ！！おのれディケイドォォォォ……あ、違った。おのれディファーストォォォ！！」

ディファースト&カテゴリーページ達に完全に存在を忘れ去られていた事にブチギレた鳴滝は思いっきり絶叫を上げる。すると突然、さっき出ていた小さな影が鳴滝の顔の正面に飛び掛る。

鳴滝
「ぐずごっ！？な、何だ・・・！？」

謎の影
「ぷぷぷぅ～～♪１０８の秘密技～超目隠しなの～」

シンイチ&健人
「な、何だありゃ…！？」

シンイチと健人声をそろえて鳴滝に張り付いた影の姿を目をまるくして驚いていた。影の姿はウサギに似ているのだが全体的に丸い白と黒のパンダ模様の身体に、長い耳に青と赤の耳飾が付いている不思議な生き物だった。その小さな足と手で鳴滝の顔にしっかりと張

り付いている。デルタは気を取られたモノの特に驚く雰囲気をしていなかったが、タイガはその逆で眼を輝かせながら謎の生物を見ていた。

タイガ
「・・・カワイイ・・・・」

デルタ
「ほう、意外な新手が登場ですか……いや、アレは僕達の注意をそちらに向けるための囮……本命は……！！」

【ＲＯＹＡＬ　ＳＴＲＡＩＧＨＴ　ＦＬＵＳＨ】

「Ｗａｋｅ　ＵＰ！！」

「「はぁぁあああ！！」」

デルタが何かに勘付いて気付いたその直後、振り下ろされた巨大な大剣と深紅に染まった剣がデルタとタイガの２人を斬り掛かる。デルタとタイガは咄嗟に後方へ飛び上がって避け、剣の持ち主を見る。

デルタ
「…また貴方達ですか……？今といいあの時といい、奇襲が好きなんですか？」

キバ・エンペラーフォーム
「まあ、少なくとも僕は蝙蝠なので否定はできませんが。どうやら間に合ったようですね剣崎さん」

ブレイド・キングフォーム
「ああ、急ぐ必要もなかったな…翼は簡単にやられるヤツじゃないって俺や渡だって分かってたのに……おい、大丈夫か？」

黒崎　連児
「アンタらはあの時の」

手塚　海斗
「紅さんに剣崎さん…」

そこ立っていたのは赤いマントと黄金の鎧を纏い真の姿となった「仮面ライダーキバ・エンペラーフォーム」と十三体のアンデットの装甲を纏った「仮面ライダー剣（ブレイド）・キングフォーム」の最強フォームに強化変身した2人だった。その姿を見た連児達は、玖楼国に来る前の元の世界でデルタ達に倒されかかった時自分達を助けたので覚えていた。

キバ――紅渡と剣――剣崎一真は以前仮面ライダーアギト／津上翔一や仮面ライダーカブト／天道総司などの仲間たちと共に翼をディケイド同様の危険な存在として抹殺しようとしたが、初めて翼と出会った際に起きたある事件によって考え方が変わり、以降翼を度々助けるようになる。

デルタ

「……いい加減邪魔しないでください。決着つけられないじゃないですか？」

ブレイド・キングフォーム
「断る。悪いが俺達は翼を守るって約束したのでな……」

キバ・エンペラーフォーム
「邪魔をするなら容赦はしません！！」

エンペラーキバとキングブレイドはザンバットソードとキングラウザーをデルタとタイガを目掛けて横に切り払おう、デルタとタイガは2人の頭上を通り越して鳴滝の近くに着地する。デルタは鳴滝の顔についている謎の生き物を無理矢理引っぺがすと、上空に放り投げる。

謎の生き物
「プププゥ～～！！」

ディファースト
「危なっ！！」

ディファーストは自由落下で落ちてきた謎の生物を両手でキャッチ。

ディファースト
「大丈夫か？お前？」

謎の生き物
「モコナ＝パンダ＝モドキ！！」

ディファースト
「はっ…？」

いきなりワケの分からない事を言われ、頭に？を浮かばせたディファースト。だがそんな和んでいる時でもなく、すぐに今の現実に引き戻される……

鳴滝
「このぉぉぉお！！離せェェェ！！私は仕返しをしなくちゃいけないんだァァァァ！！」

ストレンジ
「うるせぇ！！大人げねえぞ鳴滝のおっさん！！」

デルタ
「たく、神とばらされた事よりも悪戯された事を怒るなんて……」

タイガ
「・・・カワイイ・・・／／／」

ディファーストが振り向くと、発生した銀色のオーロラの前で人型のオートバジンと似たバリアブルビークル「ブラックバジン・バトルモード」に抑えつけられている鳴滝とデルタに抱えられているストレンジ、未だに白黒の謎の生物――”モコナ＝パンダ＝モドキ”

を見て惚れ惚れするタイガの光景が眼に写った。

ディファースト
「お前ら…！！」

デルタ
「すみませんねぇ翼。今回邪魔が入ったのでここで退散させてもらいます」

鳴滝
「離せェェェェ！！！私はあの白黒饅頭に天罰をぉぉぉ！！」

ディファースト
「うるさい○リキュアオタクがぁ！！猫の姉さん！！」

スフィンクスアンデット
「誰が猫の姉さんだ・・・マグス、お前なんか一度死ねばいいのに」

【ＫＡＭＥＮ－ＲＩＤＥ！ＢＬＡＣＫ　ＲＸ！！】

鳴滝のしつこさに鬱陶しくなったスフィンクスは、ディファーストから受け取ったサモンドライバーから「仮面ライダーＢＬＡＣＫＲＸ」を召喚し、いきなり鳴滝の腹部に必殺キック『ＲＸキック』を直撃させる。ちなみにあまりにも手際が良かったので、シンイチ・健人＆士朗達には気付かなかった。

鳴滝

「テツヲォッ!?ガク……」

ストレンジ
「ってオイイィィ!?鳴滝のおっさぁぁん!?」

デルタ
「…じゃ、いずれ何処かで……」

タイガ
「・・・欲しかった・・・」

ストレンジ
「そこ2人おっさんの事気付いてあげてぇぇぇ!!」

ストレンジが叫んでいるのにも関わらずデルタとタイガは気絶した鳴滝を気にも留めないで、ストレンジを抱えてオーロラの中へと去っていった。
翼達は変身を解くと、シンイチと健人に駆け寄る。

翔道　翼
「大丈夫か?2人とも」

龍牙　シンイチ
「あぁ…大丈夫だ」

乾　健人
「しっかし…大変だったぜ。ファイズみたいなライダーがいたり、オルフェノクが出たり……散々な日だ」

翔道　翼
「ま、まだまだ若いから無理は無いか……」

剣崎　一真
「オイゴラァァ！！翼ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」

全員
「「「！？」」」

地に響くような声のした方へ向くと、まるで鬼の如く激怒している剣崎一真が翼に向かってドガドガ足音を踏み鳴らしながら歩み寄ってきて……

剣崎　一真
「また無茶な事しやがってぇぇーーーーーーーー！！！」

――ＢＯＣＡＡＡＡＡＡＮ！！――

翔道　翼
「ギャブェッ！！」

全員
「えぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！？？」

剣崎の中にあるジョーカーアンデットとしての力までも篭った左ストレートが翼に決まり、翼はそのまま宙でカーブを描きながら地面に叩き付けられてしまう。その予想外な光景に一同は絶叫を上げたり口を開けてポカンとするしかなかった。

～～～～～～～～～～～～～～～

サクラ
「大丈夫…翼君」

翔道　翼
「大丈夫、少しは痛みが引いてきた……」

モコナ＝パンダ＝モドキ
「でもでも、まだまだ痛そうだよ～」

あの後王族が毎日食事する広間で、翼は剣崎に殴られた頬をサクラに治療されており、翼の膝の所でモコナが心配そうに見ている。その原因とも言える剣崎はというとシンイチ・健人達（カテゴリーページ達も）と共に宴に参加しており、渡の隣でココット（シンイチ達の世界で言うパンのようなモノ）を一口サイズにちぎって口に放り込んでいた。

スフィンクスアンデット
「剣崎一真、お前いつから子供を心配する母親になったんだ？いくらなんでも少し吃驚したぞ。殺す気か？」

剣崎　一真
「フン、巻き込まれやすい翼が悪い。少しは自分の身を大切にしろ」

紅　渡
「一真さん、今の貴方の言葉には説得力ないですよ。というかアレはやりすぎでしょ」

確かに渡の言う通り、いくらなんでもジョーカーの力を使ってまで翼に愛の拳（？）を入れる剣崎は遣り過ぎであり、普通の人間だったら軽くても脳震盪ぐらいは起きている。だが翼に過保護な面に今に始まった事じゃないので、言っても効き目があるのかは分からない。

渡がため息をついた後、次は翼は渡に向かって質問をする。

翔道　翼
「たっく渡に一真、いきなり何の様だ？態々ここまで来たって事は何か伝える事があるんだろ？」

紅　渡
「ええ、色々とある事を伝えに……それと同時ちょっと四月一日さんに翼宛にお使いを頼まれたんです。これを届けるようにって」

そう言うと渡は四月一日に渡された例の数枚のライダーカードを翼に渡す。翼は受け取ったカードを見ると、いつも使う赤や黄色のカードではなく総て何処かの場所を描かれた青いカードで、それを見

た翼は呟いた。

翔道　翼
「四月一日が？”ワールドライド”のライダーカード……しかもこれって…」

翼は扇状に広げたカードの中から一枚のカードを手に取る。そのカードにはドラグレッダーやオートバジン、他にも色々と描かれた絵と「ＮＥＷ　ＲＩＤＥＲ」と書かれた……健人達の世界を示すカードだった。

紅　渡
「それは『ネガの世界』の紅音也……僕の異世界の父さんが四月一日さんにこれを貴方達に渡すように頼んで、それで」

翔道　翼
「はぁ…音也の野郎……お節介な事を…」

音也の名を聞いて翼は何故か呆れながら手を頭の上に置いた。以前ディケイドとして廻っていた時、総ての平行世界の影を司り怪人と人間が共存する世界「ネガの世界」に訪れそこで渡の父親と同名同姓同姿の人物・仮面ライダーダークキバ／紅音也と出会って、そこで”ある意味とんでもない事実”が明かされて以来音也とは妙な関係が生まれてしまった。翼はその関係を今でも気にしているのである。

剣崎　一真
「おいおい、まだアレの事気にしてるのか？」

翔道　翼
「るせぇ！！しかし他の世界のカードまである……『クウガの世界』に『ネガの世界』に『ＲＸの世界』に『ＢＬＡＣＫの世界』に『アマゾンの世界』、『ストロンガーの世界』や『Ｘライダーの世界』や『ＳＰＲＩＲＩＴＳの世界』……って『ガーディアンライダーの世界』までもあるのか」

シンイチ・健人達の他にも過去に今まで訪れた世界や、ディファーストになってから行った「ガーディアンライダーの世界」のワールドライドがあって翼は驚いた。

バジリスクアンデット
「態々２人ともこれを届けに来たの？」

紅　渡
「ええ。四月一日さんはミセから出られないし、父さんも鳴滝がしようとしているコトを探るのに忙しいので僕と剣崎さんが行くことになりました」

フェニックスアンデット
「お前らも大変だな。しかし何で天道達を連れて行かなかったんだ？」

剣崎　一真

「天道たちは別の件でガーディアンライダーと一緒に異世界で任務をしている。次元の時の進み方が違うから時間が掛かる」

スフィンクスアンデット
「ふっ、パクッて言うなら大体分かった。心配かけさせるなよ……皇帝に愛されし子達よ」

フェニックスU&バジリスクU&ドラゴンU
「「「……多くの子供達に幸あれ…ってな」」」

ただそう言うと、カテゴリーページ達四人はゼロノス達のように空気に溶けて消滅する。数分後、ついにが別れの時……

撫子
「貴方達の着ていたものは魔法で綺麗にしておいたから」

白鳥　美穂
「ありがとうございます、サクラさんに撫子さん」

龍牙　真理
「私達に服を貸してくださって」

鷹取　美咲
「本当に助かりました!!」

サクラ
「いいえ、こちらこそ」

キバット
「ううう、ダーちゃん。別れは辛いが、そっちの世界でも達者でな～～」

ダークウィング
「キバットさん……私も主人を守れるような立派なモンスターになって見せます」

タツロッド
「ドラグさん、いつか再会する事が出来たらおいしいオムライスごちそうしますよ」

ドラグレッダー
「ううう……タッちゃん……ぐぉぉぉぉぉ！！」

モコナ＝パンダ＝モドキ
「ねぇねぇねぇブランちゃん、また逢える？」

ブランウィング
「モコちゃぁぁぁん！！」

女性陣は撫子から綺麗になった着物を受け取ってお礼を言い、モンスター達は渡の連れてきたキバット・タツロッド&モコナとの短い間だったが別れを惜しんでいた。そしてシンイチ・健人・翼も……

龍牙　シンイチ
「また、逢おうな…翼さん」

乾　健人
「俺達も……強くなるために頑張るからな」

翔道　翼
「その時は、組み手してもうがな。じゃ、元の世界に帰っても頑張れよ。自分自身が守る者のためによ」

黒崎　連児
「すまない…赤の他人である俺達を助けてくれて」

剣崎　一真
「関係ない。誰かを助ける事に理由なんて必要ない、俺はそうやって戦ってきた」

衛宮　士朗
「俺も。そっちでも鍛えてください」

それぞれ別れを挨拶を交わした後、シンイチと健人達は庭の中心に集まると、例のカードをサモンドライバーに装填する。

【ＷＯＬＲＤ―ＲＩＤＥ！ＮＥＷ　ＲＩＤＥＲ！！】

サモンドライバーから電子音が響き渡ると、シンイチ・健人達は眩い光に包まれて元の世界へと帰っていった……。

第十五話／新たなる龍の騎士・Ｎｅｗ　Ｆａｉｚ　「…謎の小姓と謎の生命体。

～プチミニッ！！ツバサ×仮面ライダー通信～

――新説ライダーズの世界――

ゾルダ＆ガイ＆インペラー＆センチピートオルフェノク＆クロコダイルオルフェノク

「「「「「ああ、死ぬかと思った……」」」」」

王蛇＆ロブスターオルフェノク＆ドラゴンオルフェノク

「・・・・・・・・」

ディファースト達の必殺攻撃を受けて爆発したはずの敵、何故か煤だらけでアフロを被ったゾルダ達に、犬○家の一族の如く頭から地面に突き刺さった王蛇達３人であった……

―鳴滝ライダーズのアジト―

鳴滝

「エヘヘヘヘヘ……ウヒョヒョヒョヒョヒョ」

同じ頃鳴滝は、○リキュアのアニメを見てトリックの山田○子並の不気味な笑い声を上げていた……

【完！！】

ゼロノス&イクサ「短ッ！？」

chapitre7／特別編　仮面ライダーディファースト　再会の救済者～激

風の街「風都」、その中にある建築物の間にある通路に逃げ込む5人の姿があった……

「ハァ…ハァ、どうやら逃げ切れたようだな…」

息を切らしながら他の四人に向かって話し頭に帽子を手に取った青年――左翔太郎・この風都で生まれ育ち、師匠の守る疾風の戦士『仮面ライダーW』。彼の目の前には相棒の少年――フィリップと自分の師匠の娘の鳴海亜希子と風都を守るもう一人の仮面ライダー『アクセル』――風都署の刑事・照井竜、そして亜希子に介抱されている緑と赤のオッドアイの少女…。

鳴海　亜希子
「大丈夫?ヴィヴィオちゃん…」

無限　ヴィヴィオ
「…うん……大丈夫」

異世界からこの風都に訪れた仮面ライダー…『イーヴィル』の変身者、魔界出身の上位魔人・無限ゼロと相棒で最愛の女性・リインフォースの養子で『仮面ライダーホッパー』に変身する少女・無限ヴィヴィオ。

照井　竜
「ヴィヴィオ……あのドーパンドの大群から俺達を逃がすためゼロとリインフォースは…」

フィリップ
「やめろ照井竜……ヴィヴィオはもっともショックを受けているんだ…」

左　翔太郎
「……」

険悪な雰囲気になってしまった一同、それを鏡写しにするかのように悲しみに包まれる街の空が雨雲に包まれていく。

～～～～

数十分前、突如風都に現れた大量のドーパンド達は目に写るもの全てを壊すかのように破壊活動を始め、ダブル・アクセル・ホッパー・イーヴィルの四人のライダーはドーパンドたちと繰り広げていた。だが時間が立つにつれ”サイクロンジョーカーエクストリーム”に変身したWと”トライアル”に変身したアクセルは過労とダメージが負い目となり隙を疲れて変身解除させられ、ホッパーも複数を相手にダメージを変身解除させられた。

イーヴィル・ＤＶＸ
『ハァァアア！！』

ドーパンド
『『『ガァァァアア！！』』』

変身不可能なほど傷を負った翔太郎達を守るため大量のドーパンド達と孤軍奮闘する次元世界を又に駆ける魔人戦士『仮面ライダーイーヴィル・ダークネスバニティーエクセリオン』…

【ＳＯＮＩＣ／ＴＲＩＣＫ／ＫＩＮＧＨＴ／ＢＵＲＳＴ／ＬＯＲＤ／ＭＡＧＩＣＡＬ／ＭＡＸＩＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ】

イーヴィル・ＤＶＸ
『『ジェノサイドスーパーノヴァ！！』』

専用武器”グレインノヴァ”からの十重二十重の光線「ジェノサイドスーパーノヴァ」をドーパンド達に放ち、消滅させる。だが直ぐに別のドーパンドたちが沸いてやって来る。

イーヴィル・ＤＶＸ（リインフォース）
『ハァ、ハァ……一体どれだけいるの……』

イーヴィル・ＤＶＸ（ゼロ）
『確かにな…大方百体も倒したのに、一行減らない。いや、それ以前にメモリブレイクしたのにも関わらずドーパンドに変身してた者も砕けたメモリが見当たらない…どうなってる？』

過去に経験した事も自分達の知識にもない予想外の異常事態に戸惑

うイーヴィル。いくら彼らが最強と呼ばれるほどの実力を持っているとはいえ、流石に大多数の相手との相手ではいつ力尽きるか時間の問題。

鳴海　亜希子
「キャァァ！！」

悲鳴に気付いたイーヴィルが振り向くと、盾を持った赤い騎士のドーパンドが重症を負った翔太郎達四人を非難させていた亜希子に銃を向けて引き金を引こうとする光景が目に写った。

イーヴィル・ＤＶＸ（リインフォース）
『左！フィリップ！！照井！！！亜希子さん！！ヴィヴィオ！！』

イーヴィル・ＤＶＸ（ゼロ）
『っち、世話が掛かる！！』

ゼロは舌打ちをすると、地面を蹴って走り出し、亜希子達を目の前に立ち騎士の銃撃をノヴァシールドで受け止める。

鳴海　亜希子
『へ！？無限さん！？』

ヴィヴィオ
『パ、パパ…？』

イーヴィル・ＤＶＸ（ゼロ）
『ほう～、私の娘とに刃を向けるとはいい度胸だな。下衆ドーパンドのくせに♪』

？？？
『下衆なドーパンド？違うな、私はもっとも宇宙一迷惑な存在になるため幽霊として化けて蘇った元大ショッカー幹部アポロガイストだ！！』

赤い騎士の姿のドーパンド……アポロガイストと名乗った怪人は自らをドーパンドではなく怪人と訂正すると、自分の剣とイーヴィルのグラインソードの鍔迫り合いを始める。

イーヴィルＤＶＸ（リインフォース）
『２人とも、こいつとドーパンドは私達が引き止めます。貴方達はヴィヴィオを！！』

左　翔太郎
『なんだと！？だけどそれじゃあ…』

イーヴィル・ＤＶＸ（ゼロ）
『私を誰だと思っている？こんなヤツをボロ雑巾にして倒すなどたやすい事だ。早く行け！！』

照井竜
「…すまない、無限…」

照井がそういい残すと、四人はヴィヴィオを連れてその場を離れた。

～～～～

「ガァァアア！！」

一同
「！！」

狂気に満ちた叫び声と共に光弾が降り注がれ、５人は街中の広い場所に放り出されてしまう。
翔太郎の目の前には無数にうずめくメモリの魔力に飲まれた様に狂ったドーパンド達。

翔太郎
「くそ…ここまでか…」

ドーパンド
「「「ギシャァァア！！」」」

一斉に翔太郎達に襲い掛かる大量のドーパンド。しかし、ドーパンドと翔太郎達の間に次元の壁が出現する。

照井竜
「なんだ……！？」

翔太郎
「…！？何だ…！？」

「また会ったな、帽子の似合う少年よ。まさかお前さんがこの世界の『W』だったとはな」

男性の声が響き渡ると、次元の壁が黒いバイクが飛び出してきてドーパンド達に突撃して吹っ飛ばした。
バイクが5人の目の前に停止し一人の男が降りてきた。その男を見て驚愕の顔を浮べた。

左　翔太郎
「…！！ア、アンタは…！！」

鳴海　亜希子
「お父、さん…？」

そこには白い背広を纏い、白い帽子を被った渋い雰囲気を漂いだした男性……本来ビギンズナイトで組織の凶弾に命を落としたはずの亜希子の父親でもあり翔太郎の師匠『鳴海壮吉』だったからだ。

フィリップ
「そんな馬鹿な…あれは、鳴海壮吉!?」

照井　竜
「鳴海壮吉…あれが…」

無限　ヴィヴィオ
「で、でも確か鳴海壮吉さんって死んだ筈じゃ!!」

フィリップ
「ああ……だが目の前にいるのはまぎれもなく鳴海壮吉……正真正銘偽者じゃなく、僕達が知っている鳴海壮吉だ」

もうこの世にいないはずの壮吉の出現にフィリップ、照井、ヴィヴィオは目を見開いて驚いた。そこボロボロの姿になったアポロガイストが足場をふらつかせながら現れる。

アポロガイスト
「貴様、いきなり出てきて何者なのだ!!」

鳴海　壮吉
「俺の名は、鳴海壮吉……ただのハードボイルドを心がけている探偵だ。元大ショッカー幹部アポロガイスト……こいつらが死なれちゃ色々と困るんでな、助けさせてもらう」

アポロガイスト
「フン、邪魔ものは消滅させるのみ!!いくのだドーパンド達よ!!」

アポロゴーストの命令と共にドーパンド達は襲い掛かろうとする。翔太郎達はドライバーを出そうとするが、壮吉に手で遮って静止した。

左　翔太郎
「おやっさん…」

鳴海　壮吉
「ここは俺に任せろ…お前たちは身体を休んでおけ…」

【ＳＫＵＬＬ】

壮吉の手には骸骨の記憶が刻まれた『スカルメモリ』が握られており、ガイアスィーパーを鳴らして予め腰につけた”ロストドライバー”に装填する。

【ＳＫＵＬＬ】

鳴海　壮吉
「…変身…」

渋い声で宣言すると、壮吉の周りに旋風が巻き始め紫の光が装甲を作り出す。壮吉の姿は黒いボディにボボロボロの白いマフラーを巻き、Ｓ字の傷が入った骸骨の仮面を被った戦士になり、変身前に取った帽子を頭に被り…。

スカル
「さぁ、お前の罪を…数えろ！！」

…鋼のハードボイルド探偵『仮面ライダースカル』はドーパンド達指を向けて渋い声と口調で言い放つと、向ってくるドーパンドをまとめて相手に戦い始めた。

chapitre7／特別編　仮面ライダーディファースト　再会の救済者～激

【WORLD―RIDE！BATTLE　COLOSSEUM！！】

電子音と共にディファースト・キバーラとディエンド・ディルードと召喚された仮面ライダー達が立っている場所に銀色のオーロラが包み込まれ、高熱の空気が漂う砂丘から巨大なスタジアムへ姿を変える。

ディファースト・KMキバーラ
「…はぁぁぁぁあああ！！」

リュウガ&オーガ&ダークカブト
「「「ギシャァァア！！」」」

ディエンド・ディルードに向かっていくディファーストとキバーラの二人にリュウガ、オーガ、ダークカブトがドラグセイバー、オーガストランザー、短剣の形になったゼクトクナイガンを振るって襲い掛かろうとする。

――バァン、バァン、バァン！！――

スカル
「女性（レディ）に武器を向けるなんて失礼だぜ？」

渋い声でそう言ったスカルは手に持つスカルマグナムでダークライダー三体の武器を打ち落とす。武器を失ったダークライダー三体にディファーストとキバーラはサモンドライバーとキバーラサーベルでの一撃を浴びせた。

ディファースト
「羽流亜、こいつらに構っている必要は無い。元を叩くぞ」

KMキバーラ
「ええ！！」

ディファーストとキバーラは互いに頷くと2人は光の翼を生やし高く飛び上がり、上空から銃撃と斬撃をそれぞれディエンドとディエンドを放つ。

ディエンド
「っく！！」

ディルード
「やってくれるじゃねえか！！」

ディファースト&KRキバーラ
「「うぉぉぉお！！」」

2人は急降下しながらディエンドとディルードに斬りかかろうとす

る…

～～～～～～～～～～

時は遡り、遺跡の頂上にて…

光影　羽琉亜
「・・・・・・／／／」

翔道　翼
「・・・・・・／／／」

先程から僅かだが進歩して、互いに抱き寄せ真っ赤な顔をして恥ずかしがる翼と羽琉亜。
元々2人は顔を見合わせればいつも喧嘩が始まるという士と夏海より酷い程の犬猿の仲だったが、ディケイドとしてライダー世界の旅を巡っていく内に互いに意識し始め、ネガの世界で自らの気持ちが気付いて次第に距離が縮まって行き、とある世界で翼と羽琉亜は恋仲となったのだ。

光影　羽琉亜
「…ね、ねぇ…つ、翼ぁ…」

ぎこちない言葉になりながらも羽流亜は上目遣いで翼に顔を向けて話す。対する翼は戸惑いながらも答えた。

翔道　翼
「な、なんだ羽琉亜…」

光影　羽琉亜
「私達もう、恋人よね？小狼とサクラや、士朗とセイバーの様に…」

翔道　翼
「あ、当たり前だ…／／／それが、どうした…？」

光影　羽琉亜
「私達も…ちゃんと気絶しない様にキスの練習を…しないと…／／／」

翔道　翼
「／／／！？まさか、キスしたいって言うんじゃ／／／」

光影　羽琉亜
「うん…／／／」

まさか羽琉亜が初めて誘ってくるとは思ってなかった翼は真っ赤になった顔をさらに赤らめる。これまでにも頬や額や唇でのキスは度々しておりついこの前はやっと人前で唇を重ねたのだが、その後頭からひっくり返ってしまう程実は翼と羽琉亜は恋愛に対して物凄く下手っぴである。

光影　羽琉亜

「だって…私達あんなにいたのに、この前再会したのにまだ…大好きな翼と…」

翔道　翼
「……分かったよ、士朗達に先いかれちゃたまらないからな。お前の望み通り、気持ちこめてしてやるよ」

そういうと翼は両腕を後ろに回して羽琉亜の引き寄せ、お互いを重ねようとした…

――バキュゥーン！！――

翔道　翼
「…！伏せろッ！！」

光影　羽琉亜
「…え？きゃあぁあああ！！」

突然響いてきた銃撃音が聞こえてきて、翼は羽琉亜を無理矢理抱きかかえて遺跡の頂上から飛び降りた。その直後2人がいた場所に光の銃弾が通りすがる。
もし飛び降りていなかったら2人の身体には風穴があいていただろう。

光影　羽琉亜
「何！？いまの銃撃！？」

翔道　翼
「そんなの後だ。それより今は……！！」

【ＳＰＩＤＥＲ】

何としてもこのまま地面に叩き付けられるのを避けるべく翼はギジメモリを腕に付けたガジェトモードの”スパイダーショック”に挿入しライブモードに起動させると、スパイダーショックがワイヤーを射出させながら遺跡の一部にしがみ付いた。
間一髪地面に降り立つ翼と羽琉亜。だがそこへ２人を待っていたかのように２つの声が聞こえて来る。

「流石はディロードやディガイドを初め、数々のディケイドライダーズのライダーシステムの総ての基となったプロトタイプ、ディファーストの現装着者だね。簡単には撃ち落せない」

「だがディファーストはこの上に無い最高で、その存在を知っている者なら誰もが欲望をむき出しにしても欲しがる、特別で極上なお宝だ。俺達はそのお宝を手に入れられるチャンスを手に入れた」

翼＆羽琉亜
「「…！？誰だ！！」」

２人は後ろを振り向いて、二つの声の人物の姿を見る。そこにはモスグリーンの髪をした青年と、帽子を被り水色の何かの紋章が入ったトランクを持った青年の２人が砂丘の上に立っていた。
翼と羽琉亜は帽子の青年を姿を見て驚く。

翔道　翼
「お前は・・・・海東大樹」

海東　大樹
「久しぶりだね、翔道翼」

そこには嘗て『電王の世界』でオズの契約イマジン・モモタロスをＦＦＲ「デンライナー」に変形させて手に入れようと翼達と対峙したもう一人の仮面ライダーディエンド――海東大樹の姿があった。手にディエンドライバーが握り締められている所から見るとどうやら彼が先程の銃撃を放った狙撃手の様だ。翼は海東に睨みつけながら質問をする。

翔道　翼
「お前、なんでこの世界にいるんだ」

海東　大樹
「僕は極上のお宝がある所、どこにでも飛んで行くさ」

翔道　翼
「とりあえず全世界の有名な怪盗達に誤りやがれ。いくら怪盗でも何かを失うのを覚悟して盗んでいるし、貴様のように人情や人助けぐらいはする」

光影　羽琉亜
「所詮コソ泥はコソ泥ってことね、ヘタレた所は長い時間が立って

も何一つ変わってないわ」

彼のせいによって散々な目にあり相当恨みがある上、キスの邪魔をされて気が立っている2人は海東へ向けて毒舌を連発した。が、海東は顔色変える様子も無く2人に言った。

海東　大樹
「そういう君達は随分と変わったようだね。中身や外見や・・・・色々と」

翼・羽琉亜
「・・・・・」

???
「お～い、盛り上がっている途中で悪いんだけど俺も参加したいんだけど?」

陽気な雰囲気で先ほどのモスグリーンの髪の青年が話に入ってくる。青年の名は坂木了、海東とコンビを組んでいるトレジャーハンターで、同じ世界の出身の廻や流姫とは幼馴染。

翔道　翼
「誰だ、そいつは?」

海東　大樹
「彼の名前は坂木了、僕と同じ仮面ライダーさ」

翔道　翼
「…泥棒の仲間は泥棒か、何処かの若布頭（ギルバード）ならお前は苔頭だな…」

坂木　了
「苔頭!?絡んで早々それかよ!!人生で始めて言われたよ自分の髪の事を苔頭なんて!?」

光影　羽琉亜
「黙りなさいよ苔、アンタらのような大樹（ダイオキシン）と同じコソドロは”その身に刻まない”と分からないようね…」

いい雰囲気を邪魔された結果、再会する廻が怒ったような地の底から響く声とテラー・ドーパンドも驚きの物凄い何かのオーラを放ち極寒の冷血さと灼熱の怒りを秘めた瞳を2人に向ける。

翼・羽琉亜
「「お前ら、覚悟はいいよな…?」」

坂木　了
「……（…怖ぇぇぇぇぇぇ!!何だあいつら!?”アマゾンの世界”で大ショッカーにラブラブムードぶち壊されて物凄く怖くなった廻と流姫かぁぁぁああ!!?）…」

以前アマゾンの世界で士達が大ショッカーに襲われている様子を海東と共に物陰で見ていた際に、幸せな雰囲気を壊されてその場にいた幹部のアポロガイストでさえ恐怖に凍りついた程の修羅と化した

廻と流姫が、今の翼と羽流亜に重なって見えてしまい了は心の中で絶叫を響かせる。

海東　大樹
「上等だべコンチクショー、返り討ちにしてやるっぺぞ」

坂木　了
「…って、アンタ頼もしいなオイッ！？しかも何弁だ！？」

馬鹿なのかＫＹなのかそれとも勝算があるのか、海東は田舎育ちの訛癖で言いながらで「喧嘩上等」の番長の如くディエンドライバーをライダーカードを構えて装填。この時いつもの調子に戻った了は”海東が相棒でよかった”と人生初めて思いながら黒い剣型の変身ツール――ディルードライバーに海東と同じ様にカードを柄の部分に露になった装填部分に差し込んだ。

【【ＫＡＭＥＮ－ＲＩＤＥ！…】】

海東・了
「「変身」」

【ＤＩＥＮＤ！！】

【ＤＩ－ＲＵＤＯ！！】

二つの電子音が響く瞬間に海東と了は銃撃と斬撃を放ち、ライドプレートを翼達に飛ばす。ライドプレートは２人に当たる寸前に白い

影に避ける。数体のヴィジョンが出現し二人の重なって鎧になり、戻ってきたライドプレートが頭部に突き刺さると無機質の灰色がシアンとブラックに染まる。これが”仮面ライダーディエンド”と仮面ライダーディルード”、ディファーストの後継機である次元戦士のライダーシステムである。

ディエンド
「翼、ドライバーを僕達に渡したまえ」

翔道　翼
「俺は指図されるのは嫌いなんだよ」

ディルード
「だったら仕方がない。力ずくでも手に入れるしかないな…」

【ＡＴＴＡＣＫ－ＲＩＤＥ!ＥＸＴＲＡ　ＳＬＡＳＨ!!】

ディルードライバーの刀身が淡い光に包まれ、ディルードは構えを取って思いっきり前に振るい、斬撃を飛ばす。

ディルード
「ハァァアッ!!」

翼・羽琉亜
「ッ!!」

――ドガァアン!!――

爆音が起こり、２人のいた砂漠の砂の空へと舞い上がる。それを見

てディルードは自信有り気な表情をする。

ディルード
「どうだ?俺の実力は?」

「フン、ガキにしてはまずまずの攻撃……だが女に手を出すなんて男の風上におけねぇヤロウだ」

「撃っていいのは撃たれる覚悟があるだけだ。もっとも、今回は刀だけどな…」

ディルード
「!?」

翼と羽琉亜の目の前には2人の漆黒の身体を持つ2人の男――紅音也の人格が刻まれたダークキバ、『Wの世界』の鳴海壮吉の人格を持つスカルが立っており、2人から斬撃から守っていたのだ。

ディルード
「おいおい…召喚されたライダーを盾にするのはよくあるけどライダー自らの意思で守るなんて聞いた事ねえぞ?」

ダークキバ
「黙れや苔野郎、俺の元のなった人物の翼と羽琉亜に手を出すなんざ千年早いんだよ。薄情者にとやかく文句言われたくないな」

ディルード

「酷ッ！！それ酷いって！！なんで召喚されたライダーまでそんな事言われたくないよ！！」

ディエンド
「まあそれは置いといて、今回は特別だから僕のとっておきの三体を使うか」

【ＫＡＭＥＮ－ＲＩＤＥ！ＡＮＯＴＨＥＲ　ＡＧＩＴＯ！！ＲＹＵＧＡ！！ＯＲＧＡ！！ＧＬＡＩＶＥ！！ＫＡＢＵＫＩ！！ＤＡＫＥ　ＫＡＢＵＴＯ！！ＮＥＧＡ　ＤＥＮ－Ｏ！！】

【ＫＡＭＥＮ－ＲＩＤＥ！Ｇ４！！ＣＡＵＣＡＳＵＳ！！ＡＣＫ！！】

２人はそれぞれダークライダー達と最強と謳われる三体のライダーの合計十体の仮面ライダーが召喚する。

ディルード
「さあ行くぞ、俺らの闇ライダー達」

ディエンド
「最強ライダーには最強ライダーってね、出血大サービスだよ」

ダークキバ
「さあ、千年に一度の天才であるこの俺が相手にしてやろう。光栄に思えよ坊や達♪」

ダークキバット
「ありがたく思え！絶滅タイムだ」

スカル
「さぁ、お前の罪を……数えろ！！」

翔道　翼
「行くぞ羽琉亜」

光影　羽琉亜
「うん・・・キバーラ！！」

そして時は遡り、バトルスタジアムに戦うディファーストとディエンド達に戻る…

～～～～～～～～～～

ダークキバ
「おしおきの時間だ、ハッ！！」

アナザーアギト・グレイブ・歌舞鬼
「「グギャァッ！！」」

ダークキバは闇の鎧の力と音楽を奏でる様に鮮やかな体術で三体のライダーを圧倒し、強烈な回し蹴りを浴びせている。その隣ではスカルが漆黒の銃・スカルマグナムでの射撃でＧ４・コーカサス・ネ

ガ電王に銃撃を浴びせる。

スカル
「フンッ、同じ作り物と言えどここまで違うとはな…」

G4・ネガ電王
「「ギガガガァッ!!」」

【Full chage】
【Mighty】
【Maximum Rider Power】

グレイブ・歌舞鬼
「「ハァァアア!!」」

コーカサス・アナザーアギト
「「ガァァアア!!」」

G4はミサイルランチャー・ギガントのミサイル、ネガ電王はネガガッシャーから”ネガワイルドショット”のエネルギー弾を発射させ、グレイブと歌舞鬼は”グラビティスラッシュ”と”音撃打・業火絢爛”を、コーカサスとアナザーアギトは飛び上がり”ハイパーキック”と”アサルトキック”を放とうとする。

ダークキバ
「ほう、これは面白そうだな♪おい固茹で卵の骸骨野郎、俺とおまえで『デュエット』ってのはどうだ?」

スカル
「いいだろう、お前の力を俺に見せ付けろ」

2人は互いに確認しあうと、スカルはマキシマムスロットにスカルメモリを挿入し、ダークキバは黒いフエッスルをキバット二世に吹かせる。

【ＳＫＵＬＬ／ＭＡＸＩＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ】

キバット二世
「Ｗａｋｅ　ＵＰ、２！！」

ダークキバ・スカル
「「ライダー、ツインキックッ！！」」

2人は地を蹴ってネガワイルドショットとギガントのミサイルの避け、その際に起きた爆風に乗って上空に高く飛び上がり、それぞれの必殺キックをコーカサス・アナザーアギトの必殺キックを打ち破る。
さらにそのまま二体に蹴り込み、力ずくで押し出してＧ４とネガ電王達がいる場所に叩き付けた。ディエンド達が召喚されたライダー達は爆炎となって消えていく。

ダークキバ
「フフッ、Ｅｘａｃｔｌｙ～♪」

スカル
「悪いな、これも依頼なんでな…」

ダークキバとスカルはそれぞれ炎となって消えていた同じ存在――仮面ライダー達に言い残す。
一方、ディファースト・キバーラは精密な射撃と鮮やかな剣戟でディエンドとディルード、アークと残ったダークライダーズを押していく。

【ＡＴＴＡＣＫ－ＲＩＤＥ！ＢＬＡＳＴ！！】

ディファースト
「くらいな！！」

ディエンド・ディルード
「「ぐわぁああ」」

ＫＭキバーラ
「タアァァァアア！！」

ディファーストブラストを上空から降り注ぐ雨の様にディエンド達に放ち、怯んだ所にキバーラが懐に入って斬り付ける。

ディエンド
「っく……仕方がない、ディファースドライバーが傷モノになるかもしれなけどこれを使おうかな」

【ＦＯＲＭ－ＲＩＤＥ！ＡＲＣ―ＬＥＧＥＮＤ！！】

自分達のピンチを打開すべくディエンドはＦＦＲの要領でアークの背中を打ち抜いて、フォームライドの力で巨大な翼と魔眼のもった”レジェンドアーク”にフォームチェンジ。

【ＦＩＮＡＬ－ＦＯＲＭ－ＲＩＤＥ！ＲＹＵ・ＲＹＵ・ＲＹＵ・ＲＹＵＧＡ！！Ｏ・Ｏ・Ｏ・ＯＲＧＡ！！ＤＡ・ＤＡ・ＤＡ・ＤＡＲＫ　ＫＡＢＵＴＯ！！】

ディルード
「ピンチのために一気に失礼するよ！！」

ディルードもリュウガ・オーガ・ダークカブトの身体を一気に切り裂き、それぞれ暗黒龍ドラブラッガーを模した『リュウガドラブラッガー』、オーガストランザーを模した『オーガストランザー』、ダークカブトゼクターを模した『ゼクターダークカブト』にＦＦＲ。直ぐにオーガストランザーはレジェンドアークの手中に収まり、リュウガドラブラッガーとゼクターダークカブトをレジェンドアークと共にディファーストへ突っ込ませる。

【ＦＩＮＡＬ－ＡＴＴＡＣＫ－ＲＩＤＥ！Ｏ・Ｏ・Ｏ・ＯＲＧＡ！！】

レジェンドアーク
「ガァァァア！！」

レジェンドアークは上空からＦＡＲを発動した無限に伸びた黄金の

刀身と化したオーガストランザーを振り下ろして2人を叩き切ろうとする。

【ＡＴＴＡＣＫ－ＲＩＤＥ！ＲＥＫＫＡ　ＤＡＩＺＡＮＴＯＵ！！】

ディファースト
「殿様、アンタの力を…貸してもらう！！」

ディファーストは嘗てとあるライダーのいない世界――シンケンジャーの世界のシンケンレッドが所有していた並大抵の巨大な大太刀・烈火大斬刀を片手で持ち、”ディルードカイザー”の刃を受け止めて弾き落した。

【ＡＴＴＡＣＫ－ＲＩＤＥ！ＥＸＣＡＬＩＢＵＲ！！】

ディファースト
「羽琉亜！！これを使え！！」

ＫＭキバーラ
「うん！！いくわよ！！」

ディファーストは召喚したエクスカリバーをキバーラに渡し、共に剣の刃に力を注ぎ込む。

ディファースト・ＫＭキバーラ
「ハアアアアアアア……ハアアアア！！」

そして一気に『約束された勝利の剣（エクスカリバー）』と『百火繚乱（ひゃっかひょうらん）』の黄金と烈火の二つの斬撃を放ち、レジェンドアークを叩き切った。

レジェンドアーク
「グアァァアアア！！」

――ドガァァァンッ！！――

レジェンドアークは断絶魔を上げながら爆散し、ゼクターダークカブト、先程弾き落とされて地面に刺さっていたオーガストランザー、リュウガドラブラッガーの三体は爆風に吹き飛ばされディエンドとディルードに直撃する。

ディエンド
「あ、あぶな……シンッ！？」

ディルード
「ケンジャーッ！？いった～…」

奇怪な声を発しながらＦＦＲのライダーに押し潰されている２人、そこに再びド黒いオーラを放ったディファーストとキバーラが刃を振り下ろそうとする。

ディファースト・ＫＭキバーラ
「……ウラァァア！！」

【Ｂｕｒｓｔ　Ｍｏｄｅ】
【Ｆｕｌｌ　ｃｈａｇｅ】

ディファースト・ＫＭキバーラ
「…！？うわぁぁあ！！」

銀色の光弾と赤い刃が飛んできて、２人の身体に炸裂し火花を散らせる。スカルとダークキバが振り向くとそこにはデルタとタイガ、電王が出現する。

電王・ソードフォーム
「ウェイクアップで俺達、参上！！な～んてな、久しぶりだな翼に羽琉亜」

ディファースト
「十六夜、ストレンジ……なんでお前らが！？」

突然現れた十六夜達３人に戸惑いを隠せないディファースト。そんな様子を見てデルタは口を開いてディファーストに向って言った。

デルタ
「翼、貴方を倒すためがために鳴滝さんがディエンド達と手を組んでましてね……仕方がなくこの２人を助けたのです」

ディエンド
「まあそう連れない事を言わないでくれたまえ、十六夜君」

KMキバーラ
「…何だかイヤな風向きになったわね…」

鳴滝とディエンドの共同戦線が引かれたという事実を知ったキバーラ――羽琉亜は頭に手を置いて困った表情をする。

タイガ
「…苔、ご愁傷様…」

ディルード
「おいっ!!まだ死んでねぇよ!!」

シリアスな雰囲気の中、ディルードのツッコミの言葉を気にせずタイガは自慢の怪力で2人の乗っかっている三体のFFRのダークライダーを持ち上げて、元の姿に強制解除させていた。
ダークライダー全員が元の姿になると、デルタ達が加わったディエンドとディルードは体勢を立て直す。

電王・ソードフォーム
「俺達は最初から最初まで徹底的にクライマックスだ!!いくぜいくぜいくぜぇッ!!」

デンガッシャーを構えて走り出した斬りこみ隊長の電王を機にディエンド達は猛攻を反撃を始めようとした。

～～～～～～～～～

場所は戻って遺跡、ディファースト達が戦っているバトルコロシアムの入り口ともいえる次元の壁に”長瀬準一”、”長瀬来斗”、”片桐優姫”、”長瀬奏”の四人が駆けつけて来た。

片桐　優姫
「準一、アレ…」

長瀬　準一
「翼の作ったバトルコロシアムの入り口か…今翼や羽琉亜が戦ってんだ。俺達も行くか」

小野寺　ユウスケ
「お～い、ちょっと!!ちょっと待ってよぉぉぉ!!」

先程市場であったユウスケ達が準一達四人の所へ駆け寄ってくる。まさか付いて来た事に来斗を除いた3人は驚いた。実は先程、ここに行く途中で準一達はユウスケ達と会って意気投合したのだが、今から戦になる危険な場所に一般人が迷い込んだため驚いたのだ。（ユウスケが仮面ライダーとは知らないらしく、もし知ったらどんな事になるか…）

長瀬　奏
「貴方達は確か…何しにやってきたのですか。ここはもうすぐ危険

な場所になりますから国に戻ってください」

小野寺　ユウスケ
「そう言うわけにもいかなんだ。俺達初めてこの世界に来たばっかでココの事よく知らないし…」

光　夏海
「貴方達もこの世界とは別の世界から来たようですけど…あの、少しだけでも」

長瀬　準一
「あのな…気持ちは大体分かったが、今俺達はいそがしいんでな。少し待っててくれない…」

今は翼を助ける事にいそがしいため夏海達の言葉に耳を貸そうとしない準一はそう言いかけた時、突然彼らの目の前に次元の壁が出現。

鳴滝
「仮面ライダーW、悪いが君達にはココで足止めさせてもらう…」

その言葉と共にオーロラの中から現れる鳴滝。その背後からキックホッパー、パンチホッパー、王蛇、イクサの四体のライダーが出てくる。

秋月　信彦
「何!?アレは…鳴滝!?」

時峰　劉子
「なんでアイツがこんな所に…」

長瀬　来斗
「アレは…異世界の仮面ライダーの様だ。フフッ、ゾクゾクさせてくれるねぇ。どうやら僕達の邪魔をしに来たようだ」

幾度となくディケイド――士の旅を邪魔してきた存在の鳴滝がこんな異世界で出会うなんて思ってなかったユウスケと信彦達と、自分でも知らない異世界のライダーを見て笑みを擽られる来斗。

キックホッパー
「…今、俺を見て笑ったか？」

パンチホッパー
「お前らはいいよなぁ？太陽の様にそんなに輝いていて…」

王蛇
「祭りの場所は…ココかぁ…」

イクサ
「その命、神に返しなさい！！」

来斗の笑みを自分を痣け笑ったと誤認したキックホッパーから始まり、四体は行く手を阻むかのように準一達に飛び掛ろうとする。だが彼らの身体に銃撃が直撃し火花が散る。

「…どうやらこの世界には翼がいるのか。だったら、俺達も無関係じゃないな…」

「この世界を救ってやるか…」

一同

「「「!!!」」」

鳴滝

「何…!?お、お前らは!!何故ココにいるんだ!!」

鳴滝は銃撃手の姿を見て驚いた。その目線の先にはコールドライバーとライドブッカーを向けた男――砕谷廻と門矢士が立っていたのだ。

第十六話／Bのドラマ CD 風ストーリー／迷い獣王オーバーラン！

――玖楼国からかなり離れた次元に位置する世界・鳴滝ライダーズ邸の巨大豪邸――

朝倉「・・・・・」
矢車「・・・・・・」
影山「・・・・・・」
ストレンジ「…ふあぁ～～、眠い……まだ玖楼国（さばくのくに）の戦いの疲れが取れねぇよ…」
十六夜「何のようですか草加さんに水野さん。こんな朝早くから呼び出して…」
ビャッカ「……Z～Z～Z～……」

草加「ビャッカは立ったまま熟睡しているが、全員そろったな…では話そうか」
水野「お前等を呼んだのは他でもない。ココ最近アジトで不審な影が出没が見られ、食料や物資がなくなっている……」

十六夜「ふぅ～ん、そういえば鳴滝さんがそんな事言ってましたね。『〇リキュアパンがなくなってるーー！！』とか『おのれぇディケイドォォォーーー！！私の楽しみを破壊したなぁーー！！』言ってましたしね…」
ストレンジ「鳴滝の野郎、いつもの事ながら大人気ねえな。つーか、ディケイドのせいにするなよ…」
矢車「その影って”あいつら”の事か？」

橘&睦月『『ン？』』

草加「違う、絶対違う。可能性大だけど…あんなヤツら存在自体認めない」

水野「どこから入ってきたんだろうなあのワケの分からない2人…」

ストレンジ「だけどあいつら、確か剣崎一真のヤツの世界にいたライダーじゃ…」

十六夜「気のせいですよ」

十六夜「とりあえず、僕達はアジト内を調べますか」

ビャッカ「・・・・・」

ストレンジ「ん、どうしたビャッカ？さっきから元気がねぇが…」

ビャッカ「いや、問題……にゃい」

ストレンジ「にゃい！？何で猫語ぉ！？」

十六夜「まずは目撃情報が多かった台所から探してみましょう」

ヴァンプさん「フッフ～ン、あっ皆さん。おはようございます！！」

ストレンジ「おお、お料理将軍。お前も朝早くから朝食用意してくれて」

ヴァンプさん「いえいえ～、皆さんに拾ってもらって早半年ココに来て毎日が楽しいです」

十六夜「突然ですが最近見かける不審者について心当たりありませんか？」

ヴァンプさん「あ～そうなんですよ。買い置きしておいた牛肉や魚

がなくなってまた別の献立が考え直して大変なんです……しかも何故か大きいヤツばかり」
ストレンジ「星はそんなに腹を空かしてんのかよ……あれ、ビャッカがいない。何処に行きやがった…って!?」

ビャッカ「……」↑お魚加えてる（ただしクロマグロ）

ヴァンプさん「Σちょっと、さざ○さんですかーっ!?追いかけられてるドラ猫ですかーー!?しかも冷蔵庫にあった氷付けの天然マグロ加えてるー!?」
ストレンジ「つーかビャッカ!!良くそんなデケェマグロ加えられたな!?クロマグロって４００ｋｇもある上に鱗相当硬いんだぞ!?それを涼しい顔で加えてるお前の顎の力と眩しい歯すげーなオイッ!?」
十六夜「複数のライダーを簡単に薙ぎ払うほどの戦闘力ですからね。前デストワイルダーが足を怪我した時手当てするために片手で持ち上げて帰ってましたし」
ストレンジ「のうのうと喋ってる場合か!?ってビャッカ!!何処に行こうとしてんだ!?戻って来ーい!!」

ビャッカ「……」↑結局マグロ貰った
ストレンジ「お前、顎疲れないのか?」
ビャッカ「しぇんしぇん、ぼんだびに〝ゃい（全然、問題ない）…」
ストレンジ「あ……あっそ…;;…（…もうコイツのＣＶ竹達○奈でいいんじゃねえか?）」

十六夜「次はこの大車庫の下にある地下室ですね」
ストレンジ「あー確か埃っぽくてキツクてむちゃくちゃ広い地下室か？あそこなんか出そうでやなんだよな…」
ビャッカ「ガタガタガタブルブルブル……ここにいる」↑物凄く青ざめてる
ストレンジ「あ…そういや苦手だったんだな、怪談とか幽霊の類が…」
十六夜「野生の感なんでしょうね、だけど大丈夫ですよ――襲って来た時は僕が”首を３６０℃捻り潰した後、フォトンブラッドの銃弾を両手足の関節を一回ずつ死なない程度で全て打ち抜いて、焼いて煮て最後は生きたままミラーワールドに放置”させてあげますから♪」
ストレンジ「Σ怖ッーーー！」

ビャッカ「……こ、怖い」
ストレンジ「心配するな、俺も怖くて泣きそうなんだよ…（但し十六夜にな……俺は妖怪より十六夜、アンタの方が怖い！！誰もがそれを見せつけられたら恐れ、いや畏れられるだろうな！？つか鳴滝さん、アンタよく魔人より怖い男スカウトできたな！？）」
十六夜「…ストレンジ、今何を考えてますか？」
ストレンジ「ぶご！？考えてない考えてない！！」
十六夜「そうですか……それは置いといて、この扉の向こうが地下室ですね」

――パカリッ――（扉が開いた音）

シタリ「あーもうお前さん達！！あたしに乗りかかるんじゃない！！重いじゃないか！！」
ヨゴシュタイン「うむ～、ガンガン行こうなり～～（酔）」
キタネイダス「うぷっ、飲みすぎたなり～～」
ケガレシア「負けないでおじゃるよ～～、害水目大臣の名が廃るでおじゃる！！」
メレ「フン、こっちこそ！！ねーリオさま！！」
リオ「…程ほどにしとけ」

ガジャ「シンデレラー二、呪ワレール。シンデレラー二、呪ワレール（酔）」
ガイ「ヤングデカルチャァァァァ！！！」↑カラオケ熱唱中
レイ「…五月蝿い」

メーミィ「あらぁ、一緒に飲もうじゃない～」
アブレラ「来るな！！寄るな！！この化物が！！」

ヴォッファ「あ～暇だな…今頃現世じゃどうなってるだろうな」
フラビーニョ「ハリケンジャーのみんな、頑張ってるかなぁ？」
ミケラ「アバレンジャーの奴らも元気にやってるんかな…」
サクラダラ「何だか時間が立つと寂しくなってきたーね。僕も残忍な面が薄れて陽気なキャラでもよくなった」
ウェンディーヌ「そうねぇ。私のフラビーニョの2人は何回も生き残って出番回ってきたのに、フラビーニョはクロノスとか言うヤツに利用されて、私は”通りすがりの仮面ライダー”に倒されちゃって結局ココに戻らされて……しかもサーガイン達、いつの間にか仲直りして今では一緒に歌ってるわ…」

チュウズーボ&マンバルバ&サーガイン&サンダール「「「「忍風戦隊ハリケンジャーー風になぁーれぇーー！！」」」」

ツエツエ「はぁ…これから出番はないはね…」
ヤバイバ「まぁそんな事もあったけど、今はパァーっと遣ろうばやろうば！！」

ロンダーズファミリー「……ぐがぁ～～…」↑酔い潰れてる

ストレンジ&ビャッカ「「……」」

――バタンッ――

ストレンジ「……十六夜、俺幻見てたわ。なーんか一部除いて黄泉に逝ったはずの人たちが内の中で勝手に宴してたよ。三途の川を超えた人達集まって無礼講してたよ。お無礼講してたよね？ねぇ…？」
十六夜「心配要りませんよ僕もこの目で確かに見ましたからアレは”本物”の幽霊です」
ストレンジ「いやちょっと待て十六夜！？よく平然といられるなさっきの光景見て！？あいつらなんか頭に三角頭巾つけてましたよ！！つけてましたよね！？つか不審者アイツらだ！！アイツらケッテーイ！！」
ビャッカ「……だから、十六夜のライオトルーパーや……私のオルタナティブが、ウガッツやナナシ…だったんだ」

――数分後……――

十六夜「ん…あれって草加さんと水野さんですね」
ストレンジ「何ぃ？おっ本当だ。しかもビャッカの部屋の目の前…

？」

十六夜「あの2人（特に前者）は相手を殺しかねない卑劣さ持ってますからね…」

ストレンジ「いや、水野さんは良い人だから!!別の世界の水野さんアギトを助けたから!!せめて水野さんだけは助けてあげて!!草加の馬鹿は焼くなり煮るなり刻んでも構わん!!」

ビャッカ「…!!みんなが…!!」

十六夜「…？”みんな”…？」

ストレンジ「おいどうしたビャッカ…!?あいつ二人に向って走り出していったぞ？」

水野「まさか影の正体が内の中にいたとはな…開けるのは気が進まないが…」

草加「知るか、そんな事は俺達には関係ない。ドアを開ける…」

ビャッカ「ガァァァーーー!!」↑飛びまわし蹴り

草加「ぎゃぁぁぁーーー!!」

水野「Σ雅人ォーーー!!」

ストレンジ「壁に叩き込まれたー!?てか何やってるんですか水野さんこんな所で!!」

水野「お前らか……俺達は影の行動パターンを辿ってる中、どれもビャッカの部屋に戻ることが分かった。それでココに来たんだ」

十六夜「・・・なるほど、だからビャッカの様子が……だけど、何を隠してるんだ」

草加「何を隠している…開けろ!!」

ビャッカ「・・・・イヤ」

草加「いいから開けろ…！！」
ビャッカ「イヤだ…」
草加「あげろぉ！！そこをどけ！！」

十六夜「……あの陰険が…」↑瞳が濁り始める
ストレンジ「う、ヤバイ……あの水野さん、急いで十六夜の腕引っ張って草加から離してください。
でないと『惨殺』されます、俺達ごと…」
水野「う、うむ…よく分からんがこのままだと大惨事になる事は分かった」↑アギトの予知能力で察知したらしい
十六夜「……草加、殺す…くさか、ころす…クサカ、コロス……くサ加、ムッ殺ず……」

草加「いいから退け！！」
ビャッカ「……ッ！！痛い…！！」

？「ギャオォォォォォォン！！」

水野＆ストレンジ「「！？」」

――バァァンッ！！――

ブレイブレオン「がぉーーっ！！」
ファイアーコング「うっほーー！！」
アクアシャーク「くぉーーん！！」
サンダーイーグル「キギャァァーー！！」

草加「…な!?なんだ…うぎゃぁぁぁぁぁあーーーー!!!」

ストレンジ「襲ってるぅーー!?でけぇライオンメカと頼もしい仲間たちが草加をフルボッコォー!!」

水野「オイ、誰か助けに行け!!雅人の手足がありえない方向に!!…ってさっき柱に縛り付けた十六夜の姿がいない!!」

ストレンジ「なぬ!?」

【ＥＸＣＥＥＤ　ＣＨＡＲＧＥ】

デルタ「死にやがれーー♪」↑ヤンデレ必殺キック

草加「な、何を……ぎゃぁぁぁぁぁぁあああ!!」

水野＆ストレンジ「「最後の最後にアイツ止め刺しやがったーーッ!?」」

草加「……」↑灰化

矢車「オイ、なんで死に掛かってる?」

影山「兄貴ー、腕取れそうだよー」

朝倉「…イライラすんだよ」

水野「やめろ!!踏もうとするな!!今治療中だからそっとしといてやれ!!」

ストレンジ「あー、お前等何があったんだ?」

ブレイブレオン「ガォ、ガオガオガオ」

ストレンジ「何々『俺達が彷徨ってる所、あの子に拾われた』」

ファイヤーコング「ウホ、ウホグホ」

ストレンジ「『腹を空かしたワシ等に態々食べ物を持ってくれた』」

アクアシャーク「くぉーん、くぉくぉん」

ストレンジ「『私達を身を持って守ろうとした』」

サンダーイーグル「ギシャア、ギシャギシャ」

ストレンジ「『だから俺達はこの子を主と見なし、命をかけて守り続ける』だって、どする草加？」

草加「っくそ、これ以上ワケの分からない存在増やされて――グキィッ――ぎゃぁ！！」

十六夜「うん、許す♪誰か文句があるヤツは？」↑帝王スマイル

朝倉＆水野「……」

ストレンジ＆矢車＆影山「……異議なし…」

――こうしてビャッカに新しい仲間が増えた――

十六夜「――ビャッカ…」

ビャッカ「…？」

十六夜「僕に相談しないなんて行けないですね……後で『お仕置き』ですよ」

ビャッカ「／／／！？」

第十六話／Bのドラマ CD 風ストーリー／迷い獣王オーバーラン！（後書き）

～～ツバ×カメ通信～～

ゼロノス
「久しぶりだな…」

イクサ
「久しぶりだ…」

デネブ
「久しぶりだな、あまりにも暇で『野球大会の未来』にゼロライナー使って行ってしまったな。お土産もいっぱいだ」

ダブル・サイクロン
「ゾクゾクするね、城戸真司のあの回避力…検索しなくちゃ！！」

ダブル・ジョーカー
「ダブルもいつの間にか劇場版や最終回が……ｏｒｚ」

――バガァァン！！――

ケロちゃん&いおりょぎ
「「前置きがながいわぁーーー！！」」

ダブル・ジョーカー
「あ、今回のゲストの『カードキャプターさくら』の封印の獣・ケロちゃんと、『こばと』の犬のぬいぐるみ・いおりょぎだ」

ダブル・サイクロン
「某作者さんの要望によってやって来た2人だけど、正直本編のスーパー戦隊歴代悪役達の宴会シーンがインパクトが強すぎて陰薄くなるね」

ケロちゃん
「待てオィィィ!!このナイスガイなビックスター・ケロベロスを影薄いって言うな!!」

ゼロノス
「ナイスガイと言うより、問題外のナルシストだがな」

イクサ
「…それといりょりょぎ」

いおりょぎ
「いりょりょぎじゃねえ!!いおりょぎだ!!でなんだよ…?」

イクサ
「ぜひ言ってくれ、『百鬼夜行を叩った切る!!地獄の番犬デカマスター!!』って」

いおりょぎ
「ハハァァァ!?なんで俺がぁ!?」

イクサ
「声優つながりだ、さぁ神の前でやりなさい!!」

いおりょぎ

「知るカァ！！」

再び登場の鳴海亜希子
「さっさと言わんかーい！！」

いおりょぎ
「痛ぁ！！スリッパで殴るなぁ！！」

ダブル・ジョーカー
「って亜希子！！なんでお前ここにいるんだ！？」

亜希子
「ついでにココにも顔出してみたのー！！きゃっほーー！！」

ダブル・サイクロン
「ココまで来るとなんでもありだね」

いおりょぎ
「あーもう言えばいいんだろ！？

『百鬼夜行を叩った切る！！地獄の番犬デカマスター！！』」

ダブル&亜希子
「「おーー凄い！！」」

デネブ
「本物さながらだぁ！！」

？？？

「ほう、百鬼夜行を叩った切るだぁ？舐めた口を利くな。なんならワシの百鬼夜行で試してみるかワンコロ」

いおりょぎ
「ん！？誰だ…ぐばぁ！？」

ケロちゃん
「って、なんでわいまで～～～！！」

亜希子
「え！？え！？今の誰！？私、聞いていなーい！！」

ダブル・ジョーカー
「なんつー早業、姿が見えなかった…」

ダブル・サイクロン
「興味深い、さっそく検索しよう……キーワードは『百鬼夜行』、『不可視』…」

ゼロノス
「あ～今回のゲストも何処かに行ってしまったな……（お茶すすりながら）」

イクサ
「では、次回もお楽しみに……次は何時になるのやら…」

第十七話／闇に潜む仮面＃想い出は悲しみと共に（前書き）

また遅れてしまったな、どうも皆さん更新速度が亀並みに遅い地水です。

翼

「作者お前、遅すぎだって。ココでやっとなんて、打っ倒れて執筆所じゃなくなるぞ」

うん……軽減するために今回から台本形式をやめる事にした。いちいち名前いれるの面倒くさいし、文字数の方にも余計に多くなるし……。

？

「ちょっと翼ーー！！そろそろ出番だよ！！」

翼

「え？ってお、お前は…」

？

「何キョトンとしてるの？せっかくの私の登場なのに、翼らしくないわねぇ…って…」

翼

「会いたかった…うわぁぁぁああん！！」

？

「ちょっ／／／いきなり抱きしめないでよ！！／／／」

あ～らら、何だかイチャイチャな雰囲気になってきてタイトルコール言える雰囲気じゃなくなったね。

？Ｐａｔｅ２

「ならせっかくだからワシが言おうぞ。

久しぶりの本編開始だ。第十七話『闇に潜む仮面♭思い出は悲しみと共に』、さぁ始まりじゃ」

翼＆ａｍｐ；？

「「ってアンタ誰！？」」

第十七話／闇に潜む仮面＃想い出は悲しみと共に

――生きてるだけで罪なのか？――

――存在（い）るだけで壊れてしまうのか？――

――俺のせいで俺を居て欲しいと願った大切な人が消えてしまうのか？――

――だったら俺は…全てを破壊してやる…！！――

～～～～～～～～～～

――過去・？？？の世界・光影写真館――

『アタックライド、エイトゥッ！！』

『甘いです士朗、ジョーカー』

『馬鹿か、ほらよ』

『『ってオィィー翼ァーーー！！』』

巨大な背景ロールがあるリビングルームで翼、士朗、セイバーの三人はトランプを使ったゲームを繰り広げている。ちなみに今翼が２人を差し置いて優勢を強いている様だ。

『翼にみんな！！ただいま！！』

『お帰りなさい、羽琉亜』

『羽琉亜ちゃんお帰り』

焦げた茶色の美しい長髪を持つ翼と同い年ぐらいの一人の少女――光影羽琉亜が帰ってきた。

『何だよ「羽琉亜」、いきなり帰ってきて…』

『コレ見て、じゃーん』

羽琉亜は紙袋からマグカップを取り出し、３人にそれぞれテーブルに上に並べて置いた。士朗とセイバーは不思議そうに見て羽琉亜に尋ねた。

『なんですか…これは？』

『マグカップ？』

『旅の想い出作りに何か残そうと思ってみんなに内緒で作ってたんだ～♪士朗には名前が入ったモノ、セイバーはライオンが好きそうで似てるから可愛いライオンのマグカップをプレゼント。はい！！』

クウガの様に真っ赤な文字で「ＳＨＩＲＯＵ」と書かれたマグカップと、真っ青な地にデフォルメのライオンが描かれたマグカップを士朗にそれぞれ手にとって渡した。次に翼のマグカップを渡す。

『…太極と…羽根か？』

『う、うん…歴史とか古い物とから好きだから…その／／／』

頬を林檎のように赤く染めもじもじしながら、恥ずかしがる羽琉亜はマグカップを翼に手渡した。それは黒い羽根と白い羽根が太極図のように並んだマグカップだった。

『どう…／／／』

『最悪だな』

『なっ…！！』

批判な感想を言われショックを受ける羽琉亜。流石に士朗とセイバーはコレを見て翼に食い掛かる理由はなかった。

『おい翼、そんな言い方はないだろ。せっかく俺達のために作ってくれたのに！！』

『羽琉亜が可愛そうです、誤ってください！！』

『別に、俺はだた事実を述べただけだ。俺が作った方が数段上手く作れる』

反省する様子もなく、翼は軽くこなす。今になっては心身共に成長し丸くなったものの、この時の翼は旅を成長したとはいえまだ尖っている所があるのだ。

『じゃあいいよ…嫌なら私が使う…』

不機嫌になった羽琉亜は翼の手に握られているマグカップを取ろうとする。が、翼は羽琉亜からマグカップを取らせないよう高く上げた。

『え…？ちょっと翼、早く返してよ！！』

『俺は”デキは最悪だ”とは言ったが、”いらない”とか”気に入らない”は言ってない。丁度俺のは「電王の世界」の時の一件で粉々に割れてしまってな。欲しかったんだよ』

『なによ、急に気が変わって……きゃあっ／／／！！』

羽琉亜は話の途中を遮られてしまう。何故なら、翼が突然後ろから腕を回されて抱きしめられてしまったからだ。

いきなり密かに想いを寄せてる異性の人物に林檎のように赤くなってしまう羽琉亜だが、翼は躊躇せずに言葉を彼女の耳元で呟いた。

『第一、一生懸命思い込めて作ったモノを貰って、それを捨てたら作った奴悲しむだろ?俺はそんなのは絶対嫌だ。作った奴も受け取った奴も笑顔にしたい』

『ッ／／／！！？』

真顔な表情の翼にそう言われ、今度は林檎以上に顔を真っ赤にした羽琉亜。翼も若干照れてるのか顔が少し赤い。

『…馬鹿…素直に言ってよ…／／／』

『素直に言えねえから、こうなってんだよ…／／／』

（（何だかイイ雰囲気だなぁ～～））

心の中でそう思いながら、士朗とセイバーは邪魔にならないように情報端末型“ケータッチ”や以前の世界で手に入れた「ＧＡＧＡＮＯ　ＵＤＥＷＡ」や「ＢＬＡＣＫ」などのライダーカードを整理しながら2人が元の世界に戻るのを待っていた。

だが…。

場面から突如変わり、炎上と銃撃が飛び交う血生臭い戦場の荒野になる。

『…つば……さぁ……』

『羽琉亜！！オイ羽琉亜ァ！！しっかりしろ！！』

マゼンタの装甲に翠の瞳を宿した一人のライダー――ディケイドが、自らの攻撃を庇って血に塗れた羽琉亜を抱きしめて、彼女の名を叫び続ける。

だが2人の周囲には九人の戦士が迫っていた…。

皇　昴流が変身したキバ・エンペラーフォーム。

ストレンジが変身した電王・クライマックスフォーム。

琉・F・和彦が変身したカブト・ハイパーフォーム。

獅子堂　光が変身した装甲響鬼。

司狼　神威が変身した剣・キングフォーム

本須和　秀樹が変身したファイズ・ブラスターフォーム。

阿修羅が変身した龍騎サバイブ。

龍王が変身したアギト・シャイニングフォーム。

そしてクウガ・アルティメットフォームBE（ブラックアイ）。

その他にもＧ３－Ｘ、エクシードギルス、ナイトサバイブ、ワイルドカリス、威吹鬼、斬鬼、ハイパーガタック、ゼロノス・ゼロフォーム、ライジングイクサなど最強の仮面ライダーとジェットスライガーやサイドバッシャーなどのハイスペックビークルに搭乗した無数の量産型ライダー・ライオトルーパーが２人を倒さんと陣形を囲んでそれぞれの武器を向ける。

『ディケイド、君の旅はここで終わりだ。君がこれまでして来た事は無意味な物語だ』

『てめぇの存在自体がこの世界を壊す……その前に俺が貴様を殺すッ！！』

『……』

研ぎ澄まされた刃のような憎悪と怒りの殺気を放つエンペラーキバとシャイニングアギトに対し、何度か刃を交えた電王ＣＦは何も言わずただ目の前のディケイドを見つめる。

『…そんな…羽琉亜！！羽琉亜…！！どうして…どうしてなんだよお……』

羽琉亜に呼びかけるディケイドの声は何処か悲しげだった。自分を庇い、ディケイドにはもう戦意を喪失したかの様に。

『フン、消えろッ……化物がぁ。同じ化物の恋人と共に死ねぇ……！！』

『ッ！！』

羽琉亜を化物呼ばわりにするのは――キングブレイド。非常にも彼の冷徹な言葉によってディケイドの奥底から秘めた『何か』を湧き上がらせた……。

【ＲＯＹＡＬ　ＳＴＲＡＩＧＨＴ　ＦＬＵＳＨ】

『…！！オイ神威！！やめろ、今ディケイドに攻撃をするんじゃねぇえ！！』

キングブレイドは電王も大声で叫んだ制止を聞かず、『ロイヤルストレートフラッシュ』の黄金の斬撃をディケイド目掛けて放つ。

だがこの時は誰もまだ知らなかっただろう、本当の破壊者と覚醒したディケイドが額のシグナルポインターが紫色に、禍禍しく歪んだ瞳に変化していた事に…。

【ＡＴＴＡＣＫ－ＲＩＤＥ！ＡＤＶＥＮＴ！！】

電子音声がなるとディケイドの目の前にゴルドフェニックスも超え

た究極のキメラ型ミラーモンスター『ジェノサバイバー』が現れ、邪神でさえも完全に消滅させる程のロイヤルストレートスラッシュの身代わりとなる。

「オイオイ、どうなってんだ!?」

「変身もしてないのに別のライダーのカードを!?」

冷静な戦い方を得意とするハイパーカブトと龍騎サバイブが驚愕の表情が仮面の下から隠し切れない。そして……その時は来た…。

『来るなら来い……総てを…総てを破壊してやる…』

『『『『!!』』』』

その言葉に背筋に寒気が感じ、戦慄を受ける仮面ライダー達。

『…翼…!!』

『…っちぃッ!!やべぇぞ…!!』

彼の放った言葉にを本能的に感じ取り、ディケイド＝翼の名を呼ぶアルティメットクウガと舌打ちを打つ電王ＣＦは他の仲間を置いてその場から離脱した。

その直後、ディケイドから放たれた眩い光が全てを飲み込む…。

～～～～～～～～～

「…翼くん!!」

シンイチ達が元の世界に帰って丸一日過ぎた夜、ベットの自室で寝ていたサクラは“ライダー大戦の夢”から目が覚めて、ベットから飛び起きる。全身汗だらけで傍らでは、剣崎と渡が持ってきたという自分が知っているモコナ（ソエル）とそっくりのモコナ・パンダ・モドキが寝ていた。

「うぅ～～ん……デカルチャーッ!!アレアレアレ?夢?せっかくフルーツ炒飯が目の前にぃ～～」

謎の寝言を叫んだ後、モコナは目をこすりながら起きてくる。サクラが汗まみれの姿を見たモコナは驚いた。

「どうしたのサクラ?汗で寝巻がびっしょびしょだよ?」

「大丈夫。モコちゃんありがとう」

サクラはモコナを心配させないよう笑顔を向けた。モコナは兎のよ

うに跳ねて喜ぶ。

「サクラ、モコナ喉が渇いた～。お水どこにあるの？」

「じゃあ、私が案内してあげる」

サクラはモコナを抱き上げながらベットを降りると、部屋から出て水場に向おうとする。その時…。

「「ガガァァァ……！！」」

「「！！」」

不気味な低い声が振り向くと2人は驚いた。そこに次元の壁の中から赤と緑の二体のワームが居た事に…。

～～～～～～～～～～

玖楼国の城の展望台、翼は所有品の一つの白と黒の煙管（キセル）を口に咥え寂しさがこもった瞳で夜に染まった空に照らす綺麗な星と地上では居住地の光の光景を、眺めていた。

「……」

煙管を口から離すと、口から煙…ではなく、綺麗に煌く火の粉を吐いた。
火の粉は手のひらサイズの炎と大きくなると、翼の周りを飛び回った後儚く消える。

「俺は本当にサクラを守れてるのか…」

翼はため息混じりにそう呟いた。

この玖楼国にサクラと出会った途端、自ら出した次元の壁からイマジンが現れ彼女を襲おうとし、玖楼国の城で九つの世界の怪人達が襲撃。
さらに元の世界に住んでいたはずの操られたクウガとセイバーと死闘を繰り広げ、さらにメモリをしようとしたタブー・ドーパントを招いた鳴滝とストレンジ・十六夜・ビャッカの敵の存在との戦いの兆候…。

“もうサクラや彼女の家族を引き戻せない所まで自分の危険な戦争に巻き込んでしまった”、翼はそんな後ろめたさを感じ取って落ち込んでいるのだ…。

「こんな所にいたのか翼」

「ん…？」

誰かの声が聞こえてきてふと振り向くと、剣崎の姿が目に入った。
剣崎は翼の隣に立つと話し始める。

「剣崎か…何のようだ」

「ココで綺麗な夜景を見てたのか……探してたぞ、サクラがお前を。俺達が来てから浮かない顔してたからな」

「…そうか」

剣崎の言葉にそっけなく答える翼。久しぶりに会ったにも関わらず、浮かない顔をする翼に対して剣崎は話を続ける。

「それとお前に伝えなければならない事がある、士朗とセイバーは渡の力で『クウガの世界』に一旦戻った。少しの間だがこの世界に戻れない」

「…？」

これには興味を示したのか、翼は顔を向ける。

「お前のディファースドライバーは時空転移システムが破損し玖楼国から出られなくなった。いつ鳴滝やこの世界の怪異が襲い掛かっても対応できるよう士朗とセイバーにはこの世界にいさせてもらう」

「そうか…」

実は世界への移動ができない状態の翼がこの玖楼国に暫くの間留まる事を知った2人が士朗とセイバーをこちらの生活で苦難がないように提案した事なのだ。
必要な物を準備するため彼らの出身世界でもある“クウガの世界”へ共に行っているため、少しの間だが、2人は戻ってこれない。

「俺達はお前をあいつらを任せる。俺達は側にいてやれないが、お前が心から信頼できるあいつらなら……」

「俺は別に構わない」

剣崎は士朗とセイバーに任せる事を告げるのだが、翼は納得して了解はしたが再び顔を逸らし景色を眺め始める。剣崎はため息をついて、説得をし始める。

「翼、まさかお前、昔の破壊者としてのディケイドを考えてるのか？心配するな、ディファーストは次元戦士のライダーシステムの根源ともいえるプロトタイプだ。ディケイドとはまったくの別物だ。それにお前は“元・世界の終焉者”と数日かけて立ち直らせた男だろ？あの後“救済者”として世界を旅して、最近ではスーパーショッカーを潰したんだぞ」

「ほぅ、あいつもスーパーショッカーを……だが剣崎、俺は迷って

んだよ。このままこの世界に居ていいのか。それともサクラ達のためにココを立ち去るか…」

「……」

「キャァアアアーーーッ！！」

「「…！？」」

城内の下の階からサクラの悲鳴が耳に入り、剣崎と翼は急いでサクラの元へ向う。

その頃、城内でサクラは悲鳴を聞いて駆けつけてくれた見回りの兵士達にワームから助けられて何とか難を逃れたのだが、二体のサナギワームの人外な強さに兵士達も一人一人倒される一方だった。

「ギシャァア！！」

「うわぁああ！！」

「シャッ！！」

「ぎゃああ！！」

最後の2人が蜘蛛に似たワームによって豪快に投げ飛ばされ、壁に

叩きつけられて気絶した。つまり、もうサクラを守る人物は誰も居ない。

「シャァァァ…シャァァア…」

「来るなぁーーー！！こっちに来るなぁぁーーー！！」

「ギシャァァアア！！」

「うわぁあ！！」

「モコちゃん…！！」

ジリジリと迫るワーム二体に威嚇（？）をして抵抗するモコナだったが、ワームの怖気づいてサクラに抱きつく。

【ＥＡＲＴＨ／ＭＡＸＩＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ】

「サクラ！！ふせろぉ！！」

「ッ！！」

「ギャギャ…！！！」

そこへサクラを守るように天井からぶら下った黄色のクモ型ガジェット――スパイダーショックが現る。蜘蛛のワームが驚いた隙にサ

クラは逃げると、直後に蜘蛛型ガジェット“スパイダーショック”から黒い結晶のワイヤーが発射され、一体のワームを締め付ける。

「ググ、ガガッ…！！」

「無駄だ。「大地の記憶」が刻まれた『アースメモリ』を使った超合金の縄はそう解けるモンじゃない」

サクラの目の前に翼と剣崎が現れる。翼は手元に戻ってきたスパイダーショットに挿された漆黒のアースメモリを引き抜くと、サクラに自身が満ち溢れた顔を向けた。

「大丈夫か？サクラ？モコナ…怪我はなかったか？」

「翼くん…」

「翼、次来るぞ」

剣崎の言葉にワーム達を見ると、もう一体の赤いクワガタのワームがうめき声を上げて攻撃の態勢を構える。翼はドライバーを取り出して装着しようとするが、剣崎の出された腕に止められる。

「翼、ここは俺一人にやらせてくれないか？」

「どうしてだ？俺を」

「あのワーム達の姿をよく見ろ。何か見覚えがないか？」

「見覚え…？……あ…！！」

剣崎の言葉に翼は蜘蛛とクワガタのワームを見てあることに気付く。

それは緑の蜘蛛のワームの容姿が蜘蛛を始祖するカテゴリークラブの『スパイダーアンデット』、赤いクワガタのワームがクワガタムシの始祖する『スタッグビートルアンデット』の、どちらもブレイドと戦う不死生命体“アンデット”の怪人に酷似していたのだ。まったく別種の怪人が、同じ姿をしているのは偶然にも程があるだろうか？

「なるほどな、アンデットはお前の専門分野ってことから任せろか。分かったよ…」

「だから俺が確かめる…あいつがワームなのか、アンデットなのか…！！」

翼とサクラは下がると、剣崎は腰に緑と銀色のバックル「ジョーカーラウザー」を出現させる。それを見た翼は少し驚く。

「剣崎…それは…」

「ジョーカーラウザーだ。ブレイラウザーでもよかったのだが、ち

ょっと野暮用でな……変身！！」

【ＣＨＡＮＧＥ】

「チェンジ・ビートル」のラウズカードをジョーカーラウザーに通し、蚤気楼の壁が包む。そして剣崎は本来ブレイバックルからではなくジョーカーラウザーに用いて返信した人間の血を表す「赤」い瞳からアンデットの血を表す「緑」の瞳となった『仮面ライダー剣・グリーンアイ』に姿を変える。

「ハアァァアア！！」

ブレイドは醒剣ブレイラウザーを腰から引き抜くと、それでクワガタのワームを先程巻かれた蜘蛛のワームと共に振り回し、幾多の経験を積み重ねた剣術で斬り付けていく。

【ＡＱＵＡ／ＭＡＸＩＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ】

「グア…？グガガガガ！！」

「ダガガガガガ！！」

翼の放った「水の記憶」が宿した青緑のメモリ『アクアメモリ』が装填されたライブモードの“バットショット”が現れ、汚れを祓い消す聖水の波動を放ち、ワーム達は動きを止めて悶絶し始める。

【ＴＨＵＮＤＥＲ】

「水はよく電気を通す…ハァッ！！」

さらに追い討ちと云わんばかりにブレイドが「ディアーサンダー」を発動し、ワーム達に電撃を落す。効果は絶大でワーム達は文字通りムシの息、剣も決め手を使うため二枚のカードを連続ラウズした。

【ＫＩＣＫ・ＴＨＥＮＤＥＲ】
【ＬＩＧＨＴＮＩＮＧ　ＢＬＡＳＴ】

「ハァァァ……ウェーイッ！！」

そしてブレイドの発動した電撃を纏った右足での飛び蹴りを繰り出す「ライトニングブラスト」で二体のワームに決められ、大爆発した。

「やったぁーーー！！ライダーキックだぁあーーー！！」

「…（ハシャギすぎだ……ん？）…なっ！？」

「どうした…何！？」

今まで隠れてたのにブレイドの活躍を見て大ハシャギのモコナを見て呆れる翼はある異変に気付き、ブレイドも絶句する。

それは致死量も超えたはずにもかかわらずスタッグワームが爆炎の中から現れたのだ。
しかもブレイラウザーに斬り付けられた切り口からは緑白色の血――アンデットを表す血が流血、さらに腰の楕円形のベルト――アンデットバックルが『A』と開いている。

「どうなってる…あいつ、アンデットの血を…！！」

「まさか…どっちもってんじゃねえだろうな…」

『その通りだ…』

「「「「！！」」」」

突如声が鳴り響くと、同時に発生した次元の壁に飲み込まれてサクラ、ブレイド、翼（あとみなさんお忘れだが＋α＝モコナ）何処かのスタジアムの観客席に移動してしまう。

「一体何……！？」

「何処だ？ここは…別の世界に移動した？」

「この場所…何処かで…」

驚くサクラ、冷静に状況を分析するブレイドと、見覚えがある場所と思った翼は辺りの周囲を警戒する。

――コツンッ、コツンッ、コツンッ――

「「「！！」」」

その時、何者かがこちらに近づいてくる足音が聞こえてきて三人は観客席の上に振り向くと2人の戦士がこちらに近づいてくる光景が目に写った。

銀の鎧と黄色のエネルギーラインが駆け巡るボディ、紫の瞳とX字の強化スーツの戦士。
もう一人は血のように真っ赤な鎧、コウモリの模した金色の瞳に両肩と左足が鎖に巻かれてる吸血鬼。

ブレイドと何かの確認を得た翼は言葉を紡ぐ。

「…次はお前等か…！！」

「なるほど、そう言うことか。ここは俺とお前が出くわした場所ってわけか……仮面ライダーカイザ」

復讐と嫉妬を抱く戦士――仮面ライダーカイザと、ファンガイアを統べる闇の王『仮面ライダーキバ』は翼達にジリジリと歩み寄る。

「シャァァァア、シャァァァア……ガルルゥアアアア！！」

「お前達のベルトを…もらう！！」

銃剣一体型マルチウェポン「カイザブレイガン」の銃口を定め、発砲。その銃撃はサクラと翼に被弾する。

「きゃぁあ…！！」

「サクラッ！！」

「ガァァアアッ！！」

サクラに近寄る翼だが、獣の如く荒々しくキバが2人に襲い掛かってくる。

「翼ァ！！」

「お前の相手は俺達じゃない…！！」

翼のピンチに駆けつけようとブレイドの目の前にオーロラが現れ、そこから数十体にも及ぶ魚を模した「ナナシ連中」が目の前に立ちふさがる。

「ナ～ナ～シィ～ッ！！」

「この…邪魔をするな！！」

一方、剣崎と離れ離れになった翼とサクラはスタジアムの内部にて…。

「シャァァァァァ！！」

「今度はお前か……目を覚ましやがれ！！変身…！！」

【ＫＡＭＥＮ－ＲＩＤＥ！ＤＨＩＦＩＲＳＴ！！】

サクラを後ろにやって庇いながら戦う翼は、隙をついてディファーストに変身、襲い掛かってきたキバの回し蹴りを片腕一本で受け止めてカウンターの右ストレートをお見舞いした。

【Ｒｅｄｙ】

「余所見をしてる場合かな？ハァァッ！！」

「ガァアッ！！」

そこにカイザがブレードを展開したブレイガンでディファーストを何回も斬りつけ、不意打ち攻撃を見事に決める。結構効いたのか斬られた所を抑えてディファーストはサクラを腕で庇う。

「大丈夫…！？」

「し、心配するな。サクラは俺が守る…」

今のディファースト…否、翼はサクラに心配させないようそう言う。

「さぁ…どこまでその子を守りながら戦えるかな?」

「フシューーッ……シャァァアア!!」

あざけ笑うカイザと、操られたキバ。2人の強敵を果たして翼はサクラを守り抜く事はできるのか?

そしてディファーストは、迷う事が許されない戦いへの第一歩をまた踏み出す…。

第十七話／闇に潜む仮面＃想い出は悲しみと共に（後書き）

【ツバ×カメ通信】

Wサイクロン・ジョーカー
『「さぁ、更新最終日と今回の更新の間の空白の日にちを数えろ！！」』

ゼロノス
「長いわぁぁぁあッ！！つーか演技でも縁起でもねぇこと言うな！！」

W・ジョーカー
「ハァ～っ、やっと羽琉亜こと“光影　羽琉亜”が登場したぜ。当初『ディロードの番外編』に初登場した時は感想で羽琉亜の名前が全然でないである意味作者は怖かったと語ってる」

イクサ
「しかし……あの時の翼は今とくらべてまだ精神的に未熟だったから羽琉亜を抱きつくなんて恥かしい事を…やめなさい！！男女2人が一つ屋根の下で…！！」

W・サイクロン
『心配要らないよ。光影写真館には翼、羽琉亜、士朗、セイバーの他に描写がないけど後一人栄次郎的存在がいるから』

デネブ

「まだ告白していない時だかな……よし侑斗！！」

ゼロノス
「どうせろくでもない事考えてるかもしれないが一応聞いておくか、なんだ？」

デネブ
「ゼロライナーに乗って過去の翼と羽琉亜の2人にお赤飯と桃饅を届けよう！！」

ゼロノス
「デェェネェェエブゥゥゥゥゥウ！！蹴り飛ばすぞぉぉぉぉおおッ！！」

W・サイクロン
『デネブ、それは翼と羽琉亜の2人が（ドガァーンッ！！）して（バゴォーンッ！！）した後（ダガゴドゴォーンッ！！）で送らなきゃ意味ないよ』

W・ジョーカー
「フィリップゥーーー！？お前はデネブより自重しろぉーーー！！それと桃饅は結婚式の時だぁぁーーー！！」

イクサ
「たく……ん？」

橘
「ガツガツガツガツガツガツ…」↑赤飯をガツガツ

睦月
「バクバクバクバクバクバク…」↑桃饅をバクツキ

W&ゼロノス&イクサ
『「「「……」」」』

デネブ
「お、俺の作った翼と羽琉亜のご馳走が…」

【LUNA／METAL】

【METAL／MAXIMUM　DRIVE】

W・ルナメタル
『「メタルイリュージョン！！」』

――ドガァァァン！！――

橘&睦月
「「グアアアアア！！」」↑お星様となる

W・メタル
「ハァ…ハァ…一体何なんだ、あいつらは…！！」

イクサ
「何処から沸いてくるんだ!?」

ゼロノス
「つーかなんであいつら登場したんだ?」

W・サイクロン
『謎だ…』

デネブ
「うぅぅ…せっかく…せっかく作ったのに~~…」

???
「泣くんじゃねぇよ、鴉天狗がよ。ホラ、手ぬぐい貸してやるから拭くんじゃ」

デネブ
「…あ、ありがとうッ!!申し遅れた、俺の名はデネブだ。アンタは・・・」

???
「なぁに、ぬらりくらりと自由なモンじゃよ。
ではそろそろ幕引きじゃ。次の『ツバ×ツバ通信』もお楽しみに」

イクサ
「…って、セリフ奪われた!?」

第十八話／リターン・オブ・メモリー#漆黒の闇皇帝

前回、別の世界に飛ばされたディファースト達は操られたキバと共に現れたカイザに戦いが始まる。途中、ブレイド／剣崎一真と別れ離れになってしまい、サクラを庇いながらディファーストはキバとカイザの二つの強敵に苦戦をしいられていた…。

「ぐわぁああッ…！！」

「翼くん！！」

スタジアムの内部、キバの肉弾戦とカイザのフォンブラスターとカイザブレイガンの2丁拳銃による後方からの銃撃から庇いながらサクラを守るディファースト。
被弾した肩には摩擦による煙を上げ、片手で抑えてる所をサクラはふと目に入ってしまう。

「大丈夫なの…やっぱり私のせいで」

「大丈夫だ、このくらいは馴れっ子だ…」
「話の余裕なんてしてる暇あるのからな？」

「ギシャァアア！！」

カイザのブレイガンが二人に向かって振り下ろされる。ディファー

ストがサクラを突き放して避けるも、突如天井からの逆さ吊り状態で現れたキバがディファーストの首を掴み、両腕でジリジリと締め上げる。

「グッ…この…」

「そのまま、抑えてろ…生首で」

カイザがディファースト目掛けてカイザブレイガンの刃を振りかざそうとする…だがそこえサクラがディファーストとの間に飛び込んできて、カイザに掴みかかる。

「駄目ッ！！」

「グッ！？離せ！！」

「…！！この！！」

「キ！？ウガァァァア！？」

ディファーストはサモンドライバーを取り出してにキバに発砲し、怯んだキバの首元を掴み取ってカイザ目掛けて投げ飛ばした。ライダーの技術の御陰なのか、キバはカイザだけに直撃し、サクラは無傷で済む。

「ガガァッ!?」

「ぐぼっ!?な、何……」

「お前忘れてないか?俺はお前のような小僧と違って、俺は何度も相手したことあるんだ……それも強敵をなぁ…!!」

【ＡＴＴＡＣＫ－ＲＩＤＥ!ＳＬＡＳＨ!!】

「だからな、伊達に二人で苦戦するとでも思うなぁ!!」

「なっ…ぐあわぁぁぁぁ!!」

「ガガギャァ!?」

ディファーストは『ディファーストスラッシュ』の白い斬戟の飛ばしてカイザとキバに浴びせる。キバは窓ガラスをブチ破って外まで吹き飛ばされ、カイザは壁に叩き込まれてめり込んでしまう。壁から抜け出そうと足掻いてる内にディファーストとサクラはその間にその場から逃げ出す。

「今の内に…こっちだ」

「ハイッ!!」

彼女の身と安全を案じて、今はサクラの手を引きながらディファーストはスタジアムの出入り口へ向かった。

～～～～～～～

同じ頃、ブレイドは目の前に阻む大人数のナナシ連中を切り払っていた…。

「この…一体何人いるっ！！」

「ぎゃっ！？」

一々相手をしてられないと判断したブレイドはブレイラウザーのホルダー部分を展開すると、ラウズカードの【スラッシュリザード】【サンダーディアー】の二枚の引き抜いてスラッシュする。

【ＳＬＡＳＨ・ＴＨＵＮＤＥＲ】

【ＲＩＧＨＴＥＮＩＮＧ　ＳＬＡＳＨ】

「邪魔だ…貴様等ッ！！」

「ギャギャッ！？」

ブレイドはブレイラウザーを薙ぎ払い、雷の斬撃『ライトニングスラッシュ』をナナシ連中全員に浴びせる。ナナシ連中は爆せられて全員ごと巻き込まれて全滅した。

「…早く翼達を見つけないと…ッ！！」

ブレイドは“何か”の気配を察し後ろへ跳躍して下がると先程までいた場所に炎の弾丸と氷の刃がぶつかり、小規模の爆発を起こす。放たれた所を見ると先ほど戦っていたアンデットの姿のワームがブレイドの目の前に現れる。

「こいつらも来ていたのか…！！」

「シャアァァ…」

「グギャァァ」

「…！」

ブレイドは斬りかかろうとするが、ワームが人の擬態した姿を見て立ち止まる。

何故なら二体のワームは、ブレイド／剣崎一真の出身の世界で共に戦った仲間の【橘朔哉】と【上条睦月】の姿に変わったからだ。流石のいつもの冷静さ剣崎も失い取り乱す。

「そんなまさか、橘さん、睦月…裏切っ――――」

「オレノカラダハ、ボドボドダァァーー」

「サイキョウノライヴァーバ、オデェダァァーーー！！」

「……」

【ＴＡＣＫＬＥ】

「どうやら別人のようだな！！」

“少しでも敵に寝返ったと疑った自分が馬鹿だった”と自らを呆れるブレイドは、自分の出身世界にいる橘と睦月への謝罪の意味も込めて【タックルボア】の強烈な体当たりを偽者二人に容赦なくブチ当てた。

まあそれもそうだろう…何せ剣崎の知る本当の二人は馬鹿な喋り方はしない、普通の人と同じく話しているのだ。

「ケンジャキ、オデェダダチババ」

「ナンデェ、ボォグダヂビ…」

「黙れ偽者、それ以上喋るな橘さんと睦月の姿をするな本当の二人を汚すな…！！」

今更だが苦し紛れに演じる偽者に、ブレイドは仮面の下で青筋を浮かべながらブレイラウザーの刀身を向けてジリジリと迫っていく。

二人は懐から取り出した…ブレイドと同じシステムを持つ【ギャレンバックル】と【レンゲルバックル】を装着し、ブレイドはそれを

見て（さっきとは違い）驚いた。

「何だと…それは…！？」

「「へ、……シ、ンッ！！」」

赤と紫のオリハルコンエレメントが発射され、二人が潜り抜け、二体の仮面ライダーに変身した。

紅蓮のボディスーツと銀色の鎧、腰のホルスターに“醒銃ギャレンラウザー”が収まった、緑の瞳の炎を司る狙撃手『仮面ライダーギャレン』。

緑のスーツボディに黄金色の装甲、手には“醒杖レンゲルラウザー”を従える、紫の瞳の氷を司る魔術師『仮面ライダーレンゲル』。

実は二体が変身したこのライダーは嘗て擬態元である二人が、橘はギャレン、睦月はレンゲルとして戦ったライダーであり、ブレイド…剣崎は驚愕した。

「…ッチ、まさかコイツら本当にワームとアンデットが融合したタイプなのか！？」

「オレノジャマヲスルナッ！！」

「オレガサイキョウノライダーダッ！！」

「お前らぁ…潰す！！」

奇々怪々な謎の奇声を上げながら襲い掛かるギャレンとレンゲルに、ブレイドは怒りを刀身に手を添えて込めながら迎え撃つ…。

～～～～～～～～～

「どうしたんだ、サクラ…危ないだろあんな真似をして」

「……ごめんなさい」

スタジアムの外、カイザとキバに逃げ切った二人は物陰に隠れていた。ディファーストはサクラが自分を助けるためとはいえ危険な事をした彼女を叱っていた。

「だけど…私のせいで…」

「ん…何がだ――」

「さっき夢で見たの、――光影羽琉亜さんの事」

「!?」

ディファーストは驚いた。何せ語っていないはずなのに、サクラが【自分の大切な人】の名を知っていたからだ。

「翼くんの中にあった悲しさ、何となくだけど解った気がする……大切な人だったんだね、あの人の事…」

「知ってしまったのかよ、羽琉亜の事……」

ディファースト…否、翼はサクラの瞳からそむける様に俯いて顔を逸らした。自分の気持ちを悟られない様に…。

脳裏には「破壊者の運命を受け継いだディケイド」と「白いキバ」がお互い剣を持って鍔迫り合い、大空で【純白の翼を持つ神獣】に拘束されディケイド、という激しい死闘を繰り広げる光景が過ぎった。

「…アイツはその事は気にしてないが…やっぱ俺は破壊者にもなれない『偽りの破壊者』だからかな」

「そんな事はない、だって護ってくれたじゃない!!」

「だけど…おれは巻き込んでしまったんだぞ。サクラを、サクラの家族を、玖楼国の人たちを…

それだけじゃない、士朗やセイバーまで被害に遭って……俺は」

…と、そこまで言おうとしたディファーストだが、サクラが仮面にそっと頬に手を添えられて思わず黙り込んでしまう。

「翼君……お願い、自分の心を嘘をついてまで戦わないで、あの人の…羽琉亜さんのために」

「……」

「――――バッシャーマグナム」

「危ないッ！！」

「え？おわっ！！」

無機質な声が響き渡った直後、物陰から水の弾丸が襲い掛かる。サクラが押し倒したためにディファーストは大事に至らなかった。そこへ立ち上がった二人に近づいてくる…エメラルドグリーンに染まった腕と、その手に持つ海に住む魔族が変化した武器“魔海銃バッシャーマグナム”を二人に向けている『キバ・バッシャーフォーム』。

「オイオイ、付いて来たのかアイツ？」

「あの人も操られてるのね…翼くんの仲間だった…」

「まあ、そんな所だ…今から元に戻してやるから。ちょっと痛いがな…」

【ＫＡＭＥＮ－ＲＩＤＥ！ＫＵＧＡ！！】

「変身」

ベルトに装填したディファーストは電子音が鳴った後その姿を装甲に変えていく。
やがて黒いボディに烈火の如き赤い生体装甲、金色の角、赤い瞳を持つ超古代の戦士であり士朗が変身したクウガと同等の『Dクウガ』に変身した。

「あれって…士朗君と同じ…！！」

「あぁ、古代戦士の仮面ライダークウガだ。サクラ、安全な所にいろ」

Dクウガはキバの放ってくる水弾を避けながら迫っていき、バランスのとれた格闘術で攻撃。キバ・バッシャーフォームは遠距離からの相手を狙い打つ射撃戦術のため、接近戦で攻めてくるクウガに圧されていく。

「オラッ！！タァッ！！はぁぁあ！！」

「グガァ！？」

Dクウガの放った回し蹴りについにキバは飛ばされた。だが息を荒々しく吐きながら立ち上がるとキバは腰から紫のフエッスルを取り

出し、自分同様に操られているキバットに吹かせた。

「ドッガハンマー」

まるで機械の様に感情の篭ってないキバットの声が告げた後、バッシャーマグナムが消え、代わりに時空の裂け目から紫の彫刻が出現。彫刻は拳を模した大槌…“ドッガハンマー”へ変形したキバがソレ掴むと、キバの両腕と胴体が紫の分厚い装甲となり紫雷の剛力形態『ドッガフォーム』と化す。

「ウガァァァ！！」

「はぁ、ドッガフォームか…」

【ＦＯＲＭ－ＲＩＤＥ！ＫＵＧＡ－ＴＩＴＡＮ！！】

揺るがない頑丈さと鎧の様な装甲になった大地の力を司る紫のクウガ『タイタンフォーム』にフォームチェンジ、キバＤＦの繰り出した一撃を頑丈な装甲で受け止めドッガハンマーを奪い取った。ドッガハンマーを分子レベルで物質変化させて『タイタンソード』に変え、先程のお返しとばかりに力強く斬りつけていく。

「…今度はこっちからだ！！」

「ググ…グガッ！！」

「ガルルセイバー」

キバは負けじと駿足形態『ガルルフォーム』にフォームチェンジ、すぐさま剣戟を繰り広げる。獣のように野性的な剣裁きに対し、大地のように揺るがない力強い剣術で応戦。だが、頑丈な上に的確なキレを有するDクウガに再びキバはダメージを覆っていく。

「グガァァ！！」

「どうした、お前の目指すキングってのは誰かを信じられる凄いやつだろ？その心さえも忘れたのか…？ああ！！」

【ＦＯＲＭ－ＲＩＤＥ！ＫＵＧＡ－ＤＲＡＧＯＮ！！】

圧倒するDクウガは俊敏形態『ドラゴンフォーム』にフォームチェンジ、タイタンソードも長い棍棒“ドラゴンロッド”を変え、今度は激流のようにガルルセイバーを受け流しながら薙ぎ払い、突き出し、打ちつけの素早い棒術を繰り出す。

「オリャァァアア！！」

「ぐばっ！？」

殴り飛ばされて、先程のダメージが蓄積もあって通常のキバはキバフォームに戻り、そのまま力尽きて突っ伏した。Dクウガは近づいてキバを見る。

「……くっ、やっぱりこいつも士朗達のように…」

「――――オイオイ、困るんだよ…そんくらいで油断しちゃあ」

「ッ！？」

【ＦＯＲＭ－ＲＩＤＥ！ＫＵＧＡ－ＰＥＧＡＳＵＳ！！】

先程この世界に移動する際に聞こえた謎の声が響き渡り、ディファートは振り向き様にカードを装填し、超感覚を射抜く『ペガサスフォーム』に姿を変えて、背後に振り向いた瞬間“ペガサスボーガン”引き金を引いた。

「…誰だ、お前は！！」

――バシュゥンッ！！――

放たれた空気の弾丸は数十メートル先の『何もない空間』に直撃し、そこから声の主が姿を現した…。

「流石だな…」

「お前か、さっきの声は…」

元の姿に戻ったディファーストの目の前にはボロボロのマントを纏

った一人の人物。マントの纏っているためか男性にも女性にも体型が判断できないが、マントから除かせる【漆黒の装甲】を纏った片腕と空気弾を防いだと思われる【一振りの剣】が握られていた。

「…誰だお前は…ココに呼んだのも」

「そうだ、お前をここに呼んだのは俺(オレ)だ…以前送ったお前のクウガも、今回仕向けたキバをこんなのにしたのも」

ディファーストの質問をそう返すマントの人物は顔を向け、倒れているもがく声を上げるキバに視線を向ける。

「グガガッ…ア、アアァ……」

「やはり、闇の魔族を統べる王の鎧であるキバは支配が難しいか…」

剣を四角形の本型の姿になり、開いて一つのカード…『翼を広げ大空を支配する伝説の魔獣となったキバ』が描かれた一つのライダーカードを取り出す。敵がライダーカードを持っていた事に驚くディファーストだったが、それをきにせずマントの人物はキバに向かって投げる…。

「ライダーカード…!?」

「沈め、光も闇も全てをな」

【ＦＯＲＭ－ＲＩＤＥ！ＫＩＶＡ－ＥＭＰＥＲＯＲ　ＢＡＴ！！】

「グッ…ガァァァッ！！！」

カードが突き刺さった途端、キバがゾンビの如く起き上がると苦しみ出し、黄金のペルソナが黒く変化し…さらに『ある変化』をもたらした。

黒い翼竜型の体型に変貌し、腕は黄金の血に染まったように赤い翼となり、鋭い鉤爪を持った脚、

別名「エンペラーバット」の異名を持つ『キバ・飛翔態』。

「オイオイ…ヤバイのに」

「レジェンドルガの王（ロード）がキバに同じ事をした程度に過ぎん…それよりいいのか？」

『キギャァァーーー！！』

キバ…いや、エンペラーバットは翼を大きく広げ（ブラッティウィング）て襲い掛かる。その先には、――サクラの姿があった。

「…しまったっ！！」

「さぁ、いけよ“翔道翼”。お前の大切な人が消えてしまうぞ…？」

仮面の下で血相を変え、次元エネルギーの翼を広げて一刻も早くサクラの元へ向かおうとするディファーストをマントの人物は皮肉混じりに呟きながら立ち去る。

一方、ディファーストは恐怖のあまり脚が竦むサクラを襲うエンペラーバットよりも、サクラを助けようと全力速で飛んで行く…。

「…ッ！！」

「サクラァッ！！」

『ギシャァァアア！！』

魔皇力と瞳が黒く染まったエンペラーバットが今にも鋭い牙・ビッグジョーが向けられ、サクラは思わず目を瞑る…。

その直後、『グキリッ』と腕の骨を折れる音が響き渡った。

サクラが恐る恐る目を開けると飛び込んできた光景は、――エンペラーバットに噛み砕かれて腕が圧し折られたディファーストの姿だった。

「翼君！！」

「グッ…！？」

『ギャァアアアスゥッ！！』

エンペラーバットは咥えた状態でディファーストを地面や建物に乱暴に叩きつけ、低空飛行で地面に引き摺り、まるで甚振るように容赦ない攻撃を行っていく。

「ガッ…！？」

エンペラーバットは遥か上空へ舞い上がり、そこからスタジアム目掛けて急降下、そのままディファーストを建物目掛けて叩きつけられてしまう。
ディファーストの元へ向かおうとするサクラだが、……壁から抜け出した復帰したカイザが押さえ込まれる。

「翼くん…キャァッ！！」

「諦めろ、どうせ『弱い』アイツは…死ぬ」

『キシャァアア……シャァアアッ！！』

次の瞬間、エンペラーバットの口から放たれた真紅の破壊光線『ブラッティストライク』が、スタジアムごとディファーストを包み込んだ…。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

――過去・ネガの世界――

「ねえ翼、ジャスミンの花言葉って知ってる？」

「あぁ？何だよいきなり……」

世にも珍しい『ジャスミンの神木』の直径二メートルにも及ぶ枝に翼と羽琉亜の二人は座っていた。

この世界の【戦い】が終わり、次の世界へ旅立とうとする準備の間をぬって、この場所に訪れているのだ。

「確か図鑑によれば『愛らしさ』、『素直』、『優雅』、『無邪気』…あとは」

「『ずっと私はアナタに付いて行くわ』…」

羽琉亜の言葉に一瞬驚く翼、それを見て面白がってる羽琉亜は続けて語りかえる。

「例え離れていても私は側にいる、つまり絆が繋がってるって事」

「まあ、悪くは…ないな。お前らしいし」

翼は歯切れ悪そうに答える。それを聞いて羽琉亜は翼の側に近づいてこういった。

「だからジャスミンは私の好きな花で、誕生花でもあるから」

「…羽琉亜」

――だから、大丈夫だよ――

「え？」

いつの間にか翼の周囲は暗闇の中に無数の羽が降り落ちる場所に変わる。

戸惑う翼だが、そんなのにはお構いなしと言わんばかりに強風に降りつけられる。

やがて降り終わると先ほどまでいなかった5人――羽琉亜と四人が現れた…。

――お前はそのくらいでくたばる男じゃないじゃろ？なんせこのワシと五分五分（たいとう）の盃を交わしたじゃねえか――

――オイディファースト、いつまでも寝てんじゃねぇ！！俺のライバルだったらそんな奴らに負けんな！！――

――例え離れていても俺の深紅の魂はお前の側にある。お前の危機の時は駆けつける…だから諦めるな――

――そんなふざけた幻想、ぶっ壊してやれ！！お前だったらできるだろ？――

「オーズの世界」の昔の江戸で欲望を巣食う強欲と妖怪を戦う無限を超えた存在・オーズ――ぬらりひょん。

「ウルトラマンの世界」で魂と魂をぶつけあい、本気で喧嘩できる悪友となった光の戦士――ウルトラマンゼロ。

再び訪れた「スーパー戦隊の世界」で共に戦った真紅の魂を受け継ぎし者――アカレッド。

ディケイドとして仲間と共に旅に出る前、訪れた世界の『幻想殺し』の能力者――上条当麻。

――だから、私はいつもアナタの側にいるわ、翼――

そして最後に羽琉亜の声が響き渡り、5人は消えていった…。

「たっく馬鹿野朗…うるせぇんだよ。そんな事、最初（はな）っから分かってるんだよ…」

翼は瞳には焔の輝きが灯され、不適な笑いを浮かばせる。その手に持つ『漆黒のキバ』が描かれた一つのカードを見つめ、既に装着し

たドライバーに挿した。

「『夢』から覚めるか…変身」

【ＫＡＭＥＮ－ＲＩＤＥ！ＤＡＲＫ　ＫＩＶＡ！！】

～～～～～～

「翼君！！翼くん！！」

「うるさいなぁ…いい加減黙らないと、お前を…」

エンペラーバットの一撃により、スタジアム『だった』瓦礫の山をサクラ。カイザは諦めないサクラに苛つき、今まさに手を行こうとする…。

――その刹那、瓦礫が激しい爆音と共に一瞬で吹き飛ばされ、土煙の中から漆黒に染まった『影』が襲い掛かってきた。

――ドガァァァァァアンッ！！――

『「ッ！？」』

「たっく…お前のせいで嫌な思い出を思い出してしまったじゃねぇか！！」

「なっ……うわぁぁあああ！！」

カイザは状況が直ぐに理解できぬまま『影』の放った跳び蹴りを顔面まともに受けて、思いっきり吹っ飛んでしまう。
『影』はサクラを抱きかかえると襲い掛かってくるエンペラーバットを飛び超えて、痛みで悶絶するカイザの目の前に降り立った。

「グバァ…ごばぁ……なっ、なにぃ!?」

「…だが、悪くはないな。こういう夢も…なあ?サクラ?」

そこからいたのは、マントを掲げた真紅の鎧に胸の漆黒の装甲に埋め込まれた大きな翠色の魔皇石、エメラルドに輝くペルソナの仮面、そして他者を畏怖に陥れるのに十分な殺気を放った、影よりも深き『暗黒』を持つ存在……。

「つ、翼くん…?」

「サクラ、今分かったよ。おれは戦う……自らの心のままに感じてやる」

嘗てネガの世界で出会い、自分が大切なモノを失いそうになった時に翼を立ち直らせた人物・紅音也が変身する総ての異形と闇を統べる漆黒の皇帝――『ダークキバ』となったディファーストだった。

「何故だ!?お前は腕を折られ重症を負った筈だ…なのに何故!?」

「ああ…そういやお前らのような“奴等”がサクラに触れようとしたからつい忘れてたな。まあそのままほっとくとサクラが心配するから、今から治すか」

思わぬ状況に戸惑うカイザを他所に、まるで先程負傷した事を対したことはない様子のDダークキバはぶらんとぶら下がる腕と共に余裕たっぷりに見せ付けると、“白銀の大妖の模したオーラが描かれたカード”を取り出して、ベルトに装填した。

【ＡＴＴＡＣＫ－ＲＩＤＥ!ＶＡＭＰＩＲＥ!!】

白銀に輝くオーラがDダークキバの身体を包み込み、項垂れた腕が何事もなかったように『治った』。

【アタックライド　ヴァンパイア】は不死身の由縁とも言える超治癒能力と大妖怪の戦闘力を使用者に与え、Dダークキバはそれを使って治したのだ。

『ギ!?ギギッ!!』

「なッ、何を脅えている!?」

…尚、エンペラーバットはオーラに対して畏怖の存在を脅えた声で先程の凶暴振りから打って変って怖気づいたという。

「さてと、【ヴァンパイア】の治癒能力で腕も治ったことだし……、
――そろそろ終わらせる」

「なっ！？」

Dダークキバはサクラを下ろすと、カイザとエンペラーバットの上空に【キバの紋章】の出現させそのまま振りかざした。
カイザは何とか避けられたモノの、エンペラーバットは捕えられてしまい悲惨な声を上げる。

『ギャガァァアアア！！ギャァァアアア！！』

「少し、眠ってな」

――ザシュゥンッ！！――

さらにそこへ、Dダークキバの繰り出した本来素手で似つかわしくない音で放たれた渾身の手刀によってエンペラーバットは悲鳴を上げる事もなく意識を（強制的に）手放し、地面に倒れこんでしまう。

「くそっ…使えないヤツだ――バゴッ！！――ぐっ！？」

「黙れ、お前にコイツを罵る権利なんてない。」

エンペラーバットに毒づくカイザをDダークキバはただでさえ破壊力が高い上に【ヴァンパイア】によって妖力を纏った拳で殴り飛ばした。その後、人指し指をカイザに向けて、最強の王と同様の『ある言葉』を言う。

「さぁ、絶滅タイムだ…！！」

「ちっ、なめやがってぇぇぇえ！！」

挑発に乗ってしまい激越化したカイザは間合いを詰めてカイザブレイガンを振り翳す。だが刀身は姿勢を低くして回避したDダークキバに当たる事はなく虚空を切り裂いた。

「どっちを見てるんだ…？」

【ＡＴＴＡＣＫ－ＲＩＤＥ！ＢＡＳＳＨＡＡ　ＭＡＧＮＡＭ！！】

「なっ…！！」

エメラルドグリーンの魔銃“バッシャーマグナム”を手中に召喚するとDダークキバは銃口をカイザの身体に付き立てた。カイザは驚くも、Dダークキバはカイザを構う事無く無邪気な声で引き金を手にかけ…。

「バァンッ♪」

――バババババババッ！！――

「ガァァアア！！」

そのまま零距離で水弾の銃撃を浴びせた。身体から火花を飛び散らせるカイザはくらった反動によって吹っ飛ばされ地面に叩き付けられしまうが、Ｄキバは勢いを止める事無く次のカードをドライバーに装填。

【ＡＴＴＡＣＫ－ＲＩＤＥ！ＧＡＲＵＲＵ　ＳＡＢＥＲ！！】

バッシャーマグナムが手元から消えると代わりに蒼き魔剣”ガルルセイバー”が出現し、刃を手で磨ぐ仕草をする。

「ワイルドに行こうぜぇ？ハァア！！」

「っち…このぉ！！」

毒づいたカイザは体勢を立て直してブレイガンでガルルセイバーを受け止め、そのままＤダークキバと鍔迫り合いに入り込む。

「やっぱりお前……邪魔なんだよっ！！俺は総てのオルフェノクを倒し、そして真理を」

「あっそ、それがお前の望んでいる事か？だったら俺は…」

まるでカイザ――草加の野望を見透かしてるように、新たなるカードを装填する。

「…それを綺麗サッパリ砕いてやらぁ！！」

【ＡＴＴＡＣＫ－ＲＩＤＥ！ＤＧＧＡ　ＨＡＭＭＥＲ！！】

「ぐあぁぁあ！！」

ガルルセイバーが消えると同時に“ドッガハンマー”が召喚され、カイザに目掛け強烈極まる一撃を叩き込んだ。胸の装甲はへこみ、このままだと敗北しかねないためカイザは

「サクラ、翼！！」

「「ブェェェ！？」」

「はっ…？」

突如声が聞こえたその後、――ギャレンとレンゲルが振り落とされカイザはその下敷きとなった。

「「「グガァァァ！？」」」

「フン、俺の知っている二人の方がもっと強い…！！」

「剣崎、お前はあんなのにくたばる筈はないと思ってたがまさか空にいたとは…」

Dダークキバの隣に背中に装備された金色の翼《オリハルコンウィング》を展開した『ジャックフォーム』となったブレイドが舞い降りてくる。

どうやら実力だけは本物と同様の二人のライダーに対抗策としてジャックフォームに変身し、その御陰でエンペラーバットの一撃を上空に飛び上がって何とか逃れ、そのまま駆けつけたらしい。

「大丈夫か翼？先程の攻撃は…怪我は？」

「大丈夫大丈夫だって、それよりあの三人ぶっとばす…！！」

「ギャレンとレンゲルは今の所“別にどういい”ってか…後でワケは話す」

本来キバの必殺技を発動するためＦＡＲカードをカードを取り出し、ブレイドは【マッハジャガー】【キックローカスト】【サンダーディアー】三つのラウズカードを再びラウズした。

【ＦＩＮＡＬ－ＡＴＴＡＣＫ－ＲＩＤＥ！ＫＩ・ＫＩ・ＫＩ・ＫＩＶＡ！！】

【ＭＡＣＨ．ＫＩＣＫ．ＴＨＵＮＤＥＲ．】

【ＲＩＧＨＴＥＮＩＮＧ　ＳＯＮＩＣ】

周囲が【暗黒の夜空に血のように紅い月が浮かぶ世界】に変わりＤダークキバの両足に緑と黒の色の光の刃『ルシファーナイフ』が出現、ブレイドの方も巨大化したラウズカードの絵柄がアクションを起こながらブレイドのエネルギーと変化し、再びオリハルコンウィングが展開する。

Ｄダークキバは膝を曲げて両腕を組んで扇状に広げ、ブレイドはブレイラウザーを地面に突き刺した後飛び上がった。

「「ハァァァ…ハッ！！」」

カイザ・ギャレン・レンゲルを回し蹴りの要領で断罪の刃【キングスバーストエンド】を繰り出し、ブレイドは電撃を超高速のドロップキック【Ｊ・ライトニングソニック】を上空から三人まとめてお見舞いした。

「グワァァァッ！！」

「キングスバーストエンド…！！」

叩き込まれたカイザ・ギャレン・レンゲルは容赦なく地面に叩きつけられ、落ちてきた場所には“キバの紋章”が刻まれた。
その拍子にドライバーとベルトが崩れ落ち、好青年――草加雅人。

「くっ…今日はこんな所か…」

次元の壁に飲み込まれて、この世界から『消えた』。要するに撤退したのだ。

しかし、まだ終わっていない……元の通常の姿に戻ったブレイドとディファーストが振り向くと、唯一取り残されたエンペラーバットが意識を取り戻した所だった。

『ググガァ……！！』

「…ゲッ、全然やる気？」

「翼、お前から聞いた話だと確か士朗とセイバーは『ＦＦＲ』によって戻ったって言ったな…」

「あ？ああ…キバの【ファイナルザンバット斬】にブレイドの【ロイヤルストレートスラッシュ】を受けても立ち上がったからな…」

「だったら、アレ元を戻すには『ＦＦＲ』の力が必要だ。もしかしたら…」

「なるほどねぇ…んじゃあ、いっちょやりますか」

以前クウガとセイバーが襲い掛かった時“シンオウクライマックス”による必殺技『ディファーストアクション』によって元になった事を思い出し、ディファーストはブレイドが伝えたいことを感じ取

ると、一枚のカードを装填する。

【ＦＩＮＡＬ－ＦＯＲＭ－ＲＩＤＥ！Ｂ・Ｂ・Ｂ・ＢＬＥＤＥ！！】

「我慢しろ」

「前にもやったから知ってるよ、うおっ」

そう気さくなやり取りを繰り広げながらディファーストはブレイドの背中を触るとがラウズカードが扇状に展開、ブレイドの両脚とブレイラウザーは刀身に代わり、、巨大剣型のファイナルフォームライド『ブレイドブレード』に超絶変形した。

持ち手を握り締めると、体勢を立て直したエンペラーバットに見る。

【ＦＩＮＡＬ－ＡＴＴＡＣＫ－ＲＩＤＥ！Ｂ・Ｂ・Ｂ・ＢＬＡＤＥ！！】

「いくぜ…ハァァ！！」

ブレイドブレードのＦＡＲを発動、刀身に雷が纏わりつき、同時にエンペラーバットとディファーストの間に五枚のラウズカードに出現する。ディファーストは飛び上がり、一回転により勢いを増したブレイドブレードを振り下ろした。

「ディファーストエッジ！！」

『ギ…ギギャァァーーー！！』

『ディファーストエッジ』の斬撃が炸裂し、エンペラーバットは直撃を受けて大爆発した。
爆炎が晴れると、そこには男性…キバの世界で出会った『青野月音』と相棒の小さなコウモリ型モンスター『キバットバット三世』目を回しながら気絶していた。
変身を解いた後、剣崎と翼は駆け寄って安否を確かめる。

「やっぱり青野月音か…あの時の…」

「うぅ…うぅん」

「キバって…いけない…ガクッ」

「何処も怪我はないか…、よかった」

大事に至らなかった月音とキバットを見て安心し、力が抜けて身体がふらついて倒れそうになるが、サクラに支えられる。

「やっぱり、いつもの翼くんに戻った」

「サクラ…ありがとう」

サクラは内心『自分と好きな人』と同じ焔の輝きを秘めた瞳に戻った翼に嬉しかった。

そんなサクラを見て翼は微笑むと、剣崎に向けてこう告げた。

「剣崎…」

「何だ？翼…何なら援軍として五代や乾に今すぐ来てもらっても…」

「――――俺（オレ）は…いや、おれ達は負けない、サクラとサクラの大切な人々を守る」

「分かった、俺から伝えておく……だが、様子見ぐらいはさせろよ？」

翼の揺るがない決意を聞いた剣崎は、何処か嬉しそうに背中から語っていた。

～～～～～～～

先ほどのマントの人物が漆黒の場所。
それぞれ異なった容姿をした四人が、その周囲には剣崎（ブレイド）によって倒されたはずの偽者の姿もあった。

「ハッ、何だよ倒されたじゃねえか。せっかく《コイツら》の初陣なんだしよぉ」

「まあ仕方がないでしょうな。始まりのライダーの一人・剣崎一真

がディファーストの所にいたんですから」

「……」

「フン」

鋭い鉤爪に身丈ほどの大きさの棍棒を持ち、マグマの思わせるような模様をした黒と赤の身体に鮫のようなクラッシャー、釣り上がった眼の容姿の筋骨隆々の超人。

手に槍を持ち、人に似た口に青い目、青の蜘蛛の巣状の模様が走らせた黒い身体の上に角蝉に似た外装の青い怪人。

黄金のを『Ω』の頭部、龍の脚の装飾の盾が装備された両肩、軽装かつ下半身、胸には黒地に金縁で描かれたエンブレムが刻まれた装甲、三つメダルが装填されたドライバーの漆黒の戦士。

左半身が列火を表した赤、右半身が吹き溢れる暴風を司る緑に中央にはクリスタルが青い瞳にXを模した仮面を持つ騎士。

「くだらん、あんなやつだどオレサマの力で一捻りにしてやれるってのに」

「まだお前の力は戻ってないぞ、『ベリアル』。ただでさえ本物（オリジナル）と比べて巨大化能力がないのに」

「『ブレドラン』、それはお互い様だろうが。貴様だってまだ本来の力が眠ったままなんだからよ。ま、気長に行こうじゃねえか」

「……」

青い怪人…ブレドランと黒い超人…ベリアルはまるで何処か似た所があるのか、そんな様子を黒い戦士を何も言わずにただ無言で眺めていた。

「…で、どうするんですか我が主（マイ・ロード）。クウガに続いて、キバまでも戻ってしまいました……次の駒の一手は？」

「もう決めてある…次は『クウガの世界』だ」

～～～～～～～～～～

同時刻クウガの世界、そこに二つの影が迫ってた。

もう一人は鏡面世界（ミラーワールド）から現実世界を観察する金色の鎧を纏った鏡の存在。

世界と世界を繋ぐ橋『次元の壁』から一人の出て来た、姿はボロボロの服装の少年。

「何処だよここは……不幸だァァァァ！！」

――『上条当麻』、それが彼の名だ。

第十八話／リターン・オブ・メモリー#漆黒の闇皇帝（後書き）

【ツバ×カメ通信】

イクサ「久しぶりの通信だ」
翼「タ・ト・バ、タトバ、タ・ト・バ」
ゼロノス「何が『久しぶりの通信だ』だ……前回の更新からもう数ヶ月すぎてるじゃねえか！！」
翼「ガータ、ガタガタキリッバ、ガタリキバ」
デネブ「まあまあ落ち着いてくれ侑斗、今回はゲストが来ているんだし」
翼「ラタ、ラタ～、ラトラ～タ～」
デネブ「それではゲストの方いらっしゃーい」
翼「サゴーゾ、サゴーゾ」

廻・流姫・信彦・和雄・劉子「「「「ちょっと待て、何故コンボボイス歌っているんだ！？」」」」」
翼「…シャッシャッシャウター、シャッシャッシャウター」
リインフォース「…初対面のはずなのに、先が思いやられるこの感じは何だ？」
ゼロ「でもって、何だこの格好は？」↑紅麗コス

ゼロノス「今回のゲストはラージ先生作、『仮面ライダーディロード・世界の救済者』から砕谷　廻、彩条　流姫、秋月　信彦、鉄鉄雄、の一行と…」
イクサ「同作者作『魔人戦士　仮面ライダー　イーヴィル　』から

ゼロ&リインフォースの無限夫妻だ！！」
デネブ「ちなみに、お返しコラボとして『仮面ライダーディファースト　再会の救済者』もよろしく！！」

廻「四年ぶりに再会したってのに相も変わらず…」
翼「ほう、そんなになるのか。同じ時間の流れで過ごしたワケじゃないからおれは実感はないが…ま、特別編で再会するのは当分先になるからせめての侘びとしてこちらで再会する事になった」
流姫「四年前からその気まぐれな性格変わってないのね…」
ゼロ「ほう、コイツがネウロの言っていた【化け物】か」
リインフォース（Σゼロがはじめて他人を化け物扱いした！？）

信彦「この人が翔道翼か…昔知り合いの」
和雄「前にあの『ディロード　デスエンドフォーム』と渡り合ったってあの？」
ゼロノス「つか、昔からどんだけ強かったんだ翼のヤツ？」
イクサ「そもそもあいつ何歳だ？　近隣者の俺達でさえ知らないが…」
デネブ「どうだ？　俺の椎茸御飯の味は美味いか？」
劉子「ん、美味しい」
信彦&和雄「「何を食べさせてるんだ！？」」

翼「でもって、駆け引きはここまでにして…リインフォース！！」
リインフォース「ッ！？　な、なんだ…」

――スタスタスタ↑リインフォースに歩み寄る足音

翼「――結婚おめでとうございます！！」↑ペコリ

――ズゴォォォーーーンッ!!↑ゼロ以外ズッコケ音

リインフォース「は、ハア!?」
翼「いやだって、結婚したんだからお祝いするのは当然だが…それに幼馴染からの付き合いで四年間の想いを募らせてその反動でバカップルになった廻と流姫も祝ってやらないと」
流姫「え、そんな…／／／」
デネブ「何!?　なんで黙っていてたんだ!?　言ってくれればお赤飯ぐらい用意できるのに!!」
リインフォース「だからなんでそうなる!?　」
イクサ「リインフォースの声、何処かで聞いたことのあるような…あぁ、ガーディアンライダーズか」
リインフォース「お前に至っては誰の話をしてる!?」

ゼロ「――――黙ってろ、ボタンむしりとオカン」↑魔人パンチ
イクサ「げぼっ」
デネブ「ゆーうーとぉぉぉぉぉ!!」
廻「…なあ、こんなので大丈夫なのか?」
翼「いいんじゃない?」↑ネウロと一緒にいたので慣れた

～～～～～～～～～～

デネブ「さあ、ここからはメインイベント…翼と廻、ディファーストとディロードの四年ぶりのタイトルマッチだ!!」

廻「言っとくが今回は俺が勝たせてもらう」

翼「悪いがおれは料理と酒飲みじゃ負けるつもりはない…いくぞ！！」

【【ＫＡＭＥＮ－ＲＩＤＥ！　】】
【ＤＥＬＯＲＤ！】
【ＤＨＩＦＩＲＳＴ！】

ゼロノス「さあ始まったディファーストＶＳディロード、四年前の決着をつけるべく最初からクライマックスのマジバトルを繰り広げる！！」
信彦「あ、廻の方はライナー電王に変身した」
劉子「対してディファーストの方は対抗すべく電王に変身…って黒い電王！？」
和雄「いきなり姿を消した…と思えば廻さんの後ろから現れて不意打ち！？　うおっ、廻さんすぐに受け止めた！！」

イクサ「すまんが時間が押してるため、ここで無限ゼロのドＳショーを緊急開催させていただく」
リインフォース「Σ聞いてないぞ？！」
ゼロ「ほう、それは楽しい企画だな♪」↑ドＳスマイル
イクサ「今回生贄にされるのは…コイツだ！！」

ストレンジ「ぐがぁ～…ぐがっ、あれ？　ココ何処？」
信彦（寝ていたんかい…！？）

イーヴィル・マジカルワイズマンエクセリオン「さぁ、ありがたく思え。我が魔帝七ツ兵器の餌食となるのだから！！」
ストレンジ「って、誰！？　誰このピッカピカ！？」
リインフォース『スマン、止められなかった…いますぐに逃げろ！

！』

イーヴィルＭＷＸ「魔帝七ツ兵器…二次元の刃《イビルメタル》！」

ストレンジ「ちょ、ちょい待てぎゃあああああ！！」

和雄「Σ真っ二つに切れたぁぁぁぁ！？」

イーヴィルＭＷＸ「続いて、朽ちる世界樹《イビルツリー》！」

ストレンジ「うごぉぉぉぉ！？」

劉子「うわっ、地面から割って出てきたでっかい木に激突…」

イーヴィルＭＷＸ「深海の蒸発《イビルアクア》！！」

ストレンジ「あんぎゃあああ！！」

ゼロノス「…デカイ魚の砲撃くらいやがった」

イーヴィルＭＷＸ「さらに、飛んで虫に入る火《イビルファイヤー》」

ストレンジ「アブゾブゥゥゥゥ！？」

イクサ「…虫の怪物に超音速以上の速度で跳ね飛ばされた」↑ＣＵ対抗できる程のセンサーで感知

イーヴィルＭＷＸ「トドメの…国を喰う土地《イビルマッド》！！！」

ストレンジ「なんでこうなるのぉぉぉぉ！！」

デネブ「こりゃまたウルトラマン並のでかいゴーレムの鉄拳を食らった」

ゼロ「ふぅ～、気分が清々しい♪」

リインフォース「なんだか名前の知らない怪人…止められなくてすまなかった（泣）」

流姫「落ち着いてリインフォース。ていうか、もう最初から最強の切り札を食らった時点で終わってるはずなのにそのあとも十分直撃

もらってどんだけタフなのよ…」

ストレンジ「――てめえら何か俺にうらみでもあんのかぁあああ！！」

全「「Σ生きてる！？」」

イクサ「あれだけ食らって怒る元気さえもあったとは…ハッ！！コイツ、アンデットか！？」

ゼロノス「絶対違う！！　むしろ妖怪以上の生命力だぞ！？」

ストレンジ「どっちも違う！！　俺はちゃんとしたイマジンだ――」

【【ＦＩＮＡＬ－ＡＴＴＡＣＫ－ＲＩＤＥ！　ＤＥ・ＤＥ・ＤＥ・ＤＥＮ－Ｏ！！】】

ストレンジ「へ？」

Ｄ電王ＲＦ「うぉぉぉぉ！！」↑デンライナーキック

Ｄ電王ＡＦ「せいやぁぁぁぁ！！」↑デンライナーキック

――ドガァァァーーン――

翼「げぼげぼげぼっ…あ、変身解けちった」

廻「さっきのライダーキックの際に、何か遮った様な…ん？」

ストレンジ「…」↑死

翼・廻「「あ」」

全「「「ご愁傷様…」」」

ストレンジ「――まだ死んでねえよ！！」

（完？）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7767i/

ツバサ　～砂漠の国の姫君と仮面の戦士～

2011年9月6日11時56分発行